

インフィニット・ストラトス 夜天の息子の鮮烈なる物語

ウィングゼロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

約十年前、若き天災、篠ノ之束が開発した宇宙活動を想定された、マルチフォーム・スーツ インフィニット・ストラトス通称ISの登場により地球は激変した。

ISは女性しか動かすことが出来ない、そのため女尊男卑となった地球にあるひとつの出来事が世界に激震を走らせた。

男性のIS操縦者現る。

その一報で全世界で他の男性操縦者がいないか搜索する中二人目の男性操縦者が発見される。

名は八神優希、どこにでも居そうな少年であるが地球に住む物は知らない、彼がどのような存在であるか。

4年前異世界ミッドチルダで大規模テロ事件、JS事件の解決の立役者となった奇跡の部隊、機動六課その部隊長である八神はやては優希の母親である！

新暦79年これは地球へと戻ってきた夜天の主の息子、八神優希の鮮烈なる戦いの物語である。

息抜きで作りました。そのため1話1話短いと思います。

『 一人称視点での視点主のセリフ

』 一人称視点での視点主以外のセリフ

○ 念話

□ デバイスのセリフ



視点主以外の思考

目次

第一章 I S 学園へ

一話『クラスメイトは約1名を除いて全員女!』	1
キャラ&デバイス& I S 紹介	5
二話『アラスカ条約、 I S の性質』	7
三話『ターゲットコンタクト&イギリス代表候補生』	10
四話『勃発』	13
五話『ルームメイトは○○○○○○』	17
六話『一日の終わり』	21
七話『朝の始まり』	25
八話『待合人は社長!』	30
九話『女性権利団体』	33
十話『出撃』	37
十一話『キカイノココロ』	40
十二話『叫べ必殺キツク!!』	43
十三話『交渉?』	49
十四話『家族との団欒』	53
十五話『海鳴市』	56
十六話『ようこそ!翠屋へ!』	60
十七話『漆黒の疾風』	63
十八話『漆黒の疾風は空を舞う』	68
十九話『ルームメイトと親睦を深めよう(実行前)』	71
二十話『抱えるものと臆気な過去』	74
二十一話『悲しい過去を撃ち抜くストライク』	77
二十二話『ルームメイト+αと親睦を深めよう』	80

二十三話『クラス代表決定戦』	84
二十四話『漆黒の疾風VS蒼い雫』	86
二十五話『騎士VS最強の弟』	93
二十六話『学園生徒最強現る』	97
二十七話『クラス代表決定』	101

第二章打鉄二式

二十八話『遠い過去の記憶』	104
二十九話『クラス代表就任祝いとあの子の後日談』	109
三十話『打鉄二式』	114
三十一話『1から0へ』	116
三十二話『0を1に』	120
三十三話『更識楯無との雑談』	125
三十四話『中国から来た女』	128
三十五話『力とは』	131
三十六話『優希VS鈴音』	135
三十七話『それぞれの思惑』	140
三十八話『簪とのショッピング(前編)』	144
三十九話『簪とのショッピング(後編)』	147
三十九・五話『見守る者達の戦い』	152
四十話『ゲームセンターと意外な王者』	157
四十一話『簪の才能』	162
四十二話『迫り来る影』	165
四十三話『戦いの狼煙』	169
四十四話『簪の初陣』	173
四十五話『更識姉妹の共闘』	176

四十六話 『あの日見た背中』	182
四十七話 『騎士：立つ』	186
四十八話 『一時の安息』	191
四十九話 『別次元の領域』	196
五十話 『凍結』	200
五十一話 『序曲の終わり』	204
五十二話 『ありがとう』	207
五十三話 『簪の決意』	211
五十四話 『仲違いと協定成立!?!』	214
五十五話 『優希レポート』	217
五十六話 『思いがけぬ期待』	220
五十七話 『家出少女神崎奏』	225
五十八話 『制・裁・決・行!』	228
五十九話 『行く道筋もまた険し』	232
六十話 『襲撃者達の末路』	235
六十一話 『翠屋での説明会』	239
六十二話 『批難するもの』	242
六十三話 『本音の秘策』	247
六十四話 『打鉄式式起動』	250
六十五話 『転んでもただでは起きず』	254
六十六話 『簪VS鈴 仲間同士の戦い』	258
六十七話 『勝利の女神はどちらに微笑むのか』	262
六十八話 『学生最強の妹VS世界最強の弟／決別』	266
六十九話 『学生最強の妹VS世界最強の弟／開幕』	270
七十話 『学生最強の妹VS世界最強の弟／圧倒』	275

七十一話 『乱入者（前編）』	278
七十二話 『乱入者（中編）』	281
七十三話 『乱入者（後編）』	285
七十四話 『約束の行く末』	292
七十五話 『優希レポート②』	297
七十六話 『次へのステップ』	300
七十七話 『簪の修行 序盤から高難易度』	304
七十八話 『簪の修行 第三段階は座学？』	308
七十九話 『簪の修行 ヘリレポートでの出来事』	312
八十話 『簪の修行 出立』	315
八十一話 『簪の修行 人を撃つ覚悟』	320
八十二話 『簪の修行 不屈き者に制裁を（前編）』	323
八十三話 『簪の修行 不屈き者に制裁を（後編）』	327
八十四話 『簪の修行 傷ついた心に癒やしを』	332
八十五話 『簪の特訓 真実を求めて』	335
八十六話 『簪と秘密の部屋』	339
八十七話 『簪、本局へ』	342
八十八話 『時空管理局』	347
八十九話 『腹を割ってのお話し合い』	351
九十話 『簪、ミッドに降り立つ』	355
九十一話 『八神一家』	359
九十二話 『八神家+αの日常』	363
九十三話 『GW1日目／ミッド観光』	367
九十四話 『GW1日目／雷帝と氷帝』	372
九十五話 『GW1日目／八神道場』	377

九十六話『GW 1日目／改良完了』	380
九十六話『GW 1日目／烈火の将と風の癒しての帰還』	383
九十七話『GW 2日目／新生！夢現』	388
九十八話『GW 2日目／戦技教導官の時間』	392
九十九話『GW 2日目／白い天使（魔王）降：（此処から題名はな いどこからともなく飛んできた砲撃により掻き消されたようだ）』	396
百話『GW 3日目／休日と告げられる予言』	402
百一話『GW 3日目／楯無達の出立』	406
百二話『GW 3日目／決戦世界カルナージへ』	410
百三話『おいでませ、ホテルアルピーノ』	416
百五話『決闘前日 前編』	419
百六話『決闘前日 後編』	422

第一章 I S 学園へ

一話『クラスメイトは約1名を除いて全員女!』

『どうして…こうなった…』

机にもたれかけて項垂れている俺…

現在、俺はとある特殊任務に就くことになりとある場所に潜入をしているのだ…

そこは…まあ…その…男である俺が行くような場所ではないというか…絶対に入れない場所なんだよな…

辺りを見渡しても同世代の女女女女女女女女女女女女女女女女…

今、俺が居る場所というのは…男子禁制の花園…女子校である。

…え?女の中に俺以外の男が混じってた?…ああ、その通りである、俺の他にもたつた一人だけ男が居る

というか、俺が此処にいる理由もその男が原因なのだ。

「織斑一夏です、よろしくお願いします」

俺がここに来た元凶、織斑一夏は自己紹介をするが、その後、無言の空気が立ちこもる。

…まさか、これで終わりとかほざかないよな…こいつ…

そんな嫌な予感を頭に過ぎりながらもこの男の次の一声を他の生徒や教師同様待ちわびていると漸く織斑は話し出した。

「以上ですー」

その言葉を聞いた瞬間、俺はあげていた顔を机にぶつけ、他の人達も椅子からずり落ちた。

こ、こいつ…本当に…終わらせやがった……な、なんでこんな…こんなことになったんだよ本当に!!!

そう思いながら俺は…あの日この学園に行くことを告げられた日のことを思い出す。

約二ヶ月前

新暦79年2月 時空管理局

「優希、ちよつとええか？」

『ん？なに？母さん？』

いつも通りの当たり前の日々だった。

俺：八神優希は母さんである海上警備隊司令、八神はやての副官として補佐していて働いていた。

そんな母さんからの突然の要件に少し戸惑いながら話に耳を傾ける。

「あんな、4月から優希には単独である特殊な任務にいつてもらおうことになったんや」

『特別任務？しかも単独って俺だけで？』

母さんの言葉から少し長話になりそうだと思った俺は部屋にあるやかんでお茶を器に入れて一つを母さんに渡した。

「ありがとうな……まあいきなり本題に入ると物凄う驚くと思うさかい、順を追って説明するな、まず優希はISって知ってるか？」

『ISって……チンク姉やノーヴェがJS事件で使ってたインヒューレントスキル？』

「ああ、ちやうちやう、そつちのISやなくて、地球のISってゆうたら分かるか？」

『地球のIS……ああ、あの欠陥だらけのパワードスーツか！』

始めはチンク姉達、戦闘機人のスキルであるISのことをさしていると思っただけと母さんの次の言葉で地球のISだと漸く理解した。

IS……インフィニット・ストラトスだったか？宇宙にいけるとかなんとか……でもそれって今の地球の主力兵器じゃなかったか？なんでそんな話を……

「欠陥って……優希、少しは言葉を慎みや」

『いやだって……事実だろ？』

欠陥の要因……それはISは女性しか動かせない。

普通なら男女問わず使えるのならマシンなのだが……男は何故か使えないのだ。

その要因で地球は女尊男卑の世界へと変貌してしまった。

ISの開発者は一体何を考えているのやら……はあ……

噂話じゃあ上の人もISに関して当初は注目していたらしいけど……今やその名は忘れ去られている。

「まあええわ、男の優希になんでこないな話をしてるかというところ……ほいこれ」

母さんは俺が言った言葉に苦笑いをしながら返すと端末を操作して俺の目の前に空中モニター出現させるとそのモニターに映るものをみて眉をひそめた。

『は？ISを動かした男性?!』

「ここに来て、偶然……見つかったらしいわ」

『……それで……俺に何の関係が……』

例えば男性操縦者が見つかったところで俺がどうこうするようなことではないはず……

「ところでこの前この局内で急遽な健康診断……したん覚えとるか?」

『ああしたな……それが……ちよつと待て……まさか』

嫌な予感が過ぎつた、俺の表情を読み取って母さんも柔やかに笑みを浮かべている。

「ここからが本題や、優希には今年からIS学園に入学して3年間、男性操縦者、織斑一夏の監視とISの戦力評価を命じます」

命令を下された俺は唯々漠然としていた。

その後話ほとんどん拍子で進んでいく。

まず健康診断で俺がISの適正があったことは既に母さんの親友のアリサ姉に伝わっておりアリサ姉の会社では俺の専用機を作るとか、そして長期にわたる任務であるために色々な申請などに追われ……そして二ヶ月後俺はIS学園に入学してきたのである

……まあ俺の事情はこれぐらいでいいだろう。

とりあえず状況を見ると……織斑がとんでもないボケかましたんだったな。

ボケかました織斑につきさつきやってきた教師が持つてる出席簿が顔面に振り落とされた。

「げえ!? 関羽!？」

痛そう……実質痛いのだろうかその後また、教師の怒りを買いそうな言葉を使い再び出席簿の攻撃が炸裂する。

「誰が関羽だ、自己紹介もできんのかお前は」

「ち、千冬ね……」

あ、また叩かれた、性懲りもなく……少しは学習しろよ……

まあともあれ、どうやら先に入ってきていた先生は副担任みたいで千冬……だったか? その先生が織斑の横から教卓へと移動した。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ」

織斑……ってああ、だから千冬姉なのね

「私の仕事は若千十五歳を十六歳までの1年で使い物になるまで育てる事だ。私の言う事は よく聞き よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らってもいいが私の言う事は聞け……いいな」

何とも斬新な自己紹介なこと……ISは軍事兵器だから先生も軍人ってわけだ……でもまあ中学あがりの女子には流石に答える一言……

「「「「キヤアアアアアアアアアアツ!!!」」」」

あああああああああああああああああああああつ!!! 耳があああつ!!

何これ!? なんであんな厳しい一言言われて黄色い声援なの!? こいつらみんなMなのか!? 罵声浴びて嬉しいのか!? おいそうなのか!?

「全く毎年よくこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か、私のクラスにだけ集中させて、私に嫌がらせをしているのか」

これ去年もなんだ……ご愁傷様で

「まあいい、後がつつかかえている、八神、お前だけ自己紹介をしろ」

『あ、はい……えっと……八神優希です。趣味は読書と機械いじり……後料理なんか少し得意です。1年間よろしくお願いします』

……はあ……先が思いやられる。

キャラ&デバイス&IS紹介

八神優希

時空管理局、海上警備隊司令官八神はやての補佐官の青年

とある理由で八神家で育てられてはやてのことを母としたついで（というかマザコン）、性格ははやてに似て大らかで優しいが同世代と余り話したこともないために家族以外は大体敬語で話す。次元の平和のために日々研鑽を積んでいる。

趣味は母親のはやてに似たのか読書と本が大好きで優希は学校にも行ったこともないためにだいたいの知識は小さい頃に無限書庫の教育書を読み漁って覚えた。

幼き頃に育った地球で織斑一夏がISを、動かしたことがきっかけで管理局内で同年代でIS検査を実施し（ほぼ極秘裏に）適性があった優希が織斑一夏の監視とISについての戦力評価を命じられてIS学園に入学する。

幼い時より管理局に入局しはやての元で力を尽くしており、魔導士としては空戦魔導士AAA+クラスとエース級の強さを持つ。デバイスはベルカ主体のミッド混合ハイブリッドの槍型インテリジェントデバイスのロンギヌス。

容姿はSAOのキリト

バリアジャケットはSAO時代のキリトの服装

余談であるが家のシグナムやフェイト、なのはに感染して若干バトルマニアなどところがある。

レアスキル

魔力変化凍結

自身の魔力を使って氷を使いこなすスキル、炎や、雷と他にも魔力変化は存在するが凍結をもつ魔導師は少なく魔力変化の中でもかなりの稀少価値のあるスキルである

???

優希のもう一つのレアスキル、発動中は優希の目が金色に変わる

ロンギヌス

優希がもつインテリジェントデバイス、優希との相性は良好でいつも優希のことを気にかけている。待機状態はペンダント、起動後の基本形状は両刃の槍でカートリッジシステムはヴィータのグラーファイゼンのような内蔵式のカートリッジシステム

ファーストフォームは槍型の近接用

セカンドフォームは先端が左右に分かれて銃口が現れる中距離、遠距離型のバスターフォーム

サードフォームも存在はするが余り本人は使わない。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムYY（ダブルワイ）

バニングスコープレーションが開発した八神優希の専用機。

第3世代の開発が間に合わないと踏んだアリサがデユノア社の第2世代の量産型機ラファール・リヴァイヴを買収し優希に合うように改修した。

武装は打鉄の近接ブレードの葵とセミオートのライフルの二つのみと少ないが背中に大型スラスターを6機と脚部に小型のスラスターを増設して機動力と小回りを飛躍的に上昇させ素人では扱いきれないピーキーな機体に変貌した。

二話 『アラスカ条約、 I S の性質』

入学式の後、すぐに I S の授業は始まった。

授業内容は I S の基本構造：これを知らないとい S 操縦者失格とも言つて良いことだろう。

(あの～マスター：少しいいでしょうか?)

授業を受けていると俺の頭の中に女性の声が響いてくる。

これは念話といって魔導士なら誰しでも使うことが出来る魔法？
でいいのかな：これを使うと作戦なんかを外部に漏れるのを限りなくなくすことが出来る便利な力だ。

つで今俺に語りかけてきているのは俺の首から下げられているペンダント：これは母さんが知り合いのデバイスマスター、マリエル・アテンザさんが制作してくれた俺専用のデバイス、ロンギヌス：俺のことをよく見てくれる大切な家族の一人

(ん？どうしたロンギヌス?)

そんなロンギヌスからの念話が何かと思い耳を傾ける。

(ターゲットのオリムラが妙に左右を見て慌てふためいています)

(織斑?…あ)

と俺は黒板を見ながら片目で織斑を見るとロンギヌスの言うとおりに顔を青くしている。

「?織斑くん、どうしたの?」

あ、織斑の挙動不審に気づいた一人が声かけて全員の視線が集中した。

「織斑くん、何か分からないところとかありますか?」

と副担任の山田先生が挙動不審だった織斑のことを気遣い親切に訪ねてくれた。

「先生!」

「はい!なんででしょうか?」

織斑は意を決して手を上げて、それに山田先生が反応して質問を聞き入れようとする。

「全部分かりません!!」

…おいしいおいしいいいつ!!!

そんなこと大きな声で言うもんじゃねえだろ!?

周り見て見ろよ! 予想外の言葉にみんなまた椅子からずり落ちたぞ! 俺も体勢を崩してまた頭ぶつけたわ!

母さん、本当にこんなやつ監視する意味あるんですか?

そんな今後の任務の不安に溜め息をつきそうになるも教室内にいた織斑先生が出席簿でまた振り落とそうとスタンバっている。

「織斑、入学前に届いた参考書はどうした?」

「古い電話帳と間違えて捨ててしまいました!」

……判定は……もちろんギルティだろ

そう思った直後、織斑先生の出席簿が織斑の頭に炸裂……まああれだ因果応報……

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者!! はあ…もう一人も大丈夫か気になるな…八神、アラスカ条約について説明して見ろ」

おいおい、織斑が馬鹿やらかしたからこつちにも火の粉が飛んできたじゃないか! ……まったたく!

「はい」

そう思った俺はすぐに立ち上がって参考書を見ずにアラスカ条約について話し出す。

『アラスカ条約とは、正式名称はIS運用協定、21の国と地域が参加して成立しました。軍事転用が可能になったISの取引などを規制すると同時に、ISの技術を独占的に保有していた日本への情報開示とその共有を定めました。因みにこの学園もその協定に基づいて設立されました。…以上でよろしいでしょうか?』

「よかろう、では次にISコアの性質についても述べろ」

『はい、現在ISコアはこの世界に467個しか存在しません、そのコアを作り出したのは篠ノ之束博士です。しかし篠ノ之束博士は突如コアの制作を拒否し姿をくらまし、残ったコアもブラックボックスなため現段階でどの国でもコアの製造が不可能な状況です。そのため、世界各国は残されたコアを世界各国の企業に割り振られISの開発、

制作に着手しています』

「上出来だ、わかったか？織斑、これを1週間で覚えろ」

あの参考書を1週間で…ねえ、まあかなりきついだろうな

「1週間?!?無理です!」

「やれと言っている、貴様に拒否権はない」

「うへえ…」

織斑先生によって逃げ道を塞がれたか…そして織斑は望んでここに来たわけじゃないって顔だな…まあ俺もだけど

「織斑、貴様は自分が望んでここに居るわけでは無いと考えたな？」

「……………」

「望む望まずに関係なく、人間は集団の中で生きなくてはならない。それすら受け入れられずに放棄しようと言うなら、人間である事や他人と関わる事を辞めてしまうことだな」

おお、またまたこれはきついお言葉を…まあ織斑先生は遠回しで現実から逃げるなど言いたいみたいだな。でもまあ、突然の事だから受け入れるにはやはり時間が必要なのもまた事実なんだがな。

織斑先生の言葉を終えた直後にタイミング良く授業の終了のチャイムがなった。

三話 『ターゲツトコンタクト&イギリス代表候補生』

授業が終わり、俺は教科書などをしまつて次の授業の準備に取りかかる。

『えつと次の授業はつ…と』

「なあ少しいいか?」

準備に取りかかっているとまさか監視対象の織斑から俺に接触してきた。

『ええ、構いませんよ、なんででしょうか?』

「八神さんって凄いなだな、あんな分厚い参考書を読まずに答えられるなんて」

織斑が俺に向けているのは関心だった。まあ同じ男性で参考書読まずにすらすと答えたことからだろう。

『あれぐらい、どうということもありませんよ、昔、もつと分厚い本を読んだこともありましし…それより織斑は大丈夫なんですか?あの参考書1週間で覚えなかつたのは織斑先生のあれが振つてきますよ』
実際、俺の頭の知識の元になつたのは管理局の本局にある。無限書庫という超巨大な図書館の中で教育書を探して読んだり、後は母さん達からの教えて貰い、殆ど独力で覚えた。

そんな俺は織斑に先程織斑先生にどやされたことを指摘すると、うつと凶星のように俺の言つたことが突き刺さる。

「けど、あんな分厚い参考書どうやって覚えるんだよ、八神さんは『さん付けは結構です』ああ、八神はどうやって覚えたんだ?」

『多少、苦ではありますが、覚えられないほどのことでもありませんでしたし』

簡潔に説明し織斑は顔を引きつらせて俺を見る。

……にしても中々フレンドリーな奴だなこいつは……まあなのはさんよりかはマシだけど……

「少しよろしくて?」

「え?」

『は…え?…リイン?』

織斑のことを考えているとまた俺の所に来た女性が声を掛けてきて咄嗟に声から家の妹の名前を口から溢しながら声の方へと見ると金髪でかなり髪を伸ばされて縦ロールになっており、手を胸に当ててあたかも優等生と思わせる態度を示している女性がいた。

「まあ！ なんですの、そのお返事は！ わたくしに話し掛けられるだけでも光栄なのですから、相応の態度というものがあるのではないかしら？ それとあなた？ 私はそのような名前ではございませんわ」

ああ……なるほど……この女性は女尊男卑を酔狂する奴だな……にしても……まさかあつちから接触してくるとは初日からドタバタ騒ぎなこと……疲れるね全く。

『これは失礼しました、咄嗟の判断で返事を怠ったこと……心よりお詫びします。イギリス代表候補生セシリア・オルコットさん』

この人の顔はここに来る前に調べたことがある。

セシリア・オルコット、イギリス代表候補生でイギリスのとある企業が開発した試作段階の第3世代機ブルー・ティアーズの搭乗者。

やはりデータだけでは分からないこともある……まさかりインと声が似てるとは思ってなかった。

「そちらの方は、私のことをよくご存じのようですね」

『はい、今年度の入試に主席で合格されたとか……流石は代表候補生に選ばれたかたですね』

(マスター、よくもまあ、そんな気もないこと言えますよね)

(こういうのは穩便に済ましたいからな)

そう俺はオルコットさんを褒めちぎり、その反面で念話でロンギヌスに本当のことを漏らす。

「なあ……八神……」

オルコットさんと話していると先程から会話に参加してきていなかった織斑が口を開けた。

……織斑はさつきからとんでもない爆弾を投下し続けてるからな……嫌な予感しかしない。

「代表候補生……ってなんだ？」

『はああ!?!』

「あ、あなた本当におっしゃっていますの!？」

俺もオルコットさんも驚きだよ……

いやいや、小さい頃しかいなかった俺とは違って織斑、ずっと地球にいるよね!? 実はこことは違う世界からきたとかそんなことじゃないよね!？」

「ああ、新聞は見るけどニュースとかあんまり見ないからな」

……いやニュースもみろよ

とそうこうしているうちにチャイムがなって次の授業の開始を知らせる。

ずっと此処にいればまた織斑先生の一撃が振り落とされるだろう
そう思った織斑は颯爽と席へと戻っていき、オルコットさんも織斑の
ことが気に入らないのか顔を歪ませて席へと戻った。

……神様……どうして初日からこんな厄介ごとが振ってくるんですか？

『……はあ……』

そう溜め息をこぼして俺は次の授業の教科書を取り出した。

四話『勃発』

休憩時間が終わり、2時限目の授業が行われようとしたが、何かを思い出したのか織斑先生が口を開けて話し出した。

「そうそう、1限目に伝え忘れていたが近々行われるクラス対抗戦に出場するクラス代表を決定する必要があるんだった」

……それってけっこう重要なのでは……

「自薦他薦は問わん。誰かいるか？」

「織斑くんを推薦します！」

「わたしも！」

「俺!？」

真つ先に上げられたのは織斑だった……まあ確かにいい客引きパ
ンダなわけだしな

そう思っていると次に違う女性が声を上げた。

「八神くんを推薦します！」

「わたしも賛成」

『……』

……俺もまた客引きパンダか……

「納得いきませんわ!!」

少し黄昏れていたら一人の少女の不満の声が教室内を響いた。

その声の主はオルコットさん……なんとなく分かるけど……いら
んことにならなければいいんだけど

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表者だなん
ていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそ
のような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物
珍しいからという理由で極東の雄猿にされては困ります！わたくし
はこのような島国までISの技術の修練に来たのいるのであって、
サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

おうおう、良く吠えることであ……

「大体、文化として後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わ

たくしにとつては耐え難い苦痛で……」

うわあ……オルコットさんこのクラス全員敵に回すような発言したよ。

「イギリス大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

織斑のやつ売り言葉を買ひ言葉で買ひやがった!!

「私の祖国を侮辱しましたわね!」

「買い言葉で買ったことでオルコットさんも激怒……これは收拾が中々付かないかもな。」

「八神も男なんだから何か言ってやれよ!」

おい……俺も巻きこむなよ

『……はあ……全くお二人ともまず落ち着いてください』

「このような屈辱な言葉を言われて落ち着いてなどいられませんわ!」

『まず、オルコットさんはイギリス代表候補生というお立場、つまりオルコットさんの言葉は日英の関係を悪化させることに繋がることをお忘れですか?』

「っ!」

『そして織斑もです。確かに織斑の言葉にも一理あります。ですが……無闇に売り言葉を買い言葉で買ったことは些か目に余ります。何よりこの場には織斑の姉に当たる織斑先生もおられる。織斑先生の弟がイギリス代表候補生と一悶着あったと噂になれば苦労するのは織斑先生であることでしよう』

「ぐっ……!」

……なんとか話術で二人とも黙らせたがこれで終わるとはとても……

「……ふん、自国が侮辱されたというのに随分と冷静ですわね、さぞ愛国心のないご家庭で生活なされていたのでしようね。まだ織斑さんの方が愛国心に溢れていますわ」

……ああっ!?

こいつ今なんていった

家族を……母さんやシグナム達……家族を侮辱したか……!

『オルコット……家族……母さんのことを侮辱したな!』

「っ!それが何かおありで?」

《く、口調が変わった!?!?》

いきなり口調が変わったことでクラス中が響めいたが今はそんなこと関係ない。

(ま、マスター!落ち着いてください!)

『俺のことは何度だろうと侮辱してくれて構わない……だがな母さんを家族を侮辱することは絶対に許さない!』

こいつに……母さんの母さん達が背負う重さの覚悟を汚されてたまるか!

「ならば、1週間後オルコット、八神、織斑の3名で決闘して勝ったものがクラス代表になる。異論はあるか?」

この気まずい雰囲気をもともしていない織斑先生によりクラス代表を決める試合を執り行うことが決定し俺の言葉は決まっていた。

「ありませんわ!」

『同じく問題ありません、それとオルコット、レディーファーストだ、少しばかりハンデもつけてやる』

ハンデをつけるという言葉にセシリアは驚きクラスのみんなもぞわぞわと騒ぎ出した。

「八神くん、男が女より強いなんて昔の話だよ?」

と男を馬鹿にしている発言確かに俺が行っていることは時代遅れなのかも知れないが……

『いや、確かにその話も一理あるけど、それは女性がISを動かさせたから、でも此処にいるのは男性でISを動かした特殊ケース……つまり女性が強いといわしめるISというアイデンティティはないに等しい』

と説明してクラスのざわめきを押し黙らせる。

『だから、ハンデをあげると言いました……ハンデとして開始5分間はこちらから攻撃は一切しない……これを破れば自分の負けで構いません……』

「っ！そこまでおっしやうのでしたらいいですわ！もしあなたが負けましたら、私の奴隷にして差し上げますわ」

俺もオルコットも啖呵を切った。必ず負けるわけにはいかない、八神はやての息子としてもそして騎士としても

「……………」

因みに途中から完全に話に参加していなかった織斑は啞然として黙っていたことを追記しておく。

五話 『ルームメイトは〇〇〇〇〇〇』

負けたらオルコットさんの奴隷とか絶対嫌だから負ける気はないけど……少し反省している。

家族のことを侮辱されたことでついかつとなつて激怒し決闘することになった。

冷静に考えればあまりメリツトのない決闘だ。俺はクラス代表になるつもりなど微塵もないため……負けても良かったのだがオルコットさんの口約束もあるためにもう後には退けない状況なのだ。

そんなクラス代表決定戦が来週に迫る中、授業は進んでいき初日の授業が終了した。

授業が終わり、放課後になつてクラスにいた女子生徒も帰宅していくなか、俺と織斑だけが教室に残されていた。

「なあ、八神……どうして俺達だけ残されてるんだ？」

『わかりません、ですが……俺と織斑の共通点と言えば男性といったところですから差し詰めそう言った関係じゃないでしょうか』

「……なあ、気にはなつたんだけど……八神つて猫かぶつてるのか？」
残された教室で話し合う俺達、そしてふと気になったのか織斑は俺が口調を変えたときのことを聞き出す。

『口調が変わつたことですか？あれは素ですけど……いつも目上の人なんかが多かつたので自然と敬語に……なつてしまつたんです』

時空管理局に所属していることから年上や階級上の人たちと話すことが多かつたためにと話すとはえと微妙な反応をする。

「織斑、八神、待たせたな」

と漸く、織斑先生と山田先生がやってきた。

「織斑くん、八神くん、これが今日からあなたたちの住む寮の部屋の番号と部屋です」

と山田先生から俺の名前が書かれた番号とその部屋の鍵を渡される。

『えつと1169……か』

「それと、突然のことであつたため、部屋は女子生徒とシェアになつて

います。後は大浴場の入浴は禁止です」

「え？どうして、大浴場は使えないんだ？」

折角山田先生が適切に説明しているというのにこの馬鹿は…

「大勢の女子と一緒に入りたいというのかこの馬鹿者」

俺が言いたいことを織斑先生が鉄拳とともに放たれる…まさに口は災いの元だな

「いっつ…ってそういういえば荷物とかはどうするんだ？入学から一週間は自宅からだったのに」

「それなら安心しろ織斑、私が最低限の荷物をまとめて寮の部屋に配達しておいた…だが、八神は家に電話したが誰も出なかったため荷物がない」

と織斑先生が説明

今俺が住んでいる家って言うのは海鳴に住んでいた家のことだ。

母さん達はミッドにいるために家には誰もいない…つまり電話をかけたところで誰も出てくるはずがない。

それはけっこう困るんだよな

『家族は海外にいますので、家にいるのは俺だけです…今日から寮生活となると…取りあえずですが近場のショッピングモールで服を購入して休日になれば、自宅の方に荷物をとっていこうと思います』

「そうか、なら八神も問題ないな…くれぐれも変なことは起こすなよ」

「分かってるよ千冬ね「織斑先生だ」いっただあつ！」

またやられてるよ…織斑の…奴等本当に懲りねえな…

漸く教室から出た俺は途中までは織斑と一緒にだったが俺は買い物があったために途中で別れた。

織斑と一緒にいるとき後ろから女子の大群がつけてきたときは少し溜め息を覚えたけど…別れてからは上手く巻いてひとりで買い物に行くことができた。

夕日が沈み夜になり、俺は一通りの物は買って、寮にやってきた。中に入ると高級感が漂う雰囲気醸し出して、流石はIS学園と

苦笑いの笑みを浮かべた。

『さてと、俺の部屋は……ここか…』

最後に書かれた紙を確認して今いる部屋の前のプレート番号を確認……うんあつてる。

『さてと……はいりますか』

一応とノックだけして……返事がないためいけないと思い。ドアを開けて部屋に入る。

『へえ、これは中々』

中は高級ホテルと変わらないくらいに充実しており興味本位で辺りを見渡しながらかさつき購入してきた物が入っている紙袋を邪魔にならない所に置く。

「同居人は居ませんね、お食事に出ているのでしょうか？」

『そうみたいだな……』

誰もいないことを見計らってロンギヌスは念話じゃなくて普通に話して俺も問題ないと踏んで普通に話す。

『……先にシャワー浴びさせてもらうか』

同居人が帰ってきてても待たせるのも嫌だしこういうのは有効活用するに限る

と思い買ってきた服を一式手に持ち浴場にはいる。

そしてシャワーを浴びて今日の疲れてでた汗を流しバスタオルで体を拭いて服を着込んでいると洗面所の向こうからドアが開いて閉める音が聞こえてきた。

……
どうやら同居人が帰ってきたようだ。さてどんな女性なことやら

取りあえずとラフな服装に着替えた俺は意を決して扉を開けて洗面所から出て部屋を見る。

「あつ……」

いた

内気な雰囲気のある水色髪の少女は俺に気付いたのか少し怖がりながら俺のことを見ている。

もしかして男性恐怖症とかなのかな？

そこら辺のことを考えても何も始まらないからとりあえずは…

『えっと、初めまして…今日から一緒の部屋に住む八神優希です。男と一緒って言うのは何かと嫌かも知れないけど…その…よろしくお願ひ…します』

とりあえずは無難な対応だと思ふ…さてこれにこの子はどう出る。

「…更識…簪です。八神くん」

これが内気な少女、更識簪とのファーストコンタクトだった

六話 『一日の終わり』

「…更識…簪です。よろしく…八神くん」

中々、言葉が詰まっているしゃべり方…やっぱり男性恐怖症なのかな…此処はどうするべきか…

①普通に接する

②ツンデレ的に接する

③強引に接する

④高町流OHANASHI

おいなんだ選択肢は!?

①以外ろくなもんがねえじゃないか！特に④は駄目だ！どう考えたってSLBばっばなして友達になれって言われても生まれるのは友情ではなく、恐怖だと思うし

となるとやっぱり此処は①番だな

『よろしく、更識さん…』

と普通に返事をした…

「っ！更識は止めて！」

なぜが拒否られた…なんで!?

「簪で…いい」

『えっと…それじゃあ簪さん…それとシャワー先に浴びさせてもらったから』

「…べ、別に構わない…」

と素っ気なく答えられると簪さんは椅子に座ると空中キーボードとモニターが展開されて何かをタイピングし始めた。

『…それってもしかして眼鏡型のディスプレイ?』

「そ、そうだけど…それが何か?」

話を続けようとするけど簪さんが話すことに乗る気ではないような態度で俺に返事をする。

『いえ、眼鏡型のディスプレイなんて結構珍しいなと思ひまして』

「……………そう」

……………会話が続かねえ!!!

これどうしろっていうんだよ…誰でもいいから教えて欲しい
…もちろんなのは姉以外で

同時刻とある住宅地……

「酷いよー」

「え?、なのはママいきなりどうしたの?」

「え?……なんでか酷い言われようされた気がして……」

とある母と娘の話し合いがあつたとか……

話は戻り……

「八神くん、作業に集中したいから…話しかけないで」

と冷たい一言をもらい俺は何も言えずにその場で黙るのであつた。

簪SIDE

八神優希…まさか二人の男性操縦者の片方が私のルームメイトになるなんて思っていなかった。

話しかけてきた八神くん少し冷たい態度を取ったけど…彼は

嫌な顔など一つもしなかった。

少しばかり作業の手を止めて彼のことを観察したけど……第一印象は勤勉だった。

今彼は部屋の手前のベッドに寝転がって参考書を読んでいる。

参考書なんて読んで楽しい訳がないと思うけど、彼の視線は真剣な眼差しで参考書を見ている。

「……………」

『…………変な人……』

と小声で私は彼のことをそう呟いた。

優希SIDE

時間は過ぎていき時刻は明日へと変わった午前零時

俺は簪さんが眠りについたのを見計らって誰にも気取られることなく寮の屋上にへと辿り着き首から下げているロンギヌスに視線を落とす。

『ロンギヌス、母さんに連絡入れられる?』

「了解です……繋ぎました」

『よし、母さん聞こえる?』

と俺はロンギヌスの機能を使って空中モニターを出現させて母さんに声を掛けた。

「ん?聞こえてるよ……なんや遅い報告やな」

と母さんが眠たそうな……実質眠いのだろう……その母さんが通信に答えて返事をする。

『今、IS学園の寮の屋上にいて……ルームメイトが眠ったのを見計らって出て来たからな』

「あれ?一週間ぐらいは家からやなかったんか?それやと荷物も……………」

『うん、ちゃんと説明する……まずは……』

そういつて俺は今日起きた出来事を細かく説明していき、説明を終えると母さんは苦笑いの笑みを浮かべていた。

「それはまあ……大変やったな……それで一週間後に戦うのは分かるけ

ど…優希って専用機あるんか？」

『いやまだ、服買いに行くついでにアリサ姉に聞いてみたけど、専用の第三世代型は企画書すら出来てないってだから、多分第二世代型の改良機になるんじゃないかな？』

「まあ、それが妥当やな…さてと、優希も明日も学校なんやから、夜更かしはあかんからねえや」

『うん、分かってる…それじゃあお休み』

「うん、お休みな」

と通信切ると俺は大きく欠伸をして眠気に襲われる。

『さてと、俺も寝るとするか』

そう呟いた後俺は屋上から部屋に気取られずに戻ってベッドに入って眠りに落ちた。

七話 『朝の始まり』

IS学園生活の初日が終わり次の日、まだ朝にしては薄暗い五時にロンギヌスにつけてあるアラーム機能で起床し動きやすい服に着替えると寮から出て走り込みを開始する。

『はっはっはっはっ…』

少し早めのスピードでIS学園の敷地内を走る。

辺りはまだ早いことから人などはおらず、ランニングには持つて来いの状況であった。

『ロンギヌス、走り込んだ後人気のない場所でイメージトレーニングするけど相手シグナムかヴィータ、どっちがいいと思う?』

「そうですね、シグナムの方が良いかと」

『そうだな…よしペース上げていくぞ!』

と先程より速度を上げて敷地内を走って行く。

その後監視されておらず人気のない場所でロンギヌスを起動して素振りをした後、寮に戻り、汗を流して制服へと着替える。

ここままで現在六時半…そろそろ食堂が混み合う頃かと思いい食堂へと向かおうとしたとき、隣人の簪さんが目を覚ましたようだ。

「もう…朝?」

『おはようございます簪さん』

「へ?…あ、うん…おはよう」

寝ぼけていることもあって即座に判断できなかつたのか遅れておどおどと挨拶を返してくれた。

『それじゃあ、俺は食堂行くから簪さんも早めに来た方がいいですよ』
と素晴らしい残して部屋から出た俺は食堂へと向かう。

食堂に辿り着くと既に起床した女子生徒達が朝食を取っており、俺もお盆に食べるものを乗せていき、何処で食べるか辺りを見渡すと四方八方からの興味本位の眼差しがこちらに集中しているのがわかった。

『た、食べずらいな…これ』

どうしたものかと悩んでいると俺の視界にあるものを捉えた。

他よりマシかと思った俺は一直線にその場へと歩きだしその席の前に立つと相手も気付いて視線を向けてきた。

「八神、おはよう」

『おはよう、織斑……隣座つても構いませんか？』

「ああ、別にいいぞ……箒も構わないよな」

「あ、ああ」

織斑の了承も得て隣に座ったが元から居た少女の方は不服な顔つきを浮かべていた。

そんな彼女のことを頭の隅に置いておき、朝食を取り始める。

「そういうば、昨日部屋はどうだったんだ？」

『変なことを言うのですね……部屋の構造なんて何処も同じと思いませんけど』

「いやいや、そうじゃなくてルームメイトが誰なのかってことだよ、俺の所は箒だったし」

いやいや、箒って言われても誰を指しているのかわからないし……まあ大方織斑の隣にいる少女だとは思うけど……

『織斑、先程から名前ですいませんが、俺にとつて知り合いでもないので名前で呼ばれても誰なのかわかりませんよ』

と指摘するとあつと気付いたのか少し驚く織斑に隣の少女は呆れて溜め息を付いていた。

「全く、一夏は……私は篠ノ之箒だ、八神」

『ええ、よろしくお願いします』

と一応の自己紹介を終えるとまたまた此処にやってくる。

「ねえ、八神さんに織斑くん隣いいかな？」

「別に構わないぜ」

『別に俺も構わないですよ』

同じクラスの女子三人……何故か一人着ぐるみだけ……俺達の横に座れるのがそんなにいいのか嬉しそうな顔で俺の隣に座った。

「オリムとやーくんって朝そんなに食べるんだ」

そしてその着ぐるみを着た女の子が自分たちの朝食と俺達男子の朝食の量を比較して驚いている。

「というかやーくんってなんだよ……やーくんって

まあ女子と男子とでは食べる量も違うからな……とある一家は除くけど……」

「これぐらい食べないとやっていけないからな……俺からしたら女子ってそんなにしか食べなくて大丈夫なのか？」

「わ、私たちは……ねえ」

織斑の奴……全く気付かずにそれを指摘するか……その際で隣の三人の内二人は苦笑いを浮かべていた。

「夜によく、お菓子とか食べてるからね」

……まあ年頃の女の子はこんなもんなのかな……俺の回りにはそういう人誰もいねえからな……」

「ごちそうさま、先に行っているぞ」

先程から何も発さずに黙々と食べていた篠ノ之さんは食べ終わるとお盆を持ってさっさと立ち去っていった。

その後三人に織斑と篠ノ之との関係を聞かれた織斑は幼馴染みと教えたあと、俺も食べ終わらせたので食器を纏めて食堂を後にした。

さっさと食事を終わらせた俺を見て残っていた四人は早つと驚かされたのと言うまでもないことであった。

時間は過ぎて教室の朝のHR、俺達に話す事項を話した後織斑先生が教卓に立って、織斑に視線を向けて喋り始めた。

「よし朝のHRを終わる……それと織斑……6日後の決闘についてだが政府から専用機が手配されることになった」

織斑先生の発言で教室中が響めいた。

やっぱり専用機というだけ合って欲しがらる人など星の数いるわけ……というかIS学園で欲しがらない奴なんているのか？

「それを聞いて安心しましたわ」

と考えていると織斑の前にオルコットさんが話の間を割って入ってきた。

「訓練機程度では私のブルー・ティアーズの足元にも及びませんから」とまた男をあざ笑っているように自身の実力を棚に上げていた。

それにしてもブルー・ティアーズ……ねえ

休日になれば色々動くことになりそうだな……

「専用機って……そんなに凄いのか？」

またあの織斑の一言で教室内が固まった………おいこいつ……
昨日参考書とか読んでいないのか

「織斑……きさましつかりと授業を聞いていなかったの」

織斑先生はまさか、そんなことも知らないのかと溜め息と共に怒気を感じられるオーラを発する。

……さすがにフオローしておこうか

『織斑……昨日俺が言いましたよね？ISのコアは467個と限定されているんです。その中で各国はコアをやりくりして開発しているんですよ……特に量産化機体がコアの多くを占めるわけですから……専用機持ちはその中でも僅かな者しかなることが出来ないんです』

「……ああ、そういうことか」

ようやく理解してくれたか……よかったな……もし理解できなかったらまた織斑先生の鉄拳が炸裂していただろうに

「全く、この馬鹿者は……それと八神の方なのだがそちらは政府から専用機が手配されない……」

「うそ、じゃあ訓練機で戦うってこと？」

「オルコットさんが勝っちゃうんじゃない？」

と次に俺に向いて政務からの専用機手配がないと伝えてくれたことで回りからひそひそ話でその事を言い合っていた。

『それなら問題ありません、宛てはありますから』

と言っただけはいけないことはなかったので宛てがあることをカミングアウトすると先ほどのひそひそ話が無くなり全員が俺に視線を集中させてきた。

「宛てとは……どういうことだ？」

『今はまだなので無所属と言う事になっていますが……実はバニングス社で俺の専用機の開発が進んでいるんです』

「バニングス……ってあの大手企業のバニングス社!？」

「バニングス社がIS事業に進出するっていう噂本当だったんだ」

と俺がバニングス社と契約していることを公にするとまたクラスは慌ただしくなり織斑先生は手を叩くと騒ぐ生徒を戒めた。

「静かにしろ……八神ならば専用機に関しては問題は無いということ
でいいんだな？」

『はい、ただ今週の休みは一度社にいつて機体の調整をしないといけませんから外泊届けを出すことになります。よろしいでしょうか？』

「外泊届けは後日私に提出しろ……話は以上だ。これより授業を始める」

ささてと気を取り直して授業に集中しないな。

八話 『待合人は社長!?!』

「はい、今日の授業はここまでです。皆さん気をつけて帰ってくださいね」

初日から漸く五日目…明日からは休日だ。

回りのみんなは休みに何をしようかと談笑しているようだけど俺はそんな余裕なんて無いんだよな……

『さてと……』

まず参考書なんかを全部鞆に突っ込んで教室から後にする。

五日目だというのに未だに視線は痛い。

(……はあ……学校ってどこもこうなのか?)

小学も中学も行ったことないからわかんないけど……これが基準なら……凶太い精神の持ち主じゃないとやっていけなさそうだな。

「おーい、やーくん〜!」

と廊下を歩いていると声を掛けてくる人物が一人……

振り返ると袖の丈が長くて手が制服で隠れている内のクラスの生徒……確か名前は

『布仏本音さん…でしたっけ?』

「あ、やーくん覚えてくれてたんだ」

と名前を呼ばれたことに嬉しそうに話す布仏さん…

「ねえねえ、やーくんってさかんちゃんと同じ部屋なんだよね?」

『かんちゃん?もしかしてですが簪さんのことでしょうか?』

もしかして布仏さんと簪さんは友人なのであろうか

「うん、そうだよかんちゃんとは幼馴染みなんだ」

と嬉しそうに話す彼女だけど何故こんな話をしてきたのであろうか…

ただ単に男の俺にお近づきになりたいために話しているのかもしれないが他に起因が……

「ねえ、やーくん……かんちゃん……部屋では何してる?」

『え?なにやら真剣にディスプレイに打ち込んでいましたが……それが……』

と簪さんの近況を話すと布仏さんは先程とは違い何やら思い当たることがあるのか彼女らしからぬ思い詰めた表情を見せた。

『……………』

そういえば……

簪さんが帰宅する時間はあの初日以降夜遅くまで帰ってこない、しかも帰ってくるなりディスプレイと睨み合ってるから……かなり無理してるんじゃないだろうか

といつても俺に何が出来るというのだろうか

所詮はただの部屋が同じだけでさして接点など何もない。部屋でもあまり話もしないのに……出来ることなど……

『ん？なんだ？』

簪さんのことで悩んでいるとIS学園の前に人だかりが出来ていて俺はなんだろうと首を傾げた。

どちみち通り道ということもあり近づいてみると車道にえらく立派なりムジンが止まっていて物珍しさにみんな止まって見ていたようだ。

「あ、リムジンだ……こんなところに止まってることとは誰かを待つてるのかな」

と隣の布仏さんも気になったのか考えていたことをやめてリムジンのことを見ていた。

するとリムジンの一部の窓が開いて中から……

「あ、漸く来たわね優希」

『ええ!?ア、アリサ姉!?!』

リムジンの窓から顔を出したのはバニングス社の現社長のアリサ・バニングス。

母さん達の若かりしころからの親友であり今回の任務で一番にお世話になると思われる人物。

御年24歳と若いのはやはりISによる効果もあって前社長であるアリサ姉の父親は状況を垣間見て社長の座を譲り今はアリサ姉のオブザーバーとして支えているとか

「まあ話すことは山ほどあるだろうけど乗りなさい、外泊届けはもう

出したんでしょ?」

『え?あ、ああ……それじゃあ布仏さん俺はこれで……また週明けにあいましょう』

「あ、う、うんそれじゃあねやーくん」

いきなりのことであつたために戸惑っている布仏さんに別れを言つて集まっていた女子達の視線に耐えながらもアリサ姉の乗るリムジンに乗り込んでいくのであつた。

九話 『女性権利団体』

IS学園前でリムジンに乗って待っていたアリサ姉
そんなアリサ姉の迎えに俺は周りの視線を受けながらリムジンに
乗るとすぐさまリムジンは発進して車道を走りだした。

『……はあ……まさかアリサ姉が迎えに来てたなんて……』

「なによう？来て欲しくなかったわけ？」

と俺の言ったことにアリサ姉は不服そうに顔をしかめる。

「それにねえ、あんた……二人目の男性IS操縦者なんだから……
色々なところから狙われてるの分かってるわよね」

『分かってるって……確か女性権利団体だったか？』

この世界では希少な人物であることの自覚を聞かれ、俺は地球に来
る前に一通りの資料に目は通した。

その中で女性権利団体という組織名に俺は目をとめたことがある。

女性権利団体……本来は男性から女性を守る団体だったらしいが
今の時勢になってからは完全に暴走して男性を虐げるテロリスト集
団へと変貌した。

何故そんな危険な集団を今も野放しにしているのか理解に苦しむ
所がある。

「あなたの存在は女性権利団体にとって目障りな存在なわけ……も
う一人のブリュンヒルデの弟はブリュンヒルデが目を光らせてるか
ら手を出さないと思うけどあんたは違う……下手をすれば……白昼堂々
と殺しに来るかもね」

と最後のはさすがに冗談であろう、話をするアリサ姉に俺は余裕の
笑みを浮かべて返事を返した。

『問題ないよ……来たところでその気になれば返り討ちにするわけだ
し』

仮に来たとしても格の違いを見せつけられるだけでそこまで苦労
はしないだろう。

「……はあ……まあいいわ、まず海鳴に戻ったらすぐに家の所有の演習
所にいかないと……」

『演習所なんでまた…』

「機体をあんた用にチューンするためよ……ただあんまり無茶な頼みはしないでね……こつちにも予算があるんだから……」

と俺の機体の改修にどれだけの予算が出てくるかと頭の中で計算しているのか少し溜め息を溢していた。

『まあそうだよな……そういえば……第3世代の件はどうなってるの？』

「……ああ、そっちね……相も変わらず何も変わっていないわよ……白紙のまま……あんたが乗る場合……機体に振り回されるどころかあんたに機体が付いてこれないだろうし……そこはあんたの戦闘データを元に作っていくしかないわね」

『それは……また……』

確かに事実としか言い様がないが……機体がパイロットに付いてこれないんじゃないかなを生かせないわけだし

その後は他愛もない話をしながら車は目的地の海鳴ヘリポートに辿り着くと俺とアリサ姉はリムジンから降りる。

「それじゃあ鮫島……明日には帰ってくるからその時の送り迎えもよろしく頼むわ」

「畏まりましたお嬢様」

とリムジンを運転していた鮫島さんはアリサ姉の命令に頷くとリムジンを来た道に戻っていきそれを少し見送った後、待っていたヘリに乗り込む。

ヘリに揺らされ20分程……海鳴の海に存在する中位の島……元は無人島だったらしいがアリサ姉の会社が買い取ってISの演習所を建設したらしい。

ヘリは平らな敷地内に着陸するとヘリのドアを開けて外へと降り立つアリサ姉と俺

そんな俺達にやってくるのは俺もアリサ姉も見知った人物だった。

「アリサちゃんーん！優希く〜ん」

『すずか姉！』

やってきた紫色色の髪をしたこの人、月村すずか……アリサ姉同様母

さんの親友で月村工業の社長……確か交友関係が一番長いらしい。

「わずか、お待たせ……機体の方はどう？」

「うん、ちゃんと届いて組み立ては完了したよ」

とお互い社長とは思えない仲良しな友達のように話し合う二人、そんな2人に俺は付いていき付いたのは……空港でよく見る管制塔のようなところ。

そこでは数人の男女がオペレーターとして機器を操作や、今後の打ち合わせなどを話し合っていた。

「お疲れさま、みんな」

とアリサ姉は入ってきてから早々に働いてくれている人達に労いのお礼を言う。

すると社長であるアリサ姉がやってきたことで数人の男女も全員が立ち上がりお疲れ様ですとアリサ姉にむけて全員が一礼した。

(……アリサ姉……社長らしいところ初めてみた……)

(マスターその言葉はくれぐれもご本人の前ではおっしゃらないでくださいね)

「さてと、まずは状況を確認しないと……ラファールの状態はどうなってるの」

「は、はい！」

ロンギヌスに釘を刺された後、アリサ姉は機体のコンディションを訪ねるとこの中でまだ若い女性が表情が固く緊張が見られる中、アリサ姉に報告し始める。

「ラファール・リヴアイブなのですが、組み立ては完了しましたが……まだOSの構築が未完成でして……申し訳ございません！」

と頭を下げるがアリサ姉は嫌な顔もせずその女性に接した。

「別にいいわよ。まだ入社したてだし……少しずつ馴れていけばいいわ」

「は、はい！申し訳ございません！」

と謝るのを求めてはいないのにペコペコと頭を下げる女性に横のすずか姉は苦笑いの笑みを浮かべていた。

「優希悪いんだけど……もう少し時間を……」

機体の初起動にもう少しの時間が必要だと言おうとするアリサ姉
だがその直後……

(マスター！2時の方角より熱源体が高速接近！数は4機！恐らくI
Sと予測されます！)

(っ!!)

ロンギヌスの探知機能によってセンサーに何者かがこちらに接近
している報告があがり俺も少し顔を強ばせる。

そして次にこの演習所のセンサーにも反応したのか警報音が鳴り
響く。

「警報!?状況を確認して!」

「は、はい！現在IS4機がこちらの領空に侵入して接近中！識別は
……IS委員会です!」

と慌ててオペレーターする男性の知らせに室内は緊張感が高まる。
そして侵入者は敷地内の空に立ち止まり口を開けた。

「我々はIS委員会のものです！八神優希という男性の身柄引き渡し
を要求します!」

十話『出撃』

アリサSIDE

ああもう！

優希を連れて家の所有の演習所に来たのはいいけどIS委員会……というより間違はなく女性権利団体の息がかかった奴等ね、よほど男性操縦者が目障りなのかしら……たった一人にラファールを4機も持つてくるなんて

ていうか、なんなのよこいつら！本当に白昼堂々とやってきてるし……どういふ神経してるのよ！

「じゃ、社長どうすれば……」

すずかは驚いてないけど他の人達には動揺が大きいわ、ここは私がしっかりしないと

『通信を取りたいわ、通信機を貸して』

「は、はい」

と私はオペレーターに指示を出して通信機を受け取ると侵入者に向けて話し出す。

『バニングス社のアリサ・バニングスよ……IS委員会だか女性権利団体か知らないけどあんた達は私の所有地領空を侵してるわ、即刻の立ち去りを要求する』

「その条件を飲むわけにはいきません……我々はあなた方が匿っている八神優希の保護を受けてここに来ました」

あつちも引き下がる気はないか……なら此処は正論で攻めてみましょう。

『そういった交渉ならもう少し穏便に事を運ぶべきよ……話し合いなら後日、あたしの会社に訪ねることね』

「あくまで八神優希を譲らないつもりですか……見損ないましたよアリサ・バニングス……女でありながら男をかばい立てするなどと」

ああ、もう頭が痛くなってきたどうして今の時勢にこんなに女尊男卑の思考が根強いのかしら

「大体、前々からあなたとことは気にくわなのよ！女でありながら

社内で男女平等を心がけているなんて……それに私の妹はあなたの会社に面接したのに落とされたって」

あいつの妹?……ああ、そういえば1人だけ女尊男卑の思考の子がいたって……中々のスキルの持ち主だったけど……あの性格だったし落とした覚えあるわ……

「もう一度言うわ!八神優希を渡しなさい!さもないとこの施設に攻撃を加えるわ!」

本当にめちやくちやね!さてどうすればいいか……

会社を守るなら優希を渡すのがベストなんだろうけど……優希はあかし達の友達のはやての息子……そんなこと死んでもしない……だけど他のみんなの命は……

……ってそういえば……あれからずっと優希が黙ってるけど、どうしてかしら?」

そういつて私は優希がいる方向に振り向くと漸く優希が何も発せない理由がわかった。

『い、いない!?!』

そこには優希の姿は無く、みんなもIS襲来の衝撃で気付かなかったのかあたしの声で漸くこの場に優希がいないことに気がついた。

「い、いない!?!」

「あの子何処に行ったのよ!?!」

「ま、まさか……逃げたんじゃ……」

と恐怖と動揺がこの室内に広がる中、あたしは最後の言葉は絶対無いと断言できる。

あの子は騎士だこのような状況放っておくわけがない。

後はデバイスも使わないとなると……まさか!?!

優希SIDE

『全く俺は物じゃねえっての』

IS委員会襲来と同時に俺はある場所へ急いでいた。

現状、ロンギヌスはこの世界ではオーバーテクノロジーなわけで簡

単に使うことは許されない。

ならば俺が戦える方法は何かそれはたった一つだけ……

『……あつたー!』

辿り着いたのは物資などを貯蔵する倉庫。

その中で一際目立つのは緑色を強調する機体……今この施設の上空を飛んでいる機体と同じラファール・リヴァイヴ……

『誰もいないな……ロンギヌス、バリアジャケットをセットしてくれ』

「了解!バリアジャケット展開します」

ロンギヌスに指示すると俺の服装はIS学園の制服から黒を強調する姿へと変貌しラファール・リヴァイヴに手をかざす

すると少し光った後、俺はラファール・リヴァイヴを装着していた。

『……これが、ISか……』

適正があるかどうか試しに乗ったときと実践テストでしか動かしたこともなかったためにまともに動かしたことは一度も無い。

『確かOSがまだだっかっていつてたか……ロンギヌス、ISの調整に入るぞ!』

「了解、ISプログラム接続、モニターとキーボードを表示します」

ロンギヌスに頼むとすぐに答えて俺の目の前に空中モニターとキーボードを出現させてくれて直ぐさまOSの組み立てに入る。

『通常のラファールの間接部等の駆動系を考えれば……これぐらいが限界か、後はハイパーセンサーはロンギヌスに全て譲渡、PICをマニュアルに設定……機体コンディション正常、システムに異常なし……背部スラスト動作確認……異状なし……全システムオールグリーン……行ける』

「ISのハイパーセンサーリンク完了しました……いつでも」

『よし!行くとするか!』

簡易だがOSを組み込み各部のチェックを済ませると俺は気を引き締めてラファール・リヴァイヴで倉庫から飛び出した。

十一話 『キカイノココロ』

NOSIDE

突如としてやって来たIS委員会、優希を手に入れようとアリサ達を脅迫する中、優希はラファール・リヴァイヴを装着して倉庫から飛び出してきた。

「っ！隊長！ターゲットを補足しました！」

「あちらから出向いてくれるとは丁度いい…少し痛めつけろ」

倉庫から飛び出したことで上空のIS委員会に気づかれ、隊長が優希を攻撃することを指示すると一人がアサルトカノンのガラムを取り出すと照準を優希に合わせて発砲する。

しかししっかりと見ている優希にとっては避けることなど造作も無いためトリガーを引く指の動きを見て後方に飛んで回避した。

「なっ！避けただっ!？」

操作もろくにできないただの初心者だと思っていた彼女らにとつてただ攻撃を避けたこと動揺を隠せない。

「貰った！」

その動揺を見逃さないと優希は上空の敵目がけて飛翔するがここであることに気付く。

「そういうえば武器は…って何も装備してないだっ!？」

そう言えばとこの機体の拡張領域パススロットには武装は何が収納されているのか気になってモニターに表示したがモニターには何も表示されておらず、拡張領域パススロットに何も入っていないことに漸く気付いた。

「くそー！こうなれば！この拳で！」

武装がなければこの手でと少し強引な方法と分かっているながらも優希は撃ってきた女性に拳を繰り出そうとしたとき

「っ!？」

「PIC停止!?!システムダウン、恐らく機体不良によるものかと思われます」

拳が届く直前突如としてPICが停止し重力に引かれて落下していく。

「くっ！」

あと少しと苦い顔を浮かべながらも優希は空中で体制を立て直して落下の衝撃で顔を歪ませるが無事に着陸した。

「ロンギヌス！すぐに問題点の割り出し！急いでくれ」

優希は待機状態のロンギヌスにシステムダウンの原因を割り出すように指示する。

「やはり、男が神聖なISに乗るってこの程度」

と落下していったところを優希の操作ミスと誤認したIS委員会は追撃と言わんばかりにアサルトライフルのヴェントを取り出すとIS委員会は集中砲火、それを必至に優希は両腕を前に出して弾丸を耐え凌ぐ。

「…解析終了しました、ですが機体に不備は見られません」

「なら何で止まったんだ!?!」

「……まさか…マスターこれは予測なのですが…問題点はISのコアかもしれません」

ロンギヌスが解析を完了しても不備は見られなかった。それにより優希も驚いたがすぐにロンギヌスはいくまでの仮定の話を持ち出ししてくる。

「ISコア?…まさかコアには意志があるって…そういうことか?」

「はい、なのでコアに語りかけてください…恐らく念話の要領で可能かと思います」

「……わかった……」

問題はコアの意志にあるのではと推測するロンギヌスに優希も納得して頷き防御姿勢のまま目を瞑って神経を集中する。

……

……

(えっと…聞こえるか?)

(……………)

(どうして、機能を停止したのかそのわけを聞きたいんだ…話してくれないか?)

(…………ヤダ)

(っ!?)

目を瞑った優希はコアに対して念話と同じ要領で語りかけると短い声が聞こえた。

声の主は若い女の子の声…それとどこことなくのんびりしている声音だった。

(え?..やだ?..)

(タタカウノヤダー)

コアの意志が言った言葉の意味が理解できなかった優希は再度訪ねるとコアは今度ははっきりと何が嫌なのかを教えてくれた。

(タタカウヨリオソラニキタイ)

(…………)

とコアが自分の望みを優希に打ち明けると優希は深く考えた。

コアは…彼女は戦うことより空を飛ぶことを望んでいる。

恐らくコア自体以前の操縦者達から戦いを強要され嫌気を指していたのだろうと優希は理解する。

(…………..わかった…でも今は君の力が必要なんだ)

(…………)

(今此処にいるアリサ姉や他の人達を助けるには俺とお前が力を合わせるしかない…その後何度だって空を飛ぶのを付き合うよ)

(…………ホント?)

理解した上で優希はコアに協力を仰ぎ、初めてそんなこと言われたことにコアは半信半疑で訪ねた。

(ああ、本当だ…騎士に二言はないよ)

(…………うん、わかった)

十二話 『叫べ必殺キック!!』

そして、状況は現実に戻り、連射するライフルの弾丸を防ぐ優希に防戦一方な状態を見たIS委員会は我が物顔で優希を見る。

「やはり男性はこの程度!最後は私が引導を渡してやる!」

そういつて一気に決めるためかヴェントを収納して近接ブレードのブレット・スライサーを展開すると一気に優希へと迫った。

「優希!避けなさい!早く!」

先ほどからぴくりとも動かない優希を見てアリサは焦りを見せながら通信機を使って優希に向かって叫ぶが未だ動きを見せない。

「もらったあ!!」

遂にIS委員会が優希の懐まで接近しブレット・スライサーを振り落とそうとしたとき

「っ!!」

動かなかった優希が直ぐさまに防御の姿勢から右腕を引きブレット・スライサーが当たる前に拳を思いつき繰り出すと自己防衛のシールドを突き破りISの絶対防御が発動するもその衝撃だけは相殺することができずに悲鳴も上げることなく女性は吹き飛ばされていき勢いから地面に何度か跳ね上がり……十メートル程離れたところで漸く停止したが当の本人は拳が当たったも所で気絶していてぴくりとも動かなかった。

「っ!そんな……馬鹿な!」

一撃……ただの一撃の拳で味方1人が戦闘不能に追い込まれたことにIS委員会は動揺を隠すことが出来ず啞然としていたがそんな中優希はしまったと別のことで焦っていた。

「やべ、思わず魔力使っちゃった……あの人大丈夫かな……」

「別に問題ないのでは?」

先ほど放った拳には優希がISコアを説得した後、意識を現実に向けてとあのIS委員会の1人が懐まで飛び込んでいてブレット・スライサーを振り落とそうとしていたために無意識に魔力を使ってしまったのだ。

もちろん、通常のパンチとは威力が桁違いに違うためその上魔導師としても魔力がA以上のランク保有していることから一撃で倒されることも不思議ではなかった。

あまりこちらでは魔法は使わないように心がけていた優希であったが咄嗟に使ってしまったことで撃破したIS委員会の女性のことを気にしたがデバイスであるロンギヌスは優希を舐めていた報いだと多少怒っているように話した。

「素手は…流石にきついし…こいつを使うか」

優希は気を取り直すと近くに落ちていた、先ほどのIS委員会のラファール・リヴァイヴの武装の一つブレット・スライサーを右手に掴む。

しかし、右手に持ったブレット・スライサーは拒絶するように重くなり、優希であつてもまともに振るえない程の重さを感じた。

「重っ！どうなって…そういえば…ISの武装って奪われないように使用者が承認しない限りロックされるんだっけ…なるほどだからこんな重いわけか…ロンギヌス」

「わかりました。その武装の所有権をマスターに書き換えればいいのですね？」

「ああ、頼む…その間は…！」

ISの教本を読み漁っていたために教本の中に使用者と使用者が認められた者以外は武器がロックされるということを読み出し、ロンギヌスに武器の使用者の書き換えを指示しようとする。ロンギヌスは優希が言おうとしていたことに気付いていて、早速取りかかると優希は少し顔をにやつかせると視線をIS委員会達に向けて両手でブレット・スライサーを持ちながらPICを起動させて放たれた銃弾を回避する。

「どうして当たらない！」

1人気絶したがまだ三対一と数では優希が不利なのだがIS委員会達のヴェントの射撃をいとも簡単に回避させ続けることに苛立ちを感じていた。

自分たちは選ばれた存在、私達女を虐げていた男に鉄槌を下す…そ

のための兵器があるとそう信じていたはずなのに現状はどうか？

その虐げている男に手玉に取られるように遊ばれている状況だった。

「うーん、機動性に物足りないな…ロンギヌス、武装は？」

「たったいま書き換えを完了しました。何時でも行けますよ？」

「そうか…：…なら反撃開始だ！」

銃弾を回避する優希であったが通常のラファール・リヴァイヴの機動性に不満があるのか少し悩む顔をした後、ロンギヌスにブレッド・スライサーについて聞くと漸く所有権の書き換えが完了したと報告されると笑みを浮かべて敵に目がけて飛び出した。

相手も黙っているわけもない、接近する優希に反応してIS委員会達も接近させないようにヴェントで弾幕を張るがそんなもの優希にとっては微々たるもの。

弾幕の中をラファール・リヴァイヴの機動性を活かしてかいくぐるがそれでも機動性不足で何発か被弾するが気にするほどのダメージでは無いために構いなく敵へと突き進む。

そしてIS委員会たちのもとへ辿り着くと勢いを殺さずに三人の内の一人の横腹にブレッド・スライサーの一閃を叩き込み、隊列を乱しているところに直ぐに反転して背部スラストにまた一撃を叩き込んだ。

「っ…この男風情が!!」

ダメージを受けたことに応えたのかヴェントを拡張領域バーススロットに収めるとブレッド・スライサーを取り出して優希目掛けて振るうとそれに応じるように優希もブレッド・スライサーで対応して鏢迫り合いに持ち込む

「ぐっうー！」

「……」

鏢迫り合いに持ち込まれた二人だが委員会の方はブレッド・スライサーを両手で持っているが優希は右手だけで対応していることから実力差があることが窺えた。

「もらったあっ!!」

そんな鏢迫り合いの状態の中残りの二人の内の一人が優希の背後から迫り取り出ししていたブレッド・スライサーで優希を強襲する。

「詰めが甘い」

背後からの強襲に気付いていたのか優希は空いている左手で優希に当たる前に振るっていた彼女の手を掴んでしつかりと攻撃を防いでみせる。

「なっ！その汚わらしい手を離せ！」

「安心しろ直ぐに離してやる……」

優希に腕を捕まれていることに激怒するが優希もそろそろ決着をつけるためそう告げるとまず鏢迫り合いしている女性にブレッド・スライサーで女性の持つブレッド・スライサーを弾くと直ぐさまにドロップキックの要領で蹴り飛ばす。

次は左手で押さええている女性を優希は思いつきり左手を振りかぶり先程優希が蹴飛ばした女性に向けて投げその後直ぐに自身も投げた女性を追いかける。

そして蹴飛ばした女性より投げた女性のほうがスピードが早いため二人の女性は衝突しそこに優希は手に持っているブレッド・スライサーで無防備な2人を何度も滅多打ちで切り裂き二人の機体を戦闘不能まで追い込ませた。

「さてと……あとはあんただけだ」

戦闘不能の2機のラファール・リヴァイヴが落ちていくのを見た後直ぐに最後の1人である女性に視線を向ける優希

視線を向けた先の最後に1人になった女性は今見ている物が信じられないといった表情で優希を見ていた。

そんな女性のことなどお構いなしに優希はブレッド・スライサーを構えて接近する。

「くそー！舐めるなあ!!」

三人も撃墜され激情に駆られる女性は動きながらもヴェントで優希の動きを牽制しつつ接触したさいにはブレッド・スライサーで優希のブレッド・スライサーと打ち合いまた離れたのならばとヴェントで射撃を開始する。

「中々やるじやないか……こっちは遠距離がない分きついな……ロンギヌス何かないか？」

空を飛び何度も剣を打ち合いながら女性の力量を分析する優希は相棒のロンギヌスに攻略法がないか訪ねてみた。

「そうですね………いつそのことはやてさまから送られた攻撃モーションを試してみたらどうでしょうか？もしかすれば使うかもとりヴァイヴさんと相談して調整は完了しています」

「えっ!？」

するとロンギヌスは直ぐに優希の質問に答えると優希も聞き覚えがあるのか嫌な顔をして言葉を洩らした。

「いや、あれは……その母さんの悪のりで……」

「そう言われましてもあれが最善かと……」

嫌な顔で決断が渋る優希にロンギヌスは最善策と推し進め、優希も頭の中で何かないかと模索するが……

「ああ〜！やればいいんだろ！」

「……ではまずは敵の意表を……」

「付くんだろ！」

嫌々だが最善策を了承した優希は意表を突くべく女性にへと突っ込む。

「何度やろうと！」

また同じと決めつけた女性はブレッド・スライサーで迎え撃とうとし優希が懐に飛び込んできたタイミングで優希が動いた。

「っ！」

「馬鹿な！自らの武器を捨てただと!？」

懐に飛び込んでブレッド・スライサーで攻撃を仕掛けるとようでいた女性であったが、あるうことか優希がブレッド・スライサーを手から離れたことで、意表を突かれた。

そして意表を付いた瞬間優希は女性の振り落とされるブレッド・スライサーの攻撃を最小限で避けてから女性の腕を両手で掴むと思いつき地面にへと放り投げた。

「よしーや、やるぞー！」

「OKマスター、攻撃モードシヨンUKドライブグニツシヨン…！
e t ' s S h o u t ! ! 」

未だ抵抗感がある優希であるが腹を括りそして叫んだ。

「究極疾風蹴り《きゆうううきよおおくうううつ！ラ
フアアアアアルウウウウウつ！キイイイイイック！！！！》」

「FULLBOOST」

空中で叫びながら1回転宙返りして少し加速をつけてからライダーキックのように足を突き出すとラファール・リヴァイヴの背部スラストを最大点火すると投げられた女性目がけて迫っていきシルドを突き破り、絶対防御が発生する。

そのまま優希は女性を地面にたたきつける。

その行為から加速度からの衝撃で地面が陥没した。

「よつと」

優希は究極疾風蹴りをくらわせた女性の容態を軽く見て気絶していることを確認する。

「まあ当然か……」

あれだけの衝撃、一般の人間ならば意識を失わないわけがない。

「取りあえず、もうあの技は絶対に使わない！」

「使わないことを祈りましょう」

二度と究極疾風蹴りを使わないことを誓う優希はてさてどうなることやら……

「サツキノカツコイイ」

「え？」

未来には怪しい暗雲が漂っているようだ。

十三話 『交渉?』

優希SIDE

「全く！何度もひやひやさせないでよね！」

『……申し訳ございませんでした』

今現在、アリサ姉に監視塔に呼び出され正座をさせられていた。

理由は勝手に出撃したのもあるがリヴァイヴのシステムダウンで一時的に動かなくなったことが大きな要因らしい。

「で、どうしてあんなったか言い訳ぐらいは聞いてあげるわ」

『……言い訳って……取りあえずあの時コアが戦うことを拒絶してな

……その説得に時間を費やしていた』

って説明したのはいいもののこんな信じるのアリサ姉か、さすが姉ぐらいたろう……現にアリサ姉とすずか姉以外、啞然としてるし。

「……まあそういうことになっておいてあげるわ……さてとこれから色々忙しくなるわね……全く余計な面倒ごと増えちゃったし」

と頭を抱えるアリサ姉、まあ捕らえた委員会の手先のこともあるから
らね

………待てよ

『あれを……こうして……これをこう……上手くいけば……』

「……優希くん？」

俺がぶつぶつと考えていると気になった、すずか姉が訪ねてくる。

『あつ！す、すずか姉……えつとその……』

「ん？なに？まだ何かあるって言うの？」

『ないってわけじゃないけど……そのアリサ姉、少し来て欲しいんだけど』

「此処じゃあ言えない話なの？……まあ、あんたのことだから疚しいことじゃないでしょうけど……すずかはどうする？」

「私も少し気になるから一緒に行くよ」

と取りあえず監視塔では他の人にも聞かれる恐れがあったため俺たちは移動して誰もいない個室に入ると直ぐさまロンギヌスのモニターを起動させて作業を執り行う。

『……さて、これで完了……ロンギヌス、ISコアネットワークで通信を』

空中のキーボードをタイピングしていくこと大凡数分、俺はロンギヌスにISコアネットワーク経由で通信することを指示し少し待つと相手と回線が繋がった……その相手とは

「漸くですか、報告を聞きましようか」

と偉そうな……まあ実質偉いんだろうが女性が誰かも確認せずに報告を聞こうとする。

『こんばんは……あなたがIS委員会の……幹部さんで間違いないですよね?』

「あ、IS委員会!?」

俺は平然と話しかける中話し相手がまさか先程まで戦っていた組織だとは思ってもいなかったアリサ姉は驚いた。

「……なっ! 貴様何者だ!」

『ご紹介が遅れました……私は八神優希……第二男性操縦者の八神優希です。まず一つ、あなたが差し向けた彼女達は我々の中で手厚く保護されていますので……死んではいませんよ』

「……何のことかしら? 私には聞き覚えのないことですね……」

『ご冗談を……この回線はあなた方が差し向けた人たちのISコアに残っていた履歴をサルベージして繋げたもの……それに彼女達は我々の前でIS委員会と名乗っていました……これについては?』

「二度も言わせないください私達にはそのようなこと身に覚えが……」

あくまで白を切るつもりかなら……

『ではこちらで鹵獲したIS4機の身元改めさせてもらってよろしいでしょうか?……もしかすればそれでどこから来たのかがわかるかもしれないませんし』

「っ! そういえばつい先日ISコア4つほど何者かに奪取されたと報告がされた気がするわ恐らくその4機かと思われます」

『……では彼女達はIS委員会を名乗る犯罪者だと……』

「はい、その通りです、犯人を捕まえていただきありがとうございます」

す、後日、ISコアと犯人の身柄を引き取りに向かいますので……」
『おっと、話を切られる訳にはいきませんね……こちらはそのような報告ではなく交渉をしているんですから』

「交渉？」

『はい、まずこちらの条件を教えます、今回襲撃してきたラファール・リヴァイヴ4機と予備パーツを無償で譲渡……もちろんコアは抜き取ってそちらにお返しします……期限はそうですね明日の昼までにはよろしくお願いしますね』

「……あなたの条件はわかりましたが私達は？」

『もちろん、四つのISコアの返却……そしてこちらで保護した4人の受け渡し……そして今回の騒動についてこちらは公表しないことを約束します』

提示した条件を言い切ると通信越しに机を強く叩く音が聞こえる……どうやら怒っているようだ。

「なんですか!?その条件は!?我々を脅迫するつもりですか!？」

『脅迫?いいえこれは交渉ですよ……脅迫ならば交渉などせずあなた方を脅しています……それで……解答は?』

「そんな話!付き合えるか!第一我々に非など……」

『そういつて逃げてもらっては困りますね……まあもう手は打ちましたけど』

「なんですって?……っ!!貴様!」

あ、かなり怒ってる……っことは漸く気付いたということか

『漸くお気づきになりましたか、もうしわけございませんが現在自分はあるあなたのIS委員会のデータベースにシステムクラッキング仕掛けさせてもらっています……データベースから今回の襲撃してきた人物の個人データを消去をさせるわけにはいきませんからね……こうして彼女達の情報をロックしているんです』

先ほどからロンギヌスを使ってしていたこと……それは今回の騒動の加害者の個人データを消されなかったため、IS委員会のデータベースにクラッキングしていた。

か、完全に逃げ道を潰してる

そんなアリサ姉達の思いも裏腹に交渉は続く

「ぐっ！」

『さて改めてお聞きします…プライドのために条件を飲まず、IS委員会の信用を地に落とすかそれともプライドを捨て、条件を飲みIS委員会を守るか……さあご決断を』

再度あちらの意志を確認するため伺っているとダンと腕を机に弱々しく叩く音がするが聞こえると声が聞こえてきた。

「……条件を……飲みます」

『……良いご決断です……それでは先程話したとおり……お願いいたしますね』

「……いつか後悔させてやる」

……まだ押しが足りないようだな……

『後悔？どうやらあなたはわかっていないようですね……もし、俺の関係者やバニングス社の社員やその関係者に何かして見ろ、IS委員会を何一つ残さず粉々に潰して、生きていることを後悔させてやる！そうなりたくなければ報復などという愚かな行為は慎むことだな！』
そういつて通信をきると一度溜め息……少ししてからアリサ姉達の方に向けて笑みを浮かべた。

『よし…これで色々と改修の手間が省け「省けたじゃないわよ!!!」あべしー!』

色々と省けたというのにアリサ姉に打たれた……解せぬ……

因みに俺と話していたIS委員会の幹部はこの件を終えたあとしつぽを巻くように退職書を残して逃げたとかなんとか……

十四話 『家族との団欒』

『あゝ疲れた〜』

バニングス社の演習場の宿泊施設……その個室の一つに俺は現在ベッドに寝転んでぼやいていた。

あの交渉の後アリサ姉にかなり怒られた……別に嘘は一つ言っていない……もし手を出すのなら俺も容赦なくIS委員会を叩き潰していたしもし、俺が捕まったと家族の耳にも入れれば母さん達が黙ってはいまい……確実にIS委員会という組織は壊滅するであろう。

最後にアリサ姉が「腹黒なところは、はやてに似たのね」とぼやいて溜め息を呟いていたけど……そんなに腹黒だったか？

『ロンギヌス〜母さんに通信繋げて〜』

報告書も書かないと思いなながらもISでの初戦闘もあつて疲労感に見舞われているのでまずは通信であらかたなことを言おうと思いついロンギヌスに母さんのデバイスに通信をかける。

すると直ぐに回線が繋がりに空中ウインドウに母さんとそれとリンの姿が映る。

「はーい、どないした優希？」

『母さん達と話したくなつて……もう仕事は終わったの？』

「うん、そうやで……今はみんな家で寛いでるところや」

『みんなつてことは……ヴィータ達も帰つてきてるの？』

「なんだよ、あたしが帰つてきてたら不味いのか？」

と画面には映っていないがヴィータの声が聞こえてくると他にも三つほどモニターが開いて、家族全員の姿が映し出された。

『いやいや、そんなことないって……それでみんなも元気そうだな……まだ一週間ぐらいしか経つてないのに懐かしく思えるよ』

「優希はいつもあたし達の後ろをよちよちと付いてきてたから……余計そう感じるんじゃないやねえか？」

「ああーそうかもな！それやとリン辺りも一人暮らしとかしたらそうなるかもな」

「リンはならないのですう！はやてちゃんとずっと一緒なのですう

！」

俺が言ったことだがあつちで話の話題が盛り上がってる……それとリインは……あながち間違いではないな

「そういえば主から聞いたぞ、何やら代表選抜の試合があるとか」

『ああ、来週の月曜日にイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと織斑一夏と戦う予定……たぶん総当たり戦になるんじゃないかな？』

「なあ、優希そいつらって強いのか？」

シグナムが母さんから聞いたのか代表選抜のことを聞いてきて俺は返事を返すと次はシグナムの隣にいるアギトから二人は強いのかどうかを訪ねられてくる。

『アギト、さすがに強くはないと思うぞ……データも見てはいないけどあの時の力量からして……そこまでだと思っ』

「そっか……まあ仕方ねえよな」

「優希くん、わかってると思うけど、優希くんは強いんだからその対戦相手に怪我をさせないように戦うのよ」

『……シャルそれはさすがに難しすぎやしないか？』

戦うんだから怪我の一つや二つは覚悟しないとイケないだろう

……

「そうや！優希少し聞きたいことあるんやけど……」

と母さんがなぜかニコニコとにやつかせて俺を見てくる。

「もしかして……彼女とかできたんか？」

『いやー出来るわけないでしょ!？』

いきなりとんでもないことを言い出すんですか、この人は……

「でも聞いた話やと寮生活の上に今はルームメイトもおるんやろ？その子とはどうなんや？」

『だから簪さんとはそんな関係じゃないから！』

母さんニヤニヤと見てきてるけど本当に簪さんとは何もない。

というよりあの子自身内気な性格なためにコミュニケーションと取れていないから良いか悪いかと聞かれればわからないと答えるくらいだ。

「なんだ？簪って名前じゃねえのか？」

『ヴィータが言うのもわかるけど…簪さん…何故が名字で呼ばれるのを嫌ってるみたいで…だから名前でもいいって…』

さすがに何故嫌ってるのか…聞きたくはあるけど聞かずに聞いたほうがいいだろうし…

「でもやっぱり私はその簪ちゃんと仲良うなって欲しいと思ってるよ…」

『……善処しておく……』

取りあえず色々と話すことは山ほどある…部屋には一人だから堅苦しいのみなしで思いつきり母さん達と話すことにしよう

「むっ!? そうですねば私は一言も喋っていなかったような…」

あっ……ザファイーラ……居たんだ……

十五話 『海鳴市』

IS委員会襲撃から一夜が明け朝日が昇った頃俺はバニングス社の演習場の広さを使って朝の日課である走り込みをしていた。

『にしても……スバルもなにげに凄いよな……母さんから聞いた話だと……霸王の子孫を保護したんだろ?』

昨晚の家族との通信越しの団欒……その話の中に一際気になったのが先程言った霸王の話だ。

何でもやり手の格闘家を襲撃していたとか……そしてノーヴェと戦って相打ちされたところを保護されたとか……

『にしてもスバルの奴……聖王のヴィヴィオといい、冥王のイクスといい……ベルカ騒乱の王の関係者と面識多くないか?』

まあ実質一人、当本人なんだけどな

「でも心配ですね……ヴィヴィオ様と霸王に関しては」

『……ああ……あつちも大変かもな』

主にヴィヴィオ達が……

そんなことを思いながらもランニングを続けて演習場を大回りに2周（1週9 kmほど）回ったあと社内食堂で朝食を済ませる前にリヴァイヴがいる倉庫へと立ち寄った。

中に入ると夜間も作業している整備員が多く居て鹵獲したらファール・リヴァイヴからISCコアを摘出していた。

そんな整備員が作業をする中俺は一目散に俺が乗ったりヴァイヴのもとへ駆け寄ると装甲に手を当てる。

『昨日はお疲れ様……少し手荒く使ってすまなかったな』

リヴァイヴで殴ったり蹴ったりしたわけだし……一応謝っておこうと思っていた。昨日はそれどころでは無かったから……言えなかったけど

（ベツニイイヨ〜）

『ありがとな』

（ソレトマタアレヤツテネ〜）

『いやあれだけはもうしないからな』

(ケチー)

『……全く……』

リヴァイヴとも昨日からの仲だけど……関係かなり……良好……かな？

そして倉庫を後にして食堂で朝食を食べた後すぐか姉共に帰りのヘリへと乗り込む。

外には俺が昨晚交渉した取引のため残ることになったアリサ姉が見送りにきている。

「それじゃあ、今日一日はお休みだからたっぷり満喫してきなさい！」

『ああ、後のことアリサ姉に任せるよ』

ヘリのプロペラ音で通常では掻き消されるためアリサ姉と俺の耳にはヘッドフォン型の通信機が付けていてそれを通して話し合い、そしてヘリは海鳴市へと進んでいった。

「それじゃあ、優希くんお疲れ様、明日は改修後のリヴァイヴに乗ることになるけどプランは昨日組み立てた設計でいいんだよね？」

『はい、お願いします』

ヘリが海鳴市のヘリポートへ着陸した後、すぐか姉が止めていた車に乗って八神家の前まで送ってもらう。

直ぐにすぐか姉は車を動かして立ち去っていき車を見送った後、久々の我が家の中に入っていった。

『ただいま〜っていつでも、誰もいないんだけどな』

誰もいない我が家の中に入っていき奥のリビングへと辿り着くと直ぐさま自分の部屋…昔は母さんの部屋だった部屋に入ると直ぐさまベッドの上にダイブした。

『………ああ、我が家は落ち着く〜』

IS学園やらバニングス社の演習場と慣れない環境下なこともあったために中々落ちつけなかった。

これで漸く落ちつける……わけもないか

『ロンギヌス……サーチャーは?』

「はい、自宅周辺に配置したサーチャーで不審な人物は3人ほど確認しました」

『……IS委員会の奴等か?』

「その可能性が高いかと」

……全く昨日の今日だというのに……

『……しかたねえ』

楽に体を休めなかったことに少しいらつきながらも着ていた制服から黒を強調する私服に着替えて目を隠すサングラスをかけると自宅を後にしてある場所へ向かう。

(……案の定……三人とも付いてきてる……上手く悟られない絶妙な距離で……相手はこの手のプロか)

気配でなんとなく付いてきていることを感づいて、気付かれないように気付いていない素振りを見せる。

そして歩き始めてバス停に乗って商店街へとやってきた俺……

やはり、監視は振り解けない……まあ確実に振り解くけどな

『さて、あそこだな』

商店街を歩いていて辿り着いたのは中くらいの公園、回りには土曜日だということもあり子供がはしゃいで遊んでいて、そこ光景を見て頬吊り上げて笑みを浮かべる。

でも、俺は子供のそんな光景を見に来たわけではない……俺が一目散に目指したのは公園によくある公衆用トイレだ

何の躊躇いも無く男子トイレに入っていき奥の便座トイレの個室に入ると一度溜め息を付いた。

『女尊男卑で助かったぜ……そのお陰で監視も女子だからな……さて……ロンギヌス』

「了解、作戦通りに開始します」

ロンギヌスに指示を出すと俺はパープル色のベルカ式魔法陣を展開して目を瞑る。

目を瞑ったがものの数秒後目を開けて個室から出て洗面所の鏡を見ると目の前には茶髪で黄色の瞳をして私服も蒼を強調する全く別の姿に変わっていた。

『変身魔法、成功成功』

こういつた追跡は入学する前から想定していた。

そのため付け焼き刃だが相手を巻くための魔法をいくつか習得したのだ。その一つがこの変身魔法

これなら怪盗二十面相のごとく別の姿に変わることが出来る…本当に魔法様々なわけで

『さて、翠屋にいくか』

姿を変えたことで怪しまれないと断言して本来の目的である翠屋へ向けて公衆用トイレから出て公園の外へ平然と歩いていく。

当然監視からしたらトイレから別の誰かが出て来たとしか考えられず少し見られた後視線は俺がまだ居ると思ってるトイレの方へと向く。

既に抜け出しているとも知らずに…バレたときは驚いてパニックになるだろうな

十六話 『ようこそ！翠屋へ！』

公衆用トイレで上手く監視から逃れた俺は地球でも馴染みのある喫茶店翠屋にやって来ていた。

俺の誕生日には必ずケーキは翠屋…というか、母さんもんだけどね…それほど翠屋のケーキは評判に比例して美味しいのだ。

取りあえず監視から逃れたために人の居ない裏路地で変身魔法は解除して翠屋へと入る。

中は朝早いこともあつて、がらがらに空いて…というかまだ誰も客が着ていない状態であつた。

そんなことを確認しながら俺は奥端のカウンター席にすわるとカウンターの近くに居たある人がやって来た

「いらっしやい…朝から珍しい人が来たものだね」

そういつて柔やかに笑みを浮かべる……やっぱり気付いていたか……流石と言ったところか

『お久しぶりです土郎さん……相も変わらずご謙遜で何より…』

この人は高町土郎さん……この喫茶店翠屋のオーナーであるあの管理局のエースオブエース……高町なのはの父親

小さい頃の俺にも優しくしてくれた土郎さん……実は土郎さん昔ボデイガードだったとか何とか……そのため剣術が恐ろしく強くて俺の知る限りでは最強の剣士だ言っても過言ではない人物だ。

「まだそんな年ではないよ優希くん、桃子！優希くんが着たぞ」

と厨房な方に土郎さんが声かけると奥の方から聞こえてくる足音、それは近づいてきてその人は表に俺の目に捕らえた。

「あらー優希くん久しぶり元気にしていた？」

と俺を見るや笑みを浮かべて俺の心配し出す

この人は高町桃子さん、察しの通りなのは姉の母親で今でもなのは姉とは姉妹なのではと錯覚する人も多かったとか何とか……

『お久しぶりです桃子さん……美由希さんは？』

あと一人……翠屋の跡取りとして働いてる高町家の長女、高町美由希さん……土郎さんから剣術を学び実力は対等な状況なら俺と互角に渡

り合えるほど……

その時ふと思つたことがある……

この家族だけで一国家位転覆できるんじゃないか？

だつて恐らく地球最強の士郎さん……その剣術を学んだ美由希さんに此処にはいないが剣術師範代の恭也さん……そして我等がエースオブエースなのは姉……この四人いれば……行ける気がして他ならないんだよな……

「美由希なら今日は非番だよ」

『そうだつたんですか？……注文頼んでいいですか？』

「ああ、構わないよ」

『このイチゴ盛りだくさんパフェ一つ』

「はい、それじゃあ直ぐ用意するからね」

そういつて桃子さんは厨房に入つていき店内は俺と士郎さんだけになった。

「そういえば仕事の方はどうなんだい？こんなに朝早くこつちに來られるつてことは……また何かあつたんだろ？」

と俺が朝早く來たことで任務か何かでこつちに來ているのを察したのか世間話程度に聞いてきた。

『それほどたいした話でもないですよ……といったところで大体はもうわかつてるみたいですけどね』

「やつぱりIS絡みか」

とやつぱり察していたように今関わっているISの言葉が出て來た。

「女性にしか乗れなかつたISの男性操縦者……今や世界中がその話題だからね……これで少しはマシな世界になつてくれるといいのだが」

……やつぱり士郎さんも今の女尊男卑の現状を良とは思つては居ないよな……

「はいイチゴ盛りだくさんパフェです」

と桃子さんが厨房から出てきて俺の目の前にイチゴ盛りだくさんパフェを置かれる。

『美味しそう…いただきます…はむっ…うん美味しい!』
やっぱり翠屋のケーキは格別だ。

「そういえば…優希くん…彼女とか出来たの?」

『むぐっ!?ゲホオッ!ゴフオ!』

まさかの爆弾発言に完全にむせてしまった。

まさか…桃子さんに言われるとは…

『な、なんでそんなこと突然!』

「ほらね、今優希くんってIS学園に入学してるじゃない?だから、もしかしたら…彼女の一人や二人出来ても可笑しくないでしょ?」

とニコニコと言うけどまだ入学して一週間程度だし一人二人って複数居たら問題だし、何より俺に関しては管理局にいるためにそんなこと…

「桃子、優希くんもどう返せばいいか混乱しているからその話はやめないか」

「あらそうね…」

『はあ…はあ…そういう話はなのは姉にでもいつてください』

「ごめんなのは姉、悪いけどこっちに帰ってきたときの二人の話し相手になってもらおう。」

「ん…なのははな…」

「もう…なんか手遅れって感じが…」

…既に両親にすら結婚のこと諦められてるじゃん…

「くしゅん」

「ん?なんだ?風邪か?なのは?」

「ううん、そうじゃないけど…何でだろ?」

同時刻そんな話がミツドの教導隊舎であったという。

十七話 『漆黒の疾風』

翠屋で高町夫妻と話し合った後、スーパーで明日の朝までの食材を買ってから特にいくところもなかったために家に戻った。

戻ってから少し経つと監視していた奴らも戻ってきたのをサーチャーで確認：表情は完全に疲れ切っている様子だった。

まあそんなこと気にすることではないんだけどね…

『さてと…それじゃあ…』

今できることをやろうと家の自室に置いていた。ミッド製の空中投写型のディスプレイを立ち上げる。

『…カーテン閉めとくか』

監視者から見られてもあれだからカーテンを閉めて椅子に座って空中キーボードを出して作業に打ち込んでいく。

今の俺に出来ることは二つある

1つは明後日に迫った代表選のセシリア・オルコットの調査

これに関しては持っている機体の割り出しは直ぐに完了した…：というかあの時名前言ってくれたからあんまり探す意味もなかったけどな。

『…ブルー・ティアーズ…イギリスが、開発した第3世代試作機…』

キーボードを操作して俺の前に空中モニターを8つほど展開させ一つ一つに、違うモーションや武装の映像を映し出す。

『見た限り遠距離か…だが殆どの武装はレーザー兵器：確かこの世界だと最先端の技術だったっけ？』

とうっすらと地球の世界情勢を頭から引っ張り出しながらモニタリングを続ける。

『…それと一番の強みはビットの全方位から可能のオールレンジ攻撃か…』

少しキーボードを、動かしビットが空を飛び交い相手を様々な方向から撃っている映像を俺の目の前に映し出す。

『…あれ？なんでオルコットさんは…ビット操作時に攻撃しない

んだ?』

よく見るとオルコットさんはビットで攻撃している時に手持ちの武器を使用するどころか自機の移動さえしていないことに気付き少し考えた。

『……まさか…ビット操作時は動けないとかじゃないよな……それって致命的な弱点だろ』

「お言葉ですが恐らくオルコット様はマルチタスクを習得していないのではないでしょうか?」

『マルチタスクなしで!? 正気かそれは!?!』

俺は思わず声を荒げる。

だってビットを操作するにあつて、必ずしも攻撃が来ないわけがない……それなのに操作で精一杯では完全なものである。

『……なあ……マルチタスクってそんな難しかったっけ? 9才の子供でも習得できるよな?』

因みに俺の最大マルチタスク数は12……なのは姉に関してはその気になれば50は行けるとか何とか……流石戦技教導官

『取りあえず…致命的な弱点ははつきりしたな…それと警戒すべきは武装はこのレーザーライフルとビット六基だけなのか…だな』

「はい、恐らく最低限でも近接武器は所持している可能性が伺えます」

『取りあえず、言えるのは……油断しないなら簡単に倒せる……つてことだな』

「はい、マスター」

とりあえずは調べるのはこれでいいだろ……織斑は……何もわからじまいだし……対策しようもない……だが話だと篠ノ之と剣道しているとか……もし機体に剣付いてなかったらどうするつもりなんだろう

……まあ別にいいか俺が気にすることでもないし

『調べ物はこれぐらいでいいか……次は……』

調査も直ぐに終わったために8つのモニターを全て閉じるとまた

新たにモニターを表示させる。

しかし今度のモニターは何も映し出されてはいない。

俺が今できることの2つ目それは専用機となるリヴァイヴの改修機のOSの構築。

以前の突貫工事のOSは通常のリヴァイヴより少し良く動くほどOSだった

それにロンギヌスが即座に考案したシールドエナジーを一点に収束して攻撃および防御に使用するシステムも突っ込んだだけに過ぎない

といつても……OSはそう簡単にはいはいとできるものではないのだが……俺には特別、もう一つの専用機があるわけで……

『さてと組み立てるか』

そうと決まれば俺はキーボードを高速で打ち込んでいきモニターには打ち込まれた英数字が並べられていく。

おそらくOSを組みたてるに当たって相当な時間を費やすのは一般的だ

しかし俺にはもう何年も相棒のロンギヌスが存在する。

しかもISとデバイス両方とも精密な機械ときて似ているところが多い。

つまり、俺用に調整されているロンギヌスのOSをIS用にアレンジしてリヴァイヴに組み込むたったそれだけでいいのだ。

え？手抜き？そんな簡単に高難度のOS組むなんてチートだつて？

なら聞こう……身近に俺用に調整されてる専用機あるのに流用しない道理……ある？

まあ何はともあれロンギヌスのOSも相当な量だしそれにアレンジを加えることから……ぶっ通しなら四時間……何度か休憩ありながら六時間つてところかな？

さてと…やっつけていきますか

そして場所は変わって翌日のバニングス社の演習場。
勿論ここに来た理由は…出来上がった俺の専用機の稼働のためである。

昨日のうちにOSは完成しアリサ姉に送りつけ、その時に昨日の取引も全て完了した。

それからバニングス社の整備員が日夜問わずリヴァイヴを改修し今日の朝ようやく完成したのだ。

演習場にすずか姉と付いてから待っていたアリサ姉に連れられてやって来たのは倉庫前…この中に俺のもう一つの相棒が待っているのだろう

「さて、それじゃあ…お披露目といこうかしら！」

とアリサ姉は元気よく声を上げると倉庫の扉が開いていき、中のリヴァイヴが姿を現す。

『これは……』

一言で言うとかかなり変わっていた。

正面から見たところは通常のリヴァイヴとそう変わってはいないがカラーリングが緑から漆黒へと変わり。

何より大きく変わっているのは背部のスラスター、二つしかなかったメインのスラスターは母さんの飛行魔法のスレイプニールをイメージさせる形に6つに増強されている。

後は細かいところで脚部と背部のスラスターに旋回用の小型スラスターも付いていることだろう。

これを見るだけでもわかるように完全な高機動性の機体……先の戦いで感じた不満は確実に解消されているだろう。

「驚いた？うちのスタッフが丹精込めて改修したあんたの専用機…この機体ならあんに付いてこれるはずよ」

「カラーリングは優希くんのバリアジャケットと同じ黒なんだね…そうだアリサちゃんこの子の名前は？」

そうだ、新しくなったんだから名前も変わるのか一体どんな名前なんだろうか……

「ええ、今から教えるわ、この機体の名前は

ラファール・リヴァイヴ・カスタムYYダブルワイよ！」

十八話 『漆黒の疾風は空を舞う』

「ラファール・リヴァイヴ……」

『カスタムYY……』

アリサ姉から機体名を聞きすずか姉と共に名前を呟く俺……

だが少し気になることがあった。

『アリサ姉最後に付いているYYダブルワイってなんだ？』

YYなんて一体どこから来たものなのか……付けたアリサ姉なら由来を知ってるだろうしと訪ねてみた。

「まあ気になるわよね……YYダブルワイは八神優希YAGAMI YUUKIの名字と名前の頭文字を合わせたものよ」

『滅茶苦茶単純明快!?!』

さ、流石に頭文字だとは思ってなかった……いや……確かにそうだけど……

「この際気にしない、さてと……優希最終調整に入るわ、リヴァイヴに乗りなさい」

『了解』

そういつて俺はリヴァイヴに手を当てて乗ることをイメージするとリヴァイヴを装着した姿へと変わった。

『……ふっ！』

装着しただけで以前とは全く違うのが肌で感じて……実際にとシヤドウボクシングと回り蹴りで身動きに違和感があるかを調べ無いことを確認する。

『動きは悪くないな……』

「それなら良かったわ……他は問題ない？」

『各部間接駆動に問題は無し6基のスラスタも正常、ハイパーセンサーもリンク出来てるよ……あと最終調整も……うんロングノスが今終わらせたみたい』

「最適化完了しました」

最適化を終了したと報告する。

「調整も終わったことだから……実際の稼働データをとっていくわよ」

『いよいよか』

ようやくリヴアイヴの要望に叶えることができる。

そして倉庫から出て広い敷地内に装着しながら出される。

「はい、それじゃ始めるわよ」

管制塔にいるアリサ姉から通信が送られてくる。

「内容は簡単、敷地内を自由に飛びなさい…以上よ」

『了解！全くもってわかりやすい！』

「ええそれじゃあ…テスト開始！」

アリサ姉の開始の合図それと共に俺は空高く飛翔した。

アリサSIDE

私の合図と共にリヴアイヴのフルスロットルで空高く飛んだ。

やっぱり物凄い早さ…もう第2世代は愚か第3世代をも上回る速度で飛んでいる。

しかも直線というわけでもなく脚部についた小型スラスタ等でジグザグに…まあ彼にとっては日常茶飯事のことだから…としか言えないけどね。

「す、凄い…」

「あんな軌道…どうやって…」

稼動データをモニタリングしている社員達からは驚愕の一言だ。

「あ、あのバニングス社長、あの子は一体…」

気になったのか新人の子が優希のことを訪ねてくる。

何者かね…

確かに男性操縦者とはいえ…あそこまで乗りこなしてるのを見たらそういう言葉も出ないわけ無いわよね…

まあ此処で言えることは…

『「あたしの幼馴染みの息子よ」^{だよ}』

すずかと声がかぶったわね…ふふ

優希SIDE

中々いいな！本当に！

今現在、俺はリヴァイヴの最大速度でバニングス社の演習場の空を飛び回っている。

『どうだ？リヴァイヴ？おもいつきり空を飛べてる感想は？』

「サイコー」

『そうかそうか…なら良かった…』

リヴァイヴは戦いに明け暮れるのが嫌みたいだしな…

「優希？聞こえる？次はFCSのデータを取るわ…拡張領域バスターレットから射撃武器を取り出して」

『了解』

アリサ姉の通信に返事をすると同時にリヴァイヴの拡張領域バスターレットに格納されているアサルトガカノンムを取り出すその取り出す時間はわずか0.2秒

「やっぱり早いわね今からターゲットを空中に射出するわ…数は15…制限時間は1分…準備いい？」

1個に4秒か…面白い

俺は笑みを浮かべながらガラムを構え準備万端という姿勢を示す。

「それじゃあ…開始！」

十九話 『ルームメイトと親睦を深めよう（実行前）』

「お疲れ様でした」

『お疲れ様です』

取るべきデータを全て終えた。

みんな完成した達成感から上機嫌な雰囲気は漂わせている。

「優希…お疲れ…ほら…飲み物あたしのおごりよ」

『あつ…ありがとうアリサ姉』

とやってきたアリサ姉が俺に飲み物…アイスコーヒーを渡してくれて蓋を開けて濁いた喉にコーヒーを通す。

「にしても…あたしの会社でIS事業に進出するなんて今でも夢にも思っただけだったわ」

『あははは…本当にごめん…管理局の調査を手助けしてくれて』

「別にいいわよ結果的に利益がプラスになってるわけだしね」

管理局の依頼でISに関わることになったのは事実だが利益はしっかりと出ていると述べたことで俺は少しほっとした。

「でもこれだけは約束してもらおうわよ…無茶だけはするんじゃないわよ」

『…もちろん！』

するつもりもないし…そうなる状況になること自体難しいわけだから…問題ないだろう。

……………

「はい、到着だよ」

すずか姉の車に乗せてもらって高速道路を入っていくこと3時間…既に夕方になっていて日が沈み始めていた頃に漸くIS学園へと辿り着いた。

『ありがとう、すずか姉』

俺はすずか姉の車から家から持ってきた荷物とあるものを持って出る。

「それじゃあ優希くん、頑張ってね」

とそう言っただけで姉は笑みを浮かべながらもその場を車で去って行き、見送った後、俺は寮にへと歩き始める。

『さてと…よろこんでくれるかな…』

そういつて、俺は右手に持っている物を見ながら寮に辿り着くとまらずは受け付けで帰宅したことの報告手続きをして、漸く部屋の前にやってきた。

『簪さん多分いるよな』

もしかしたら間が悪いときかもしれない…一応ノックはするか

そういつて部屋の前でノックをして…数秒待つ…：返事がない…いないのか？

『それじゃあ入るか』

と此処で立ち止まっているのも仕方がないためにドアを開けて中へと入った。

『ただいま〜あれ？』

中に入ると俺の目の前に映るのは…

「……………すう……………すう……………」

椅子に座り机に体をうつ伏せている簪さんの姿。

『…疲れて寝たのか』

寝ているのを見て日頃の貯まった疲労から寝ていると俺は推測する

とりあえず、あるものを冷蔵庫に入れようと冷蔵庫の中身を見ると少し目を細めた。

『……………何……………この健康食品の数……………』

冷蔵庫の中身はこの近くのスーパーかコンビニで買った物なのか…大量のカロリーメイトや大豆食品…サプリメントなど明らかに食とは思えない数々が冷蔵庫の殆どを占拠していた。

「彼女の食料と推測しますが…これは…」

『普通…女の子でもこんな食事じゃだめだろ…』

…もしこれを食べ続けるとある知り合いに言えば一日も経たぬうちに弱音を吐くだろう…誰かとは言わんけど

これ…流石に口出した方が良いのかな…

『まあ取り合えずこれ何とかおけるスペースあるから置くとするか』
俺は冷蔵庫にあるものを入れて閉めると眠っている簪さんに顔を
向ける。

『……これは本当に話し合った方が良いかもな』

流石に放っておくわけにもいかない。

二十話 『抱えるものと臆気な過去』

さてと…話し合おうと決めたのは良いけど…どうしたものか…
『ん?』

簪さんの姿を良く凝らして見るとモニターが開いているのに気づく

『もしかして作業中に眠ったのか?』

俺は恐る恐るだが簪さんに近づいてモニターを覗いてみた。

『…これは…ISのデータ? いや…それにしては…』

モニターには見たこともないISの姿が映っていてモニターを見た限りで直ぐにあることに気付いた。

「ん…んん…あれ? 私…」

簪SIDE

「ひっく…お父さん…お母さん…お姉ちゃん…」

これは…夢…

いつの間にか眠りに落ちてしまったのか…またこの夢を見るなんて…

今、泣いて家族のことを呼んでいるのは小さい頃昔の私…

もう5年ほど前になるのかな…

ある日…私は一人で家に帰る途中…人気の無い道で誘拐犯グループに誘拐されどこかの廃棄工場に連れて行かれた。

誘拐された私を使ってお金と取引しようとしていたことを臆気だけど覚えてる…

このころの私は…うん今の私も弱くて情けない…

怖くて泣いている昔の私は心の底で微かに必ずヒーローが助けにやってくる信じていた。

きつと…捕まった私を救ってくれる完全無敵のヒーローが…

そして…その人は現れた。

部屋の高いところにある窓からガラスを破って室内に侵入し私の目の前に着地、そして私の近くにいた誘拐犯を一撃で倒してみせた。

その時の私は本当にヒーローが現れたって歓喜した。
今でもその人の後ろ姿は覚えてる…

顔は見えないようにフード付きのコートを羽織って…見たことも
ない機械仕掛けの槍を持った…小さいヒーロー男の子の後ろ姿を

…

…

『ん…ん…あれ？私…』

夢から覚めたのかな…まだ頭がぼやけててはつきりしない…そう
いえば…私何をしてたっけ…っ！

『そうだ！打鉄二式！』

倉持技研から受け取った第3世代試作機、打鉄二式それを開発して
いた途中で眠ってしまったんだ、一刻の猶予もないのに！

「起きて早々、作業に取りかかろうとするとところ申し訳ございません
が…手を止めていただけないでしょうか？」

『え？八神くん!?!』

どうして、八神くんが此処に!?!八神くんは事情で学園から離れてい
たはず…そうか…もう日曜日だし帰ってきてても可笑しくはないもん
ね

「止まっていたいただきありがとうございます…まともな思考判断力が
残っていて助かりましたよ」

『え？それってどういう…』

八神くんがなにをいつているのかわからない…私の…私の邪魔を
するの？

「まず…冷蔵庫の中…改めさせてもらいましたが…何ですかあの健康
食品の量は…簪さんちゃんにご飯食べてますよね」

『そ、それは…』

八神くんがいうことに私は言葉を詰まらせる。

正直に彼の言うとおりだ…

私は一刻も早く打鉄二式を完成させなければならなかったために食事
も最低限にしていた。

だけれど、栄養はちゃんと取ってるし何らか支障も…

「健康食品程度じゃいつか倒れてしまいますよ…：それに…あまり眠ってもいない様子…」

『え…っ!?!』

どうして、それもわかるの!?

確かに八神くんが外出してる間は寝る間も惜しんで開発を進めていたけど…

「少しは眠っていたみたいけど…まだ目元に隈が付いています…」

『そう…なんだ…』

私の顔や冷蔵庫の中身を見ただけでここまで推測するなんて凄い…

「無理は禁物…オーバーワークは何も得なことなんて無いよ」

『っ…：そんなこと…』

…：八神くんに…：私の…：私の何が分かるって言うの!?

先ほどまでの気持ちから一変して私は八神くんに苛立った。

二十一話 『悲しい過去を撃ち抜くストライク』

優希SIDE

「そんなこと、あなたに言われたくない！」

俺の言葉に気が触ったのか睨み付けるように俺を見てくる。

必死にやっていることを否定されているようなそう見えたのかも
しれない。

「か、かんちゃん、どうしたの〜」

すると後ろの扉が開いて慌てて布仏さんが入ってきた。

『布仏さん…!』

「あ、やーくんだ、おかえり〜それでなにがあったの〜」

入ってきた布仏さんが俺に気付いて挨拶することこの顛末を訪ね
てくる。

「何も知らないくせに!…特別なあなたに私の努力なんて…!」

布仏さんに話す間もなく簪さんが感情をむき出しにして俺に訴え
てくる。

その言葉に説明しようとしていた布仏さんも大体理解できたのか
これからどうするのかと動向を気にする目で俺を伺う。

『別に努力を否定してるわけではありません…ただ限度を超えたオー
バーワークは危険なんです』

「そんなこと…!私は姉さんを越えたいから…!だから私も一人で専
用機を!」

…姉を超えるか…

全く…簪さん…似てるな…

『…詳しいことはわからない…けど…簪さんと似た人を知ってる』

「え?私に似てる?」

つい、敬語をやめたけど…今は良いか…

『その人には年が離れた警察官のお兄さんが居たんだ…けど…とある
事件で殉職して…周りからは犯人を取り逃がしたとかで蔑まれたん
だ』

「…酷い…」

『本当酷い話だよ…それでその人も兄の意志を…引き継ぐ…ううん兄と自分の力を証明するために警察官になって必死に努力を重ねただだ』

「……………」

『その人は周りの人達からみたら凡人で…その事を自覚しているから力を証明するために物凄い努力をしたんだ…今の簪さんみたいに…無理をしてオーバーワークをね』

『そしてオーバーワークをした結果…その人は…現場でミスをしてた…頑張りすぎたために…無理をしすぎたんだ』

「……………」

俺の話を何も言わずに耳を傾けてくれる。

『それからその人はもう失敗しないために今以上の練習を重ねたんだけど……まあ…当の本人もあまり言われたくない話だろうし…ここまでにしよう…長々と話したけど…結論を言うと…例え難しいことでも一人でどんなに頑張るより他の友達や仲間の手を借りたほうが良いってこと…』

「……………でも…姉さんは…」

一人でやるよりみんなで作った方が何よりも経験になると説明したがまた姉のこゝろを持ってきた。

この話から察するに簪さんは姉のことを気にしているみたいだな。「かんちゃん…たっちゃんさんも一人で専用機を作ったわけじゃないんだよ」

思い悩む簪さんに布仏さんがフォローに入る。

「でも姉さんならもしかしたら…」

『俺には簪さんのお姉さんの凄さは分からない…けど簪さんは…簪さんだろ?』

「私は…私?」

『そう、簪さんは周りから多分、簪さんのお姉さんと比べられていたんだと思うけど……簪さんは簪さんのお姉さんじゃない……だから専用機を一人で作るってことに執着しなくてもいいんじゃないかな…お姉さんはお姉さん…簪さんは簪さんらしく…周りに認めてもらえ』

ば…ね』

「私は…私らしく…」

『困ったときは周りに助けを求めれば良い少なくとも此処に一人…いや、二人いるわけだし』

後一押しと簪さんが困ったときは手伝うと俺は言おうとしたが隣の布仏さんも手伝う気があるようなので少し訂正して言った。

「…八神くん…本音も本当に良いの?」

「かんちゃん頼みならいつでもいいよ」

『俺も機械いじりは得意だから…力になれるはずだ』

「…っ!あり…がとう…!」

簪さんは助けてくれる俺達がいることを実感したからか瞳からは嬉し涙が流れて、俺と布仏さんもそれを見て笑みを浮かべた。

二十二話 『ルームメイト＋αと親睦を深めよう』

「…あつーでもやーくん…やーくんって明日はおりむーとセッシーと戦うんじゃないかったー?」

あ…そういえばそうだった…

「え? そうなの?」

簪さん、その噂、結構有名なんだが…それほど専用機にご注進だったわけね

『と、取り合えず明日の方は何ら問題ないです「別に敬語はいいから」…ああ、さつきも言ったけど…明日のことは問題ない』

「やーくん凄い自信だね〜でもセッシーは代表候補生だよ〜」

『問題なし、大体はデータで見たから…なんなら明日、簪さんを連れて見に来いよ…約束守った上で勝つから』

えらく布仏さんは心配してるみたいだけど…俺勝てる気しかないしな

「本当に〜あつ、やーくん、私のこと本音で良いよ」

「私も…呼び捨てで構わないから」

『わかった…俺のことも名前呼び捨てで構わない…本音は…その愛称で呼ぶだろうけどな』

話し合って打ち解けていたこともあつてお互いに名前で呼ぼうことになった、俺達…取り合えず、明日の戦いの準備自体は問題ないために簪の抱えてる問題の方に直視した。

『取り合えず、簪が作ろうとしてる専用機…どういった経緯で簪が一人でやろうとしたのかそこら辺の説明も出来ればして欲しい』

今更首突っ込んだけど…その辺何も聞いてないんだよな……

「そういえば…何も言っただけね…私の専用機…打鉄式は倉持技研っていう施設で開発されていた第3世代試作機なの…打鉄式は本来入学前に完成するはずだった…」

『…問題が発生したのか?』

そう俺は問い掛けると簪はこくりと頷く。

「実はこの話には織斑一夏も関係してるの」

「おりむーの専用機も倉持技研が開発してるんだよ」

ああ…なんとなく話が見えてきた。

『まさか…織斑の専用機に打鉄式式の人員も割いて、それで開発が止まった…そういう話か?』

推測を立てて言うと言と簪と本音が縦に首振って頷く…まじか…

『…最低だな技術者として…プロなら両方やれってんだ…』

俺もデバイスマイスターの資格を持っているから作ることもの大変さはよくわかってるつもりだ…

だがやっていた開発を簪に全て任せてそれでも倉持技研が作ってたってでかい顔されるのも気に食わない。

『簪、今の打鉄式式の状態ってどれぐらいなんだ?』

「この前組み立てだけは完了したけどOSやシステム関連は…」
ってことはまだハリボテ状態ってわけか…

「それと武装もまだ出来てないんだよね」

「うん、春雷と山嵐…春雷は2門の連射型の荷電粒子砲…山嵐はマルチロックオン・システムを使った最大48発の独立稼働型の誘導ミサイル、それともう1つ完成してる超振動薙刀の夢現の3つ」

『……武装は三つだけか…』

ブルーティアーズも言えたことだけど武装が少なすぎる気がする……それに…

『決定打っていう武装はないんだな…』

「決定打?」

『確かに荷電粒子砲も独立稼働型の誘導ミサイルも確かに強力かもしれないけど…完全に決め手になるわけじゃない』

「それじゃあ優希はどうするの?」

「そうだな…式式の予想パラメーターを見る限り防御特化の打鉄よりリヴァイヴのような機動性重視な点がある……防御重視なら…なのは姉みたいなS Gセンターガードが出来るんだけどな」

まあそれは本人の要望なわけだしスタイルを変えるのも駄目だろう

「優希?何か言った?」

『いや何も…取り合えず…って簪の簡易ディスプレイに三人群がるのもなんだなちよつと待って』

そういつて俺は家から持ってきた荷物から空中投射型のディスプレイを取り出して机に置く。

「そ、それは…！空中投射型のディスプレイ！最低でも40万はする。学生の身分ではお目にかかれない物を優希は持ってたの!？」

ディスプレイを置いて見せただけで簪がぐいぐいと食いついてくる。てかこつちじやあそんなに高いのか…あつちだとこのディスプレイ約20万ほどで買ったのに

そう思いながらディスプレイを起動して完全に立ち上がるまで少し時間がかかった後空中キーボードとモニターを展開してキーボードをタイピングする。

『簪、式式のデータこつちにコピーして送ってくれないか？』

「うん、ちよつと待ってね」

そういつて簪も自身の眼鏡型のディスプレイを操作して俺の方のディスプレイにコピーした式式のデータを送るとすぐさま送られてきたデータを展開、簪と本音にも見えるようにとモニターに大きめに映し出した。

『取り合えず、俺はこの春雷を強化するのが一番かな…まず荷電粒子砲っていうけど何発も撃ち続けてたらオーバーヒートを起こす可能性がある…だから直ぐに再使用できるよう冷却機能を搭載すべきかな…それと砲身を厚くして砲身が焼き切れないようにするこれだけでも使い勝手が違ってくると思う』

「ほえくやくんすごーい」

『そんなこと無いぞ…取り合えず…一旦休憩しよう…あれもあるわけだし』

「あれ?」

やはり気になるのか不思議そうに首をかしげる簪、俺は冷蔵庫からあるものを取り出す。

『はい、取り合えず数がわからなかったら5つだけ買ってきたんだ』

といいながら簪達の前で箱をあけると中にはケーキが綺麗に立ち

並んでいた。

「あくケーキだ〜」

『俺の故郷で美味しい喫茶店のケーキ…多分聞いたことあるんじゃないか？喫茶店翠屋っていう名前』

「あつ、その名前知ってる…」

と簪が聞き覚えのある顔で俺を見てくる。

『取り合えずこれを食べて少し休憩してからまた話し合おう、焦りは禁物だからな』

「…うん」

休憩を取ることに笑みを浮かべて頷いた簪

まだまだ時間は残されている…一人では途方に暮れるほど時間がかかるだろう…だけど三人でならより早く安全に打鉄式を完成させることだって出来るはずだ

そう思いながら俺は買ってきた翠屋のケーキを取り出して3人で一緒に食べるのであった。

余談だが残り2つのケーキは簪と本音がもう一つずつ食べて買ってきたケーキは完食した。

二十三話 『クラス代表決定戦』

俺の専用機も完成してIS学園に戻り簪の悩みと向き合い、簪と本音と仲良くなつて翌日…

昨晩は遅くまで打鉄式式の改良プランの話し合い…夕食の時間を忘れていたために簪が買い込んでいた健康食品で腹を満たした。

そんなことがあったのだがしつかりと睡眠はとつて体調も問題ない…そしていよいよクラス代表決定戦が執り行われる日がやってきた。

朝にかけて今日一日の授業中はクラス全体がひしひしと重い空気で居心地は悪かった…そして漸く放課後…その時がやってきた。

IS学園の第一アリーナそのこのカタパルトデッキそこに俺と織斑そして篠ノ之がその場にいた。

「…なあ、箒…俺ISの特訓を頼んだんだよな」

「ああ、そうだな」

「この一週間、剣道だけでISには一切触れてないんだが…」

「……………」

「いや、目をそらすなよー！」

「…一夏が弱いのが悪い」

「……………何やってんだ？この一週間…剣道だけしかしてないのは明白だけど…」

「……………まさかまだ織斑の機体は来てないのか…」

倉持技研は式式を放つておいて未だに織斑の機体を届けられないことに俺は溜め息をつくくと、アリーナ管制室に在るであろう織斑先生に向かつて声を上げた。

『織斑先生、これ以上オルコットさんを待たせるのも無礼かと思いますので俺から行ってよろしいでしょうか？』

「…そうだな…いいだろう、直ぐに準備しろ」

織斑先生の許可も下りた…さて行きますか

『いくぞ、ロンギヌス…リヴァイヴ』

(了解。バリアジャケット、IS展開と同時に装着します)

(リョーカーイ)

そうして制服の内側に隠しているロンギヌスとドッグタグ型の待機状態のリヴァイヴを起動して起動時に起きる発行を利用してバリアジャケットをセットしそしてリヴァイヴを装着する。

(基本装甲異状なしスラスタール及びブースターも正常、システムに異状なし：問題ありません)

(ありがとう：ロンギヌス)

念話でリヴァイヴに異常がないか調べて教えてくれたロンギヌスにお礼を言い、IS発進用のカタパルトに乗る。

「八神くん、相手は代表候補生です：頑張ってくださいね」

と一緒に管制室にいる山田先生も俺にエールを送ると俺は笑みを浮かべた。

『：上等：しっかりと約束守って勝ってやる：ベルカの騎士として1対1で負けるわけにはいかないしな』

と小声でそう言うとお撃の時は来た。

俺の前にある表示器がGOサインがでて俺は口を開けた。

『八神優希、ラファール・リヴァイヴカスタムYY、いきます！』

(シュツゲキ)

(ドライブイグニッション)

名乗りを上げた直後カタパルトが動き俺は戦いの舞台へと身を乗り出した。

二十四話 『漆黒の疾風VS蒼い雫』

NOSIDE

IS学園第一アリーナ

今日ここでは一年一組のクラス代表を決める総当たり戦が始まるうとしていた。

既にイギリスの代表候補生であるセシリアは専用機、ブルー・ティーズをその身に纏い対戦者を待ち構えていた。

そんな様子を観客席のとある場所で本音と簪は見に来ていた。

「やーくん大丈夫かな」

「優希は勝つって言ったよ…それほどの自信が優希にはきつとあるんだと思う」

やはり相手は代表候補生ということもあつて大丈夫なのか本音は心の内に思っていることをもらし、隣にいる簪も同じであったがそれより優希の勝つと信じてそう述べた。

「あつ！出てきたよ！やーくんだ！」

「あれが…優希の専用機…見た目は第2世代のラファール・リヴァイヴだけれど…スラスターが増えてる…機動重視の機体なのかな」

カタパルトデッキから優希が飛び出してきて簪は初めて見た優希のリヴァイヴを見て高機動戦闘特化の機体であることを見抜く。

そしてアリーナへと降り立った優希は武器も何も構えることなくセシリアとその身に纏うブルー・ティーズを見据える。

その名の通り青を強調している機体…背中中のウイングには6機のビッドも搭載されていることもすぐさま優希は見抜いた。

「あら？あなたが先でしたのね」

優希が出てきたことに意外そうに見下ろすセシリア

「織斑は専用機まだ来てないとのことだ…さすがに待たせるのも気が引けたから俺が先に出てきた…これ以上待つのも嫌だろ？」

「ええ、そろそろ待つのに耐えられませんか…それとあなた…また口調が変わってましたけど…貴族である私に対して無礼ではありませんこと？」

先に優希が出てきた理由をセシリアに述べる、しかしその時の口調は丁寧語ではなく、それを聞きセシリアは不機嫌になりその事を指摘する。

「気に障ったのなら謝る…だがどうも戦いとなると…口調がこうなつてな…早々直せるもんじゃないんだ…許せ」

「…まあいいですわ、ところで、あなたに最後にお聞きします。今ここで謝ってくださるのであれば、許してあげないこともなくってよ？」

戦いの空気で口調が少し荒々しくなることをセシリアに謝罪する優希、それを聞いたセシリアもその事は隅に置き最終通告を優希に言い渡した。

「……残念だけど負けるつもりもないし…約束を破るつもりもない…」

優希は何も怯むこともなく曇りのない瞳でセシリアを見据えた。

「そう……」

優希の言葉をどう受け取ったかは不明だが最後の通達を蹴ったことでセシリアは手に持つレーザーライフルスターライトmkⅢをかきず優希へと銃口を向けた。

「ならこれでお別れですわね!!」

その声と共にスターライトmkⅢからレーザーが放たれ真っ直ぐ優希へと向かっていく。

「開幕早々の射撃…直撃コースか…避ける必要もない！」

迫るレーザーに優希はその場で止まったまま直ぐさまに拡張領域パストロットから瞬時に近接ブレードの葵を取り出しタイミングを合わせて振るいレーザーを打ち落とし反れたレーザーは優希の右後ろに着弾した。

「……………」

レーザーを打ち落とすことでアリーナ全体が静粛に包まれる。

もちろんその理由は先ほどの光景からのことだ。
たったいま地球の最先端技術レーザーを何のからくりもない刀打鉄の刀で打ち落とすて見せたのだ。

当然啞然とならないわけがない。

当然管制室で試合を見ている教師も

「や、八神くん今…レーザーを刀で打ち落としましたよ?!?!」
「何処かきな臭い所はあったが…やはり化けの皮を被っていたか…」
《>ということはあいつの手の者から逃れられたのも単なる見落としては
ないのかもしれない》

カタパルトデツキでは…

「ば、ばかな…レーザーを打ち落とすなど…人間技では…」

「八神…あんなに凄いのかよ…」

一人は優希が平然と行ったことに筈は優希を恐怖し一夏も優希の強さに唾然とした。

そしてアリーナの簪と本音は…

「か、か、か、か、か、かんちゃん…み、み、み、見た!? さっきのやくんの!?!」

「レーザーを刀で打ち落とす…凄…カッコイイ…」

あまりの光景に驚く本音に簪はその優希の行ったことに見惚れた。

他も先程の優希の技に驚きの声を上げる中当の優希はレーザーを打ち落とされたことで固まっているセシリアに葵の剣先を向けてしゃべりだす。

「どうした? オルコット! そんなところで突っ立ってないでかかってこいよ! さっき攻撃したことでもう約束の時間タイムリミットの限界は着実に狭まっていつているぞ!」

今唾然としている相手のセシリアに檄を飛ばす優希、その言葉で我に返る。

「わ、わかっていますわ! お行きなさい! ブルー・ティアーズ!」

《>八神優希…! 全力でお相手しなければ私が負けてしまいますわ!》

先程の技を見たことで焦りを滲ませるセシリア、背部のスラストに搭載されていたブルー・ティアーズを4基展開し四方八方へと飛び回る。

《>八神優希は約束でまだ私には攻撃できない、でしたらその時間内で終わらせるしかありませんわ、四方八方からの同時攻撃なら!》

伊達にイギリスの代表候補生でもあるために優希の力量をわきま
え一気に終わらせようとビットを優希の周りに飛び回りレーザーを
発射し始める。

「っ！」

レーザーが発射されて優希は最小限の躲しと葵での打ち落として
ビットに対処する。

「残り…4分」

「やはり、簡単には…でしたらこれならどうでしょうか！」

角度や位置を変えての攻撃も徒労に終わったのを見てセシリアは
ビット2基を優希の左右に移動させると即座に射撃、流石に葵では2
基も防げないので優希は後方に脚部のスラスターを点火して下がる。

「今ですわ！」

（マスター後方にブルー・ティアーズのビット残り2基の存在があり
ます）

（なるほど…考えたな）

それを狙ったと言わんばかりに優希の後ろにはビットを配置して
おり優希が下がったのを見計らってその2基からレーザーが放たれ
る。

《例えあなたでも後ろからの攻撃、その上移動中ということもありま
すし…これなら…！》

入ると確信するセシリア、しかしこんな状況でも優希は何一つ表情
を崩さなかった。

「でも…まあ…」

そう後ろからレーザーが迫る中優希がそう口をこぼすと後ろへと
下がっていたスラスターを切って脚部のブースターで上に少し飛ぶ
とまた脚部のスラスターとメインスラスターに付いている小型スラ
スターを駆使して後方宙返りで後ろからのレーザーを避けた。

「なっ!？」

「なのは姉のアクセルシューターよりかは断然楽勝だしな」

（あ、なのは様とオルコット様あの方とこの人を比べるのはどうかと…）

（ラクシヨ）

(リヴァイヴさんも気を緩めないでください)
(ハーイ)

慌てることなく避けた優希、そしてまた優希は自分しか見えない自分の横に表示しているタイムを横目で見る。

「残り2分半…さあどうする?」

攻撃開始まで残り半分…それまでどう楽しませてくれるかと優希は笑みを浮かべた。

一方観客席では本音と簪のテンションが上がっていた。

「すごいよ!すごいよ!やーくん!」

「うん!私にもあれだけ強くなれるかな」

「きつとかんちゃんならできるよ!だからそのためにも」

「うん、3人で打鉄式式を完成しないとだね」

優希の力量から二人も打鉄式式の製作の意欲を更に強める結果になった。

「残り1分…」

そしてアリーナでは避けまくる優希にもう時間が無いとセシリアは焦りの顔を見せて攻めたてる。

しかし焦りからかビットの攻撃も更に単調になり、優希にとっては避けやすくなっただけであった。

そして避け続けること…

「…約束の五分間が経過」

ついに優希は

「さて…一気に終わらせる」

牙をむいた。

時間を経過すると優希は攻勢に出るのが早かった

まず優希は拡張領域パススロットから左手にガルムを取り出すと直ぐさま片手で前方のビットの2基に向けてすかさずに射撃、動く間も与えずにビット2基を撃墜させる。

「ブルー・ティアーズを!」

「驚くのはまだ早い!」

2基落とされて動揺するセシリアだが驚く暇など優希には与えてくれずその間にも優希の背後を取っていたビットも小型スラスターで180°。旋回しメインスラスターを点火させて加速、その速度と共に3基目を葵で切り落とし最後の1基をガラムで撃ち落とした。

「これで同時攻撃は使えないぞ！」

飛び交うビットを殲滅した後スラスターで加速して優希は一直線にセシリアへと向かっていく

「一直線これなら……！」

「やらせない！」

一直線ならとセシリアはスターライトmkⅢで狙撃しようと構えるがそれを見逃す優希ではない、ガラムをセシリアに：セシリアのもつスターライトmkⅢに向けると直ぐさま放ち弾丸はスターライトmkⅢの銃口の中へと吸い込まれ内部から暴発してスターライトmkⅢを破壊する。

「これで主力武器は全て失った」

スターライトmkⅢを破壊したことでガラムを拡張領域パススロットに収めて右手に持つ葵を両手で持ち更に加速してセシリアへと詰めよっていく。

「まだですわ！まだブルー・ティアーズはもう2基ありましてよ！」

《この加速にこの距離なら流石に外しませんわ！》

加速する優希を見計らって奥の手と言わんばかりに残り2基のブルーティアーズのミサイルを発射

間もなく優希に直撃しようとしたとき優希は笑みを零した。

「知ってたよ……」

速度をあまり殺さずに脚部のスラスターを後方へと噴射させ続けてメインスラスターの上部の小型スラスターも噴射して今度は前方宙返りでセシリアの目の前でミサイルを躲した。

「あり得ませんわ！またしても……！」

あの加速状態からの回避、動揺を隠せないのは当たり前であるが優希は前方宙返りした反動を利用して葵を、セシリアに向けて打ち込みシールドエネルギーを削る。

「うっ！くっ!!」

「切り裂く！」

悲痛な声を少し上げるセシリアだが優希はお構いなしにメインスラストを最大点火してセシリアのシールドを斬り破り絶対防御を、発動させてシールドエネルギーを大幅に減らしていき…

「これで終わりだ！」

上段からの縦切りでシールドを破壊した後続けるようにもう一撃下段からの斜め切りを放ちシールドを張られる前にセシリアの体を切り裂き絶対防御を発動させたことによってブルー・テイアーズのSEは尽きた。

「勝者 八神優希」

システム音声と共に勝者の名前がアリーナ中に響きわたる。

クラス代表決定戦：初戦の優希VSセシリアは周りの予測を覆す優希の圧倒的圧勝で終わりを迎えた。

二十五話 『騎士VS最強の弟』

セシリアとの戦いに勝利した優希…

しかしセシリアは最後の一撃の衝撃で意識を失いISが解除されて地面へと落下していく。

「っ…まずいー!」

優希もこのままセシリアが落ちていくのを見過ごさずリヴァイヴのスラスターを吹かせて地面に叩きつけられる前にセシリアの体を保護して落下を阻止する。

因みに今現在セシリアは優希にお姫様だっこされているのは余談である。

「ん…私は…」

「あつ、気がついた?」

優希が地面に着地した後、セシリアが意識を取り戻し優希は安否のために声を掛ける。

「あつ…!」

「ごめん、男性嫌いなのは知ってたけどあのままじゃ地面に叩きつけられていたから」

と男性を劣等感を持っているセシリアにきちんと説明する優希。

「いえ…そ、そんなことはありませんわ」

しかし先程の態度は裏腹にセシリアは頬赤く染めて優希の顔を見つめた。

「オルコットさん…立てる?」

「は、はい…それと…」

「ん?」

「私のことはセシリアと…呼び捨てで呼んでくださいまし」

そうお強請りするように優希を見つめるセシリア、そのセシリアに少し戸惑ったが直ぐに冷静になって返事を返した。

「わかった…これからはそう呼ぶよ…セシリア」

「はい…優希さん」

とお互いに名前で呼びセシリアは名前で呼ばれた嬉しさから笑み

を浮かべた。

「ところでセシリア：ブルー・ティアーズは大丈夫か？ 武装全部使い切ったと思うんだけど」

「…ええ、優希さんに手痛くやられてしまいましたし、この損傷では直ぐに修復もままなりません：私は今回のクラス代表を辞退しようと思えますわ」

「…そうか…」

セシリアと話を終えた後カタパルトデッキに戻った優希、そこに一夏は何か言いたげな表情で詰めよってくる。

「おい！ 八神！」

「…いきなりどうしたんですか？」

「なんだよ！ あの戦いは!? あんなの男らしくねえ！」

「…は？」

なにをいつているのか：そう思った優希は首を傾げる。

「一方的に虐めて楽しいのかっていうのかよ！」

「…：つまり、織斑はセシリアと対等に戦えるよう手を抜け：そう言いたいんだな」

「ああ、そうだ！」

俺は間違っていないそう一夏は目で訴える。

「…馬鹿馬鹿しい…」

「なんだと!？」

「手を抜くということとはそれは相手を侮辱することに繋がる：それすらわからないとはブリュン^世ヒル^界テ^最の弟と聞いて呆れる」

「なっ！ 千冬姉は関係ないだろ！」

優希に指摘され、この場で織斑先生は関係ないと否定する一夏。

しかしその答えは個人の意志であり周りの総意はそう簡単にはいかないものだ。

「…まあいい：話し合っても何時までも平行線だ：なら手っ取り早く戦って決めるのが一番だ：専用機の最適化ができたなら来い：初期設定で来ても瞬殺と結果が見えているからな」

と優希はリヴァイヴの補充が完了するとまたアリーナへと出撃し

た。

そしてアリーナで待つこと約30分、ようやく一夏がカタパルトデッキから出てくる。

白を強調する機体、右手には近接ブレードを持っている。

「来たな…それが織斑の専用機か」

「ああ、この白式でお前の根性をたたき直してやるー!」

と勝てる自信があるのか優希に向かって強気の発言を述べる。

「…勝てたらな」

「っ!…いくぞ!…うおおおっ!」

軽い挑発を言う優希に挑発に乗って一直線に突っ込んでいく。

「…単調な動きだな…いい的だ!」

優希は左手にガルムを取り出して持つと一夏に向けて3発放ち、一直線に飛ぶ一夏はその全弾直撃する。

「く、くそ!」

「さっきの威勢はどうした!?!」

「なら零落白夜!」

そう一夏は叫ぶと持っている近接ブレード雪片式型の形状が変形しレーザーブレードが展開させる。

(マスター高出力のエネルギーを検知、それと同時に白式のシールドエネルギーも低下を開始しております)

(…まさかあれ…自分のシールドエネルギーを使用してるのか…なんていうピーキーな能力…)

念話でロンギヌスが零落白夜を分析して優希に教え、それを聞いた優希は使い勝手が悪いと判断して呆れた。

「たぶん、このまま避け続けても勝てるけどそれだと味気ないし…なら驚かせるか」

優希は良いことを考えたのか笑みを浮かべてガルムを空へと投げ捨て近接ブレードの葵を取り出す。

「うおおおっ!!!」

優希は葵を両手で構え、それを見た一夏は迎え撃とうとしていると

思い一直線に雪片式型構えて振るう姿勢を取る。

しかし優希は一夏とは打ち合うつもりなど毛頭に無かった。

「はあああっ!!」

優希はリヴアイヴに組み込んでいたプログラムを起動してシールドエネルギーを葵に収束させ、まだ葵の間合いに入らない位置で一夏目掛けて葵を思い切り振るう。

優希が振るった葵の一撃は収束させたエネルギーを斬撃として放ち、それは一夏を目掛けて飛んでいき斬撃が飛んでくるなど予想もしていなかった一夏は為す術もなく直撃を受けた。

「そん…な…」

「…これが結果だ…お前にはその剣は重すぎる」

「勝者 八神優希」

一夏の刃は騎士には届かず…虚しくも勝利者の名前が名乗られた。

二十六話 『学園生徒最強現る』

優希SIDE

クラス代表決定戦：俺はセシリア、織斑と戦い圧倒的な強さを見せつける。

そして戦いを終え俺は管制室へとやってきた。

その理由は簡単だ：

「なに？クラス代表を辞退したいだど？」

『はい、色々とありまして：元々クラス代表も乗る気ではありませんでした』

これも正直な本音だ：まあこれだけでは織斑先生は納得をしないだろうがな

「その理由を聞かせてもらおうか：もしかしたらない理由なら容赦はせんぞ」

明らかに威圧する態度：これは俺に対しての警戒心から来たものもあるであろう。

でもまあ別に警戒されることでもないので嘘偽り無く俺は話し始めた。

『更識簪：そして打鉄式』

「っ！：なるほどな：良いだろう特別に許可する」

二言だけで大体のことを察したのか織斑先生はそれ以上何も聞かず：辞退を認めてくれた。

『ありがとうございます。それでは自分はこれで失礼：』
「待て」

直ぐさま退散しようとしたが織斑先生に止められる。

「八神：お前は何者だ？」

『……仰る意味がわかりませんが：俺は二人目の男性操縦者：としか言いようがありませんね』

目を鋭くして睨む織斑先生：これは俺のことを少し調べたと言ったところか

「確かにそうだな：しかし8年前から貴様のいや八神の家族全員の足

取りがつかめなくなっている……これはどう説明するつもりだ?」

『……俺は母さんの事情で国外を転々としていましたからそれで足取りがつかめなかったのではないでしようか?』

確か母さんは中学卒業後イギリスへホームステイで留学した設定だったはず流石にミッドのことは口にするわけにも行かないしな

「……そうか?」

これで上手く撒けたか?

『では、自分は失礼いたします』

そういつて管制室から出て行つた。

にしても織斑先生つてどことなくシグナムに似てる気がする……と
いふか気が合いそうだな

そんなことを思いながらもアリーナの通路を出口へと向かって歩き寮へと戻る道中俺は管制室から付けられている視線に俺は後ろに顔を向けた。

『……此処には俺とあなたしかいません……出てきたらどうですか?』

人の気配を確認し2人しかいないことをわかると隠れている人物に声を掛ける。

すると後ろの木の陰から簪に似た女性が出てくる。

「あら? 気付かれてたみたいね」

どこか落ち着いている彼女は手に持つ扇子を開け、開いた扇子には驚きと書かれていた。

『それで……あなたはどちら様でしょうか? 怨まれるようなことはした覚えがありませんが』

あつ……これはIS学園での話しな。

「私は更識楯無……簪ちゃんのお姉ちゃんよ……だから畏まらなくてもいいわよ……それであなたに少し聞きたいことがあるのよ」

『……聞きたいこととは?』

何を聞こうとしているのか更識さんの出方を伺う。

「あなたのこと私の家の者に調べさせたんだけど……」

また扇子を開けるとそこには収穫0と書かれていた……

どういった仕組みで変わってるんだ? あれ……

「全く素性がわからなかったのよね、その上、第二の男性操縦者であるあなたがここに来る前にどこにいたかさえも…はつきりさせていない…これって不思議だと思わない?」

また扇子を閉じて開けると次は怪しいと書かれていた。

『それで本題は何を聞きたいのですか?』

薄々だが何を聞きたいのか分かってはいるがそれは彼女自身の口から聞こうと思った。

「…あなたは私達の敵?それとも味方かしら?」

と鋭い目つきと殺気を飛ばしてくるが俺は臆することはない
しかし更識さんのいうことも一理ある。

彼女はおそらくこの学園を守ろうとしているのであろう。

『……全く何のことかわかりませんね…』

だけれど俺達時空管理局のことを知られても厄介…はぐらかすしかないか
「答えになってないわよ…」

と睨みを効かせ更に目つきが鋭くなる。

『……敵か味方か……はてさて…俺はどつちなんでしょうね』

「あなた…いい加減に」

『それでは失礼いたします…疲れているので』

「ま、待ちなさい」

更識さんの静止の呼びかけを無視して俺は寮へと歩いていく。

先程の俺が言った言葉あれもあながち嘘ではない。

敵か味方か…今の俺達時空管理局は味方寄りの中立…だが状況が変われば手の平返してISの敵になることだろう…

『本当…気楽にはいかないもんだな』

…
ただの調査任務のはずがここまできついとは思ひもしなかったな

セシリアSIDE

負けた…

優希さんに敗れた私は優希さんと少しお話しした後、織斑先生に事情をお話ししてクラス代表を辞退、織斑先生はそれを聞き入れてくだ

さつて私はいち早く寮に帰り部屋のシャワーを浴びた。

私は温かいシャワーを浴びながら今日の試合のことを振り返る。

一言で言うなら圧倒的

試合が始まった時は私の勝利は揺るぎないものと信じていました。

しかし時間が経つにつれて私の自信を彼は崩していった。

卓越された剣技、針に糸を通すような正確な射撃、油断や無駄も一つも無い動き

全てに置いて私の実力を上回る優希さんに負けた直後は恐怖を覚ええました。

しかし負けて意識を失いISを解除してしまい命の危機に瀕したとき彼は何の躊躇いも無く私を抱きしめ、助けてくださり、そして優しく声を掛けてくださいました。

どうして彼は私に、優しく接してくれたのでしょうか…

私は彼のご家族を中傷したというのに…何故…

そしてなにより…

『…優希さん…』

この胸を締め付けるこの感覚は何なのでしょうか…

優希さんのことを思うと胸の奥が熱くなって…そして鼓動が高鳴っている感じがします…

この思いは…一体…

『…………叔父様に聞いてみるのが一番適切かもしれませんね』

幼き頃に私は両親を失った。そんな私に手を差し伸べてくれて小さい頃お世話にもなった叔父様…

私が男を見下すようになったときから一度も連絡も取っていませんでしたが…アリアさんとロツテさんとご一緒にお元気でしょうか…

そんな自分にはわからない感情を胸の内に秘めながら私はシャワーを浴び続けた。

二十七話 『クラス代表決定』

優希SIDE

『あゝ気持ちいゝ』

今日2戦もしたので：寮の部屋に戻ってきた俺はまだ帰ってきていない簪には悪いが先にシャワーを浴びさせてもらうことにした。

『なあ、ロンギヌス：お前から見て織斑とセシリア：どう見る』

シャワーでかいた汗流しながら洗面所に置いてあるロンギヌスに今日戦ったふたりについてロンギヌスの観点で聞いてみる。

『セシリア様はF Bフルバックに適した方だと思えます。武装からして大型ライフルのスターライトmkⅢとビッド：これら二つを使いこなすことが出来ればマスターでも無傷とはいかなかったでしょう』

『でもまあ：あれ以上の弾幕を経験済みだしどうにかなっていたらう：それで織斑はどうだ？』

『…些か誉められたものではありません：ポジションではマスターフロントアタッカーと同じF Aなのですが…』

『あの機体自身：織斑には合っていない：だろ？あの機体は能力アビリティによって一撃必殺の剣になる：しかしその代償があまりにも大きすぎる：IS初心者にはきつすぎる能力だ』

『ではマスターならどうなさいますか？』

と俺なら白式をどうするかその質問に俺は直ぐに答えた。

『零落白夜を封印する：その身を削る力など無茶も良いところだからな』

こつちにも前例プラスターがあるから尚更だ。

『もしマスターがそう指摘しても彼は止まらないでしょう』

まあ確かに織斑は強情な所があるのは戦っててよくわかったからな。

『いざとなれば奥の手を使うさ：織斑先生や篠ノ之さんあたり批判されそうだけど…』

俺があれを使う前に力を持つ意味を理解してくれることを祈ろうか。

そう思っていると部屋の寝室の方から扉を開ける物音が聞こえてくる。

『あつ、簪帰ってきたのかな』

「そのようですね生体反応は二つですが恐らくは本音様でしょう」
俺はシャワーを止めて近くに置いてあるタオルで髪や顔、体を拭くとラフな格好の服装に着替えて洗面所から出た。

翌日…

「というわけで、一年一組のクラス代表は織斑一夏くんに決定しました。一繋がり縁起も良いですね」

「ちよ、ちよつと、待ってくれ！俺は八神に負けたからクラス代表は八神じゃ…」

朝の教室のHR、副担任の山田先生がクラス代表は織斑に決まったことを告げて、当然何も知らないということかならないと思っていた織斑は大きく取り乱した。

『俺とセシリアはクラス代表を辞退しました：俺は色々あつて手が離せなくなるので』

「私はこの前の件で皆さんに不快な思いをさせてしまいました。そんな私がクラスの代表を務める資格はありません。また、私もまだまだ未熟だと思い知りましたの」

『…まあ、これで少しは織斑も実戦経験不足が解消されるだろうかな…』

と内心では織斑の成長に期待している点があるが…そんなこと言ったところで織斑は俺を目の敵にしているわけだし聞き入れるはずもないか

「ともかく、クラス代表は織斑一夏。いいな？」

締めは織斑先生が織斑を威圧して完全に黙らせて、クラス代表は織斑に決まった。

そして余談だがセシリアが今回のことを機に丸くなったことからクラスメイトから歓迎された。これでセシリアも不自由な学園生活

を送らずに住むだろう。

何はともあれ：たった一週間位で何かと色々あったけど今日も一日頑張っていけますか

第二章 打鉄二式

二十八話 『遠い過去の記憶』

クラス代表が織斑に決まり、セシリアもクラスとのいざこざが無くなつて数日：

今日の授業も終わり、寮へと帰つてきた俺は直ぐさま部屋で報告書の作成に取りかかった。

夜からは簪と打鉄式式の開発の話になるだろうから、今のうちにやれることをしておかないと母さんからの注意を受けることになる。

『俺つてやっぱりここに仕事できてるん…だよな』

ここ数日…今まで味わつてきたこともない学園生活に戸惑いもあつた：

恐らくエリオやキャロももし学校なんかに行つたらそうなんだろうなとおもう。

『さてと、報告書は完成…つと、ロンギヌス、ディスプレイから報告書をコピー、母さんの所に転送頼む』

こんな面倒な方法には訳がある。

簡単に言うとな誰かに見られた場合の措置でディスプレイにはアドレスやメールの送受信の履歴が無いために第三者が見たとしてもわからないようにするためだ。

「了解、コピーした後にはやて様のデスクに転送します…お疲れなら少し休まれてはいかががでしょうか？」

『…ああ、そうだな…少し…休む』

俺は後処理をロンギヌスに任せて報告書を上手く隠したパスワード付きファイルに保存するとそのままベッドへと飛び込んで少し眠りについた。

…

…

これは…夢か…

どこか頭の中がぼんやりとしているためそんな気がした。

辺りに見える景色はどこかの街でもう日が傾き始めていた。

それと気が付いたのは夢で見ている視線が低い…つまりはもう何年も前の記憶を夢として見ているのだろうか。

「……………」

「マスター、そろそろはやてさま達の元へお帰りになられては…」

どうやら首にはロンギヌスを付けているようだ。

「うつせえ！そんなの俺の勝手だろ！」

と怒り任せに言い放つ昔の俺…

ああ、わかった…これは5年前の…機動六課が創設される前の記憶だ。

このときの俺は自分の真実を知って、それを隠していた母さん達にぼろくそ怒りをまき散らして…ミッドから地球へ家出したときのやつだ。

それで当てもなく道端を歩いていると…少し遠くで子供が複数のグループに車で拉致される場面を目撃する。

「あ？あれって誘拐か？」

「マスター、何故悠長なことを言っているんですか？」

「悠長も何も知ったこつちやねえだろ？大体誘拐されたならもう誰かが警察に連絡して…」

「マスター我々以外近くにはいなかったようです」

「……………」

このときの俺は完全にぐれてたから…助けに行く気など毛頭なかったんだよな…

「マスター…直ぐに警察に連絡を言えるべきだと思います」

「警察が子供の言葉を信用するとは思えないけどな…」

このときの俺はまだ10歳と幼い…そのため真実を述べても信じてもらえない可能性を考慮して連絡を入れるのを拒んだ。

「ではマスターが助けに行かれては？今行けるのはマスター以外居りません」

「……ちっ……！」

気に食わぬ顔で昔の俺はロンギヌスをセツトアップして顔を見られたくないためにフード付きのコートを羽織った昔の俺は空へと飛び直ぐさま車を追跡していった。

そして辿り着いた先は持つ使われていない工場

その一つの倉庫の屋根の上で昔の俺はそこから中をのぞき込んで状態を伺っていた。

中の状態は誘拐犯3人に水色の髪の子が一人…女の子は恐怖から泣いていた。

「たったいま匿名で警察にこの場を通報しました…これからいかがしますか？」

「……ぶつとばす」

「マスター…？」

「今あるイライラを解消するためにあいつらぶつとばす！」

残っている怒りをぶつけたくて仕方なかった昔の俺は勢い良く窓を突き破って飛び込む。

飛び込んで周囲は昔の俺に釘付けになるがそんなこと構いなしに昔の俺は女の子の近くにいる誘拐犯に左手で魔力付与のパンチを顔面に繰り出し勢い良く壁まで吹き飛ばして一人…気絶させた。

「なんだてめえ!？」

「何処のガキだこいつ!？」

いきなり現れた俺に辺りは騒然そんな中、昔の俺はお構いなしにロンギヌスを誘拐犯に向けてる。

「うつせえな…今、俺は機嫌が悪いんだよ…だから…ぶつとばす!!」

怒り任せに暴れまくる昔の俺…まあ一般人に止められるはずもなく1分もしないうちに残り二人も片付けてしまった。

「けっ、齒ぐたえのない奴等だ」

「………凄…」

「ああん!？」

まだ怒りが収まらない昔の俺はふと聞こえた女の子の声に過敏に反応し挑発的な返事をしてしまう。

でもそんなことお構いなしに女の子は昔の俺を好奇心に見つめていた。

「あの…！その…！」

「なんだよ…とつとどつか行きやがれ」

おどおどとしている女の子に昔の俺はまた威圧的に話しかけてしまう。

それにより怯える女の子は涙目に…さすがの昔の俺も怒りが失せて気まづい表情になってしまう。

「マスター…」

「ああ！わかってるよ！」

ロンギヌスにわかつてることを言われて少しうっとうしく感じる昔の俺は倒れている奴から財布を抜き取り300円ほど手にするとバレないように元に戻し何故か有った自動販売機でジュースを2本購入する。

ジュースを持って女の子の元へ行くと昔の俺はジュースを差し出した。

「…？」

「ほらよ…ジュース…」

「…うん」

まだ涙声だが昔の俺が差し出したジュースを受け取り俺達二人してジュースを飲み始める。

飲み始めて無言の時間が広がるが、声を掛けてきたのは女の子だった。

「ねえ…あなたは…ヒーローなの？」

ヒーロー…そんな言葉が聞こえるとは思わなかった昔の俺は笑った。

「ヒーローねえ…馬鹿馬鹿しい俺はヒーローじゃねえよ…どつちかつてと悪役だ…しかもとんでもないな」

このときの俺は俺の真実のことを思い浮かべてついジュースの容器に力が入る。

「でも…私は…」

女の子は何か言おうとしたけどそこで途切れた…パトカーのサイレン音が聞こえてきたために

「ようやくか…」

昔の俺は警察が来たことを悟るとサイレン音を聞いた女の子がそつちに意識が集中していることを確認し気付かれないようにジューズを持ちながらその場から消えた。

………

また景色がぼんやりとしてきた…夢から覚めるのか…

二十九話 『クラス代表就任祝いとあの子の後日談』

……！……！……！

ん？…なんだ？誰か呼んでるのか…

臆気に現実世界へと戻ってきた俺は誰かに呼ばれている気がした。

まだ頭がぼんやりとしていて上手く頭が回らない…もしかしたら口
ンギヌスか？

そうだ寝る前にロンギヌスに後処理を任せただ…ということはこの声はロンギヌスが呼んでる声？

『…ロンギヌスか？』

と寝たそう声を出す俺…そして少しずつ意識もハッキリしてきて返答を待っている…

「ロンギヌス…って何？」

とロンギヌスではない第三者の声が…っ!?

俺は一気に眠気が覚めて慌てて起き上がり辺りを確認するとベッドの横には帰ってきてたのか簪が俺の顔を覗き込んできた。

『か、簪！』

何故此処に!?!っていか同じ部屋なんだから当たり前だけど、いやならなんで眠っていた俺に声を!?

「ごめん。眠っていたみたいだったけど…その…オルコットさんが…」

眠りを妨げたことに罪悪感から少し落ち込む簪…

『いや、つい寝てた俺が悪いから…それにセシリアが？』

「はい、優希さん」

と部屋をでる通路からセシリアがやってきて片手を胸に当てて俺を見る。

「もうすぐ織斑さんのクラス代表就任のパーティーをすることになりましたの、ですから優希さんもご一緒にと…」

なるほど織斑がクラス代表になったからその祝いと…

でもな…

『俺も行って良いものか…』

「?どうしてそのようなことを仰るのですか?」

普通は行くと二つ返事に返すだろう…しかしだ…

『俺は織斑に嫌われてるからな…』

あの一件以降…織斑と…幼馴染みの篠ノ之さんは完全に俺を敵視している…といっても俺が間違ったことはしていない…ただ単にあの二人が子供なだけだ。

「…優希さんは織斑さんを嫌っておりますの?」

『いいや、俺は嫌ってないよ…逆に期待してるぐらいに』

天賦の才…間違いなく織斑にはそれが眠っている。それをどう活かすか…俺が戦技教導官ならもつと適切なことが出来るんだけどな…

「それで…優希はどうするの?」

行くか行かないか…その話から少し反れていたために簪が聞き返してきて、俺はどうするか悩む。そして悩んだ末に…

『はあ…まあ一応行くよ…でも主役は織斑だから端っこの方にでもいることにしておく』

と参加を表明するとセシリアは笑みを浮かべる…そんなに俺が参加するの嬉しいのか?

「では、直ぐに参りましょう…皆さん待っておいでですから」

と俺はベッドから起き上がってセシリアと共に食堂へと赴いた。

「…というわけで、織斑くんクラス代表決定おめでとう、かんぱーい!!」

クラスの誰かがパーティーの始まりの音頭をとる。

セシリアに連れられてやってきた俺は織斑が居るところから一番遠い席でジュースを飲んでいた…殆どのクラスメイト織斑の近くに行つて、俺の隣にはセシリア…と簪がいる。

『簪…何で此処にいるの?簪って四組だよな』

「細かいことは気にしない」

…さいですか…

「それより優希には聞きたいことがある…寝ぼけてたときにいったロ
ンギヌス…ってなに？」

…そのまま忘れていていて欲しかったな…

「そういえば、そのようなこと優希さん仰っていましたね」

簪が振ってきた話にセシリアまで食いつく…本当にやばい…どう
誤魔化すか

『あ…ああ…夢の話しでな…その夢の中で出てきた人物の名前ロン
ギヌスっていう名前だったんだよ…だからロンギヌスって聞こえた
のかも…』

「……………」

いや簪さん…そんな一目で見られても…

こつちだってロン||ギヌスって誰だよって心の中で叫びたいのに

…

……………そういえば……

「な、なに？私をじつと見つめて」

『い、いやなんでも…』

つい簪の顔を見つめていたら小恥ずかしくなった簪が頬赤くする。

何故俺がずつと簪の顔を見てたか…それは夢の話しを思い出して
あの時出てきた女の子が幼かったが簪に似ていたような気がしたか
らだ。

と思っただけどそれは流石に無理があるか…確かに日本人ではある
だろうが偶然出会った女の子が学園のルームメイトとして思わぬ再
会、どんな奇跡だよ…あり得ないな

そうそう…

一応あの後のことを話しておこう…

あの女の子を無事警察が保護したのを陰から見届けた後俺はミツ
ドへ戻った。

まあ当然家族から大目玉をくらった…特にヴィータとシグナムの
怒りは凄かった。

しかし俺も言われ放しではない…でもそれで泥沼化しても何時終

わかるかわからないために手っ取り早く母さんと模擬戦をすることにした。

教導隊の練習場所をかりて始まった母さんと俺の戦い、まだ未熟だった俺は詠唱タイプの母さんにも悪戦苦闘：しかし母さんもがん攻めていた俺によって決め手が決められず試合は泥沼化てかして：何時間とも及んだ。

…そして長き時間を労した模擬戦の結果は………一人勝ち引き分けだった

：ルビが可笑しい？いや：これであってるのだ

それは突然とやってきた：

奴の出現の理由は2つ

まず場所

本格的に戦える場所なんて限られているためになんとか教導隊の訓練施設を借りて戦っていたこと

2つ目、かかった時間

先程も言ったとおり泥沼化してかなり時間がかかった。

周りの人も流石にここまで掛からないと踏んでいたが思いのほか時間がかかり他の訓練する予定だった局員達は訓練をすることが出来ず………俺と母さんは教導の邪魔をしてしまったことにより……

なのは姉
魔王は現れた

そうあれは一瞬だった…

泥沼化していた俺と母さんの戦いに割って入りバインドで即座に動き封じ込まれる。

そして俺と母さんが戦って発生した魔力残滓を収束し魔王は無慈悲にも祝砲をぶつ放し俺と母さんは仲良く倒された

そして、次に気がついたのが家で話を聞く限りだとシヤマルが母さん共々家に連れ帰ったとか…

そんなこんなで真実を知っての怒りは何処へやら…綺麗さっぱりと無くなり、いつもの八神家の生活に戻ったわけです…めでたしめでたし…

まあ…余談だが…その日から約3ヶ月間、ピンク砲撃恐怖症に陥りまともになのは姉と話せなくなっただがな…

三十話 『打鉄式式』

織斑のクラス代表就任パーティーから翌日…

結局昨晩はパーティーのおかげで打鉄式式についての話し合いはすること無く就寝した。

そして放課後になり俺は直ぐさま教室から出て行こうとする。

「あら？優希さん？どちらへ行かれるのですか？」

すんなりと出ることは叶わず出て行こうとする俺に気付いてセシリアが俺に声を掛ける。

『ああ、セシリア…今から少し野暮用でな…』

とあまり大声では話せない内容でもあったのでお茶を濁す。

「そうですか…あつ、でしたら私もお手伝いさせてもらいますわ」

『え？い、いや〜大丈夫…一人で出来ることだから』

…実際は無理だけどな…

「八神くん…またなんだ…」

「なんか八神くんって付き合い悪いよね〜」

と周りからは俺に対する不満の空気が漂う。

いや確かにクラスの人間には付き合い無いけど…別に無視してる

わけでもないし…

「八神！貴様まさか疚しいことを考えているのではないな!？」

そして何故あんたが突つかかる篠ノ之さん!!

「お前それ本当なのか!？」

そしてお前も便乗するな織斑!

『ああー!もう!皆さん落ち着いてください…まず…篠ノ之さん、そんな根拠の無い憶測で事態を悪化させないでください。織斑はその言葉に便乗しない…それと付き合いが悪いのは申し訳ございませんが…何分他言出来ない理由がありますので聞かないで下さい…それじゃあ…これで失礼します』

と俺はこの空気から逃げるようにこの場から立ち去った。

そして早歩きでやってきたのは一年四組のクラス

もちろん目的はこのクラスにいる簪だ。

俺がクラス前にいることに気付いて簪は荷物を纏めると俺の元へやってくる。

「お待たせ、優希」

『別に待ってないよ、それじゃあいこうか』

と俺は簪と共に歩き出す。

「ねえねえ、あの人だよね…織斑一夏くんとイギリス代表候補を圧倒したって」

「あんな試合…もう試合って呼べるものじゃなかったわ…」

とひそひそと微かに聞こえる周りの声…

前の試合の結果か俺は強すぎるため恐れる者達が多くなった。

…まあ避けられるのは別に気にすることでもないし…嫌みを言われるのも慣れている

「優希…」

と俺は別に大丈夫だが簪は堪えたようだ。

「優希は悪くないから」

『…ありがとな…簪』

俺は少し感謝の気持ちで簪の頭を撫でる。

撫でたことで簪は頬赤くするが俺は少しその簪が可愛いとそう思いつながら…目的地へと歩いていく。

そしてやってきたのは第八整備室…ここに来た理由それは此処にある物のためである。

整備室を歩く俺たちは奥のハンガーで立ち止まりハンガーに鎮座するISを見る。

簪と同じく水色を強調している機体…そして簪のディスプレイで見たまんまの姿をしている…

『これが簪の…』

「うん、これが私の専用機…打鉄式」

三十一話『1から0へ』

「…そう…そんなことが…」

『ああ…正直許せるもんじゃないよ…これはな…!』

もう既に夜の八時、俺はアリサ姉と連絡を取っていた。

事情を話した俺は右手を力強く握りしめ倉持技研に対して憤りを覚えた。

「…それで…式式のパイロットの彼女は？」

『……今はもう…寝てるよ…』

アリサ姉は簪のことを気にして俺に伺うと俺は後ろへと振り返り眠っている簪を見る。その目元には涙を流した後のある彼女の姿を

数時間前…

整備室にやってきた俺と簪は目の前にある、打鉄式式を見上げ眺めたあと早速作業に乗り出すことにした。

『取りあえずまずは…』

と俺は懐からUSBを取り出すと簪に手渡す。手渡された簪はこれが何なのな分からず首を傾げるが俺は中身について話し出す。

『そのUSBの中身は昨夜一夜で俺が作ったOSプログラムだ、取りあえず動作確認程度のスペックだから…試運転ぐらいなら問題ないはずだ』

「OS!?!昨日一日で作ったの!?!」

『ああ、試運転程度のOSならまだ簡単だからな…』

といってもロンギヌスも力を合わせてくれた点があるけどな…流石に口には言えないし

『取りあえずこのOSを打鉄式式にインストールしよう』

「うん」

そういつて簪は手前にあるコンソールの前の椅子に座りコンソールに先程のUSBを差し込むとコンソールをそう差し出す。

「……………OSインストール完了」

『簪のISとの拒絶反応もないよな』

「え?うん、うん、ないよ…でもどうしてそんなこと聞くの?」

と不思議そうに理由を訪ねてくる簪

というのも俺のリヴァイヴは戦うこと自体嫌っていたわけで…もしかしたらOSを受け付けないということもあり得たために俺は簪に聞いたのだ。

『無いなら別に良いよ…気にすることでもないし』

「う、うん」

まだ気にしているようだが今は打鉄式式に集中しなければならぬ。

「やーくん、かんちゃん、遅れてごめん」

と漸くいつも通りのほほんとした本音がやって来た。

『本音も来たか、今から動作確認をするんだ。何か気になることがあったら言ってくれ』

取りあえず簡単に今の状況を本音に話し、本音もわかったと首を縦に振って頷くと簪はコンソールを操作して動作確認を開始する。

背部のウイングが細かく動く…今まさに組み立てた打鉄式式が動いていることに簪と本音は笑みを零すが…俺は少し違った。

(…なああロングヌス…動作遅くないか?)

(私もそう思いました…インストールしたOSから推測するに予定より下回る性能です)

「次は春雷の武装展開の動作を」

そんな俺の考えを他所に簪は次にと両翼に付いている春雷の展開しようとコンソールを操作し春雷が銃口が前方へと展開するが…左右の春雷の展開する速度に違いが見て取れた。

『右の方の春雷が遅れてる簪、一度打鉄式式のシステムを全てダウンしてくれ』

「え?うん、わかった」

俺の指示に簪は戸惑いながらも打鉄式式のシステムを全て止めると先程簪が操作していたコンソールを操作してハンガーに付いてい

るアームを操作して打鉄式式の春雷を取り外す。

「優希?!何するの!?!」

『ちよつと気になってな…簪、確かパーツは倉持技研から届いたんだよな…パーツの中は見たか?』

「え?見て…ないけど…」

『……………』

嫌な予感がしてきた…

俺はアームを操作して春雷を静かに地面に下ろすと春雷に近づき工具を使つて2門の春雷のフレームを取り外し中を見る。

『……………やっぱりか…倉持技研のやつら!』

中身を見て俺は憤りを隠せなかった、その異変に気づいた簪と本音も近づいてきて俺の後ろから覗いてくる。

「ほえく春雷の中身ってこんな感じなんだく」

「私も初めて…あれ?」

本音は単純に中身を見れて感想を述べたぐらいだが簪の方は俺が思っている異変に気がついた。

「優希…こつちの春雷の駆動部の部品…錆び付いてない?」

『気付いたか簪。明らかにこの駆動部のパーツは使い回した形跡がある…その上もう一つの方も錆び付いてるパーツとは微妙に違う…恐らく駆動部ではあるけど機種が違うんだ』

左右の展開時間に差があったのはそのため…嫌な予感しかしな
い。

言いたくはなかった、しかし…安全性を考慮すれば…

『簪…今から言うこと…気分を悪くすると思うけど…聞いてくれ…』

「な、なに」

少し重い空気の中俺は真剣な顔付きで話しかけたことで簪は嫌な予感を頭に過ぎりながら俺の言葉を待った。

『打鉄式式を一度オーバーホールした方が良い……もしかしたら倉持技研から見かけ倒しの不良品を掴まされたかもしれない』

「不良…品…!」

告げたくなかつた言葉…その衝撃の言葉に簪は立ちくらみをしてその場で倒れた。

「かんちゃん!？」

「簪!」

ショックから倒れるとは流石に思つてなかつた俺は本音と一緒に簪に近寄り状態を確認する。

『…大丈夫…気絶してるだけだ……けど…』

命に別状はないが簪の精神は…相当な傷を負つてしまつただろう…しかし黙つていては簪の身に危険もあつた…

『本音、簪を保健室に連れて行つてくれ…』

「え? やーくんは?」

『俺は打鉄式式を全て調べてみる…簪のこと…頼む』
「うん」

そういつて本音は簪を連れて整備室から出ていき俺は打鉄式式に他に不備がないが調べ始めた。

「それで…あんたはどうするの?」

涙を流す簪を見つめていると電話しているアリサ姉からこれからのことを聞かれる。

『決まってる』

簪が一生懸命に努力することを無意味にはしない…俺がさせない…だから

『アリサ姉…力を貸してくれ』

絶対に俺達三人で打鉄式式を完成させてみせる!

三十二話『0を1に』

打鉄式式の新たなる問題に直面した俺達

簪はあまりのショックに完全に意気消沈してしまい瞳からは生気が感じられなかった。

ならば俺に出来ることをやるしかない

『…気が進まねえな…』

今いるところはとある部屋の前その周りには誰も居らず…というか極力近づきたくないのであろう…当の俺も嫌だし

『背に腹は変えられないか』

俺は部屋の扉をノックして数秒返事が来るのを待つ。

すると扉の奥からこちらに近づく音が聞こえてそして…

扉は開かれた。

簪SIDE

もう…無理だ…

私は必死になって努力してきた…周りの人に認められるために私の姉…更識楯無を越えるために…

そのために一人で打鉄式式を完成させようと頑張った…だけど一人だと限界がある…優希は教えてくれた。

だから優希と本音の二人と一緒に…打鉄式式を完成させよう…
…決めたんだけどな…

打鉄式式の動作確認でわかった事実…それは打鉄式式が不良品であること…

そう言われてみればそうだ…

倉持技研が…ただの小娘に大事なコアと一緒にパーツだけ渡して完成するとはとても思っていないのだろう。

元から期待などされていない…だからもう一つのよりデータ収集ができそうな白式に狙いを絞った…

2人しかいない男性の1人：織斑一夏が乗るIS：当然注目度も圧倒的と言う他ない：

当初打鉄式式が付ける新品のパーツも全て白式に回された：そう考えれば辻褃も合う：

私は結局：何をやっても認めて貰えない：：弱い人間：私って：なんて無力なんだろう：

私はその日気絶から目覚めたら部屋の中だった。

多分優希もいた：けど感情を抑えきれなかったから声には出さなかつたけど泣いた。

自分の無力さに：報われない理不尽な運命に：私は嘆いた。

次の日：私は昨日と同じで授業を受けていた

けど授業の、内容は何も覚えてない：

：まじめに聞く：理由ももうない：この学園にいる理由ももう：私には：

そして、時間は過ぎてお昼休み：みんな昼食取るために食堂に行くもの買ってきた：作ってきたものいる：

そんな中で私はただ呆然としている：いつもなら：打鉄式式のことをしていたのに：もう：私にはする必要は無いから：

「ねえねえ聞いた？2組の話」

「うんうん、クラス代表が今日転校した中国の代表候補生に変わったって話しだよね」

：：そうなんだ：でも私にはもう気にすることのない話：

「かんちゃんいるう〜」

そんなことを耳にしているといつもと変わらない：本音がやってくる：

『：本音：何しに来たの』

私なんか放っておけば良いのに：

「かんちゃん来て欲しいところがあるんだ〜」

と本音は私の手を拝借して私を教室から連れ出していく。
方向から食堂じゃない：何処に行くつもり？

私は抵抗せずに本音に連れられていくと辿り着いたのは…

『整備…室…』

昨日、私が絶望を味わったあの打鉄式式が鎮座する整備室…今更何しに此処に

そんな私を他所に本音は私を連れて整備室に入ると中には見知った先客がいた…

「やーくんくかんちゃん連れて来たよ」

「ありがとう本音…漸く来たか」

打鉄式式の前のコンソールを操作する優希…今更こんな不良品打鉄式式に手をかける価値なんてもう…ないのに…

「…簪…」

どうして…それなのに…

『どうして優希はこんなことしてるの!?!…もう何をやったって無理だよ!…こんなの私たちじゃ到底…』

不可能…結果は見えてしまっている。

「そうだな…確かに絶望的…といっても良いな…」

優希も少し俯く…やっぱり優希だって…

「けど…諦めるにはまだ早すぎる」

優希は俯いていた顔を上げて打鉄式式を見据える。

どうして…

理解できない…優希が何を考えているのか…まだ…出来ることがあるというのか…

「誰だつてこんな結末を望んではいないんだ…俺も本音も簪も…そして…こいつも打鉄式式」

最後に優希は打鉄式式の元へ行きフレームに手を当てる。

どういうこと? 打鉄式式も望んでないって…

「打鉄式式だつて…きつと簪と一緒に飛びたいって本当に思ってるはずなんだ…この中で一番、打鉄式式を見てきたのは…簪だから…」

『そんな…わたしは…』

私にはそんなこともう…

「諦めない先だけに未来はある」

『諦めない先に…未来?』

「ああ、受け入れられない運命を必死に足掻いて足掻いて…足掻き抜いたその先…きつとその先には幸せが待ってる…俺はそう思う…簪はどうしたい」

私…私は…うん私だつて

『私だつて、打鉄式式を完成させたい!こんな絶対嫌だから!』

涙声で叫ぶ私…瞳からは涙が溢れてるのが分かる。

「ならやるしかないな!必ず俺たちで打鉄式式を完成させる!」

うん、決めた…無理だからって逃げない…きつと打鉄式式を完成させてみせる。

『だけど…部品はどうするの?部品がないと…』

「その点は何とかなった…昨晚に織斑先生に交渉した結果…学園に余ってるパーツの使用許可を取れた…これはやっぱり学園からも打鉄式式を完成させたいっていう意志をくみ取れる、計らいだとおもう」

学園からパーツが…私が無力で泣いてるときに優希は動いてくれてたんだ…うれしいな…

「それともう一つ、俺の所属するバニングスの社長にパーツのことを聞いたら喜んで了承してくれたこれで学園にない必要パーツがあった場合でも…まあ予算もあるけど…ある程度なら揃えられるはずだ」

優希の所属企業も…優希…凄いよ…

「それとこれはアリス姉…バニングスの社長からの伝言…倉持技研から捨てられたんならいつそのことうちにこないかって…」

『本当に!?倉持技研から怒まれるかもしれないんだよ!』

「まあ今から恨みの一つや二つどうってこと無いだろう」

と軽く優希は言うけど…怒まれるの…バニングス社の社長さんじゃ…

「まあ取り合えず…パーツ面なら問題は無い、な、まだ諦めるには早いだろう?」

と、優希は私に向かって笑みを浮かべる。

うん優希の言うとおりで。

私のために優希は必死になって繋ぎ止めてくれた…絶望の中で希望の光へと繋げてくれた…

優希…まだ出会って間もないのに私の凍りついた心を溶かしてくれて私を照らしてくれる光のような大切な人…ううん…もつと…簡単に例えられる…優希は私にとっての…

完全無欠の英雄^{ヒーロー}

三十三話 『更識楯無との雑談』

優希SIDE

何とか簪を立て直すことに成功した俺と本音…本当…苦労したんだよな…

あの織斑先生に頼まないと行けなかったし…

この前から俺のことを警戒して注視している織斑先生だ。下手に言葉を滑らせれば追求は免れなかっただろう。

だからこの顛末だけ話すと意外にもすんなりと了承してくれた。

ただの気まぐれか…それとも他の意図があったのか…正直分からないことだらけだが…今は一歩前へ進める道程を作れただけでも良かった。

『簪、本音と一緒に先に食堂行つてくれ俺は少しやることあるから』

「え？やることあるなら手伝うけど…」

『いや…本当に直ぐ終わることだから…』

と簪に優しく言うのと2人は整備室から出ていき足音も遠ざかっていくのを耳で確認すると俺は口を開けた。

『そろそろ出てきたらどうですか？更識さん？』

とハンガーに向かつて喋るとハンガーの陰から更識さんが出てくる。

「上手く気配を殺してたはずなのに…どうして分かったのかしら？」

と口元を扇子で隠しながら俺が何故気付いたのかを訪ねてくる更識さん。

『所々殺気が見え隠れしていましたから…』

俺と簪が話し合つてるとき感情的になって出してしまったのだらう…

『まあ察するに倉持技研に対する恨みですか？それとも俺に対しての嫉妬？』

簪の姉なのだ…簪を無いがろにした。倉持技研を怨んでいても可笑しくない

後は楽しく話してる俺に嫉妬したか…何だけど…

「両方よ…」

と隠さずに殺気を俺にぶつけてくる。

『…全く…ただの生徒会長が出せるものじゃないぞ…それは』

殺気を受け、率直な答えを述べる俺に更識さんも思うことがあるのかそういう顔付きで俺に向かって話し出す。

「そういうあなたも、殺気を受けて平然としてる時点で可笑しいわよ」

…更識さんの言葉…確かに一理ある…

俺は動じなかったのは…まあ…場慣れしすぎてるからな

それとこの人のことは俺は調べていた

更識楯無…本名、更識刀奈…日本の裏を担う暗殺部隊の現頭領…第十七代目楯無に若くして襲名した、秀才

その秀才から簪のコンプレックスになった要因…そして彼女の専用機も1人で作り上げた…まあ、これは恐らくロシアのでっち上げだろうが…

そんなこと、ぺらぺらとしゃべれば却って警戒されるから言わんが…

『…別に気にすることでもないだろう…お互い触れられたくないことだってあるわけだからさ』

ここは互いにこれ以上の検索を予想と考え、引き下がるように促す。

「…わかったわ…けど…もし簪ちゃんを裏切るようなまねをすれば…あなたを殺すわ」

と最後に先程以上の殺気を飛ばして威圧

しかし、この程度で動揺するほど柔では無いわけで…

『逆に返り討ちにあって喉元を食いちぎれられないことだな』

と下手に手を出させないために更識さんより比べものにならないレベルの殺気を飛ばす。

すると更識さんの表情は一変し俺の殺気を受けて体が竦み、恐怖から後ろへ数歩下がる。

『後、簪のことは見捨てないよ…それじゃあ、簪が心配して帰ってこられたらそちらも困るでしょうし、これで失礼します』

と俺は更識さんに一礼した後俺はその場を後にした。

「私が…殺気に竦んだ…だ、だめ…得体も知れない彼を…簪ちゃんの隣に…居させるわけには…」

と恐怖で体を震わせながらも、俺のことを更に危険視したことを俺はこの時知るよしもなかった。

三十四話 『中国から来た女』

整備室で更識さんと話し合った俺は食堂にやって来た。

昼になつてから既に20分程は経過しており食堂は既に混雑している

『さてと…簪達は…』

辺りを見渡し先に行った簪達を探していると直ぐに見つかり料理を頼んだ後そこへと向かった。

『……………』

向かった…向かったはいいが…

『よりによつてなんで此処なんだよ…』

今俺達が座つてる席その隣には織斑と篠ノ之…後何故かセシリアと…見たことない女がそこに居た。

そして此処にいた簪と本音はというと…打鉄式式の原因ともなつた白式を持つ織斑がいるため居心地が悪くして気分の優れない簪に、後々気付いて淡々と慌てている本音の姿。

恐らく此処以外はもう取られていたのだろう…そうなればどうしようもない。

気まずいが黙々と食べてさつさと立ち去ろう。

「ねえあんた…」

と食べようとしていると知らない女に声を掛けられる

『…俺でしようか？』

俺も礼儀として食べる手を止めて女に顔を向けて返事をする。

「そうよ、あんたが八神優希ね…噂は聞いてるわ…あんた強いんだってね」

と俺の強さに興味を持っているのか女は俺をまじまじと見てそう答えた。

『…人に物を訪ねる前に…自分の名前ぐらいは先に名乗った方が良いでしょう…そちらは知つても俺ら知りませんから』

「そうだったわね、凰鈴音よ、中国の代表候補生…そして2組のクラス代表よ」

と遅れて自己紹介を済ませる凰さん。

『凰さんですか、俺は知ってると思うけど八神優希です…よろしく…これでお互い自己紹介が済んだことですし本題に入りましょう…』

「そうね、ちよつと今日の放課後…私と模擬戦で勝負してほしいのよ…なるほど噂が真実なのかを確かめる節がありそうだな…」

別に断る気もないため俺は了承しようとしたとき何食わぬ顔で織斑が見ていることに気付く…

『何でしょうか？織斑？』

「お前また…そうやって痛めつけるのかよ」

と批判する言葉を吐く織斑…だがそんなこと言われてはいそうですかとは認めるわけにはいかない。

『痛めつけるとは心外ですよ…』

「ふざけるなよ！あんなの…！男がすることじゃねえ！」

男男って…お前も…女を見下してるじゃないか

少しいらつく俺はきつく言おうとすると…

「馬鹿みたい…」

意外にもその言葉が出たのは簪からだった。

「あなたは何も優希のこと分かってない、優希の優しさも強さも何もかも…」

俺のことを言われて腹が立ったのか織斑を睨み付けて俺のことを言う簪

「あなたに優希は負けない…優希はあなたのこと期待してるみたいだけれどね」

「なんだよ、それ！どういうことだよ！」

いや確かに負ける気はしないけどさ…奥底で思ってることまでぶちまけなくても…

と俺は内心苦い笑みを浮かべていると意味が分からない織斑はまた声を荒げた。

「もういい。本音行こう」

と居心地が最悪なのか一刻も早くこの場から立ち去りたいのか簪は席から立つとその場を後にして、慌てて本音もそれを追いかける。

「簪……織斑……簪が……あの子が言った意味ちゃんと理解することだよ……」

と俺は立ち上がって食堂から出ていった簪を追いかけていくのであった。

……結局昼飯食べ損ねたな……

三十五話 『力とは』

簪を追いかけけるため食堂から出た俺は往来する女子の合間をすり抜けながら出ていった簪を探す。

『もう此処ら辺には居ないか…』

意外と早い…そう思いながら足を動かそうとしたとき後ろから声を掛けられる。

「優希さん！お待ちになって！」

『っ！セシリア』

後ろからやってきたのは食堂にいたセシリアだった。

何故追いかけてきたのか少し気になるところで走ってきたセシリアは息を整えると話しかける。

「追いつきましたわ：優希さん、更識さんをお探しに？」

『ああ、でも遠くにいったはずだから…』

簪が出て行ってから俺が追いかけるまでの差は短いことからまだ近くに居ると思っていると懐にしまったスマホが鳴り響き画面を確認すると本音からだった。

『本音、今どこに居る？』

「屋上だよ！かんちゃんもそこにいる」

『わかった直ぐに向かう』

と本音から簪の居場所を聞くと通信を切って屋上へと向かった。

屋上に辿り着くとあまり此処には人が来ないのか人影は余りなく、それによつて本音と簪を直ぐに見つけることが出来た。

『簪！本音！』

「あ、やーくんが来たよ…あれ？セツシーもいる」

俺が声を上げると本音は気がついて返事を返すが簪は気付いているか落ち込んでいて返す気力がないように見て取れた。

『少し探したぞ…全く…』

「優希…」

とポツリと俺の名前を言う簪に俺は耳を傾けた。

「優希はあんなに言われて…悔しくないの？可笑しいよ…優希は優し

いのに…誰も分かってくれない…そんなの…」

以前にも俺を恐れていた生徒のことも含めて…織斑に言い放ったのか…俺は大丈夫でも簪はやっぱり堪えたんだろうな…

『俺のこと自分のように考えてくれてありがとう………簪…』

「なに？」

『力って…なんだと思う？』

「力？」

俺が言った力について訪ねるがあまり意味が分かっているのか簪やセシリア達も含めて首を傾げる。

『まあ、分からないよな…色々と主点が変わると力っていうのは別の意味を表すことが出来る…例えば…相手を倒す力…テストでライバルに勝つために身につけた知識の力…これだけで同じ言葉なのに意味合いがなんか変わってくるだろう？』

とここまでは分かったのか三人ともうなずく。

『次は誰かを救うための力と復讐のための力…この二つは確かに同じ力だけど…方向性が違う…守りたい気持ちと憎しみに狩られる気持ち…』

「つまり…力はみんなそれぞれってこと？」

「ここまで話していると簪はなんとなく分かったのか俺が言いたいことを述べる。」

『ああ、簪に言えば…姉を越えるための力…理由も力も人それぞれってわけだ』

「…うん、なら優希の力は何なの？」

と簪の力を述べると簪は俺が何のために力を振るっているのか気になって訪ねてくる。

『俺の力か…俺は家族や大切な者を守るために戦う…そのための力だと思う』

「大切な者を守る力…」

『でも守る力といえど…周りから見たら恐れられるのも無理はないけどな…』

強すぎる力は周りを恐怖させ恐れられる…それに…

『力だけじゃ…駄目なんだ…力を振りかざすだけはただの暴力と変わらない…力を使うことで必要なこと…』

「自分自身の力を振るう理由…だよね」

と俺が言うまでのなく簪は答えて俺は縦に首を振って頷いた。

『そう、心構えがないとそれはただの力を見せつけてるだけに過ぎない…その力を自分自身で何のために誰のために使うか…力と心の二つがあつてこそ…人は強くなれる…俺はそう思ってる』

…と俺は三人に話す中頭の中で織斑のことを気にかける。

あいつはこの前白式という名の力を手に入れた…しかし力を手に入れたが心はまだ無い…いや借り物の心で戦っているであろう。

「…力はただ力…真の強さは曇り無い信念とそれを突き進む力を持つ者」

『…セシリア?』

先ほどまで黙っていたセシリアが何とも貫禄のある言葉を口ずさむと気になった俺は振り向いてセシリアの名前を呼んだ。

「ごめんなさいまし…これは幼き頃の私を育ててくださいました、叔父様のお言葉なのです」

中々良いこと言う叔父さんなんだな。

「ほえ〜セツシーの叔父さんってすごいね〜その人今は何してるの〜」

と本音もセシリアが放った言葉に興味を示してその叔父のことを訪ねるとセシリアは暗い顔をして顔を俯かせる。

「もう…居りませんわ…」

「え…それって」

「3年も前に叔父様は亡くなっていたと…私はその頃は色々対処に手間取っておりまして…今の今まで私は叔父様にお返しもできませんでしたわ…」

『…そうか…』

3年…前か…それぐらいだと…グレアム叔父さんが亡くなった年だったな…

それにセシリアの叔父さん…一体どんな人だったんだろうか…

そんなことを思いながら時間は過ぎて行くのであった。

三十六話 『優希VS鈴音』

昼休みから時間は過ぎて放課後…俺はアリーナに来ていた。

アリーナに来た理由それはもちろん凰さんとの模擬戦のため

あの時は織斑が遮ったが元々受けるつもりだったし、模擬戦を受けた方が第3世代の制作にも近づけるだろう。

『…各部スラスター、FCS問題なし、機体コンディション異状なし、システムオールグリーン…』

アリーナのカタパルトデッキでリヴァイヴの出撃最終確認を終えるとPICで宙に浮く。

『さて…いくか!』

「行きましょうマスター」

「シュツゲキ」

意気込みを言った後俺はアリーナへと飛び出した。

NOSIDE

アリーナの観客席…イベントなどが無いことから無人であったがそこに簪と本音、そしてセシリアはやって来ていた。

「…あれが中国の第3世代…甲龍…ですか」

と観客席からアリーナ内を見下ろしてみるとそこにはマゼンタと変わった色をしたIS…甲龍がそこにあった。

「噂だと安定性と燃費がいいらしいけど…一体どんな兵装を持っているのか」

簪も中国の機体に興味があるのか熱心機体を見て両肩の浮遊するユニットに目が行く。

「…あの両肩のユニット…あれが一番気になる」

「確かに簪さんが仰るとおりですわ…あの丸みのあるユニット…スラスターとは思えませんし…」

「あゝやーくんでてきたよ」

と甲龍の浮遊するユニットに興味を寄せる2人を他所に本音は優希がカタパルトデッキから出てきたことを口にする。

そして所変わり出撃した優希はアリーナ内に入るときれいに降下して着地そして鈴音の甲龍を見つめる。

もちろん、相手の鈴音も優希がアリーナに降り立ったことは確認して、驚いた表情をしながらも優希に通信をつなげる。

「あ、あんた…どうしてここに…」

「どうしたもなにも…模擬戦にきたんだよ…あの時織斑に遮られたけど…元々受けるつもりだったし」

「そう…ありがとう」

と優希は試合に応じる理由を鈴音に告げると鈴音は噂の優希に戦えることから少し嬉しそうに頬上げた。

「じゃあ早速始めるけど良いよな？」

「ええ、こつちからお願いたいわ！合図はどうする？」

両者、戦う気満々で合図をどうするか鈴音が訪ねてくると優希は拡張領域バースロットから弾込めされているガルムの替えのマガジンを取り出す。

「このマガジンを真上に投げるそしてマガジンが落ちた瞬間がスタートの合図…っていうのはどうだ？」

「いいわ、それでやりましょう」

鈴音の同意も得られたことにより優希はマガジンを思いっきり天高く投げて、投げでもおおよそ三十秒後マガジンは地面に落ち、2人の戦いの火蓋が切つて落とされた。

「先手必勝！」

と先に飛び出したのは鈴音で右手に拡張領域バースロットから双天牙月を取り出すと一直線に優希に向かって飛び込んでくる。

《踏み込みが良い…ガルムを展開するより…!》

飛び込んでくる鈴音を見て優希は即座に拡張領域バースロットからガルムではなく葵を取り出して鈴音と切り結ぶ。

1回、2回、3回と打ち合う優希と鈴音、そして4回目のぶつかり合いの後優希は後方に下がる。

「なるほど、その武装…切り裂くというより、叩き潰すといった武器だな」

優希は数回切り結んだことで鈴音の双天牙月の特性を見極める。

「たった数回切り結んだだけなのにこの武装のことをわかるなんて凄
いじゃない…あたしもあんたの葵が気になって仕方がないのよね…」
鈴音も優希の観察眼を賞賛し自身も気になっている優希の葵に目
を向ける。

優希が持つ葵は日本刀を模した近接ブレードだ。

その葵で青竜刀の双天牙月の一撃を何度も受け止めた。

普通なら刀身が双天牙月の一撃に耐えきれずに折れるところだが
優希の葵は一つの刃こぼれもなく保っている。

「もしかして…一夏がいつてたからくりが関係してるとか？」

《からくり…ねえ》

鈴音から述べられた一夏が言っていたという話しそれは恐らく優
希が一夏とのとどめの一撃で使った斬撃のことを指し示しているの
であろうと優希は推測し話し始める。

「その通り…このリヴァイヴには特殊なシステムを積み込んでいてな
…シールドエネルギーを収束して攻撃に転用することが出来る、今回
はシールドエネルギーの少量を葵に収束して刀身の強化したってわ
け前回の戦いはその収束したエネルギーを斬撃として飛ばしただけ
…」

「あ、あんた…わりとささっと言ってるけど…とんでもない力よ…そ
れ」

淡々と説明をする優希に鈴音は呆れた顔でツツコミを入れる。

「まあいいわ…近接攻撃でだとあんたに分がある…なら！」

優希に近接攻撃を仕掛けても分が悪いと判断した鈴音はある程度
の距離を取り、距離を取ったことから優希は何か来ると葵を構えて次
の攻撃に備えた。

そしてその攻撃は直ぐに来た。

優希は何かに吹き飛ばされるように後ろへと飛ばされる。

不意に吹き飛ばされたことで体制を崩すが直ぐに整えて鈴音を見
る。

《なんだ…今のは風圧なのはわかったが発射のタイミングがわからな
かった》

砲身は見ええず砲声すら聞こえない完璧な不可視の攻撃…この攻撃に優希は余裕が消えた。

「これが甲龍の第3世代兵装…龍砲よ、この威力はその身で味わったと思うけど…どう？」

「完全な見えない攻撃…知らなかったからな…完全に不意を突かれた…さすがに俺でも見切るのも難しいか」

「あんたにそこまで言わせられたんなら嬉しいわね…じゃあどんどん味わいなさい！」

優希も手に負えないと口にする龍砲に鈴音は嬉しくなりながらも勝つために龍砲を再度撃とうと考えるが優希は未だ龍砲の攻略を諦めたわけではなかった

（確かに俺一人じゃあ無理だろうけど俺たちなら！ロンギヌス！）

（分かっていますよ、マスター先程の時も空気の圧縮と放たれたときの空気の乱れをリヴァイヴさんのハイパーセンサーを経由して感知しました次は…遅れは取りません）

（了解、なら頼むぞー！）

と優希はロンギヌスと念話で話しを取り合い葵を両手で攪んでシールドエネルギーを葵に収束させていく。

両者一步も動かず時が少し過ぎ、そして動いたのは…鈴音からだつた。

（マスター！）

「っ!!」

ロンギヌスの声から優希は察してロンギヌスに収束したエネルギーを斬撃として鈴音へと飛ばす。

その斬撃は鈴音と優希の間で何かとぶつかり合って掻き消された。

「…あ、あんた…いま龍砲を…」

先程の現象…それを見た鈴音は大きく取り乱す。

それもそのはず、先程鈴音は優希に目掛けて龍砲を放っていた。

優希は迎え撃つ構え、ならまた次も当たる、そう自信満々出会ったのに関わらず優希はタイミングを合わせるかのように斬撃を飛ばして龍砲を相殺したのだった。

「ああ、相殺した…俺一人じゃ、無理だった…けど俺は…一人じゃない」

驚いている鈴音に優希は葵の剣先を向けてそう口にした。

「つで…どうする?」

「……はあ…降参よ…龍砲まで防がれたら私…あんに勝てる気がしないわ」

続きをやるかと訪ねた優希は鈴音の返答に耳を傾けると鈴音は一度溜め息を吐いた後、打つ手なしと判断して両手を上げて降参をするといった。

三十七話 『それぞれの思惑』

優希SIDE

凰さんの降参で幕を下ろした模擬戦、戦いが終わったことで俺はリヴァイヴを解除すると同じく甲龍を解除した鈴員の元へと向かう。

『おつかれ…中々良い線行ってたと思いますよ』

『お世辞はいいわよ、噂通りあんたは強いわね』

と互いに強さを認め合ったからか戦った後だというのに笑みを浮かべながら握手する。

…本当は織斑達ともそうなって欲しいんだが…

これは俺の願望…実際はそうならないことが多い…

『俺なんてまだまだ未熟…凰さんもまだまだ伸びると思いますよ』

「あんた、まだ強くなるうとしてるの…呆れるわね…それとあたしのは鈴でいいわよ…凰なんて呼びづらいでしょう？」

とまだ強くなるうとしてる姿勢に少し呆れた表情を見せる鈴…そして名前でと言われて俺は素直に鈴のことを名前で呼ぶことにする。

『ああ、わかった…それでこれからどうする？』

「どうするって何が？」

俺が言いたいことがなんなのかわからず鈴は首を傾げる…

確かに主語が抜けているからそれもそうか…と思いつつ俺は話し始める。

『この1回で終わらせるのかそれとも続けるか…練習相手にはなってるってこと…っで…どうする？』

と再度まだ戦うか訪ねると鈴は笑みを浮かべて即座に返答した。

「あたりまえでしょ！やるに決まってるわ」

と鈴は甲龍を展開して戦う意志を俺に示してくる。

『なら…思う存分やってやるよ！』

俺も鈴の意志に応じてリヴァイヴを再展開、そして俺と鈴との戦いは夕日が沈みかけるまで続いた。

…
…

『あく疲れた〜』

体中が疲れてあんまり動けない…

疲れ果てている俺は部屋のベッドで体の回復をしていた。

「優希が限界まで体力を使ったからそうなったと思う」

と椅子に座りディスプレイと睨み合って真剣に打ち込んでいる簪は少し俺に向かってそう言葉を投げかけた。

『でもありがとうな肩を貸してくれて』

「う、うん…どういたしまして…ねえ、優希」

顔を赤くして返事を返す簪、それから少ししてもじもじしながらも俺の名前を呼んでくる。

『どうした?』

「あ、明日…お休みだから…その…一緒に気分転換に出かけない…かな」

恥ずかしく勇気を振り絞って述べたそれは2人で何処かへ行くと
いう誘いであった

その時俺はふと頭の中にあることが過ぎる。

地球に来てからまともにくつろげた覚えがない…少し羽目を外してもいいだろう

そう思った優希は頷いて簪への言葉をかえした。

『いいよ、場所は電車で行ったレゾナンス…で良いんだよな』

「うん!それじゃあIS学園前駅に9時に集合!絶対だよ」

と嬉しそうに笑みを浮かべる簪に俺も少し頬緩ませるのであった。

《どうしましょうか…これは…あれですよね……やはりここはマスターのパートナーである私がサポートしなければ…早速…はやてさまに極秘連絡を…》

この時ロンギヌスがそんなことを思って密かにしていたとは何も知らなかった。

ミッドチルダ クラナガン郊外…八神宅

「ん〜今日も疲れてくたくたや〜」

「お疲れ様ですう、はやてちゃん…お飲み物取ってくるのですう〜」

「ああ、おーきにな…あれ？優希から電文の連絡？なんやろ？」

……………

「こ、これは…！」

「はやてちゃん、お茶持ってきたですよ〜」

「一大事や!!」

「はうう!?ど、どうしたのですか？」

「リイン！行くで！」

「ど、どこにですか？」

「地球や！地球！こんな面…やない一大事なことがおきようとするんや！見逃さへん理由は何処にもないで!!」

「ああ〜はやてちゃん…引っ張らないでください〜」

……………一方IS学園の寮の一室でも…

「……か、簪ちゃんが…八神優希と…二人きりで…お出かけ…」

「会長？また盗聴してるのですか？」

「……………」

「会長？お嬢様…どうなされたのですか？」

「…八神優希が…簪ちゃんと…デート…！そんなの…そんなこと…！」

認められないわ!!」

「あの…お嬢様？」

「絶対に阻止しないと！虚！悪いけど明日の予定を全てキャンセルしてくれる？私は八神優希をこの手で葬り去る！簪ちゃんは…絶対に渡さない！」

「……………これは…どうしたものでしょうか…」

こうして各々の陰謀が交錯しながら夜は過ぎていった。

三十八話 『簪とのショツピング（前編）』

優希SIDE

翌日、俺は簪より先に寮から出て待ち合わせ場所に指定した駅前で待っていた。

同じ部屋なのに出るタイミングが別々なのか…まあ簪にも色々準備があるのだろう。

今の俺の服は紺色のズボンに白いシャツその上に黒きコートを羽織っている。

駅で待つこと大凡10分ほど…約束の9時の2、3分前…俺はIS学園の方から来る簪の姿を捉える。

「優希、お待たせ」

約束の時間に間に合うように少し走ってきたのか少しだけ息を荒くして呼吸を整える。

そして、簪の姿も白のワンピースに簪の髪と同じ水色のカーディガンを羽織っていてとても清楚な感じが醸し出されている。

『……………』

いつもは見ない新鮮な簪に見惚れるが直ぐに正気に戻る。

いつまでも見惚れていては駄目だと自分に活を入れてから俺は簪に話しかける。

『おう、服装似合ってるな』

『似合ってる!?…ありがとう』

と誉めただけなのに頬赤くして照れる…あれ？なんでそんなに赤くなるの？

『とりあえずそろそろ行くか』

『うん！』

と俺達はそういつて電車乗り場へと向かった。

一方、ここから少し離れた場所では…

「あく簪ちゃん可愛いわ〜今からでもお持ち帰りしたい」

と簪を眺めて萌えている水色の少女が居たとか…

そして電車に乗った俺達は席に座り電車はレゾナンスの最寄り駅方向にへと進んでいく。

『そういえば…まず始めに何処に行くんだ』

「あ、うん、えつと…まずは服を見たいかな〜」

やっぱり簪も女の子なんだし当然だな…

「その後は…その…ア○メイトにいったり…ゲームセンターで優希と楽しみたいなくって」

今日の日程を述べる簪…その告げている顔は楽しそうで何よりと頬緩ませる。

また一方優希のいる車両から1つ前の車両にて…

「ほ、ほうくあの子が噂の簪ちゃんやね…ちよつとわしわししてみたいな〜」

「はやてちゃん…こんなことのために、サーチャーを飛ばさなくてもいい気がするのですが…」

「何を言うかりイン…息子の成長を見届けるんも母親の責務や」

「優希にバレたらただでは済みませんよ…きつと…」

そうして電車はレゾナンスの最寄り駅へと辿り着き電車から降りた俺達はショッピングモールのレゾナンスへと辿り着く。

まだ早い時間だというのに休みの日ということもあつてか人の往来はそれなりとある。

「結構居るな…よし行こうぜ簪」

「うん、優希」

そうして俺達は人混みの中でまず始めに向かう先の服屋へと向かう。

しかし俺はこのとき重大なことに気がついていなかった…そう…この世界は女尊男卑だということ…つまりは…

『…女物…一杯だな…』

服屋に辿り着いたはいいがまわりは女性しか居ない…しかもこの店男女両方の衣服があると看板にあったが男性の服などこの店の片隅にしか置いて居らず九割近くは女性者の服ばかりだ。

「優希？やっぱり居づらい？」

と心配してか簪は俺に大丈夫か訪ねてきて俺は大丈夫と答えた。

『多少は馴れてるから…』

昔、シャマルの買い物に付き合ったときも服選びに長々としていた記憶もあるから一応耐性はついてるつもりだ。

「これと…これもいいなくねえ優希はどっちが良いと思う？」

と簪は二つの服を俺に見せる。

一つは白を強調する服、もう一つは黒を強調する服…

『どっちも似合うと思うけど…』

「けど、お金がかかるから」

どうやらどっちも買いたいけど決められなくて俺に相談したのか

…

『それなら俺が出すよ…』

こういうとき、優しく女の子の買いたい物を買ってあげることがい
いとか…昨日、ロンギヌスから教えられたけど…意外だったな…ロン
ギヌスがそんなこと知ってるなんて…

「え？…いいの？」

『別に良いよ…それじゃあ直ぐに決算しに行こう』

そういつて俺達は簪の買う服2着を持ってレジへと向かった。

…

「よし！私がロンギヌスに教えたとおり！女の子に優しく買いたい物
を買ってあげて好感度アップ作戦成功や！」

「はやてちゃん…そんなことロンギヌスに教えたですか」

と陰から見守る2人が居たことは知るよしもなかった…

三十九話 『簪とのショツピング（後編）』

服屋で簪の服を買った後、店が並び立つ通路を一緒に歩いていく。因みに簪のために買った服が入った袋は俺が持っている。

『さてと、次は何処に行く』

と次の行き先を訪ねると簪は機嫌良く次の場所を述べた。

「それじゃあ次はアニ○イトにいこう！」

『アニメ○トって確かアニメグッズとかの専門…だったか…簪ってアニメ好きなのか？』

「え？あ、あの…その…うん」

次の行き先を述べた簪に俺は簪がアニメ好きなのか訪ねると簪は顔を赤くして小恥ずかしいのか俯けてこくりと頷いた。

「その…やっぱり…以外だった？こんな年になっても…アニメなんて…」

『別に好きなことに年なんて関係ないだろ？』

少し俺に聞かれるのが嫌だった内容だったのか少しだけ落ち込んだ姿を見られた簪に俺はフォローするように励ます。

励ました後また楽しく歩きながら話し合い…○ニメイトに到着直ぐに中に入っていく。

『…ほお…初めて来たからどんなのかわからなかったけど…専門っていうことあって品揃え良いな…』

と店内にはアニメのグッズなどが立ち並んでいて、商品数も品揃えが良いと見受けられる。

「こ、これは…中々お目にかかれない仮面ライ○の限定フィギュア！この曲線にこの塗り具合…まさに芸術…！」

『そ、そうなのか…』

やべえ…全然理解できない…

もうこれは素人が踏み入れる領域を越えている気がする…ただ、簪のアニメに対する情熱は…なんとなく分かったとおもう。

「こっちは数量限定の本人サイン入りのハンカチ…あっこつちも

…」

…

……

「楽しかった…」

『それは…なによりだ…』

ものの一時間半ほどアニメイ○で簪に連れ回られて昼時にも丁度良いことから喫茶店へとやってきた。

入って2人用の席に店員に案内されると…数分ほどで昼食の注文をして今しがた料理がやってきた。

「ごめんね…優希…その私だけはしゃいじやって…」

と浮かれていた簪は俺を置いてきぼりにしているように思っし訳なさそうな顔で俺を見ってくる。

『あ、ああ、いや…別に楽しくなかったわけではないし…簪の意外な一面がわかったことだからラッキーと思ってるし…』

と簪を落ち込ませないと必死に言っ注文した卵サンドを一囓り食べる。

「そ、そうかな…」

照れくさくしている簪にここぞとばかり俺は次行く場所のことを話を持ち上げる。

『それに次はゲームセンターだろ？なら2人で一緒に楽しめる…そうだろ？』

次に行く場所はゲームセンターと決まっている…ここなら俺と簪、両方楽しめるはずだ。

「お待たせしました」

と次のことを考えていると考えを中断させるかのようにお盆を持った店員がやってきて俺達の席に一人分とは思えない…器に注がれたメロンソーダにはバナアイスがトッピングされた言わばメロンクリームソーダが置かれる。しかも問題は二つあって一つはアイスを救うスプーンが一つしかない…もう一つは一つの容器にたいてストローが二つ…

これって認めたくはないが…

『あ、あのく俺達もう注文は全て終わってるんですが…』

認める以前に俺達はこんなもの注文もしてない…だから店員に聞いたですしかない…

「実はレジのカウンターで…若い女性が…こちらの席のお客さまにこの商品をと…お代はこちらで出すと言ってました」

………

なにそれ…

「それでは、ごゆっくりどうぞ」

説明し終えたことにより店員は笑みを浮かべた後立ち去り、残ったのは俺と簪…そしてでかでかと有る俗に言うカップル用のジュース。

『…どうする…これ…』

「誰のおごりなんだろう…」

とやっぱり俺も簪も犯人がわからないために犯人については気になっただけ。

しかしこれの所為で新たな危機に直面している…

『簪…アイス…食べるか?』

と言いながらアイスをすくうスプーンを簪の方へ寄せる。

「うん、それじゃあお言葉に甘えて…」

と少しだけ抵抗感があるように簪はスプーンを手につつとメロンソーダの上にあるアイスをすくい口の中に運んでいく。

美味しいと顔に出ている…にしても本当に一体誰なんだ…っ!?

『っ!?!』

「ど、どうしたの?」

『いや…今こっちを見る視線を感じた…どこかまではわからないけど』

今はもう無い…本当に一瞬だったからどこに居るのかもわからないなかつた。

なんか嫌な予感を過ぎりながらもキョロキョロしていたら周りから不信に思われるから辺りを見渡すことができない。

「…優希…」

と先程の視線のことを考えていると簪がアイスをすくったすくったスプーンを俺の顔に近付かせていた。

「優希も食べる?」

『いやいやー流石にそれは不味いだろー!』

上目遣いで訪ねられてもこれだけは駄目だとハッキリしている。

だって…このまま食べたらつまりあれだ一つしかないスプーンがないために間接キスになる訳で…

「アイス…溶けちゃうよ」

と簪はアイスが溶けるのも考えて更に焦らせる。

……………ええい!

「それじゃあお言葉に甘えさせてもらおう」

…駄目だ…ここで拒否したら簪が悲しむような気がする。

「うん!それじゃあ…あーん」

とからにスプーンを、俺の元へと近づけていく。おいちよつと待て!

これはあれか!あれなのか!こ、ラブラブな恋人どうしがやるという伝説な…相手に食べさせるか!

間接キスの件もあるって言うのにどうするんだよこれ…でも食べるって言ったし…上手くしてスプーンをもらって…

「……………」

だから上目遣いに涙目で俺を見ないでくれ!!

駄目だ、可愛すぎて抗える気がしない。

『あ、あーん』

もうなすすべなく口を開けると簪はにこやかな笑みを浮かべてアイスに乗せたスプーンを俺の口の中入れてアイスを食べた。

うん、美味しい…けど何故か、かなり複雑な気がする…

その上異様に周りから見られているような…居づらい…

『か、簪…これ食べたら直ぐに行こう』

「う、うん、私も…恥ずかしいし…」

とやっぱり周りの目に気づき先程自身がやったことに簪は顔を赤くして恥ずかしがる。

周りの目から一刻も早く抜け出したいために俺達は先程の抵抗感を忘れ一心不乱にクリームソーダを食べていくのであった。

三十九 五話 『見守る者達の戦い』

NOSIDE

時は優希と簪が喫茶店に入り注文を頼んでいる頃
その喫茶店にまた新たなお客が入ってくる

「いらっしやいませ、2名様でしょうか？」

「はいそうです。テーブル席って空いてはりますか？」

と返事を返すのは優希の母親のはやてと八神家末っ子2人組の1人、リイン

勿論彼女達の目的はただ単に昼食を取りに来たわけではない…優希と簪のデート（はやてはそう思ってる）を親として見守るためである。

「いや、優希もあの子もお熱いことでなく」

と優希が帰郷した時辺りからかう時のネタになると思ってたかニヤニヤと面白そうに優希達を見つめるはやて。

「いらっしやいませ、ご注文はおきまりでしょうか？」

「私はアイスコーヒーにホットケーキ」

「リインはミルクティーにフルーツパフェですう」

二人してとても昼食に食べるものではないものを頼むのであった。

「はい、畏まりました、ホットケーキがお一つ、フルーツパフェがお一つ、お飲み物、アイスコーヒーがお一つにミルクティーがお一つ…
コーヒーの方お砂糖とミルクはいかがいたしましたでしょうか？」

「いえ、いりません」

「畏まりました」

と店員は厨房の方へ行き2人になるとはやては優希達に目を向ける。

「なんや、楽しそうやな」

ここからでは何を語っているかわからないが表情から楽しそうだと読み取れた。

「はやてちゃんはいえつと…簪…さんでしたか？あの子のことどう思ってるのですか？」

リインも簪のことを気にしているのか今日短い間だが観察してみようと思ったのかを聞いてみる。

「そやな…まずええ子やってことは優希の話から聞いとったさかい、実際見てもそややなって思った。それと内気な所とか…なんや守つてあげなつて気持ちになるな」

まだ観察して短いというのによく見て答えを述べる。

「リインはあの子が家族になるって思ったらどう思う」

「リインは大歓迎ですう！」

とリインに簪のことを聞いてみると即答で賛成と述べた。

それからしばらく優希達を観察するはやて達、しかしそのはやての席に店員とその後ろから近づく水色の髪の少女がやってくる。

「申し訳ございません。今大変混み合っております…この方と相席よろしいでしょうか？」

昼時ということもありこの店の席はほぼ満席になって埋まり、はやて達がいるところは元々4人席だったためかそうして相席の話が店員に持ち出されたのである。

「はい。別に構いませんよ」

とはやてはすんなりと肯定し水色の少女ははやて達に会釈して座る。

「私は紅茶とミックスサンドをお願いします」

「畏まりました」

と水色の少女は注文を頼むと、何故か視線を優希達に向けた。

なぜならこの水色の少女…簪の姉である更識楯無、本人だからである。

《見つけたわ、電車を一本遅れてきてしまったから、一度は見失ったけど色々調べて追いかけてこれたわ…それにしても…》

と優希達に気付かれないように観察をする楯無、2人を見ているとまるで恋人のように…

《な、何を考えているの!? 簪ちゃんとかんな得体も知れない人物と恋人なんて…私は絶対に許すわけには行かないわ!》

と直ぐに頭を横に振りながら考えていることを思考から振り払う。

「あ、あの…どうかされたのですか？」

と流石にいきなり横に頭を振ったことでリインは不信感を抱きながら楯無に訪ねてくる。

「べ、別に何でもないわ」

と、戸惑いながらも楯無はリインに言葉を返すが、ただの子供ではない（本人は子供ではないと否定するが）リインは鋭くその点を突いてくる。

「ですが、声に戸惑いがあるですよ？何か良からぬことでも…」

《何この子…鋭い！》

とても子供とは思えない…と楯無はリインを警戒するがここであることに2人は気付いた。

《あれ？この子の保護者は？》

いつの間にかはやてが居なくなっていて辺りを見渡しているとはやてはなにやらレジのカウンターで店員と何かを話し合っていた。

しばらくして、はやてがニヤニヤしながら帰ってきて、気になったリインは声を掛ける。

「はやてちゃん、一体何をしてたですか？」

「なんや、それは見てからのお楽しみや」

と聞いても何も話してはくれないはやてにリインは首を傾げた。

そして少し待っていると、はやてが何をやってたのかを理解することになる。

はやて達の席から見える優希達のもとにカップル用のクリームソーダが置かれた

「なっ！あれは！」

クリームソーダを見て思わず声を出してしまう楯無、しかし二人とも優希の方に集中していたからかその事に全く気付かない。

「ふ、ふふふ計画通りや」

と思う通りに言ったことでニヤリと笑うはやて、それにはリインと楯無も視線をそちらに向けてしまう。

「さっき店員に頼んだカップル用のクリームソーダ…あれこそ、優希と簪ちゃんの距離を一気に縮め、あわよくばそのままゴールインす

る。クリームソーダ計画や！」

と、どどんと力説を述べる計画の全貌：リインも流石に目を点にして呆然とするがここに一人：無関係とは言えない人物が居た。

「…なっ…!?そ、そんなの認めるわけにはいかないわ！」

そういうのは勿論、楯無…あれだけ優希を警戒しているのだ当然の返答と言っている。

「あれ？あのもしかして…どっちかの知り合いやったりします？」

はやてもようやく楯無が二人のどちらの関係者と踏んだのか気になつて訪ねてくる。

「簪ちゃんは私の妹よ！そういうあなたは何者なの？明らかに2人にご執心してるじゃない」

「簪ちゃんの姉…ああ、優希が言うと思った楯無さんか！優希は私の息子です」

「八神優希の…母親!？」

互いに二人の関係を暴露するがはやてが優希の母親ということやはり楯無に十分すぎる衝撃を与える結果となつた。

《どう見たつて二十代前半じゃない！こんな人が母親つて…》

優希という息子が居ることに対してこの母であることにたいして若すぎると楯無も動揺を隠せない。

しかし、冷静さを取り戻し楯無ははやて達のことを考える。

何故この場所にいるのか…もしかしたら妹を拉致するために八神優希が母親を呼んだのでは!？」

と全くの当ての外れたことを考えていた。

「も、目的はなんであれ…簪ちゃんをあんな男に渡すわけにはいかな
い」

「ええそないなと言わんで…なんやあれお似合いカップルやん
か」

少し動揺を残している楯無に対して未だ余裕なはやて…

「だいたいあの男は…」

「ふんふん、せやけどな…」

優希に妹である簪を渡さないと懸命に頑張る楯無。

優希と簪の交際を真つ向から推す…はやて…

正反対の考えの2人が言い争うのは必定であり…口論へと発展していく。

《あ、優希と簪さん…お店を出て行くです》

その話に入っていないかつたりインは早急に食べ終えた優希達が店を出て行くこうとしているのに確認する。

《とりあえずサーチャーで追いかけることにしましょう》

とりインは追跡用の無色のサーチャーを飛ばして優希達をサーチャーに追跡させていき、自分が頼んだフルーツパフェを堪能するのであった。

四十話 『ゲームセンターと意外な王者』

優希SIDE

何とかあのクリームソーダを飲み干した俺と簪、勿論あそこで休憩など出来るわけもなく早々にあの場なら離れてレゾナンスの休憩エリアで体を休める。

…にしても…

『なんか、あの喫茶店で俺の母さんの声が聞こえたような…』

『そういうえば姉さんの声が聞こえた気がした…』

周囲の目が痛いから一刻も早く抜け出したかったから周りを確認していなかった…でもまあ…

『いるはずないか…』

と偶然にも簪と言葉が合わさった。

それで俺達は互いに顔を向けて目が合うと、なんか面白くて笑った。

そんなことがあった後、予定通りゲームセンターにやってきた。

ゲームセンターだから、色々と遊べる機器が置いてある。

「優希、なにがやりたい？」

とまず俺に選ばせてくれるのか簪は俺にそう訪ねると馴染みのあるあれが置いてあることに気がついた。

『それじゃあ、あれやろうか…太鼓○達人』

俺が指さした方向、そこには結構大きい画面とその前に専用のコントローラーである太鼓が2つほどついている。

太○の達人…かなり馴染みのあるゲームだ。

「あ、うん、良いよ2人プレイでやる？」

『元からそのつもりだよ』

とプレイ代分のコインを入れると両手にバッチ棒を持つとゲームをスタートする。

太鼓の達○なんて昔やったきりだったか…

「難易度どうする」

『鬼で良いんじゃないか？』

実際、鬼をやつてフルコンできる自信もあるから…

俺がそういつたことで難易度は鬼でやることになり次は曲のセレクトへと入る。

『あ…この曲』

どれにするか選んでいるとある曲が目にはまるその曲はというと

…

地上の星…

これは印象に残っていた曲だ…

だつてザファイラがやつてたから

ザファイラ、暇なときに人間形態になつてゲームセンターで太○の達人をやっていた。

しかも…上手いというおまけ付き…確か…キタサイタマ2000
0つていう曲をフルコンしてたっけ…

「地上の星?この曲やるの?」

『いや、懐かしい曲があるなつて…家族がこれやつてたから…』

「そうなんだ…それじゃあ…」

と簪が曲を選びやり始めた。

…

…

『な、中々…』

「優希も凄いよ、鬼なのに1、2回しかミスをしてないし」

『…全部フルコンしてる簪には言われたくないぞ、それ…』

結論から入ると簪に負けた…簪かなりやり込んでるのがわかる。

「わたしなんか…まだまだだよ、全国だともっと凄い人いるし…ほらランキングトップ…」

とランキングが映る画面に目を向けると1位を見た俺はその名前に目を疑った。

1位…盾の守護獣

お・ま・え・か!!!
ザファイラ

まさかの身近…それも身内とは…世も末だな…

それから他のゲームも遊びまわり、次は何をしようかと考えてるとセンターの奥の方に一際目立つものが置かれていることに気付く。

『なあ、簪、あれってなんだ?』

「あれ?あれはVRシューティングだよ、あの中に入って五感全てを使つてISを動かすの」

フルダイブ技術か…

「ただ、あのゲームは…」

と何故か簪がああゲームには何かあるのか言葉を詰まらせる。

『何かあるのか?』

「うん、実はあのゲーム最高難易度が…あつ…」

言葉を詰まらせる理由を述べようとするとある集団がゲーム機の近くに群がっている。

「よし!今日こそ天使を攻略してやる!」

「頑張ってください!兄貴!」

と男が息巻くが何が何やらわからないために俺は首を傾げた。

『天使って…なに?』

「優希は知らないよね、あのゲームの難易度なんだけど…簡単、普通、難しい、鬼…鬼の上に天使つて言う難易度があるの」

『…何で鬼の次が天使なんだ？』

「それは…制作者の考えじゃないかな？…それでその天使っていうのが…あつ、今から始まるみたい」

と簪は始まることを知らせると俺はゲーム機の上にあるモニターに視線を移す。

フィールドは何処かの森林、そこに先ほどの男が操縦するリヴァイヴに似たISと人型を…というよりあれは…

(なあ、ロンギヌス…あれなのは姉に体格似てねえか？)

(確かにそうですね…それとあれの製造元…バニングス社でした…)

ロンギヌスの話を聞いて俺は黙って考えた…

これってまさかだとは思うけど…

…数分後…

「…だめ…だった…」

ゲーム機の前で力尽きている先ほどの男…

まあ結果は…察してくれ…

それよりこれでハッキリした…あの天使って言うデータに使われているもの…それは…

間違いなくなのは姉のデータだ。

画面で見た限り、シューターしか使わなかったけど、恐らくシューターを、撃ち落として得点を稼ぐゲームだと仮定した。

…まあ本人了承の上のことだろう…天使って名前もなのは姉が固執して言ったんだらうな…

まあとりあえず…

『俺がやってみるか』

「え!?!優希本当にやるの!?!」

信じられないという顔つきで俺を見る簪、俺はそれに対して迷うことなく頷いて肯定した。

『まあ見てろって…』

そういつてゲーム機の方へと歩き出した俺…内心、なのは姉のデータを使われていることもあって強いと確信しながらゲーム機に触れた。

四十一話 『簪の才能』

簪SIDE

信じられない…

今の私はそう思うしかなかった…

今見ているゲームは五感全てを使ったシューティングゲーム…

その中で一番の最高難易度の天使は攻略不可能と言わしめるほど難しさを誇っている。

理由は簡単。無数のエネルギーの弾丸が四方八方から飛んできて確実に仕留めてくる…避けきれた者を見たことはない…

でも…今まさに優希は…

『全部…撃ち落としてる…』

ゲームで使える武装を駆使して迫り来る弾丸を撃ち落としていき得点を重ねていつている。

四方八方からくる弾丸を撃ち落とすなんて…前にも何処かの国家代表がやつても無理だった…つまり、優希は国家代表以上の実力者ということ？

『やっぱり、すごいな…優希は…』

あれだけの力を持っている…どれだけの努力をしてきたのかわからないけど…私もいつか…優希の隣に居たいな…

あれ？

私は優希がやっているゲームの画面を見ているとあることに気がつく。

『優希…動いてない？』

みんなは開始時点で動いて弾丸を回避するのだけ…優希は違う

優希は避けることなく動かずに射撃武器で弾丸を撃ち落としていた。

これってどういうことなんだろう？

私は不思議に思っていると後ろから声を掛けられる。

「優希も慣れない射撃を卒にこなしますね」

そんな声が聞こえてきたために私は後ろを振り向くとそこには空

色の髪の毛をした女の子が画面の中で戦っている優希を見ていた。

『あなたは？』

誰？と本当にいきなり現れて優希の名前も出てきたことから訪ねると女の子は私に向いてニコリと笑みを浮かべた。

「それは秘密というやつですよ、それよりどうして優希が動かないか知りたくないですか？」

『優希が動かない理由？』

やっぱり何かあるのか？それにこの子はそれを知っている？

知りたい：どうして動かないのか：ちゃんとした理由もあるのなら：それを聞いて自分も納得したかった。

「確かに優希は撃ち落とすより防いだり、回避することを優先します
フロントアタッカー

：F Aですからね…」

F A って何？

いや今は気にすることじゃない：それにしてもこの子優希のことをよく知っているように話しているけど：優希の関係者なのかな？

「あれは中衛のS Gの基礎とも言える立ち回り：足を止めて視野を
センターガード
広く：誰よりも中遠距離を制する…」

『足を止めて視野を広く…』

I Sだから：動き回る：なんて当たり前だったけど、当たり前だから見えなかった穴：それがこれということなのかな…

「でも…まあ…」

あの子が苦笑いの笑みを浮かべていて私は首を傾げた。

「優希でもS Gの真似をしても完全とは言えませんからね」
センターガード

とそう言い切った瞬間好調だった優希がついにペースを乱し被弾すると次々と弾丸の雨が優希に降り注がれていった。

優希 S I D E

あく負けたく

難易度天使で俺が取れた得点は35万…

ランキングは2位と上位に食い込んだが：俺以上のやつって一体

誰だよ…

そんなこと思っていたが俺はゲームの映像が映し出される画面に目を向ける。

ゲームを終えて簪の元へ帰った後直ぐに簪がやるといってゲーム機に向かつていった。

あの目…試したいといわんばかりの目だった…もしかして俺の動きが簪の闘志に火を付けたのか？

『さてと…始まるか…』

ようやくスタートしてまず天使が弾丸…シューターを生成し始める。

この時点では武装を展開しているだけで簪に動く気配はない…

まさか…さっきの俺の真似をしようというのか？

ぶつちやけると俺はS Gセンターガードには向いてない…精々F AとG Wフロントアタッカーカードウイング

の前線で戦うポジションのみ…

S Gセンターガードに関しては見よう見まねで練習はしていない。

そんなことを考えているとゲームは動き出していた。

天使がシューターを発射しだし、簪は俺の予測通り、足を止めて射撃武器で正確に射撃してシューターを撃ち落としていく。

『俺より弾丸への反応速度が早い』

俺に比べて簪の方が動きがいい、これで色々とハッキリした。

『足を止めて、視野を広く…』

『誰よりも早く中遠距離を制する…』

『S Gセンターガードに必要なのは…』

『「正確な弾丸を選択する判断速度に命中精度！」』

……なんてだろう…いま簪と声が重なった気がした。

これで簪のバトルスタイルは完全に固まった…ならやつぱり後付けでの射撃武器は必要だな……さてどうするか…

こういうの創作意欲がわいて楽しいんだよな

俺は笑みを浮かべて簪と打鉄二式のことを考えた。

四十二話 『迫り来る影』

『おつかれ』

ゲームセンターからでた俺達はレゾナンスの休憩できるところで腰を添えて小休憩していた。

あれから簪は順調にシューターを撃ち落としていき得点は何と俺を上回って42万点。

さすがに上回るとは思ってたなかった。

しかも簪でも2位だ…一体あれの1位はどんなやつなんだ？

気になった俺は恐らく知ってるだろう簪に訪ねてみた。

『なあ、簪、あのゲームの1位の人って得点何点とってるんだ？』

『あ、優希は気になるよね…えっと…999999点』

『…え？』

あまりの得点に呆然として聞いてしまう。

「えっとね、驚くのは無理ないよね、その人、得点がカンストしてるの、噂だと120万はいつてたって話だよ」

…あの…なのは姉のデータのデータから生まれた天使相手に…カンスト…
一体どんな人物だよ！

物凄く気になり俺は簪に更に話を聞いてみる。

『特徴は？後キャラネームとかわかる？』

「え？う、うん…えっと若い女性の人でオレンジ色で髪は下ろしてたみたいだよ…後ネームは…BONZIN」

『BONZIN？』

BONZIN…ぼんじん…凡神？嫌違う…凡人!!!

凡人って名前で更に女性で髪はオレンジ色で髪を下ろしてる!?

………やばい…該当者がたった一人居る…

うん、あいつなら…やれるかもしれないな…なんで地球にゲームな

んてしに来たのかは全くもって意味不明だが…

何しに来てたんだ魔王の教え子ティアナ!!

「ど、どうしたの? 頭なんて抱えて…」

『い、いや…なんでも…』

ザフィーラといいなのは姉といい…今日はなんで身近な人物が関わっていたものに良く遭遇するよな…

『さてと…ゲームしたら喉渴いたな…ジュース奢るわ』

「え?、それぐらい自分で…」

『良いんだよ…さて何にするかな…』

そういつて近くの自動販売機の前に立って飲みたいジュースを決め始めるのであった。

はやてSIDE

ほんまに…私の一生の不覚や…

楯無さんとお話しとつたらいつの間にか優希達居らんようになってるし…その上リインまで居なくなつてたのは驚いて念話したら一人で優希を尾行してるつてことで安否は確認できたからほつとしたな…

『それで…まだ楯無さんは拗ねてはるんか?』

と目を横に向けると不機嫌な表情を見せる楯無さんが居る。

「別に拗ねてないわよ…ただ私は…」

『力はただ力…使う人によって力の使い方も変わってくる…優希は私らが丹精込めて育てた大切な子や…育て方を間違えたとは思ってないよ』

この子、力を持つてるわけやからそこんところはちゃんと考えてるとは思うけど…

『後は本人次第やな』

と私は小声で楯無さんの未来を祈っていると楯無さんが歩くスピードを早めて私と距離を広めようとするも私も同じく縮めようとする。

「どちらにしても私があの子を見極めるわ」

と強きにそう述べる楯無さん：なんややつぱり優しいな：そういうことやったら応援したいな：

『まあまあ、そこは楯無さんのお眼鏡に叶うとおもいますよ』
そういつて私は笑みを浮かべて楯無さんの肩に手を置いた。

NOSIDE

レゾナンスの通路は休日ということ人で多く往来する中、まだ中学生になりたての女性が何やら思うことがあるのか俯いて歩いていた。

《これからどうしよう…》

先の見えない未来に不安を隠せない少女。

なぜならばこの少女の家庭は昔に父親を亡くし、母親一つで育てられた少女：

その母親は女尊男卑の思考の持ち主で男性を見下す傾向を持っていた。

本来ならばそういう思考も娘である少女にも移ると思われるが：彼女はそうはならなかった。

そのために男性を侮辱する母親に嫌気がさした少女は今日もレゾナンスにやってきて気晴らししていたのだ。

《…それにしても…この力に目覚めてからも何年もたつんだな》

と少女は思考の中でそう思うと少しあたりを見渡して見られていないことを確認を取ると右手に力を入れて意識を集中すると：手のひらの中で微弱でありながらも電撃が発生する。

少女にとって：小学校低学年のときに使えるようになった力：誰にも知らせていない謎の力：

この力がなんなのかはわからないし、この先役に立つかといえれば使えないと言い切るだろう。

だけど、自分しかないこの力：なぜだか選ばれたような感覚に囚われた少女は少しずつ練習を重ね、意識すれば電撃の調整が出来るようになるまで使いこなしていた。

《…夢物語だけど…いつかこういう力を使える職場につきたいなく》
無理だなと苦笑いの笑みを浮かべる少女…

その一方レゾナンス上空では一つの黒フードで顔を隠した謎の者が少女を目に捉えていた。

「…あれか…」

どこことなく機械のような声が混じった声音、しばらくすると謎の者はミッド術式を展開する。

「封絶結界」

そう呟くと謎の者から空間の色が変わっていきレゾナンスの建物とレゾナンス周辺を飲み込んだ。

「結界展開を確認…索敵阻害の粒子を散布」

結界を展開すると続けて謎の者は左腕を突き出す。

その左腕は異形な腕であり鋼鉄で出来た機械の腕。

その機械の腕の一部が展開して粒子を噴出する発射口が展開されると粒子が結界全体にへと散らばっていった。

「粒子の散布確認、自機のセンサーに異常なし…これより…ミツシヨンを開始する」

四十三話 『戦いの狼煙』

優希SIDE

休憩エリアでジュースを飲みながらまだ有る時間で何処に行くか考えていると首から下げているロンギヌスから慌ただしい念話が届く。

(マスター！警告！結界の展開を感知、間もなく結界内に飲まれます！)

『なっ!?!』

何故地球で結界なんか!?!そう慌ただしく考えていると結界は迫つていき俺は結界内に飲み込まれた。

『くそ！ロンギヌス！』

(駄目です、ジャミングされました外部への通信、周辺の探知は不可能です)

くそ！先手を打たれたかこれじゃあ援軍も呼べないし、事の次第も話せない。

どう動くかそう思考している俺にある人は声を掛けてきた。

「ゆ、優希…急に人が…居なくなってる」

『簪?!』

どうして簪が結界内に居るんだ!?!

いや、それよりも事態は最悪か…俺だけならよかったけど戦う力を持たない簪まで…

どうする…事態は刻々と進んでいる…

これからどう動くか考える俺はまだ完全ではないがある程度決めて、俺は簪の手を引っ張る。

「え?」

『隠れるぞ…こっちだ』

とりあえずは簪を敵から隠して安全を確保する、それからこの結界内を搜索して結界を維持している奴をぶっ倒すか話し合いで解決する。

そう思つて簪を引き連れて向かった先は隠れやすそうな服屋の試着室。

隠れるにはベターな感じがするけど服屋は服なんでしゃがめば服が視界を遮つて隠れやすいから身を隠すにはうってつけだろう。

『取りあえず此処にいろ…後』

俺は身を守る術のない簪に待機状態でドツクタグになっているリヴァイヴを渡す。

『リヴァイヴを持っていてくれ…いざとなれば身を守るぐらいの力は持つておかないとな…それと俺用に調整されてるから扱いづらいかもしれないけど…それは我慢してくれ』

これなら何も出来ずに殺されることはないだろう…でもやっぱり心配だな…

「え？で、でも優希は…」

『大丈夫心配するな…それじゃ俺は辺りを調べるから絶対にここから離れるなよ』

そういつて俺は服屋から出て結界内の搜索を開始した。

簪SIDE

ど、どうしよう…

いきなり辺りの色が変わつたと思つたら優希以外の周りの人達が突然消えちやつて…何が何だかわからない…

優希もいつもの冷静さが無くて私を服屋に隠してから何処かに行つちやつた。

優希は大丈夫といつてたけど…

私は優希のことを思いながら先程渡されたりヴァイヴのドツクタグを握りしめる。

ISのリヴァイヴを置いて…大丈夫なんて…どうして言えたのだろうか…

確かに優希は強い…けどISがないと…

唯一の武器を私に託して…優希は何処に行ったの？

ついさつき、出ていったところなのに…優希会いたい…

『会いたいよ…』

弱々しい声を呟く私…優希、早く戻ってきてよ…

『っ！』

足音が聞こえる…

足音の間隔が短い…走ってる？もしかして優希？

ううん、誰でも良い、一人でいるよりかはマシだ

『まだ…間に合うよね』

足音は着実に遠のいているけど後を追えばきつと人が居る。

私は優希との約束を破って服屋から出て足音を追いかけた。

追いかけて数分ぐらい、その足音の人物は直ぐに見つかった。

一階のエスカレーターがある広間、そこに息を荒くして体を休めて

いる女の子が一人。

『いたーあ、あのー！』

私は走りながら体を休めている女の子に声を掛けて私に気付いてもらう。

気づいた女の子は驚いた表情のあと安堵感に満ちた表情を見せ、その合間に私は二階からエスカレーターで、一階に降りて女の子の元へ辿り着いた。

『はあ…はあ…漸く…見つけた…』

私も人が居てくれたことで安心していると、女の子も嬉しそうに返事を返してくる。

「よ、よかったよ…いきなり人が消えちゃうし、化け物に追いかけて回られるし…どうなってるのって…思ってたんです」

と女の子はふんわりとした性格で年も私より年下かな？それに茶髪で黒い瞳…この近くの学生なのかな？

それにさっきの女の子から妙な言葉が…

『化け物？』

こんなところで化け物があるなんて…一体どうなってるの？

「はい、いきなり突然魔法陣みたいなものから出てきて、私を襲ってきたんです…」

とその光景が頭の中で再生されているのか小刻みに振るえている

のがわかる。

『取りあえず、服屋にいこう、そこにいればもう一人…辺りを見に行つた友達が戻ってくるはずだから』

優希との約束破つちやったな…戻ってきてたら心配してるかも…

「そうなんですか!?!だったら早速」

いこうと女の子が言おうとしていたんだけどその言葉を遮るかのように人の足音とは思えない足音が聞こえてくる。

間隔が殆ど無い…その上、足音と共に地響きもしてる。ハッキリ言つて人間の足音とは思えない

その足音は徐々に近づいてきて次の瞬間二階から巨大な物体な飛び降りてくる。

私達の目の前に飛び出てきたそれは体長は私達を遥かに超えて五メートルはあり、ごっごつとした固そうな赤紫色の甲羅に目で視認できる二本の触覚、その上気持ち悪い目…

そしてなにより…挟まれれば最後と思わせる鋏が四つ生えている

…

…最後の鋏はともかく明らかにこれは…

「巨体な…蟹!?!」

女の子が言っていた化け物それは鋏を四つも持つ巨大な蟹のことであつた。

四十四話 『簪の初陣』

私達の前に現れた巨大な蟹。

それは何もためらいもなく腕の一本を振り上げる。

『危ない！』

振り上げた腕を見て危険を察した私はすかさずに女の子と一緒に下がる。蟹は振り上げた腕を振り落とされその威力は地面が陥没するほど…

もし、受けてしまえば一撃で死んでしまう…私は死の恐怖に身を震わせる。

「キシヤアアアアアツ!!」

避けられたことに怒っているのか蟹は奇声を上げて口から何かを吐こうとして私は少し後退ると身構えた。

身構えていて吐き出したのは大量の水、しかしその水を私達に浴びさせるわけでは無くて私達の手前に吐き出している。

「どうしてこっちに撃たなかったのでしょうか」

女の子も同じ疑問を感じていた…けど、嫌な予感がするな…

でも何される前にリヴァイヴを起動して…

そう思つて優希から渡されたリヴァイヴのドックタグを手に持ったが既に巨大な蟹は、行動を開始していた。

大きい触覚…その二つの間で放電が起き始めていて私は直ぐさま足元を見た。

足元には先程蟹が吐いた水…もう疑う余地は無い！

『不味い！』

急いでここから離れなければと体を動かそうとする前に蟹が足の脚力を使つてジャンプ。

そして蟹はジャンプしている滞空中に触覚で発生した電撃を私達目掛けて振り落とす。

電撃を振り落とされて私達の居る場所は土煙が立ちこめるがその土煙から飛び出すのは優希のラファール・リヴァイヴYYを身に纏い女の子を抱えて間一髪、飛翔…ぎりぎり感電死せずに済んだ。

取りあえず、二階に着陸し女の子を下ろす私

何故か緊急だったのにISスーツが装着されていることには今は触れないでおこう

その女の子は私を見てううん、ISを見てるのかな？それを見てポカーンと呆然としていた。

『大丈夫、いきなり飛んだけど』

緊急とはいえないいきなり飛んだんだから酔ってるかもしれないな…

「大丈夫です」

と問題ないと答えると私はあの蟹が居る下のフロアをみる。

蟹も私達逃がさないと目がこちらに向いている。

昔の私なら怖じ気づいて逃げるところなんだけど…

『今の私は…戦える！』

優希に貸してもらったこのリヴァイヴを使えばきつと勝てる！

そう心の中で意気込み拡張領域バススロットからガルムを取り出し銃口を蟹に向ける。

優希のリヴァイヴの武装は近接の葵と遠距離のガルムこの二つしか無い。

優希はたった二つの武装で戦ってきた。

やっぱりそれは物凄く凄いことで私には到底リヴァイヴの性能を出し切るなんて無理だと思っ…

だけど、戦う力があるなら精一杯戦わなくちゃ！

そう思っ私はガルムの引き金を引いて弾丸を発射させる。

狙いは正確、このまま当たる。

そう思っ居た私だが戦いは甘くはない。

蟹に当たった弾丸は悉く背中の甲羅に弾かれる。

『固い…だったらー！』

ガルムを拡張領域バススロットに収納し、そのかわり、葵を取り出すとあの蟹目掛けて飛び降りる。

『固くたって全部が固いわけじゃないー！』

甲羅や硬そうな所は駄目だ…だったらー！

『いっくら…どうー！』

うまく蟹の背中に着地して私は葵を蟹の胴体と腕の合間に突き刺すと蟹は苦しみ出す

『効いてるー!』

やっぱりこの隙間は甲羅に覆われてなかったから蟹の肉に剣先が刺さった。

ならもう一度と思った矢先、私の左側から別の腕が迫ってきて直ぐに対処できなかった私はなすすべ無く背中から落とされる。

蟹の腕で吹き飛ばされシールドエネルギーを削られたけど衝撃はPICのお陰で問題ない。

直ぐに崩した体制を整えようとするけど蟹の方が早くて私が動き出す前に蟹は動きを封じるために私を鋏で掴んで動きを封じられる。

掴まれた握力でシールドを抜いてリヴァイヴの絶対防御が発動してるけどこのままだと…強制解除されてそのまま…

その後のことを考えて私はぞっとして何とかしようと思案するけど身動きが取れないから…

『っ…!』

駄目だ…私…折角優希からリヴァイヴを渡されたのに…何もできなかった…

自分の無力さを痛感しながら諦めようとしたとき上から風を切るような音が聞こえた。

一体何がと私は上を向くと、見知った機体と人物がこっちに目掛けて降下しているのがわかる。

どうして此処に…と私はその人がやって来たことに何かを投げ掛けられる不安と助けに来てくれたことの安心感を感じながら、その人は叫び声を上げた。

「簪ちゃんに…何してるのよ!!!」

…そんな大声で叫ばないでよ…姉さん…

四十五話 『更識姉妹の共闘』

助けに来てくれたのは優希ではなく、私の姉の更識楯無と専用機の霧纏ミステリアス・レイディの淑女

姉さんは叫んだ後持つている霧纏ミステリアス・レイディの淑女の主武装、蒼流旋で私を掴んでいる腕と胴体の合間に突き刺すと

先程と同じように奇声を上げ、そして私を掴んでいた鋏の握力が無くなったのを見て、鋏から抜け出すことに成功する。

鋏から抜け出した後蟹と一旦距離を取るとすかさず姉さんが私の元にやってくる。

「……………」

『……………』

言葉がでない…

本当は姉さんのこと嫌いではないけど…やっぱりあのことがあったから上手く話せないでいる。

「…怪我…」

『?』

「怪我…してないわよね…」

『…うん』

ぎこちない…私自身そうだけど気まずい空気が辺りを包んでいく。

「そう…なら簪ちゃんはこのでじつとしていて…この化け物は…私が片づけるから」

と…一人で倒すと言い切った姉さんは蒼流旋を構えて前へと踏み込んで蟹に迫っていく。

やっぱり姉さんは私のことを…

私は姉さんが私のことを必要としないと思っ
て戦う姉さんを見る。

私より動きも良いし攻撃も正確…

何を競っても勝てる気がしない…やっぱり姉さんと霧纏ミステリアス・レイディの淑女には勝てるはずが…

『あれ?』

そういえば…姉さんの霧纏ミスティアス・レイディの淑女って水を扱うんだよね…

『あつ…！姉さん！』

伝えないと！手遅れになる前に！

「え？なに？」

私が大声を上げたことで姉さん反応する…そしてあの蟹も先程と同じように触覚から放電して…

教えてる時間が無い…こうなったら

「ごめん！」

やる前に先に謝っておいて私はリヴァイヴのメインスラスタを噴かせて姉さん目掛けて加速し姉さんに体当たりし姉さんを蟹の視線から外す。

そして私も姉さんが居た場所を通り過ぎた後、思った通り蟹は電撃を放って当てようとしていた姉さんはそこには居なかったから空振りに終わった。

「で、電撃…」

『あ、危な……かった…』

姉さんの霧纏ミスティアス・レイディの淑女は水を使うわけだから…あの蟹の電撃浴びたら間違はなく大怪我では済まないような気がする…ハッキリ言って霧纏ミスティアス・レイディの淑女とあの蟹との相性は最悪と見て間違いない。

「か、簪ちゃん!?なにあの蟹!?蟹が電撃使ってくるなんて聞いたこと無いわよ!」

いつもの冷静さが何処かへ行って慌てる姉さん

まあ蟹が電撃使ってくるなんて思わないよね誰も…

『姉さん…取りあえず私も戦う…良いよね?』

「…仕方ないわね…」

姉さんは渋々了承…本当は嫌なんだろうけど…

「簪ちゃんは援護お願い、私が前衛で叩くわ」

これには多分、危険な目に合わせまいとという意味合いが含まれているのだろう

でも、私は刀での接近戦は馴れていないために、姉さんの発案に領き葵からガラムに取り替え、準備が完了すると姉さんは前に飛び出

す。

姉さんが前に出てきたことに反応して蟹も姉さん目掛けて腕を振り落とすけど、姉さんは軽々と避ける。

次は別の腕で姉さんに攻撃しようとしているようだけど、そうはさせない

私はガラムを姉さんを狙っている腕に銃口を向けて射撃

銃弾は見事に蟹の腕に命中し攻撃を仕掛けようとする腕を封じ込めるとすかさずに姉さんが蟹の懐に入り蒼流旋を硬い甲羅と柔らかい肉の合間に突き刺すと蟹は苦しんで声を荒げ暴れる。

姉さんは暴れる前に一撃離脱で後ろに下がり、再び距離を取る。

「…硬いわね…いつその事ミストルテインの槍で…」

『待つて！姉さんそれだと姉さんが危険…』

ミストルテインの槍は一撃必殺と言って過言ではな攻撃力を誇る姉さんの切り札の一つ

ただしそのかわり、防御に使っている水のヴェールを攻撃に転用するため、その時に攻撃でも受けてしまえば…

ミストルテインを発動するリスクを考えて即座に反対する。

『せめてあの蟹の動きを止められれば…』

確実に当てられる状況それに持ち込むことが出来れば…

「それなら任せてください！」

とそう言ったのは私が出会った女の子

その子はいつの間にか一階に降りてきていて蟹へと近づいていく。

「あなた！危ないわよ！」

姉さんもあの子の身を案じて警告するけど、あの子は大丈夫と一蹴り、そして蟹の前では無く蟹と少し離れた、水溜まりの前に止まる。

『何をする気なの』

彼女は一体と何をするかわからない…自然と視線があの子に向いてしまい見ているとあの子の右手から電撃が放電されているのがわかった。

「これで…！」

そういつてあの子は放電している手を水溜まりが出来ている床に

付けると先程蟹がやった同じく、ぬれた床を伝って電気が広がっていき蟹の片足は水に触れていたことにより電撃は蟹の体を襲い、痺れて動きを封じ込めた。

『あの力…一体』

手から電撃を発生させていた…そんなことできるなんて可笑しいと蟹に向いていた視線をあの子に戻すと…

「し、痺れ…て…る〜」

体から小さい電撃が何度が発生してるけど…恐らく…さつき床に手をつけてたから…自分も感電したのかな…

「何はともあれこれで動きは封じられたわ！一気に決める！ミストルテインの槍、発動！」

姉さんはあの子のことは後回しにして動きを封じたことにより、ミストルテインの槍を発動、それによって姉さんが持つ蒼流旋に霧纏ミステリアス・レイディの淑女のアクア・クリスタルから放出されている水のヴェールが蒼流旋に纏う

「これでえー！」

水を纏った蒼流旋を突き出しながら蟹に目掛けて突撃してミストルテインの槍を繰り出すととてつもない威力の一撃で蟹は吹き飛ばされて土煙が舞い、それが収まるとぐつたりとした蟹の姿が見えた。

『やったの…？』

何処かフラグのように聞こえるけど、次の瞬間、蟹の足元に魔法陣らしき物が出現し蟹は一瞬にして姿を消した。

「…消えた」

姉さんも突然のことで驚きを隠せないようではばらく固まっていたが、私の元に戻ってきた。

「取りあえず…何とかなつたわね…色々聞きたいことがあるけど…まだ終わりじゃなさそうね…」

あの蟹を倒したのに未だに異変は続いたまま…

「取りあえず、ここから離れましょう」

此処には危険と判断して姉さんが先導にこの場から離れよう

としたとき…

「っ！簪ちゃん！伏せて！」

姉さんがこつちを見て目を大きくして直ぐにこちらに駆けだして叫んだ。

私はそんなことに直ぐに反応できず、姉さんが見ている方向に向くと、空中に高速回転している何か…：そいつが私に向けて何かを無数に飛ばしてきた。

飛ばしてきたもの長細く尖っている…：もしかして針？

そんなことを考えている間にも針は迫ってくる。

「簪ちゃん！」

避けられないそう思ったその時、駆けつけていた姉さんが私と針の合間に入り私を覆い被すように立って…

針をその身に受けて私から守った。

「うっ…くっ！」

『お姉ちゃん！』

つい昔の呼び名に戻ったけど今は気にすることじゃない。

ISのシールドエネルギーが有るけど何本かはそれを貫通して絶対防御すらも貫通してお姉ちゃんの体に刺さりそこから血が出る。

針の攻撃が止まり、今一度、お姉ちゃんの容態を見ると背中には何本も針が刺さり、着ているISスーツは血で染まっている。

『お姉ちゃん…！お姉ちゃん！』

必死になってお姉ちゃんの名前を叫ぶ私…：もう既に気が動転して頭が回らない。

「かん…ぎし…：ちゃん…：逃げて…」

お姉ちゃんは苦しそうに私に逃げろと伝えるけど…：逃げれそうに無い。

お姉ちゃんがボロボロにやられたことにより、足が恐怖で震えて動けない…

そしてその化け物は私達の息の根を止めようと回転しながらこちらに迫ってくる。

迫り来る時を私はお姉ちゃんを必死に抱きしめて、迫ってくる怖さから目を瞑る。

そういえば…優希にリヴアイヴ…返さないと…
それに私が死んだら本音や優希も悲しむよね…

……

……

『生きたい』

生きたい…生きたいよ！

こんなところで死にたくない！

優希といっぱい遊んで…食べて…買い物に出かけて…これからも
ずっと優希と一緒にいたいのに…こんなところで終わるの？

助けて…都合が良いかもしれない…けど…だけど……優希…助け
て…!!

『優希!!!』

私のこれでもかという気持ちに乗せた声は辺りへと広がっていく。
それでも迫り来る化け物は迫り来ている音が聞こえていて…
涙が頬伝いもう諦めかけたその時…

「そんなに大声出さなくても…聞こえてるよ」
願
声は届いた

四十六話 『あの日見た背中』

「そんなに大声出さなくても…聞こえてるよ」

救い主の声が聞こえた後直ぐに何かにぶつかった衝撃音と今も続いている擦れる音が聞こえてくる。

しかし私の体には何ともないため、私は恐る恐る目を開けると…そこに映ったのは…

『あつ…』

私達の目の前に立つ優希の背中…左手を突き出し三角形のパープル色をした魔法陣のような物で化け物の攻撃を防いでいる。

一目見ただけでも異様な光景が広がっていて絶句しているが私は優希の右手に持っている物に気がつく。

『機械仕掛けの…槍…』

その槍には見覚えがある…

あの日何も出来なくて泣いていた私を颯爽と、現れて助けてくれた口の悪いヒーロー男の子…

そのヒーロー男の子が持っていた槍と優希が持つ槍は正しく瓜二つだ。

その時、私は優希とあのときのヒーロー男の子の影が合わさって見えた。

背中が大きさも衣服も違うけど…あの時見た背中が、全く同じように！

きつと…きつとそうなんだ…あの日…私を助けてくれたヒーロー男の子は…

「全く、待つてろって言ったのに…まあ…色々と探す手間が省けたけど…取り合えず…こいつが居るとまともに話せそうにないな…」

優希はこんな間近で化け物を防いでいるというのに取り乱している様子が無い…ううん、何処か馴れてるように見える。

「取り合えず…」

「ロードカートリッジ」

優希が何か仕掛けようとしているとどこからともなく声が聞こえる…

すると優希の持つ槍の束の先端がスライドして元に戻る。

でもスライドして戻るとき、スライドして見えた所に弾薬？らしき物が見えた…もしかして炸薬か何かなのかな？

「魔力刃形成」

直ぐに槍に変化が起きた、突然、槍の刃の間が窪むとパープル色のエネルギーで形成された刃が展開される。

これって…織斑一夏の白式と…同じ？

色々思うところはある中、そんなこと他所に優希は左手を更に強く突き出すと魔法陣も突き出すように動いて化け物を弾き飛ばす。

弾いたのを好機として優希は一気に飛び込み、化け物との間合いを詰めて槍を両手で持つ。

「臥龍…一閃！」

その掛け声とともに優希の鋭い一撃は放たれなすすべも無く当たり化け物は物凄い勢いで吹き飛ばされて壁を破り姿が見えなくなる。

さっきの一撃…威力からしてミストルティンの槍と同等の威力があるように見えた。

一撃を放った優希は少し息を吐くとそれと同時に槍も蒸気が排出する

どうして蒸気を排出するのだろうか…あの一撃を起こすために相当な熱が槍に籠もるからなのかな？

色々気になることが有るけど…あれだけの威力を軽々と…やつぱり優希は凄いな…

私は優希を尊敬の目で見てると優希はこちらに振り返る。

「簪、服屋で待ってるようにちゃんと言ったよな…俺は…」

何処か恨めしそうに私を見る優希

それもそのはず私は優希との約束を破って此処にいるから…でも後悔だけはしたくないな…

「…まあ、それで助けられた者もあつたみたいだから良いけど…」

先ほどまでの恨めしい顔は消えて、仕方がないと割り切った顔を見せる。

「マスター…少々よろしいでしょうか」

「どうした？…ロンギヌス」

少し間が空いた後、またどこからともなく声が聞こえてきて、すると優希は槍に目を向けて話し始めた。

でもロンギヌスって…

この前優希が寝ぼけて口走った名前と同じ…ということとは…

あの時は槍を持っていたということになる…一体あんなの何処に隠し持ってたんだろう…

そう言えば何か転がっている音がするような

「さっきの生物、三時の方向から接近しています」

そう槍が警告して私も優希もそちらに向く。

向いた方向からさっきの化け物が凄い速度で回転しながらこちらに近づいてくる。

「まさか、加速して来たのか…あれは受け止めるのはきついな…ロンギヌス」

「了解、シューティングフォーム起動」

迫り来る化け物を見て優希は未だに至って冷静に槍に声を掛ける
と意思疎通に優希の意図を組み取った槍が動き出す。

突然、槍の刀身が先端から左右に分かれて片方が少しだけ手前にスライドすると柄の長さが長くなりトリガーが付いたグリップが現れる。

シューティングフォーム…つまり射撃するってことだろうけど…
一体何なんだろう…私は思ったことを思わず口にした。

『優希…優希は何者なの…』

小さくて直ぐに掻き消されそうな小声…近くに居た優希は私の言葉に気づいて、少し考えた後、優希は話し始める。

「普通ならはぐらかす所だけど…」

「ロードカートリッジ」

「まあ強いて言うなら…」

「デイバイン」

「騎士だ」

「バスター」

そういつた直後優希はトリガーを引いて槍？の先端に貯まったエネルギーギョを前方に放つと見たこともない位のレーザー：そんなものじゃない得体の知れない砲撃が化け物を飲み込んだ。

その優希の後ろ姿を見ながら私は優希がいつた言葉を思い浮かべる。

騎士：

そんなのもうこの時代に居ないと思ってたけど：今の優希の姿を見ると正しく騎士そのものに見えた。

四十七話 『騎士…立つ』

優希SIDE

優希が簪達と合流する前…簪と一度別れたときまで遡る…

…

…

俺は簪と別れ、一人レゾナンスの通路を走りながら辺り見る

やはり人の子一人居ない…

いつもならロンギヌスのセンサーで生体反応を感知することも出来たがジャミングでセンサー…探知面が無力化されていて使えなくなっていた。

だからこそこうして地道ながらも目視での確認で主犯…もしくは結界に迷い込んだ人を探していたのだ。

「中々見つからないな…ロンギヌス、センサー類に変化は？」

「以前としてジャミングは継続中…」

『…そうか…』

取りあえず聞いてみようと思ってみたがやっぱりか…

敵は何故こんな世界にやってきて結界を張ったのだろうか…色々わからないことが多い…

こうなるのこれら諸々全部本人に聞く以外無さそうだな

『っ！』

俺は耳に微かな音を聞き取り一度足を止めて、音を殺しながら角に張り付き、ロンギヌスを起動する。

微かに聞こえた音は誰かが走る音…

巻きこまれた者か…それとも敵…

どちらにしても動いているものが居る…

近づいてくる足音に俺は息を殺してタイミングを待つと…直ぐ傍まで来たことより俺は角から飛び出してロンギヌスを相手の首筋に突きつけた。

『動くな…下手な動きをしたら…はあ!?!』

抵抗をさせまいと脅そうとしたその時俺は突き付けている人物を見て驚きの声を上げた。

「ゆ、優希！・リインは敵じゃ無いですう！味方ですう！」

『リイン!』

俺がロンギヌスを突きつけた人物の正体は妹のリインであり、予想外な人物に戸惑いを隠せない。

『どうしてここに…』

リインが地球にいる理由が全くわからない：何かしらの理由はあるとは思うが：リインがひとり地球に来るとはとても考えられない。

「え、えっと…ですね…」

何故かそこまで詰めよって聞いただして居るわけでも無いのにたじろいで目をそらしてくる。

『まあ、リインがひとりで来るわけ無いか：子供だし：母さんも一緒にだろ?』

「むー！リインは子供じゃないですよ〜！」

と小さい声で呟いた言葉に対してぶんぷんと可愛ながらも否定するリイン…

否定したとしても：年齢的にもまだ子供だろうけどな…

『取りあえず母さんはどこに居るの?』

今有る情報を整理したかったために母さんの居場所を聞こうとリインに訪ねた、何やら困ったことがあるのか顔色が優れない。

「はやてちゃんとは一度合流はしたのですが：巻き込んだ民間人をリインに任せて探索行っただけです」

『つまり：母さんの居場所は知らないと…』

「はいです」

と肯定と頷くリイン

しかし弱ったな…

術者タイプの母さんが単独で行動してるのも問題なんだけど…

…ん？リインに民間人？

『なあ、リイン、さつき民間人をつて言ってたけど…その肝心の民間人

は?』

普通ならラインと一緒に民間人がいても良いはずなのだが、その姿が何処にも見当たらない。

「え、えーつと…ですわね…」

おい何故そこで目を泳がせる。…まさか…

『…目を離れた際に何処か行ったのか?』

「うぐっ!」

凶星か…分かりやすいな…

『…はあ…取りあえず、一旦来た道に戻るか…簪を待たせるわけにも行かないからな』

「え!?簪さんも結界内に居るのですか!？」

取りあえず信頼できるラインが増えたこともあるから一度服屋に戻ってみることにしたが簪の名前を出したことからラインが反応する。

『ああ、巻きこまれてた時は本当に驚いた』

結界に簪までも取り込んだときのことを頭の中で思い浮かべながら率直な感想を述べるとラインと一緒に服屋にへと向かい始める。

「そういうえば…簪さんって専用機がまだ完成されてないのですよね…一人にするのは些か危険な気が…」

『取りあえず、簪には俺のリヴァイヴを渡してはある』

自衛程度にと渡してあるためにそこまで危険は無いと言い切る俺しかし、不安が無いわけでは無い…何もなければ良いが…

…

…

『くそ…何処に行ったんだ!?!』

服屋に戻ってきた俺達、しかし簪を隠していた試着室の中には誰もいない

俺は辺りを見渡すが簪はおらず、それに立ち並んでいる服等の乱れを見る限り連れさらわれたりはおらず自分からでいったとする推

測した。

『そんな遠くには行っていないはずだが…』

時間からしても差ほど経過しているわけでは無い…つまりこの辺りに居る可能性が高いと結論付けると近場から大きい音が聞こえてきた。

『音?!これは爆発音!!』

こんなモールで爆発音なんてあり得ないことだ…つまりは…戦闘!

『くそー!』

俺は簪がもしかしたら爆発があった場所に居るのではと嫌な予感を思いながら戦闘がある場所に向かって走る。

「ま、待つですよ〜」

後ろからリインが待つと懇願するが無視…そんな余裕は無い。

急いで現場へと急行する俺が着実に近づいていると…

「優希!!!」

『っ!簪!』

今のは簪の声だ、声からして危機が迫っていて俺に助けを求めているのがわかる。

声から正確な場所はわかった。俺は足に力を入れて落下防止の柵を越えると簪達の状況を確認することが出来た。

背中に何本か針が刺さって怪我を負っている更識さん…その更識さんを必死に守ろうと抱きしめている簪…後…少し離れたところに何故か気絶している民間人が一人…

何より、危険視するのは今簪達に回転しながら迫ってきている…多分ハリネズミ

あのままだと簪達は死んでしまう…ならばやることは一つだ。

「ロードカートリッジ」

1階に降りながら俺の意志を組み取るようにロンギヌスがカートリッジを1発消費

そして1階に降り立つと直ぐに動いて簪達の前に立つと左手を突き出してラウンドシールドを展開した。

『そんなに大声出さなくても…聞こえてるよ』

簪を安心させるために優しく声をかける。

そしてハリネズミの突撃は俺のラウンドシールドにぶつかり衝撃音と擦れる音が室内に響き渡った。

四十八話 『一時の安息』

デイバインバスターでハリネズミを吹っ飛ばし、カートリッジも内蔵されている4発全て使ったことで自動でロンギヌスがカートリッジを排出する。

さて、何とか危険な状況を脱したは良いが色々と問題がある

まず俺のことをまじまじと見てる簪

すでに無意識下でリヴァイヴを解除したようだ：まあそれは置いておいて：

さっきの光景はばつちりと見られてるわけで：ちやんと説明しないといけない。

二つ目、更識さんの容体

こつちも簪と同様見られてはいるがさっきのハリネズミの攻撃で怪我を負ってる：放っておけば大事に繋がることもあり得る。

三つ目：何故か倒れてる女の子：

俺が来たときにはこうなってたけど：何で気絶してるんだ？よく見れば微弱ながら体中から電気も走ってるし：

でもまず優先すべきなのは：

『更識さんの容体か』

一番に怪我をしてる更識さんに駆け寄り、具合を見る。

何本かハリネズミの針が刺さっているが傷口からは血があまり流れ出て居る様子は無い：運良く大きめの血管を傷つけてはいないようだ。

だけど針を抜こうにも傷を塞ぐ手立てが：俺、治癒魔法は使えないし：

どうするか頭で考えていると2階から俺と同じく柵を飛び越える影が視界に移る。

『っー！』

咄嗟にロンギヌスを構えて臨戦態勢を取るが誰が降りてきたのかを確認すると構えを解いた。

「優希！リインは待ってっていったですよ！」

『緊急だった仕方ないだろう…リイン』

俺の後を追いかけていたリインがいつの間にかバリアジャケットを装着し置いて行かれたことに腹を立てて、頬膨らませてゆっくりと降りてきた。

『それより、リイン、こつちに来てくれ、一人怪我を負ってるから治療して欲しい』

「…っ！更識さんですね！もう勝手に何処かに行つてリインは心配したんですよ！」

と今の言葉から察するに居なくなつた民間人つて更識さんのことだつたのね…

『今から針を抜く、リインは応急治療、頼むぞ』

「わかつたです！」

とリインも頷くと俺は更識さんに刺さつてる針に手に持つ。

『更識さん先に行つておきますけど…多少は痛いですから我慢してくださいよ』

「分かつたわ…なるべく…お願いね…」

多分、早くと痛くしないでの二つの意味合いがあるのだろうと…そう思いながら俺はゆっくりと更識さんの背中に刺さっている針を抜き始めた。

「っ！くうっ！！」

「お姉ちゃん！」

やつぱり麻酔なしだと激痛に顔を歪めるのは致し方ないか…

痛がる更識さんを見て簪が心配で声をかける所を見ると抜いてる俺も心苦しいんだが…

そんな心苦しさに精神的に磨り減りながらも時間をかけて全ての針を抜き取つた。

『リイン、頼む』

「はいですよ！」

俺が出来るのはここまで…そう思つて更識さんから離れると交替でリインが近づき治療魔法で背中傷を癒やしていく。

『リインはそのまま更識さんを頼む俺はもう一人の倒れてる女の子の』

容体を見てくる』

「わかったですよ」

と更識さんをリインに任せて俺は女の子の元に駆け寄り体の状態を見る。

やっぱり体中に電気を微弱だが走ってる…ここは俺より前に居た簪に聞くのが先決か。

『簪！』

「な、何!？」

いきなり呼ばれたことで驚くなか、こつちに駆け寄つてくると俺は話を続ける。

『この子、体中に微弱の電気を帯びてるんだが何か知らないか?』

「えつと…あの化け物と戦う前に巨大な蟹の化け物と戦つてて…その時蟹の足を止めるためにこの子が右手から電撃を使つて…その時一緒に感電してたよ」

『右手から…電気ね…雷撃の魔力変換持ちか…』

……何というか…こうなつたのは自滅だということがよく分かった

普通なら自分の体に対電撃用のフィールド魔法をかけるのが普通なのだがそれをせずになると、感電するということはレアスキルの有無なしでも見習い魔導師なら知つていること…この子もしかして…この力のことを魔法のことをよく知らないようだな…

「魔力…変換?」

『ああ、別に気にすることじゃない』

気になるのか俺が口に零したことを聞こうとしたが上手く話をはぐらかす…出来れば言いたくないからな…

『取りあえず、直に目を覚ます……更識さんもリインに治療を任せれば良いし…少し羽を休められるか…』

そういつてレゾナンスの支柱に背中をもたれて先程装填させていたカートリッジを全て使い切つたためにロンギヌスのストレージから魔力が込められているカートリッジをロンギヌスに装填し直す。

「…ねえ優希…」

一息付けたところで簪がとなりに座り込むと話しかけてくる。

「その…優希のその力は何？それにきつき騎士だって…」

やっぱり色々と聞きたいようでグイグイと押して質問してくる。

さてと…どうしたものか……

ここまで来たら話さないと行けないのは絶対だ…しかし…次元世界のことや管理局のことを話しても信用してくれるかどうか…

やっぱり話すことと隠すこととどこかで線引きすべきかな…

「優希…こっちは更識さんの治療終わりましたよ」

簪にどう言えば良いかと考えていると手を振って治療を終えたことを知らせるリイン…

簪も視線がリイン達に向いているために今ははぐらかしておこう

そんな俺の考えなど他所にリインと何とか危ない足取りだが更識さんもこちらに近づいてくる。

『お疲れ、リイン…さてとこれからどう動くか…』

今は一息付けてるが次の行動をどうするかも、しっかりと決めておかなければならないと思いを回すと突如上空から天井のガラス窓を突き破って何かが落ちてきた。

『くそーもう少し休ませろって！』

何かの落下により土煙が舞う中俺は座っていた体を立たせて前に出てロングヌスを構えると土煙が晴れてそこには人型をした体長二メートル半、そして体はムキムキマッチョで頭には凜々しい一角の角が生えている。

『おいおい…蟹…ハリネズミ…今度はカブトムシか』

カブトムシのような茶色を強調する体を持ったそいつは腕を組んで二つの赤い眼光で俺達を見下ろすのであった。

NOSIDE

レゾナンス上空…そこでは今回の主犯である人物はサーチャーで映し出されている優希達の映像を見ていた。

「召喚獣、ヘラクレストの投下を確認…勝率は六割と推定…」

と機械のように坦々と言葉を出す人物に黒翼を羽ばたかせる女性
がやってきた。

「漸く見つけたよ……こちら時空管理局です……管理外世界での魔法の使
用は禁止されています。そのため少し……同行してもらいましょうか」

と黒翼の女性……はやては自然にシユベルトクロイツに力を入れ
て構えると、謎の人物は警告を無視して臨戦態勢を取ると両腕を隠し
ている黒フードの部分が弾け飛び両腕からトンファーにも似たブ
レードが展開される。

「っ！機械の両腕?!……どうやら普通の人間やないな……あんたは」

両腕からでた刃を見て普通では無いと踏み、はやても臨戦態勢を取
り相手の出方を見極めるのであった。

四十九話 『別次元の領域』

謎の人物により召喚されたハリネズミを撃破しほんのわずかな安息な時を過ごした優希達であったが、カブトムシのような二足歩行する召喚獣が優希達の前に現れる。

「リイン、簪達を頼む」

簪達の前に守るようにロンギヌスを構えて立つ、優希はリインに真剣な表情で頼む。

「優希！」

一人で戦おうとしているのを見て簪も前にへと出ようとするが優希に頼まれていたリインが簪を静止する。

「大丈夫です、優希は簡単にやられるような人じゃ無いですよ」

冷静に述べられるリインの言葉に簪は確かに正論だと押し黙るしかなかった。

「さてと…感じからさっきの奴とは別格だ…」

楯無のミストルテインの槍で倒した蟹

優希がデイバインバスターで吹き飛ばしたハリネズミ、これら二つの魔力生物とは比べものにならないほどの風格を持ち合わせ、優希も身体強化しかしていないことで相手にするのはきついと判断する。

「ロンギヌス、バリアジャケットを」

「了解、バリアジャケット、セットアップ」

優希はロンギヌスに一言を言うのと優希が来ている私服からバリアジャケットにへと変化する。

「…ふう…」

バリアジャケットを身につけると構えながら一度、空気を吐くと優希は相手の出方を伺う。

両者一步も動かずに二分ほど膠着状態が続き、ヘラクレストの指が微動だに動いた瞬間事態は動き始めた。

先に動いたのはヘラクレストで、足に力を入れて飛び出すと物凄い瞬発力で優希との距離を詰め寄せて右腕を引いて優希の目の前に来ると引いていた右腕を優希目掛けて一気に突き出しその威力は優希

のいる床をひび割れて床の破片が辺りへと飛び散った。

「優希ーいやああああっ!!」

一瞬で優希のいた場所にあれほどの重い一撃を繰り出されたことで簀は悲鳴を上げて叫ぶ。

「いいえ、優希は大丈夫です、ちゃんと避けてます」

隣にいるリインは取り乱すこと無く冷静に優希が攻撃を避けたことを伝えると、簀は信じられないかと思いつながら目をこらして見ると床がひび割れたことで土煙が舞う中、ヘラクレストの背中の左側、高速魔法で先の一撃を避け低い姿勢でヘラクレストを狙う優希の姿が微かに見えた。

「はあああっ!」

背後を取った優希はロンギヌスを切り上げるが直ぐに察知したヘラクレストはステップの要領で前に出ると切り上げていたロンギヌスの刃は空振りに終わり、前に出たヘラクレスト、前に出た後に前のめりになって両腕を床に付けると腕を力で体を飛び上がらせて、空中で方向転換するとそのまま優希目掛けて前宙返りしながら踵落としを繰り出す。

「っ!」

避けた後いきなり攻撃に転じることを予測して回避行動をしていた優希は後ろに飛び踵落としを避けると同時に左手を右肩辺りに移動させると左手の指の合間に10cmほどの銀色の短剣が三つ生成される。

「シルバーダガー」

「これで!」

銀の短剣…シルバーダガーをヘラクレスト目掛けて投げつけ、シルバーダガーはまっすぐにヘラクレストの着地点に迫るも着地したヘラクレストはシルバーダガーを右腕で大きく振りかぶり三本とも弾き飛ばした。

「本命は……」

「『ダイバイン』」

「こっちだ!」

「バスター」

優希はシルバードガーをヘラクレストの動きを止める陽動として使い、足を止めている間にロンギヌスをシューティングフォームへと切り替え、カートトリッジを2発ロードすると、使用したカートトリッジの魔力を使ってデイバインバスターのチャージを短縮しチャージが完了するとトリガー引いて砲撃を放つ。

迫り来る砲撃を前にヘラクレストは避けること無く足に踏ん張りを入れて腰を使って拳を砲撃に向けて突き出し優希のデイバインバスターを相殺する。

「砲撃を相殺した！やっぱりこいつ並みの召喚獣じゃないな…」

「まだ始まったばかりです、いきましようマスター」

「ああ、もちろんだ！」

ヘラクレストの強さを再確認し気合いを入れ直しヘラクレストに仕掛ける優希

その優希とヘラクレストとの戦いを離れた場所から見ると簪は既にあまりの光景に言葉を失っていた。

あまりにも次元が違いすぎる攻防：少なからずISが最強の兵器だという認識を持っていたがこれを見てはそんな定義を粉々に碎かれた気分に見舞われる。

「あの召喚獣…侮れませんね…優希も本気で打ち合ってるのに…中々クリーンヒットしません」

ことなを失っている2人を他所にリインは至って冷静にこの戦いを分析しており、それを気にした楯無はリインに声を掛けた。

「あなた…八神優希の家族なんでしょ？助けに行かなくて良いの？」

「助けたいのは山々ですが…リインでもあれに踏み込むのは危険なのです…それにリインは優希から皆さんを任せられましたから」

と自分には荷が重いと重いながらも優希の言われたとおり、簪達を守る自分が出来ることだと言い切る。

「それに…優希は本気を出してますがまだ手の内を明かしてはいないのですよ」

と余裕に笑みを浮かべるリインに2人は首を傾げたとき、自滅して

気絶していた女の子が漸く目を覚ました。

「ふえ？え？なに!?何あの万国吃驚ショーみたいな光景は!？」

目を覚まして見た者が人外と思える光景なら此処まで驚いても致し方はないだろう……と苦笑いを浮かべながらリインは女の子に優しく声を掛けた。

「目が覚めたのですね」

「え？は、はい」

「今から見ることちゃん和您と見ていてくださいね……きつとあなたにとって有意義な物が見れますから」

「は、はい?..」

突然そんなことを言われてもわからないと女の子は首を傾げるがリインは何も言わずニコニコと笑みを浮かべるだけだった。

五十話『凍結』

既に優希とヘラクレストとの攻防戦が続いて数分が経過した。

両者、隙あればと打ち込んでくるが中々決めてとなる一撃は入らず時間だけが過ぎていた。

《そろそろ……一発入れたいところだな……》

そう考える優希だが、それを行うのは至難の業だ。

《……そろそろ……あれも使って行った方が良いかもな》

そう、まだ奥の手があるのか……使うか使わないかを頭の中で思考し、その答えを直ぐに導き出す。

「おりゃあああつー！」

優希は考えを纏めるとロンギヌスを強く横に空振り、土煙を舞わせるとそれにより周りから優希の姿が煙の中に消える。

「目眩まし……優希は仕掛けるみたいですね」

離れたところから見るとリイン達も優希の姿は確認できなくなり簪の中には不安と心配で胸を締め付けるような感覚に陥る中、ヘラクレストは土煙のなか至って冷静で次の瞬間右腕を大きく振り回すとその風圧で土煙を乱す。

乱した土煙の合間から優希の姿が見えて、それをヘラクレストにしっかりと見られる。

「優希……」

簪も優希が発見されたことで叫ぶがもう遅い

既に視認した着後からヘラクレストは優希に迫りすでに拳を振り落としていた

既に目の前に迫っていた拳に優希は何も出来ずその拳は優希の腹へと直撃した。

「あつー！」

直撃したことで簪は目を大きくして短い悲鳴を上げる。

ヘラクレストの拳に直撃した優希は腹に拳めり込み体がくの字に曲がり……そして……

体が氷のように砕け散った。

「え？砕……けた？」

優希がただ砕けたことに目を丸くして驚く簪

それもそのはず、普通なら人間粉々に砕けるなどあり得ないこと

……しかも血も一滴も出ていない

アイシクルシフト
「氷結分身」

どうなっているのか3人は唾然としている中、リインが知っているのか技名を呟いた。

アイシクルシフト
「氷結分身？」

「はい、優希の数少ないサポート系の技です、自らの力で氷の分身体を作り敵を攪乱する……ティアナのフェイクシフトを優希がアレンジして生み出した技なんです」

坦々と説明するリインだがどういう原理でそうなっているのかわからず三人とも首を傾げた。

「あの……そんな……生身の人があんな離れ技を使えるのでしょうか」

そう質問したのはこの中でまだ名前が明かされていない女の子……そう質問するとリイン達は女の子に何か言いたげな表情で見つめた。

「あなたがそれを言う？」

「普通に手から電撃使ってましたよね？」

「はうっ！」

完全に凶星、楯無と簪に的確に指摘されて何も言えなくなった。

「まあまあ、えつと……あなたが電撃を使えるように優希は氷……凍結の素質を持つてるのですよ、因みにリインも凍結の素質を持つてるですよ」

凶星で何も言えない女の子にリインは柔やかにフォローを入れる。

「……色々と聞きたいことがあるけど……それなら本当の優希は？」

簪は色々と聞きたいことが多くなる中その欲求を抑えて本当の優希がどこにいるのかと聞くとリインは自分の予測を述べた。

「そうですね……リインの予想ですが……あの召喚獣の背後だと思

ますよ」

とリインが予測したとおり背後の土煙の中から優希がヘラクレストの背後を目掛けて飛び出してくる。

「ロンギヌス！」

「ロードカートリッジ」

背後を取った好機と優希はロンギヌスに込められている残りのカートリッジ2発をロードして魔力刃を生成するがハリネズミで見た時とは少し違っていた。

魔力刃の周囲に目視できるほどの冷気が発生していて気になった簪達は自然とリインに目を向けた。

「あれは凍結の能力を自身の武装に纏わせているのですよ…属性の変換素質があるならあれぐらい出来て当然です」

と軽く言うリインに女の子は自身の手を見て思い詰める。

自分は電撃を意のままに出せるのがやっとなのに優希はそれを見自在に攻撃やサポートなどに応用している。自分は何と狭い世界を見ていたのだろうか…

《私もいつかああいう風に使ってみたいな…》

そんな女の子の考えを他所にヘラクレストの背後を取った優希はロンギヌスの射程内に入ると叫びと共にロンギヌスを振るった。

「氷華…一閃！」

振るった優希の一撃は方向転換していたヘラクレストの右肩から胸へと一線に切り裂き、ヘラクレストは受けた衝撃で後ろに押されて下がった。

優希に切り裂かれた場所は優希の力で凍りついておりそれによりヘラクレストの動きを先ほどより鈍くなった。

「まず一撃……」

漸く良い一撃を入れられたと笑みを浮かべているとヘラクレストの足元から魔法陣が展開され…瞬く間にヘラクレストはこの場から消えた。

「消えた!?!」

「転移？撤退したのでしょか…」

消えたことに驚く楯無、ラインは転移したことを見て召喚士が撤退したのかと考えた。

突然起きたこの戦い…その終わりは目の前まで迫っていた。

五十一話 『序曲の終わり』

優希とヘラクレストの戦いはヘラクレストが突然の転移されたことで終わった同時刻、レゾナンス上空では、はやてと召喚士が飛び交っていた。

「中々、わたしの距離に持っていきへんな」

完全な詠唱系のはやてにとつて接近戦に持ち込まれるということ
は詠唱の暇が無く詠唱していても、やもえず、詠唱破棄することもあるほどだ。

対して召喚士の方も気味が悪いほどに積極的に攻めてこない。

そのため地上での戦い同様、戦いは均衡状態が続いていた。

「……………任務……………失敗……………ヘラクレストの送還を確認これより撤退する」

黙っていた召喚士の口から作戦の失敗というはやてには朗報の情報を耳にする。

《あつちは優希とリインが何とかやってくれたみたいやな…けど逃がすわけにはいかんな!》

敵の撤退には地上で戦う優希が要因であろうと推測するはやては、目の前にいる敵を逃すわけには行かないと魔法陣を展開する。

「くらい!クラウ・ソラス!」

と名を叫ぶと白い直射の砲撃が召喚士目掛けて放たれるが直撃する直後、召喚士の転移魔法が先に発動してクラウ・ソラスは空振りに終わった。

「…逃げられてもうた……………」

転移されてしまったのを確認した後ははやてはシユベルトクロイツを構えるのを解いて、上を向いた。

はやての上には結界が広がっていて、少しずつ結界が消えていつて居るのがわかった。

「…結界は消えるみたいやな……………まだジャミングは効いとるみたいやし…優希達とは連絡はまだ取れそうにないな…」

まだ辺りにはジャミングの粒子が舞っていることから優希との通

信であちらの状況がわからないことを不安に思いながら、はやては上空にて他に何かないかと周囲を警戒するのであった。

優希 S I D E

突然起きた召喚された魔力生物の襲撃：民間人の簪達まで巻きこんだ今回の一件：大元の召喚士の姿が見えないのが気がかりではあるが…

「優希！上を見るのですよ！」

とリインが大きく声を上げて俺も釣られて空を見ると結界が薄れていつている。

『これは…母さんか？』

結界が解除されていくのを見て母さんがひとりで解除したのかと推測しながら、結界解除後のことを考えて俺はロンギヌスを待機状態に戻しバリアジャケットを解除した。

結界解除されてまわりに魔導師としての俺を見られたくはないからな

『取りあえず結界が解除されるみたいだ』

取りあえずこのことを何も知らない簪にこのことを話すと、簪は此処から出られることに笑みを浮かべ、更識さんはほっとした表情を見せた。

「取りあえずもうすぐ元通りになるのね…それにしても壊れた建物とかはどうなるのかしら？」

元に戻ることにはほっとしていると、壊れた床などを見て結界が解除されればどうなるか訪ねてくる。

「問題ないですよ、結界が張られる前と同じ状況ですう」

俺が口にする前に聞いていたリインが更識さんに言うのと更にほっとした表情を見せた。

まあ確かに結界が解除されてもボロボロだと色々問題になるからな…

「ねえ…優希…ちゃんと…説明…してくれ…よね？」

すると更識さんの隣にいる簪が不安そうな目でこちらの出方を伺

い、俺は少し考えてから答える。

『大丈夫、ちゃんと話すよ』

そう言うと言はわかったと頷いた。

『そろそろ結界が解除されるぞ』

次の瞬間、レゾナンスを覆っていた結界は消え去り、そして、辺りには何も知らない人達が往来をしていた。

辺りを見渡しても壊れているところは見受けられない

後は母さんとも合流するだけだな

そう思いながら俺は簪たちのもとへ歩き寄った。

五十二話 『ありがとう』

突然、起きた今回の事件、敵の目的は判らなかつたが簪達を救えることは出来た。

でこれで解散…とはいかないわけで、少し前に漸く念話が出来るようになったために何処かにいる母さんを念話で呼び出し俺達は手頃な休憩所に羽を休めていた。

『更識さん、体…大丈夫ですか?』

『全然…大丈夫に思える?』

休憩できる椅子に座り、この中で怪我を負っていた更識さんに体は大丈夫か聞いてみるけどそのまま質問を質問でかえされて、言われたとおり止血はされているが体中痛いのは変わらないため明らかに大丈夫には見えず苦い笑みを浮かべた

『見えないですね』

『よろしい』

そう更識さんは扇子で口元を隠しながら当然と言わんばかりの顔をする。

「あっ…来ましたよ」

とリインが声を上げてリインの視線の先を俺達は見ると小走りながらもこちらに近づいてくる母さんの姿があつた。

「ごめん、お待たせや〜」

「はやてちゃん、遅いですよ〜」

「いや〜局に連絡入れるのに少し手間取つてな〜」

と遅かつたことに少し頬膨らませるリインに、母さんはやんわりと理由を述べた。

「あの人が優希のお母さん…若い人だな…」

と後ろにいる簪がそう呟いているのに気づき、俺は簪の方に振り向き、簪に話しかける。

『若いというか…母さんまだ23だぞ』

「…え?」

母さんの年齢を述べると急に固まる簪…いや更識さんに女の子も

固まっていた…そして…

「2、23才!?ちよつとまって!?優希は15だからつまり…8才しか変わらないの!」

「確かに若いとは思ってたけどあり得ないわ!ちゃんと説明してくれるかしら?八神くん?」

「ほえ、あなたたつてできちゃった婚の子供なの」

それぞれ詰めよって問い詰めてくる三人…なんか一人だけ明らかに違った気がするが…まあいいか…

「あれ?優希いつとらんかったんか?私と優希は親子やけど養子やで」

『いや、まあ家族のことは余り話さなかったからな』

思い返しても家族関係の話は簪にしたこともない…というかこんなところで合うとも思つてなかったわけ…

「そんなの一言も聞いてない」

と恨めしそうに見てくる簪…ほんとうすまん…

「まあそういうんは置いてお話の方なんやけど…」

漸く本題に入りそうになったけど、なぜが申し訳なさそうな、顔つきをしている。

「えつと、これから…組織の本部に戻らなあんのや…そやから…明日きつちり説明するさかい」

と両手を合わせて少し頭を下げる母さん…まあ地球でこんな事件起きたら招集されないわけが無いわな…

『てことは…俺も呼び出し?』

「優希はそのままであえよ、でも今日のことはきつちりとまとめて送つてな」

『了解』

「ほんなら、明日場所は…海鳴市の翠屋午後2時頃に集合、これでどうや?」

と母さんは少し考えて明日の集合時間と場所を言うと全員予定も無かったことから頷いた。

「さてと、それじゃあ優希、ちゃんと簪ちゃんと楯無ちゃんを送るんや

で…もしかしたらまた襲ってくるかもしれない…私とリインはこの子を…：そういえば名前聞いたらんかったな」

「は、はい、神崎奏です」

「神崎ちゃんやな、ほんなら神崎ちゃん連れていくな」

「ま、待ってー!」

と言つて母さんは神崎さんと一緒に別れようとするも簪が声を上げてそれを止めた。

『簪?』

「あの八神さんその…少し聞きたいことがあるんです…大丈夫ですか?」

「うん、ええよ…：なんや?」

俺じやなく母さんに聞きたいこと?何のことだろう?

「五年程前…：私、誘拐にあつてその時、多分優希だと思うんですけど…助けられたんです…」

『五年…前…』

誘拐、簪に似た女の子、そして五年前…

やばい、ものすごく身に覚えがある。もしかすると…：いや確実にあのことを指摘している。

「五年前…：それやと…：優希が丁度グレとつたときかな?」

「あの時ですか…：優希に見覚えは?」

『…：…』

母さんが記憶の奥底から五年前の俺のことを思い出し、同じくリインも覚えていたために俺に訪ねるがどう言えば良いか分からずに押し黙る。

「優希?」

そう首を傾げて俺の名前を呼ぶ簪…：このまま黙っていても拉致があかない…

『ああ、仕方ない…：簪、こっち』

俺は腹を括り簪の手を持つと簪を引っ張つて母さん達から離れていく。

そして辿り着いたのは人気のない裏路地、そこで俺は掴んでいた簪

の手を離すと、少し小恥ずかしそうに頬かいて話し始める

『その…簪って…やっぱり昔に出会った…女の子…なんだな?』

聞いて違うと言われれば少しショックだなと思いつながら恐る恐る訪ねた。

「……………っ!」

訪ねると簪は無言のまま俺に抱きついてきた。

『簪!?!』

いきなりのごとで戸惑う俺だが簪はそんなことお構いなしに話しかけてくる。

「警察が来たときにはもういなくなって…:…ちゃんとお礼も出来なかった…:…だからこれだけは言わせて」

五年…五年も言いたかった言葉、漸く言える日が来たからか簪は柔やかな笑みを浮かべ短い言葉なれど俺に伝わるに十分な言葉だった
「助けてくれて…:…ありがとう優希」

偶然にも交差していた優希と簪の道…:今再び交差する。

五十三話 『簪の決意』

戦いが終わって簪と本当の意味で五年前ぶりに再会を果たした俺達

そして裏路地から出た後母さん達がいる場所に戻り、そこで二手に別れた。

…戻ったとき何故か母さんと更識さんが息が荒かったけど…気にすることではないか。

そして電車に乗ってIS学園へと戻って来た俺達はゆっくりなペースで寮へと向かっていく。

『何だろう今日一日でどつと疲れたような気がする……』

本来なら楽しく終わる予定がいきなりの襲撃……簪達にも色々とバレてしまったのもあるだろう……

それに結局何で母さん達がいたんだろうか……その理由聞けてないんだよな……明日聞いてみるか

「……………」

「……………」

……無言の姉妹……

二手に別れてからというもの一向に話し合えない簪と更識さん……昔何かあったのは明確なんだろうけど……何か話そうよ……場の空気が……

「それじゃあ……私はあっちだから」

と更識さんは何か学園に用があるのか学園へと続く道を指さして向かおうとする。

『あの大丈夫ですか？良ければ付いていっても……』

「いいわよ、そんなことしたら……誰かさんが拗ねちやいそうだし」

俺は更識さんの体のことを心配して声を掛けると更識さんは首を横に振って断り、更識さんの言葉を聞いた簪は少し頬を赤くする。

『あの更識さん、今回のことは……』

「わかってるわよ、内密にでしょ？」

今回のことに釘を刺すと更識さんもわかりきっていることからす

ぐに了承した。

そして臆ながらもゆつくりとした足取りで学園へと向かっていく更識さん、そんな背中を簪が見ていると、何か言いたいことがあるのか迷ってる表情を見せた。

『…簪、思い切って言ってみるものもあるぞ』

「っ！優希…ありがとう…姉さん！」

俺はそれを見て簪の後ろを押し、簪は俺にありがとうと述べると歩いて行っている更識さん呼び止めるために名前を叫んだ。

「うえっ!」

叫ばれたことから予想していなかった更識さんはヘンな声を上げて体制を崩して前のめりに転けた。

って冷静に見てる場合じゃねえ！

「姉さん!」

『更識さん!大丈夫!』

「だ、大丈夫よ…それで何の用かしら…」

俺と簪は心配して急いで更識さんのもとへ駆け寄り声を掛けると更識さんはゆつくりしながらおでこを右手で抑えながら痛かったのか涙目で起き上がる

「う、うん…姉さん今月の末…クラス代表戦…もし私が優勝したら…姉さんと戦いたい生徒会長だからとか関係なく姉妹として…」

『簪…』

簪の目は本気だ、きっと悩んだ末にそういう答えを導き出したんだ

…

対する更識さんも真剣な表情…少し考えた後考えが纏まったのかゆつくりと口を開ける。

「いいわ、相手になってあげる、けどそのためにも打鉄式を完成させる必要があるわよ」

「やるよ、必ず完成させて優勝する、今の私は一人じゃないから」

受けて立つ姿勢をとる更識さんに、簪も堂々とした振る舞いでそれを答える。

『なら俺も最大限、やれることをやることにするよ』

その簪の姿勢に答えるように改めて協力をすると述べて、そして更識さんはその日が来ることを思って笑みを浮かべながらゆつくりと学園の方へと向かっていった。

……

……

「ひつく…ぐつず…」

「お、落ち着いてくださいますし…こういうときはどうすれば…」

…え？なにこれ…

ありのままの状況を説明する。

漸く、寮に戻ってきた俺達は寮内に入って自分達の部屋に戻ろうと廊下を歩いていたんだけど、途中で蹲って泣いている鈴に偶然通りかかりどうすればいいか分からずあたふたしているセシリアがいた。

取りあえず、無視は出来ないので…

「えつと…大丈夫か？」

いや、まあ鈴は大丈夫ではないだろうけど一応は声を掛けておかないとな

「優希さん！丁度良かったですわ、凰さんが泣いておられましたのでどうすればいいか…」

俺の声に気づいたセシリアが藁にすがる気持ちで頼ってくる。

此処にいてもあれだし…

『取りあえず…俺達の部屋に入ろう、そこで話を聞くからさ』

まずは落ち着くことを第一にして俺達はセシリアと鈴と共に部屋の中へと入っていくのであった。

五十四話 『仲違いと協定成立!』

「……」

取りあえずかなり落ち込んでる鈴とそれに付き添っていたセシリアを部屋に入れたけど、先ずはコーヒーでも出すか

『好きなところ座っててくれ、俺はコーヒーを入れるから』

そういつて俺は台所に立ってインスタントのコーヒーをカップに注いでいく。

四つのカップに注いだ後、乗せたトレイを持って簪達の元へと歩いていく。

『ほい、お待たせ、これ飲んで少し落ちつけ……砂糖とミルクはここに置いておくから』

そういつて、俺は鈴達にコーヒーを渡して俺も話を聞けるように椅子に座って鈴の話しを聞く体制になる。

「……実は……」

……

……

『織斑が鈴とした約束を忘れてた!』

何が来るかと思えば約束を忘れてたというよくある出来事……でもまあ内容によるものもあるからなんとも言えないが……

「中学の頃、中国に帰国しないと行けなくなって……その時、一夏に告つたのよ、私の料理が上手くなったら毎日私の酢豚を食べてくれる?」
て」

「それって……」

簪も告白だと直ぐにわかり顔を赤くする……それいうのってかなり勇気がいるだろうな

「そしたらあいつは……」

と鈴がその時のことを思い出してるのか思い出し怒りで腕に力が入って震えている……一体何があつたらそんなことになるのか……

「タダ飯食べさせてくれる、って思ってたのよ！そんなこと言われたら怒りたくもなるわよ！」

「……………よく分かった……………明らかにあいつが悪い」

「何ですの!?!それは凰さんが必死になって仰った告白をそのような解釈で受け取るなんて……………」

「織斑一夏……………乙女の純情をなんとも思っていない」

鈴の怒りに飛び火するようにセシリアと簪の怒りの炎にも着火、そりゃあそんな話したら万国共通で女子の頭には来るだろう……………いや男としても頭にくるな……………実質俺もだし

「それで、凰さんは織斑さんをどうするおつもりで?」

「鈴で良いわ、取りあえず、あの分からず屋のバカ一夏をぶつとばさないと気が済まないからクラス代表戦で一夏をぶつとばす」

と具体的な報復を述べるが…クラス代表戦ね

「待って!凰さん、「鈴で良いわよ」……………うん、鈴の怒る理由も分かるけどクラス代表戦、私も織斑一夏には色々と晴らしたいことがあるから……………」

と敵は同じでも自分の手でやりたいと簪も織斑には色々と借りがあるために鈴の怒りを理解しているも簡単には引き下がることをしない。

「あんたも一夏になんかされたわけ?昨日もあいつのこと相当毛嫌ってたみたいだけど」

「……………うん織斑一夏は……………」

鈴は昨日の食堂でのことを思い出しながらも織斑を嫌っている理由を訪ねると、簪は打鉄式式の話語り出した。

「ということなの……………」

「なるほどね……………倉持技研の奴ら……………」

「あんまりですわ!もうこれは訴えてるべきです」

打鉄式式をほったらかしにした上に中身が不良品というおまけ付き……………まあ普通に訴えられる要素が満載何だよな

「取りあえず、クラス代表戦で、織斑一夏と戦って倉持技研に私達が組み上げた打鉄式式の力を見せつける」

それが騒がず、周りにも迷惑が掛からない方法だろう。

『……取りあえず、クラス代表戦は二人とも織斑とは戦いたい、そういうことだな……けどクラス代表戦はトーナメント式だから……どつちかが先に当たるかもしれないし、もしかしたら初戦で簪と鈴が戦うかもしれない……』

「優希がいたいということはどちらかは織斑一夏と戦えないかもしれないから恨みっこなし……ってことだよね」

「早い者勝ちってことね、良いわ」

どちみち総当たりではないために織斑と戦う確率は絶対とは言えない、だからこそどちらかが戦って勝ったとしても恨みっこなしと二人に聞くと、嫌な顔ひとつせずはこの話に乗った。

『それじゃあ、お互い織斑を倒すために頑張っていこう！』

「うん！」

「はい！」

「ええ！」

打倒織斑一夏と俺達、四人は妙な縁から一致団結し、決意を新たにクラス代表戦に望んでいくのであった。

五十五話 『優希レポート』

打倒織斑一夏ぶっ飛ばす協定が締結して一致団結した俺、簪、セシリア、鈴

2組のクラス代表である鈴には代表戦までセシリアが相手となって特訓するということになり俺と簪は変わらず打鉄式式の完成に着手することになった。

そして話し合いが終わった後鈴とセシリアは自分達の部屋に戻っていき、簪も今日は実戦での初陣となってしまうために汗でべとべとで解散した後すぐに衣服を持って浴室へと駆け込んだ。

そして一人となった俺は飲み干してあるカップ四つを、洗った後、先程座っていた椅子にまた座ってディスプレイを起動させる。

母さんに言われたとおり今回の戦闘についてのレポートを作成するためだ。

しかも今回に関しては早急に必要となる資料でこの作成する資料は今後の捜査を左右することになるだろう。

『やっさと終わらせるか』

新暦79年4月〇日

第97管理外世界、通称地球、その極東の島国、日本の東京にて午後2時頃、シヨツピングモール、レゾナンスを中心に結界が展開された。

偶然にも調査任務で派遣されていた、自分も結界内に入り込み、同じく巻きこまれたIS学園に通う、更識簪もまた結界内に飲み込まれるというハプニングが発生。

すぐさま更識簪を身を隠せる場所に隠し、非常時として自分が持っているIS、ラファール・リヴァイヴ・カスタムYYを更識簪に一時的に譲渡し自分は結界を張ったとされる犯人の捜索に向かった。

レゾナンスを探索した末、同じく地球に来ていた海上警備隊司令補佐官八神リインフォースII空曹長と合流、情報交換を済ませ、一度、更識簪のいる隠れ場へと戻るも更識簪は自分が居なくなった後に民間

人である神崎奏を追いかけ、敵召喚士が召喚したと思われる蟹型の召喚獣と交戦したとのこと

詳細は自分も居合わせていなかったために不明だが、更識簪に譲渡したラファール・リヴァイヴ・カスタムYYの記憶映像によると途中、更識簪の姉である更識楯無……本名更識刀奈と雷撃の魔力変換性質を持つ神崎奏が戦闘に参加し召喚獣を撃破、神崎奏は雷撃の魔力変換性質を、上手く扱えて居ないと思われ、自らの雷撃により体を感じ電させて気絶、召喚獣は召喚士の力で送還されたと思われる。

その後、間を待たずしてハリネズミ型の召喚獣が更識楯無、更識簪、両名に襲いかかりそれにより、更識簪を庇った更識楯無は負傷、そこに騒ぎを先行して駆けつけた自分が更識両名を保護、ハリネズミ型の召喚獣は魔力砲撃により撃破、ハリネズミ型の召喚獣も蟹型と同じく送還されたと思われる。

その後、八神リインフォースII空曹長と再度合流し負傷した更識楯無を治療、その後、カブトムシ型の召喚獣が来襲した。

襲いかかってきた召喚獣と自分が交戦し凍結の魔力変換性質の力を持ちいり一太刀を浴びせた後召喚獣は転移魔法にて撤退、その後、直ぐに結界魔法は解除された。

今回の戦闘は召喚獣を三騎も従える召喚士の犯行と断定、同じくこの場に居合わせていた海上警備隊司令、八神はやて二等陸佐が召喚士と交戦、詳細は八神二佐のレポートに記載されている。

上記の召喚獣について

まず、始めに出現した蟹型の召喚獣

ラファール・リヴァイヴ・カスタムYYの記憶媒体からの映像によると、四つの腕から振り落とされる鋏と口からの水鉄砲、触覚からの雷撃の三つの攻撃モーションを確認、これらの他にも攻撃方法がある可能性もあり、斬撃及び実弾の兵器はあまりダメージを受けていないと推定、そのため打撃及び魔力攻撃などの攻撃が有効な攻撃と思われる。今回は更識楯無が自分の愛機であるミステリアス・レイディの最大火力攻撃、ミストルティンの槍を使用し撃破したものの、ミストルティンの槍にはミステリアス・レイディの防御の要となっている水の

ヴェールを攻撃に転用していることからあまり良い戦術ではないと思われる。

次のハリネズミ型の召喚獣について

攻撃モーシヨンは自身の体を丸めて回転し突撃してくるものと背中にある針を無数に飛ばしてくる、二つ

特に突撃してくる攻撃に関しては仕掛けてくる距離に比例して衝撃の威力も変わってくるため距離を捉えた場合防御せずに回避、もしくは一撃で撃破できる高ランクの砲撃などを使い迎撃することを推奨

距離を捉えた突撃は推定でもAランクの魔導士の防御魔法を砕くほどの威力があると思われる。

ハリネズミに関しては早々に撃破したため十分な戦闘データが取れていないのもあり憶測な所が多いため、確定ではない

最後にカブトムシ型の召喚獣

カブトムシ型の召喚獣は上記の二騎とは比べものにならないほどの力を保有しており、推定ではあるが、囑託魔導士ルーテシア・アルピーノの召喚獣、ガリユールと同等の強さを保有していると思われる。

攻撃も拳による、格闘のみで合ったが他にも攻撃手段がある可能性は高い

カブトムシ型の召喚獣と交戦する場合単騎での戦闘は避け集団で中遠距離にて戦うことを推奨する。

そして今回の戦いに巻きこまれた、更識楯無、更識簪、神崎奏の三名の処遇については後日話し合いの末に決定することになっている。

時空管理局 海上警備隊司令補佐官 八神優希准空尉

五十六話 『思いがけぬ期待』

『…ふう…こんなもんかな』

今回の戦いのレポートを作成し終えて、パスワード付きのファイルに保存した後…いつも通りロンギヌスから母さんのディスプレイにレポートを送信し、漸く落ちつけると目を瞑りながら椅子にもたれかかる。

あゝ疲れたゝ

正直もう晩飯なんて要らずに寝たい気分だ…でもさすがにシヤワーは浴びたいかな…

『明日も予定があるしな…』

明日は海鳴に行つて事情説明…そして休日明けからは授業と簪の打鉄式式の開発に着手…気分は月月火水木金金だよ…なんか六課時代を思い出すよ

「マスター、マリエル技術主任から連絡です」

『え？マリエルさんから？…問題ないから繋げて』

ロンギヌスから意外な人物からの連絡が来たことに驚きながらも通信を入れるように指示すると目の前に空中のモニターが出現しあつちの映像が映る

「優希くん、今大丈夫？」

と陽気に話しかけてくるマリエルさんでも何故か目元には隈が付いている…徹夜だったのか？

『大丈夫ですよ、それで何か用でも？』

「あ、うん、優希くんのロンギヌスなんだけど一度メンテナンスをしようと思つてね、明日に本局に来れないかな？軽いメンテナンスだからそれほど時間も取らないし」

ああ、メンテナンスの連絡か…

昨日までならそこまで重要じゃないために後回しにするところだが今日あつた出来事を考えるとそうもいえない。

早めにメンテナンスをしてその上今日でカートリッジを8発も消費したから補充申請も出したかったし

『良いですよ明日の午前中にはお伺いします、何分早め方が良いでしょうから』

「え？優希くんの方で何かあったの？」

俺が言った言葉が気になったマリエルさんは更に訪ねてくるけど別に今すぐに話すことでもない。

『その話は明日に追々…それじゃあ切りますからね』

「え!?ちよつとま…」

マリエルさんが言い切る前に通信を切って再び椅子にも垂れかける。

そして一息吐くと俺を見る視線に気づきゆっくりと視線の方向に目を向けると簷が立っていた。

「優希?今の何?」

どうやら俺とマリエルさんとの通信の一部始終を見ていたようであり気になって訪ねてきた。

俺の秘密の一部はもうバレていることから、はぐらかすこともないだろう。

『映像通信、ロンギヌスに通信機能が搭載されているからそれで連絡を取ってたの…明日俺は先に行かないと行けない所が出来たから』

「そ、そうなんだ」

先程の出来事を説明しながら椅子から立ち上がり衣服を持って浴室に向かっていた。

翌日……

『ん〜片道約3時間、朝から出かけたからまだ10時前か……さつさと要件を済ませないとな』

朝7時頃にIS学園から出て電車を乗り継いで海鳴までやってきて、そこからは月村邸に向かってミッド直通の転送ポータルでミッドチルダに向かいそこから本局へと辿り着いた。

辿り着いて直ぐに俺は工業区画に向かう。

転移ポータルを利用するので直ぐに工業区画に転移し、転移し終わると工業区画を歩き始める。

工業区画は主にデバイス機材を持つている局員が目だち、そんな中で俺は私服で歩いているため結構目だつが俺の顔を知っている人が多いためか、気づいて敬礼する人たちが多い。

そしてマリエルさんが働く精密機器を取り扱う部署に辿り着き、扉の横にあるパネルに触れる。

そして扉が開くと中に入ると中はいつもより機材の量が多いことが目に入る。

『……失礼します……機材多いな……』

「あー…優希くんいらつしやい、機材が散らかつててごめんね」

と奥からマリエルさんが出てきて、俺に挨拶と機材の件に関して謝罪してくる。

『別に良いですよ、それよりロンギヌスのメンテナンス、お願いしますね』

そういつて俺は首から下げているロンギヌスを外してマリエルさんに渡す。

「はい、任せました……それで優希くん、昨日の話の続きなんだけど……」

『はい、実は……』

マリエルさんは渡されたロンギヌスを受け取った後、昨日のことで気になっていたことを訪ねてきて、俺は昨日の出来事を話し始めた。

『つてことです、だからメンテナンスなら直ぐの方が良いかなと』

「そうだったんだ……地球でそんなことがあったんだね……わかつた、ロンギヌスはちゃんと責任を持って整備するから……優希くんは少しどこかで時間を潰してて、簡単なメンテナンスだから一時間半ほどで済むから」

とロンギヌスをメンテナンス用のポットに入れて、メンテナンスを開始するマリエルさんに俺はふとこの部屋の有様のことを気になつて訪ねてみる。

『そういえば……この機材の山は一体何なんですか？』

「それがね、昨日から上から指示で第五世代型の開発に着手するから、第三世代のパーツを処分することになったの」

『第三世代つてたしか…もう十年ほど前の産物でしたっけデバイスにカートリッジを付けるようになって、近代ベルカとミッド式が主流の時ですし』

まあ確かに局員の殆どは第四世代型の量産機使ってるしなのは姉のレイジングハートやフェイト姉のバルディッシュに関して分るは2・5世代型でもパーツとかは特注で発注した最新なものだから…確かにもうここまでパーツがあっても、置き場所に困るだけだよな…

『待てよ…あのマリエルさん…』

「なに？優希くん？」

頼みたいことがあってマリエルさんに、声を話しかけるけど、当の本人は表示されているモニターに釘付けになっていてこちらには目を向けない。

『第三世代型のパーツ一部で良いから譲って欲しいんです』

「え!?優希くんどうしてパーツが欲しいの？ロンギヌスは第四世代の初期段階の機体だけど…第三世代型よりかは性能も良いんだよ？」

パーツの譲渡を口にする案の定驚いたマリエルさんがこちらに振り向く。

マリエルさんの言いたいことはよく分かっている…恐らく作ったデバイスもロンギヌスには劣る性能だろう

……デバイスを作るならな

『実はそのパーツが必要なのは俺じゃなくて、今いるところの人なんです』

「……どういふことかな？」

気になって作業を止めて耳を傾けるマリエルさん。

そして俺は簪と打鉄式式のことを説明して、説明し終わると険しい顔つきでマリエルさんは悩む。

『なるほどね…それは確かに許せるものじゃないね…そういうことなら私も喜んで協力したいんだけど…私の一存じゃあね』

と渡すことについては些か難しいと述べる。

やっぱり難しいよな……

そう思った俺だがマリエルさんは諦めてないのか後ろめいた顔つきはなく俺に話しかけてくる。

「でも任せて！・上にその事を掛け合ってみるから！」

『っ！・よろしくお願いします！』

と頭を下げる俺はこれが通れば色々と問題も解消できるだろうと胸に期待を膨らませるのであった。

五十七話 『家出少女神崎奏』

本局の工業区画で思わぬ収穫があり、胸に期待を膨らませる俺はと
りあえずメンテナンスが終えるまで暇を持てあますことになり……ど
うしようかと模索するとふと母さんの事が気になって母さんの執務
室へと向かうことにした。

『さてと、なら転送ポータルでオフィス区画に行かないとな』

本局ってかなり広いから転移ポータル無しだとかなり移動に時間
がかかる。

まだ幼い頃は転移ポータルの使い方分からなくて知らず知らずで
迷子になってたっけな……

昔のことを少し思いながら歩いていると転移ポータル前で不思議
と辺りをキョロキョロして不自然な感じをさせる女の子が一人

しかも知っている顔……どうして本局にいるんだ？

取りあえずと困ってるみたいだから見過ごすことは出来ないため
俺はその子に近づいていく。

「あれ〜可笑しいな〜……確か……これに乗ったはずなのに……」

……転移ポータルの使い方を知らないからか、行きたかった場所に
行けなかったのだろう。

取りあえず声を掛ける。

『ここで何しているんですか？神崎さん』

「ほえ？あつ！八神さん！」

キョロキョロしていた女の子……それは昨日の事件に巻きこまれ
た神崎奏さん本人で俺が声を掛けたことで驚いた表情を見せた。

それからどうやら神崎さんは母さんの執務室に向かおうと転移
ポータルを使ったが転移先が違ったために別の場所に転移したよう
だ。

それ以上に気になったのは何故神崎さんが此処にいるのか

昨日母さんが神崎さんの家まで護衛していたはず……

だから俺はその事を聞くと神崎さんはその事を思い返しているの

か苦笑いの笑みを浮かべていた。

「えつと…ね…実は…」

とどう説明しようか困った顔をしながらゆっくりと話し始めた。

『家出した!?!』

事情を聞きながら母さんの執務室へと向かっている俺は、神崎さんが言った言葉に驚いて声を荒げた。

「うん、八神さんに家まで送ってもらったんだけど……家で親にくどくどと言われて……もう頭にきちやつてそのまま……」

『家出したと……』

なんとまあ……大胆な……俺も人のことは言えないが

「持ってきた荷物は必要最低限なものだけにして、八神さんとは連絡先を交換していたから、それで何とかなったんですよ」

そう和やかに話すけど…きつと、母さんのことだから連絡した後、神崎さんの話しをまともに聞かずに転移魔法なんかで直ぐに現場に直行したんだろうな

昨日の事件後だから…

そんなことを薄々と思いながらも母さんの執務室前にやってくる。

隣の神崎さんも此処は見覚えのあるためここかくと頭の中の記憶と合致させ領き、それを横目で見た後俺は母さんの執務室にはいった。

『失礼します…母さんいる?』

執務室内に入ると辺りは紙で散らかり、母さんとリインが机に突っぱねて疲労感から眠っているのがわかる。

『全く、昨日は色々あったからってここまで散らかさなくても……あれ?』

そう言いながら近場の書類を広い部屋を整理しようと動き出したがふと、床に落ちている母さんのケータイに視線の先がいく。

普通ならそこまで気に病まないんだけどな…問題は映し出されている画像。

なんで……

なんで俺と簪が抱きしめている画像が母さんのケータイから出てくるのかな？

五十八話 『制・裁・決・行!』

母さん達が昨日の出来事の処理に追われて机に突っ伏している中偶然床に落ちていた母さんのケータイに映る俺と簪の画像

「どうやら……聞きたいことが出来てしまったようだ

「や、八神……さん?」

俺の一変した雰囲気を感じて恐る恐る話しかけてくる神崎さん……その姿勢は引け腰で細かく震えているのが分かる
取りあえず言い逃れが出来ないように外堀埋めるか

『神崎さん?』

「ひ、ひう!」

《え、笑顔が怖いよ》

俺は普通に声を掛けたただけなのに神崎さんはヘンな声を上げて震えていた体がは更に小刻みに震える。

『俺と簪が少し席を外したとき……母さん……何してた?』

《こ、これは正直に話さない……こ、殺されるよ!》

「は、はい……八神さんと……それと更識さんが八神さんの

跡を……」

『優希で良いよ……ふーんなるほどね』

多分その時激写したんだなそれにまさか母さんだけかと思えば更識さんまで……このこと簪に話せばどうなるかな?・

《もう一人は無理》

一人でいるのが耐えきれないのか神崎さんは涙目で近くにいたりインの体を揺さぶり、リインを起こそうする。

「うーん、リインはもうハンバーグ食べきれないですよ」

なんとも子供らしい夢を見ていたんだろう……そんなリインに俺は

『おはようリイン』
ようこそ地獄へ

「……起きる世界を間違えたのです」

とまた寝込みに入るがそんなことさせるつもりはない。

『安心しろリイン、此処は現実だし……別の世界線とかそういうのもないから』

「起きたら、とんでもない怒気に怖い笑みを浮かべてる優希がいる世界線もどうかと思うですよ!!」

起きて早々のツツコミありがとうございます。

『まあ茶番はこれぐらいにして……リイン一つ聞きたいことがあるんだけど……』

「な、なんですか?」

今にも逃げ出したいリインは俺の質問内容に今か今かと待っていると俺はその内容を述べた。

『昨日、レゾナンスでリインと会ったけど、母さんと一緒になにしていたんだ?』

「え、えっと……それは……そのですね……」

歯切れの悪い返事明らかに理由を知っていると云わんばかりのおどおどした態度……なら……

『素直に話したら、翠屋で一番高い特製パフェ奢る』

「はやてちゃんがロンギヌスから来たメッセージを見て面白いつていつて優希と簪さんのデートを監視してたですう!あ、後、喫茶店のカップル用のクリームソーダーもはやてちゃんの仕業ですよ?」

現金だなりインは……

それにしてもあれにも関係してたか……まあ薄々勘づいてはいたけどさ、でもこれで母さんの容疑は固まった。

「あの……優希さん……」

そんな中、神崎さんが何か言いたげな表情でこちらを見ている……でも安心してくれ

俺は神崎さんが言い切る前に動き出しこつそりと動いているあるものをきつちりと腕を組んで床に倒れ伏せさせた。

「八神さんが……ふえ?」

そしてあるもの……母さんのことを伝えたときには既に母さんを捕らえた後のために神崎さんは間抜けな声を上げた。

「ちよつ!ちよつとたんま!」

『たんまなし』

「ゆ、優希!? 明らかに怖いんやけど! そんなでもって、さっきの動き明らかあの反則チート能力使ってるやろ!」

必死に弁明しようとする母さんだが、母さんの指摘通り俺は現在有る能力を使っている確実に逃がさないために…

『さて、既に言い逃れができないけど何か…: 言い訳は?』

「ろ、ロンギヌス! ロンギヌスはどうなるんや!? 元を辿ればロンギヌスも悪いことになるで!」

『ロンギヌスは右も左も分からない俺のために密かに情報収集してくれてたんだろ? 主人思いな良い子じゃないか』

「鼻肩や! 今間違いない鼻肩をしてるで!」

なんとしてでも免れようと必死になる母さんだけど既に判定は決めているんだよな

『取りあえず、母さんに対する制裁なんだけど…: リインさつき夢でハンバーグが、何とか言ってたよな?』

「ふえ? そうでしたか?」

『うん、言ってたの…: 取りあえず一般区画にある牛肉専門のお店知ってる』

「あつ! 知ってますよ各世界から牛肉を取り寄せて次元世界でも右に出るものがないって言う美味しいお店です!」

やっぱり知ってるよなくあの店一度は行ってみたかったから丁度良いよな

そんなこと考えていると腕を組まれて伏せられてる母さんの顔色が悪くなっていた。

「ちよいまち…: あそこって美味しいけどかなり高かったような気がするんやけど…」

『知ってるよ…: だから俺達4人で食べに行くんだよ母さんの奢りで!』

「ふあつ!」

これが俺が決めた母さんへの制裁…: 物理的にも良かったけど此処はこういう精神的に行くべきだと判断した。

『取りあえず俺はあれが食いたいね…シェフ特製ダレ三日漬け最上級牛サーロイスステーキ、300グラム』

「それ12000はするやつ!」

「あ、リインは次元世界三大牛の合挽きハンバーグが食べたいですう!」

「それは15000!」

リインの奴本当にガチのやつ行きやがった……さて後は……

「あの…その…」

「神崎さん!頼むから!遠慮して!この通り!」

未だどうするか迷う神崎さん、そんな神崎さんに必死に遠慮させようと訴える母さん…大人げないな…

『神崎さん、遠慮することないよ……これは制裁なんだから』

「それにこんなお店、滅多に行けませんよ?」

こちら側に引き込もうと誘惑する俺、それに応じるようにリインも誘惑してくる。

そして悩んだ末10秒ほど……神崎さんは余所余所しいが笑みを浮かべてこう告げた。

「それじゃあ……お言葉に甘えて」

「ふにやあああああ!!!」

誘惑に負けた神崎さんも加えたことで母さんが猫みたいに奇声を上げた。

まあ、人のプライベートを覗き見してた人の制裁には丁度良いだろう。

五十九話 『行く道筋もまた険し』

少し早めの昼食を取り、時間も12時前と約束の時間も二時間後と迫る中、俺達は一般区画の通路をご満悦に歩いていた、ただ1人を除いて……

「合計45000……めっちゃ掛かった」

と下を向きながら俯く母さん……まあ因果応報だな

『さてと、母さんはまだオフィスの方で仕事有るの?』

「あくないよ……そういうえば優希はどないして本局におるんや?」

『ああ、マリエルさんにロンギヌスのメンテナンスでな……丁度メンテナンスも終わってることだろうからマリエルさんの所に行ってくるよ』

「わかった、ほんならミッド行きの転送ポータル前で集合な」

と母さん達と分かれて転送ポータルで工業区画のマリエルさんの仕事場に入るとひと仕事終えた顔をしているマリエルさんがいた。

そしてドアが開いた音に気づきこちらに振り向く。

「優希くん、お待たせ、ロンギヌスのメンテナンスも終了したよ……どこも問題なかったから……それと補充用のカートリッジ、16発入ったケースを2ケース渡しておくね」

マリエルさんは俺にメンテナンスが終えたロンギヌスを手渡すところでも異常が見られなかったことを言っつて、先の戦いで消費したカートリッジが入った小箱を2ケースを渡される。

『ありがとうございます。それと第三世代型のパーツについては……』
正直こつちが問題だ上が縦に頷いてくれれば一気に完成に近づくんだが……

「それなら大丈夫!事情を話したら技術局長も良いつて言ってくれたよだからはいこれ」

そう言うともリエルさんは自分の後ろにあるデバイスの機材が一杯は言っつてる大型のトランクケースを渡す。重みから中身は結構入っつてるな……

「取りあえず第3世代型で使つてた記憶媒体や駆動部関係のパーツ他

にも色々入れておいたから、それを使ってしっかりと完成させるんだよ」

『ありがとうございます』

俺は色々としてくれたマリエルさんにお礼を述べてマリエルさんの仕事場から出てミッド行きの転送ポータルの所へと向かっていった。

「はい、地球にとうちやーく」

ミッドの転送ポータルを使い、地球の月村邸のポータルへと転移して戻ってきた俺達

辺りにはいつも通り猫が沢山いて…見るだけで和む

そんな和む空間にいる中、家主のすずか姉が俺達を見てこちらにやってくる。

「はやてちゃんー!」

『あつ!すずかちゃん!』

昔から読書という共通な趣味があるため仲の良いふたりはあつた瞬間笑みを浮かべてお互い手を握り合う。

「はやてちゃん久しぶり、お仕事大変そう?」

「うん、まあな……」

(優希、悪いんやけど、先に行つてくれへんか?まだ約束の時間まではもう少しあるはずやから)

久しぶりに会うために積もる話があるのか……俺に念話で先に行つてほしいとお願いされ、俺は何も言わずに頷いた。

『リン、神崎さん、俺達は先に翠屋に行つていこうか』

『そうですね、神崎さんこっちですよ』

母さんはすずか姉と話し合いがしたいために一度別れて俺が先導で月村邸から出て商店街へと向かった。

商店街は休日ということもあり利用客の往来が激しく道はかなり混んでいる。

「神崎さん、こっちですよ……今日は人が多いですからはぐれないようにしてくださいね」

混んでいる中、海鳴に土地勘のない神崎さんを、気にしてリインが手を握って引つ張って先導していく。

『リイン、楽しそうだな……………』

前を歩くリインを見て、頬緩ませるのも束の間こっちに見ている視線が一つ……………つけられてるな

(リイン、誰かが後ろをつけてきてる、取りあえずトランクケースを、そっちに渡すから翠屋で合流しよう)

(わかったです、気をつけるのですよ?)

念話でつけてきている奴の対処を打ち合わせ、リインと神崎さんは翠屋へ、俺は追っ手をまくために別方向にへと分かれる。

そして案の定つけてきている人物の標的は俺であった

もうここまでの推測で恐らく俺のことを良く思わない I S 委員会の奴等だろう……………

『取りあえずまたトイレで撒くか』

そうと決まれば公園のトイレへと入っていき、落ち着こうと洋式の便所に腰掛ける。

『はあ……………相も変わらず……………しつこいな』

1 回失敗してるんだからやるだけ時間の無駄だつてことわからな
いのかな。

『さて、また変身魔法で誤魔化すかな……………?』

同じ手口で切り抜けようと便所から立ち上がったとき、耳に微かに聞こえた機械音……………俺は不思議に思って、聞こえた先トイレの給水部分の背中辺りを除くと……………なんていうもの仕掛けてやがる!

『っ!プラスチック爆弾?! ロンギヌス!』

おれはプラスチック爆弾が仕込まれているのに気づき大急ぎで口
ンギヌスに声を掛けるとその直後プラスチック爆弾が起動した。

六十話 『襲撃者達の末路』

NOSIDE

商店街前に位置する海鳴の駅前、遠い別の街からも来訪する人々が多く、電車が停車すると多数の人がその駅に降りてくる。

そんな海鳴に降り立った二つの影……

「ここが……海鳴」

初めて海鳴に降り立った少女：簪は駅前の辺りを見てそう呟いた

「私もここに来たのは初めてね」

簪の後ろからやってくる楯無は口元を扇子で隠している。

この二人が来た理由は勿論、優希達の説明を聞きに行くことが目的であり、あくまで観光というわけではなかった。

しかし、まだ午後12時45分と約束の時間までには一時間ほど残っていたが楯無には早く来た目的があった。

《この機会に簪ちゃんとの仲を戻したらって虚は言ってるけど……どうすればいいのよ》

簪との仲を戻すこと……それは楯無自身が一番望んでることであり、そして一番彼女にとって難しいものでもあった。

「か、簪ちゃん……」

「何？」

「まだ時間もあるから商店街を見て回らない？」

ぎこちないやり取りだが簪との仲を戻そうと必死になる楯無、そのやり取りで簪は少し溜め息を付いた。

「元からそのつもりだったんでしょ？ なら言わなくてもわかってるよ」

「うっ……」

刺々しい簪の言葉に精神的なダメージを負う楯無、気まずい状況の中、海鳴の商店街をぶらり歩き始める。

《気まずい、どうすればいいのよ！ 何か……何か簪ちゃんの気に入りそうな話は》

必死に簪が乗りそうな話題の話を模索するも中々そういつた話題

が出てこない。

そんな時、近くで爆発音と爆風が吹き荒れた。

「爆発!？」

「此処から近いわ…っ!」

平穏な所でいきなりの爆発にしゃがんで驚く簪に横にいた楯無は少し冷静に爆発した地点が此処から近いことを分析し、その場に急いで向かった。

突如平穏な海鳴の一角が爆音に支配された。

どこにでもある公衆トイレ、それが突然木っ端みじんに爆破されたのだ。

爆破した直後辺りは騒然となり人は一目散にと悲鳴を上げて逃げ出していく。

そんな中公園の木の陰から爆破されたトイレを見る三人の女性達があった。

その者達は爆破されたにも関わらずしてやったりと笑みを浮かべていて一人の女性の手には何かを起動させるスイッチが持たれていた。

「やったわ! 忌々しいあの男を殺せた!」

「私達に泥を塗った哀れな男に罰が当たったのよ」

と、優希自身に恨みのあるのか何かに対しての腹いせで今回の爆破に至ったように爆破されたトイレ跡を悠々と眺めているところに、近くにいた楯無と簪が駆けつけた。

「あなたたち、そこは危険ですから直ぐに避難を」

楯無は悠々と眺めている女性達に退避するよう促すが、彼女達は動こうとしない。

それに不思議がり更に近づいてみると、一人が持つ起爆装置に目が入り後ろに付いてきた簪を守るように立って彼女たちを警戒する。

「あなたたち…その装置爆弾の起爆スイッチね」

「あら、よく分かったわね、丁度、私達をはめた忌々しい男に鉄槌を下

した所よ」

楯無が女性が持っているものを見抜くと彼女は隠すことなく話出した。

「公共施設の爆破に殺人…言い逃れは出来ないことよ」

そういつて楯無はミステリアス・レイデイを展開して蒼流旋を構えた。

「ああ、更識さん、殺人じゃなくても殺人未遂ね、でもまあ、器物損壊に爆弾所持…まあ罪が重いのは変わらないけどさ」

楯無と女性達とで膠着状態が続くそうになると思いきや、そこに第三者の男性の声が聞こえてくる。

そしてそれを耳にした五人は聞こえた方向を向くと、トイレの爆発に巻きこまれた優希が気を失っている子供を背負ってそこにいた。

「優希！」

「八神くん！丁度良いところに！」

騒ぎを聞きつけて来てくれたと思つた楯無達は優希が現れた事に歓喜するが変わつて優希を爆弾で爆殺したと思つていた女性達は無事な優希を見て信じられない表情を浮かべる。

「ば、馬鹿な!?あの爆発でどうやって!?!」

「ん?ああ、直ぐに爆弾見つけてこつそり抜け出したんだよ、ついでに近くに子供もいたから背負つてな」

《実際は……爆発する直前にロングノースに爆発規模と範囲を割り出しとその範囲内に民間人の索敵をして爆発する中を民間人担ぎながら目の力使つて飛んでくる破片と爆発を避けたんだがな……》

さすがに言つても信じないか……と心の中で溜め息を付きながら木を背をもたれさせるように子供をゆつくりと下ろし、優希は今回の首謀者達を睨みつける。

「全く、付けられてとは思つたがまさか、こんなことまでしかすとはな……」

「う、うるさい！全部お前のせいだ！お前がいたから私達は居場所を失つたんだ！」

「はあ？どうしてそうなるん……ん？待てよ……」

睨まれて当然のことをしでかした彼女達だがそんなこともお構いなしに彼女達は優希が一方的に悪いと言い、優希は呆れる中彼女たちの顔を見て眉をひそめた。

「思い出した、お前達……バニングス社で俺を保護しようとして襲撃してきた奴等だろ……全く……ちゃんと帰れるようにしてやったのに恩を仇で返すのかよ」

「うるさい！何が恩だ！あれからの私達の苦しみも知らずに……！」

優希は今回の首謀者が以前にも優希を無理矢理連れて行こうとしたIS委員会の手のものだと思い出し、交渉脅迫の末に無事に解決したはずが……彼女達にとってはそれが生き地獄となつて優希に対しての憎しみが強くなっていた。

「……はあ……仕方ねえ……取りあえず」

優希は彼女達の言い分を聞いた後、呆れて溜め息を吐くと次の瞬間優希が消えたと思うと女性達は次々と気を失い倒れ込み、直後優希は少し移動した所に現れた。

「少し寝てろ、後のことはじっくりと警察が聞いてくれるからな」

優希も長々と聞くのはめんどくさかったため、即行で女性達を鎮圧した。

「いつの間に……」

「簡単な動きを力を使って早めただけですよ……その気になれば誰でもできるような……ね」

物凄い早業に圧巻の一言を述べる楯無に優希は淡々と簡単にできるといふ。

「はあ……取りあえず……警察の事情聴取を受けないとな……約束の時間には遅れそうだけだな」

そう優希は言いながら、遠くから聞こえはじめるパトカーのサイレン音を聞きながらこの場で警察がくるのを待つのであった

六十一話 『翠屋での説明会』

優希SIDE

公園のトイレ爆発事件が起き、死者や重軽傷者は0とトイレ以外に被害が出なかったことに内心ほっとしながら警察が来て、首謀者達の身柄を渡した後、事情聴取を受けた。

取りあえず、その時の状況を警察に教えて約一時間ほど、漸く解放された俺達は翠屋に辿り着いた。

『全く、どうしてこう外にでると厄介ごとに巻きこまれるんだ?』

バニングス社襲撃と言いつつ、昨日のレゾナンス襲撃事件と言いつつ今回の俺の殺害計画と言いつつ……気が滅入るよ。

そう思いながら溜め息を吐き、後ろの二人は同感と苦笑いの笑みを浮かべる中、翠屋の中に入ると、爆発のせいなのか店内は人が少ない。

まあ、こつちとしてはあまり聞き耳を立てられると困る話のためいない方が良いんだけど

と店内を進んでいくとカウンターにいる美由紀さんが俺に気がつく。

「あ、優希くんいらつしやい、さつき凄いい爆発があつたみたいだけど大丈夫だった?」

「大丈夫ですよ、犯人も捕まりましたし怪我をした人もいなかった、みたいですから……それと先にリイン達が来てると思うんですけど」

『そっか……よかった、リインちゃん達は奥の個室にいるから』

『え? 翠屋って個室あつたんですか』

個室なんて初耳なだけ……

「ふっふっふー舐めてもらつたら困るわね、翠屋も日々進化しているのよ、因みに売り上げしだいじゃあ2階も作る予定なのよ」

……売り上げで改装してるんだ……やっぱ凄いな……翠屋

そんなことを思いながら奥の個室に案内されて中に入ると既にリイン達だけではなく母さんまで到着していた。

「あつーやつと来たですね！もう、特製パフェ頼んで食べてますからね」

そう目の前にある半分食べているパフェを見ると待ちきれなかったんだろう……こどもだな

「むうー！リンは子供じゃないのですう！」

俺の心の中を見透かしたのかむくれて子供ではないと否定するリンだが……余計に子供っぽくなるため、逆効果である。

「取りあえず、なんや大変やったみたいやな、三人とも座り、疲れてるやろ？」

母さんの言葉に言われて俺達は母さん達がいる席に座り美由紀さんに注文を頼むと俺は背中を椅子にもたれて息を吐いた。

「取りあえず、少し休憩して、みんなのケーキなんか来たら話し始めようか」

そういつてこの場にいる年長者のはやてはそういつて取り仕切り、俺たちのケーキが運ばれてきてから話は始まった。

「……なるほど……国家に属さない秘密結社……ね」

話の主な説明は母さんが3人に話してくれて、大まかな説明の後、更識さんは俺たちの組織に関して思考を巡らしているようだ。

「そうや、私らは特殊な力を使って表には絶対出ずに裏で世界の平和を守ってきたんや」

と堂々とした態度でそういう母さんだけ結構内容が抜けている……例えば次元世界のこととか……

それも全部母さんが混乱を避けるためのことだろうけど……更識さん……やっぱ怪しんでる感じなんだよな……

「それで、その秘密を知った私達はどうなるのかしら？」

秘密結社……なんて言うくらいには存在自体明るみになるわけには行かない。

そのため、知ってしまったものについての処遇がどのようなものなのかそれに尽きて更識さんは怖い顔で訪ねる。

「そんな怖い顔せんでも、問題ないでただ、私らのことは内密にしてほしいだけやから」

「そう……なら良いわ……」

少し空気が重くなっていたけど、元通りに戻り、一通りの話は終わったために、普通に翠屋のケーキを堪能し他愛もない雑談に話を咲かせるとあつという間に時間は過ぎていった。

「ほんなら、ここでお別れやな」

海鳴の駅前まで一緒に母さん達も付いてきたが、三人は本局に戻るため此処で別れることになる。

「優希のことお願いするですよ」

「うん、八神さん達もお大事に」

別れの言葉を交わし、母さん達は月村邸の方角へそして俺達はI S 学園に戻るために駅の中に入っていくのであった。

六十二話『批難するもの』

休日も明け、今週からまた授業が始まる中、教室に入るといつもとは違う雰囲気には少し不思議に思った。

何というか今よりいつそう拒絶されてるような……そんな感じ

一体何があった？そう疑問に思いながらも学生鞆を机の上にそして打鉄式式に使うパーツの入ったトランクケースを机の横に置いて席に着く。

取りあえず、強くて恐怖されていたのは知ってるけど、他は何もしてないはず……

そう思っているとこっちに近づいてくる織斑が見える。どうも何か言いたげなそんな顔で

「おい！八神！お前！」

『……何ですか、朝から騒々しい……』

この頃織斑にことあるごとに絡まれるのも鬱陶しくと思えてきたが……大事な情報リソースだ、今は黙っておく。

「女に手を上げたってどういうことだよ！」

俺が女性に手を上げた？何を言ってるんだ？

大体そんなことする場合なんらかの理由もあるはず……そこら辺の言葉が抜けているから何を指し示しているのかわからない。

『何を指し示しているのか……全くわかりませんが……何時……どこでやったことか教えてくれませんか？』

丁寧に敬語で織斑に話す俺だが少し声が低い、どうもイライラを隠せないらしい

「しらばくれるなよ！昨日、お前が女性3人を手にかけてたつて噂になってるんだぞ！」

昨日？……つてことは海鳴でのあの爆殺未遂の件か？

でも織斑の話からしてなんか……俺が一方的に女性に手を上げたみたいなの言草だが……

織斑のことだからそう思い込んでる可能性も否めないか

「そうよ！女をひっぱたくななんてサイテー」

「そうよそうよ！」

織斑の話に乗るように周りの半数の女子まで俺を批判してくる……これが俗に言ういじめという奴な……

「お静かに！皆さん、噂でしかないことを本人に攻めて何になりますか！」

それを見かねたセシリアが大声をかけて静止させようと声を上げたが……それで終わるほど甘くはなかった。

「なによ、オルコットさんは八神くんに肩を持つ気！見損なつたわ！」俺に肩を持ったセシリアまでも批判させる対象に……

教室中に響く罵声……その状況に煮えをきらした俺は……机を強く叩き気迫をあたりに撒き散らした

『お前ら少し静かにしろ……！』

俺はそう言い切るとピタリ、一部のものは気迫にやられてその場に倒れ込むものも出る。

「っ……！」

《なんだ……これ……体が動かない……！》

目の前の織斑は特に気迫を受けただろう……察するに動けない様子。

静粛な時間が過ぎていく……それは騒ぎを聞きつけた織斑先生が来るまで続くのであった。

「全く、騒がしいと急いできてみれば、八神が殺気だっていたから何かと思えば……」

織斑先生が到着し事態の收拾を終えると気迫していた俺を廊下に連れ出すと溜め息を付かれる。

『ああ、でもああしなれば事態が更に深刻になってました……最悪は学級崩壊もありえましたし』

「それについては礼を言おう……全く、根も葉もない情報を撒き散らしおって……それと織斑については後で私がじっくり言っておく」

『案外それが目的だったのかもしれない……彼女達の行動を知っていて泳がせ、俺を始末できれば上々、出来なければ情報戦で俺を追い込んで……手中に納める……合理的な方法です』

「ちっ！余計な真似をする」

先生……舌打ちはないでしょう

「取りあえずだ、八神、ことが収まるまでは学園の敷地外にでるな……それが賢明だ」

織斑先生は俺のみを案じてそう忠告する。

でもいざって時は……

『わかりました忠告、ありがとうございます』

「分かったなら言い、では教室に戻るぞもう直ぐ授業の時間だ」

織斑先生にそう言われて俺は教室内に戻って授業を受けるのであった。

本音S I D E

こんにちはく本音だよ

ってそんなこと言ってる場合じゃないんだよ

朝からみんなやーくんのこと遠ざけてて、聞いてみたらやーくんが女性を傷つけたっていう話なんだ

でも、やーくんが何もなしに人を傷つけるわけないと思ってかんにんに聞きに言ったらやっぱり間違いだったよ！

かんちゃんの話だとやーくんは恨みを持たれてたI S 委員会の人に爆弾を使ってまで襲ってそれで拡大しないようにやーくんが女性気絶させたって

その話を聞いたとき私だけじゃなくて4組の人もいたからみんな、かんちゃんの話に釘付けになって聞いていたから、4組内では誤解は解けたみたい……やーくんの味方が増えてよかったよ

その後1組に戻ったんだけど、何故か空気が重いというか……みんな可笑しかった。

何かあったのかなくと思っただけど直ぐに先生が来て授業になっちゃったから誰にも聞けなかったよ

うーんでも……こう言うのはおりむーがまた何かやったのかもしれないなくよくおりむーが絡んでるし

1 限目が終わったらやーくんに聞いて見よう

……
……

結局話せなかったよ

いや、授業終わって、ケータイみたら知らないアドレスからメールが入ってて、興味本位で開いたらやーくんからだったんだ

なんかほとぼりが冷めるまでは周りがあるときはあまり話しかけるな、理由が知りたいなら本音の友達かセシリア辺りに聞けって

それでね、鷹月静しずと相川清き香ちゃんに何があつたか聞いたらやつぱりおりむーが絡んでたんだよね

それでやーくんをかばったセツシーまで罵声を浴びられて……やーくんが怒った？のかな一喝でみんな黙らせたんだって、凄いやね、って、そうじゃなくて……そのせいでやーくん、更に怖がられることになったんだって……

そのせいでやーくんとは話せずお昼休みになって、やーくんはお昼休みになるとさつきと何が入っているか知らないバツクに右手には近くのコンビニかな？そこで買ったお昼ご飯を持って何処かに行っちゃった。

多分、かんちゃんの手伝いに行ったから整備室かな？

そんなことを思いながら、食道でお昼ご飯を食べる、お魚美味しいな

「ねえ、本音」

『なに〜しずしず〜』

食べてると一緒に食べてるしずしずが箸を止めて私に聞いてくる。

「八神くんのことなんだけど……本音ってセシリアと同じくらい親しかったよね、八神くんってどんな人なの？」

『えーつとね、やーくんは優しいよ〜それに強いし〜まるで本物の騎士みたいな人かな〜』

私はやーくんの人物像を話すけど、それでもしずしずもきーちゃんも納得いかないみたい……どうしよう〜あつ！そ〜だ〜！良いこと思いついたよ〜

そうと決まればお昼ご飯を食べて行かないとね！やーくんとかん
ちゃんの所に行かないと！

六十三話 『本音の秘策』

こんにちは引き続き本音だよ

お昼食べてからしずしずときーちゃんを連れて整備室の前に来たよ

理由は簡単、聞くだけで信用しないんだったら見せれば良いんだよ！

だからやーくんとかんちゃんの必死な姿を見せれば二人もやーくんのこと怖くなくなるはずだよね！

というわけで扉を少し開けて3人で中の様子を拝見

お昼ご飯は食べ終わったのかな？今なら作業を執り行う所かな？

トランクケースからパーツを取り出してるのがわかる……けど

……声までは聞こえないな

『中に入って、やーくん達の話が聞き取れる所まで近づこう』

そうしてそつと、扉を開けて、しずしずときーちゃんと一緒に整備室に入ってやーくん達に見えないようにハンガーの影に身を伏せて隠れる。

「さてと、俺は打鉄式の中核の方やるから簪は脚部の方を頼む」

「うん、わかった」

そういつてやーくんもかんちゃんもそれぞれの作業に取りかかる。

「本音、あれって……八神くんの専用機とは……」

『あれはね、4組のかんちゃん専用機なんだよ……』

二人は知らないもんね、かんちゃんの苦悩とかそれを支えてるやーくんの優しさとか……

取りあえず、おりむーのことや倉持技研のことは省いて2人に説明。

「そうだったんだ、凄いなだね、八神くんと更識さんって……」

しずしずがやーくんのことを誉めてる。

『うん。やーくんが居なかったらかんちゃん……今でも一人で頑張っていたと思うよ、だからやーくんには感謝しきれないぐらいだよ』

いつか、やーくんが困ったときにはちゃんと恩返ししないかね

「……ねえ、……優希」

「ん？どうした？」

考えてる内にやーくんとかんちゃんが話し合ってる、けどなんか少し空気が重いかな

もしかしたら今の現状の話かな？

「優希は……大丈夫なの？……その昨日のあれのせいで……」

「ああ、心配してくれたのか……大丈夫だ俺はその程度で折れるほど柔じゃない」

「そっか……うん、でも耐えられなかったら私に言ってね」

「それは俺のセリフだ、きつかったら俺に言え」

……うん何だろこれ……遠くから見てたらカップルしか見えないよ

しずしずもきーちゃんもそんな感じで見るから……うー目的は達成したし、そろそろ退散しようかな

「……隠れてないで出てきたらどうだ？」

バレちゃってる……これは……出ていった方が良いよね

潔くハンガーの影から出てやーくんの前に出るとやーくんやつぱりという顔をしていた。

「やつぱり本音か……それと……確か鷹月さんに相川さん……でしたよね？」

あーやーくん、二人の名前覚えてたんだ。

「は、はいー」

しずしず、名前呼ばれて慌てる、やつぱり2人しかいない男子っていうのもあるんだろうね

「畏まらなくても良いですよ……大体の話は本音から聞いていたと思います……」

「はい、本音から全部聞きました……八神くんが真剣に取り組んでい
るのを見て……本音が言っていたことがわかった気がします」

「そっか……でも今は……」

「他言無用……ですよね？下手に刺激しないように」

「も、物わかりが良いんですね鷹月さんって」

しずしず、すごいでしょう！私の自慢の友達なんだよ！

「優希…その話し合いも良いけど…機体の方に集中して欲しいな」

あ、かんちゃん、ふて腐れてる…

「ああ、悪い…取りあえず、記憶媒体の取り替え完了…つと…すみませんね、話し合いたいのは山々ですけど何分手が離れないので」

「いやいや、八神くんは忙しいのは分かるし…ねえ」

「うん！静寐の言うとおり、八神くんはそのまま作業を続けて」

「そ、そうか…本音、悪いんだが手伝ってくれ」

『ふえ!? やーくん、私、やーくんやかんちゃんほど整備なんて出来ないよ!』

ISを作るなんて私の技術じゃ無理だよ！本当に

「本音…それじゃあ夢現の調整お願い、武装の組み立て得意だったよね」

『それ、銃の組み立てが得意なだけだよ!』

夢現って薙刀だし…というかもう2人も自分の作業に集中して聞く耳を持ってないよ！

『しように無いなあっ! しずしずときーちゃん、ごめんね！私はやーくん達と一緒に整備するからしずしず達は教室に戻ってて』

「あ、整備してるところ見てみたいからこのまま居させて」

『きーちゃん、そんなに面白いものなんてないよ…さてと…どうしよっかなくあれ? これなんだろう?』

夢現の整備に取りかかろうとしたけどやーくんの持ってきたケースの中に見慣れない部品を見つけてそれを手にとって見る。

『炸薬と…装填する部品かな?』

炸薬らしい弾薬? とそれを4つくらい装填する部品…

多分、クラス代表戦でもかんちゃんは夢現だけで戦うことになるんだらうな！

夢現は高周波ブレードだし…それに炸薬…あっ!

『良いこと思いついたかも!』

そうと決まれば取りかかろ！

六十四話 『打鉄式式起動』

優希SIDE

打鉄式式の開発に本格的に取りかかってから十日が経過した。初日は中核となる場所のパーツを取り替えた。

これにより、起動させるだけでばんばんになるであろう記憶媒体に伝達スピードが遅い、伝達部分等を取り替え、それから各部の駆動部を取り替えたりとやることは大量だった。

その他にも打鉄式式を動かすOSの作成、スラスタの調整なんかも完了したが……武装に関しては完全に後回しという結果になった。

いまは動かすことを第1にしたため、それに夢現があるから完全じゃないわけじゃないし……俺がリヴァイヴ乗ったときは違ってたな

武装の話は置いておいて……取りあえず、打鉄式式の改修は一時的だが終わった、まだ改修の余地は有り余っているが何分クラス代表戦も既に四日後に迫っている

そして今日、打鉄式式の初試運転とファーストシフトを行うことになった。

今、俺が居るのも第4アリーナで既にリヴァイヴを纏っている。

それと、観客席の方でも今回の件に関わりのある本音や鷹月さん達、後セシリアと鈴も見に来ていた。

後は打鉄式式を纏った簪が来るのを待つだけ……つと……来たみたいだな

カタパルトから出撃する機影、それは俺の前に降り立つ。

降り立った期待は俺にとっては見慣れた人物と機体……簪と漸く動かせる段階まで完成した打鉄式式

『取りあえず、ちゃんと動いたな』

カタパルトから出てきただけでもちゃんと動いていることの証明になったため俺は笑みを浮かべてそのことを喜んだ。

「うん、優希と支えてくれたみんなのお陰」

簪も自分が手塩をかけた打鉄式式画動していることに感動して笑

みを浮かべた。

しかし感傷に浸るのもこれくらいにしてここからが本番だ。

『取りあえず、ファーストシフトは完了だな…次は何処か異常がないか見る、アリーナ内を飛び回ってくれ』

「うん！」

そういつて簪は打鉄式式のスラスターを吹かせてアリーナ中を飛び回る。

加速、旋回、急停止…動きに関しては見る限り問題点は無さそうだが、いや従来の第三世代の専用機以上に機体性能が良いように見える。

一通り飛び回ると俺の目の前に戻ってきて、俺は次の段階へと進めるため、拡張領域バスターから葵を取り出す。

「優希？」

『取りあえず基本動作はここまで…』

疑問に思う簪を他所に俺は葵を軽く素振りて振るうと構えた。

『少し軽く打ち合おう、動くだけじゃ物足りないだろ？』

「…うん、わかった！」

俺と打ち合えることがうれしいのか少し笑みを浮かべながら打鉄式式の拡張領域バスターから夢現を取り出して構えた。

「それじゃあ…行くよ！」

『ああ！来い！』

簪の動きを見るのが目的だから簪の攻撃を誘うと直後簪は俺に目掛けて飛び込んでくる。

まず上段から斜めに振り落としそれを俺は中段で構えて葵で軌道を削らして外すと続けて夢現を切り返して下段から振り上げてきてそれも夢現の軌道に合わせるように葵で打ち合う。

『いい、切り返しだな！薙刀術習ってるのか？』

「うん、やっぱりさっきの動きで分かるよね」

『まあな…よし、今度はこっちからも行くぞ！』

それから数分間お互い打ち合って打鉄式式の性能確認を大体完了し一度距離を取って葵をおろして構えを解く。

『よし！機体に不備は見られないな…お疲れ、それじゃあ取りあえず

…』

「ま、待って！また1つ試したいことがあるの！」

簪SIDE

優希に付き合ってもらって打鉄式式の性能チェックを一通り終わらせたんだけど…まだ1つだけ試していない打鉄式式の力があつた。

これは優希は知らない…というより打鉄式式の性能チェックの前に私も本音から言われたから具体的にしか聞いていない。

だけど…聞く限り、優希のあれのことだと思う…やり方も本音から聞いている、だから後は試すだけ

「なんか。まだあつたつけ…別に気にすることでもないか…よし、なら来い！」

優希は思い当たることがなかったみたいだけど、あるならと葵を構えて防ぐ体制を取った。

『それじゃあ…行くよ』

やり方はイメージしてそれを、打鉄式式が私のイメージを夢現に伝達！

すると夢現は一昨日の優希がやったように柄の先がスライドして元に戻ると、夢現の先端の高周波ブレードが更に激しく振動する。

「っ！それはカートリッジシステム!？」

あの部品…そういう名前だったんだ

優希も夢現にカートリッジシステムが組み込まれることに驚いてる…けど、驚いてると怪我するかもしれないよ？

『行くよ！』

「っ！」

私は打鉄式式のスラスタを点火させて優希に一気に近付くと夢現を横に一閃に切り裂き、優希も葵で防ごうとするけど、葵は刀身が夢現のブレードに当たったところから真っ二つに折れた。

「っ！」

『凄い…』

さつきと振るうスピードも全く同じだったのにカートリッジシス

テムを使っただけで威力が段違いに変わってる。

そう威力に感傷しているとピキツと嫌な音が聞こえて、聞こえたところを見ると夢現画至るところに罅が入っていて次の瞬間バラバラに砕け散った。

『…………え?』

一体何がおきたの?そんな疑問が私の頭を埋め尽くす中、優希がゆっくりとこつちに来て、砕けた夢現の中から無事だったカートリッジシステムの部品を拾い上げる。

「なんでカートリッジシステムがここに……………取りあえず言わないといけないことと聞きたいことがあるな……………だけどまずは夢現の破片回収しよう」

『…うん』

どうしよう…唯一完成してた夢現を壊してしまった…これからどうすれば……

六十五話 『転んでもただでは起きず』

優希SIDE

取りあえず打鉄式式の性能チェックは終わった……そして第4アリーナのカタパルトデッキ、そこで俺は正座させている本音の前に仁王立ちしている。

『さて、本音、言いたいことはあるか?』

「あははく足が痺れてるから……立って良い?」

『駄目に決まってるだろ?』

え、笑顔が怖い。

お決まりのやりとりで笑みを浮かべながら言葉を返す。それを見ている周りは俺を見て後退っているようだが気にしないでおう

『本音、お前だよな夢現の調整してたのだったら例の部品!あれにも見覚えはあるはずだ』

俺は本音にカートリッジシステムのことを問い詰めると本音は苦笑いをしてその事を話そうとする。

「えっと……かんちゃんの武装夢現しかなかったし……どうにか強化できなかならうって思っ……そしたらやーくのケースの中に炸薬とその部品があつたから……」

……まあ、本音の気持ちも判らなくはない……これは本音に取っ手の簪への負担を少しでも和らげようとする考慮だ……だがそれが仇になるとは思ってなかったようだが。

「優希のいいたいことも分かるけど、それより私達にもその例のあれっていう部品について教えなさいよ」

「そうですね、なぜ簪さんの武装が砕けたのか納得のいく説明をしてもらわなければ納得もいきませんわ」

本音の説教もあるが、観客席から見ていたセシリアと鈴もカートリッジシステムに御執心で、寄りかかって問い詰めてくる。

……取りあえず、上手く誤魔化すか

『あれは……俺の知り合いが独自開発してるカートリッジシステムっていうものだ』

「カートリッジシステム？なによそれ、聞いたことも無いわよ」

当然、何それと鈴が聞き返してくる、それは当たり前前の返答なんだがな

『カートリッジ、こいつにはエネルギーが圧縮されていて、それを戦闘中に装填して武装……または機体の性能を爆発的に高める効果がある、簪の夢現でシールドエネルギーを転用して強化していた俺の葵を簡単に折ったのが良い例だ』

「確かに……私の双天牙月でも折れなかったからね……」

鈴はあの日模擬戦した時のことを思い浮かべながら納得しカートリッジを使った夢現の威力に良く理解する。

「で、でも、どうして更識さんの武装は壊れてしまったんですか？」

次に質問したのは相川さん、これは一番気になることだよな

『簡単だよ、夢現がカートリッジのエネルギーに耐えきれなかったんだ、あれには耐えられるほどのフレームとそれを扱う使用者の技量が必要とする……もし扱えきれなかったら……ただの自爆装置にしかならないからな』

自爆装置……そう俺が言ったら周りのみんなぞつとした顔で俺を見てその後すぐに本音に顔を向けた。

「ちよつと、本音！あんたそんな危ないものを……」

「い、いや！私もそんなこと知らなかったし！」

カートリッジを知らなかったこともあり、今更、焦って本音に詰めより問いただす相川さん、本音もそんなこと知らないため相変わらざるのほほんと頭をかきながら自分のやったこと反省する。

「それで、これからどうするんですか？その更識さんの武装が……」

鷹月さんのいうとおりこれで打鉄式の使用できる武装は無くなってしまうた。

修理するにも機材も無いため直ぐにはできない、加えてクラス代表戦まであと四日到底、間に合うものではない。

それは簪達も分かることなので俯いて気が沈んでいる中、まだ潰えたわけでない

一応の予防策……ちゃんとしていて正解だった。

『……そう落ち込むな、戦えないわけじゃない、実は俺の知り合い……
というか母さんの友達が今、簪用の武装を作って貰ってる、聞いた話
だと2日後には届くことになってるからそう気に病むことはない』
「そうだったんだ……よかった……」

簪はそれを聞いてほっとした顔をするが直ぐに何か思うことがある
のかさういった顔つきで俺を見つめる。

「優希、夢現にちゃんと改良すれば……私にカートリッジシステムを
扱うことってできる？」

『……まさか簪、お前』

「うん、夢現にカートリッジシステムを取り付けてほしいの」
真剣な瞳で俺に訴える。

簪は本気だ……確かに簪の技量は目を張るものがある。きつと
カートリッジシステムも扱うことが出来るだろう。

しかし……そのためには機材が圧倒的に足りない……夢現がここ
まで壊れてしまつては一から作り直すしか無い、勿論時間は幾分かか
かるしクラス代表戦には間に合わない……でも

今の簪の決意に応えないのは……ここまで付き合ってきた俺に
とって見捨てることなんて出来ないよな！

『わかった、だけど機材がないから此処では絶対無理だ、カートリッジ
システムを扱ってる知り合いのフリー技術者に俺から頼んでみるよ』
今回、俺の不注意もあるけどマリエルさんも少しは非がある、何と
か協力を取り付ける。

「うん、ありがとう！優希！」

簪が笑顔で感謝され、それを見て俺も自然と頬緩めた。
笑顔は良いものだ絶対に守っていかないとな

簪SIDE

漸くこの日が来た

クラス代表戦当日、既に試合を観戦したい生徒達でアリーナの席は
埋め尽くされている。

選手の準備室、そこで私は対戦の組み合わせができるのを優希と一

緒に待ちわびていた。

「いよいよだな……簪、緊張してるか？」

『うん、してるよ……でも……優希がみっちり鍛えてくれたから大丈夫』
「そうか……にしても……」

優希に一昨日からみっちり届いた武装を使つての戦闘方法を教え
てくれたから戦えるはず……だけど優希こつちを見て顔を赤くして
目をそらされる。

『優希？』

「ISスーツってどうしてこう……」

ISスーツ……はっ！

私、今優希にISスーツ姿見られてるんだった。今更意識すると
……恥ずかしいよ

「わ、悪い……あつ！対戦表出たぞ……マジかよ」

なんか、話が逸らされた気がする……でもいいか

そして私は対戦表を見て優希が驚いた理由を理解した。

1 回戦目

2 組 VS 4 組

2 回戦目

1 組 VS 3 組

私が戦う相手……協定仲間中国代表候補の鈴だ

六十六話 『簪VS鈴 仲間同士の戦い』

NOSIDE

「鈴と戦うのか」

モニターに映る対戦表を、みて優希はぼつりとそう呟くと隣に居る簪は無言で頷く。

鈴と簪互いに織斑一夏を打倒するため協定を組んだどうし……

しかし、織斑一夏に戦えるのは勝ったどちらか、負けたものは勝った者に託すしかない。

簪が鈴か……どちらに織斑一夏と戦えるチケットを手にするのは……

「優希……私勝つよ……だから……見ていてよね」

そう簪は鈴に勝つと優希に意志を示し、その姿を見ていてくれと頼む。

「分かってるよ、それじゃあ俺は観客席で見てるよ」

簪も出撃準備に取りかかるだろうと優希は準備室から退出し簪も少ししてから準備室から出てカタパルトデッキへと向かっていった。

《まだ一ヶ月しかしてないけど……色んなことがあったな……》

カタパルトデッキへと向かう通路、簪はこれまでの経緯を思い浮かべる。

《最初は姉さんに言われて打鉄式式の開発に躍起になって……誰にも頼らずに頑張ってた》

《だけど、今はもう違う、本音がある、セシリアがいる、鈴が居る……他にも支えてくれたみんなが居る……そしてなにより優希がいる》

そして今はみんなに囲まれ支えてくれたことで今の自分が居ると心の中で実感し簪は、その中でも一番心に残ってる優希のことを思う。

《優希……あの日私を助けてくれた、私のヒーロー……強くて優しく……誰よりも頼りになって……打鉄式式の開発にも優希の力が無かったら絶対に此処まではたどり着けなかった》

簪の心は既に優希への好意でいっぱいだった。

《だから、優希に私の姿を見て欲しい……まだ私には優希と隣に居るこ

とは出来ないけど、いつかきつと…!》

隣で歩みたいから、そう簪は決意すると右手の中指にはめてあるクリスタルの指輪、待機状態の打鉄式式を突き出す

「いこう！打鉄式式！」

そう、簪が叫ぶと答えるように打鉄式式が起動して機体が展開し装着した。

「更識簪、打鉄式式…いきます！」

そうして簪はカタパルトデッキからアリーナ内へと飛びだっただった。

少し時間は遡り、観客席へと向かった優希は元から取ってある席の元へ向かうと本音達がアリーナ内がよく見えるところを確保していた。

「本音、お待たせ！」

「あ、やーくん、はい、やーくんの席取つといたよ〜」

「悪いな今度ジュースでも奢る…さてと…いきなりの対戦カードだな」

「そうなんだよね、更識さんと凰さんが当たるなんて…私達どつちを応援すれば良いんだろう」

本来なら優希が本音達と近くに居るだけでも本音達が批判される所だが、それは無い

なぜなら此処にいる観客は全員、本音や鈴達の協力により優希の誤解を知っている人達、そのためこの中には優希を批判する者は誰もいなかった。

そして本音が取ってくれた席に優希は後日、お礼に奢るといった後、座り、改めて対戦表のことを口にするると清香がどつちも応援したいという気持ちがあったためお互い戦うふたりのどちらを応援すべきか悩んでいた。

「…両方応援しましょう…どちらか片方というのも、嫌なものでしょうから」

「そっか、それじゃあ凰さん！頑張れ!!」

「更識さん！フアイト!!」

「かんちゃんもリンリンも頑張れ〜」

悩む清香に優希は、両方応援するという方法を提案し、その提案に乗った本音達は両者とも応援する。

「さて、見せてもらうぞ、簪」

そう思いながら優希はアリーナ内を見つめて試合が動くのを待ちわびた。

「まさか、いきなりあんたと当たることになるなんてね……」

「それはこっちも同じ……でもそういう確率はしつかりとあった」

アリーナ内では試合開始の合図が出ていないため簪も鈴も軽い話し合いをして初戦で当たったことについて話し合っていた。

「鈴、私、勝つから」

「ふっ……そうはいかないわ、簪！勝つのは私よ！」

お互い勝つと意気込んだ直後、試合開始のブザーが鳴り響き、始まったことに観客は歓声を上げ、開始直後鈴は双天牙月を取り出して構えた。

《さてと、簪の主力武装である夢現は壊れて出てくることは無いけど……優希が新しい武装を取り寄せたのよね……それがどんなものなのか……本人と優希しか知らない……ここは警戒すべきね》

《鈴が踏み込んでこない……私の武装を警戒してる？今私が見えるのは新武装と優希がギリギリ間に合わせた山嵐のみ……山嵐はただミサイルを飛ばすだけだから牽制用にしかなれない、だったら……鈴の意表を突くのが一番良い!》

お互い開始直後に頭で相手の動きを分析して、先に動き出したのは簪だった。

簪は打鉄式式のスラスターを噴かせて鈴に接近する

《間合いを詰めてきた！……ってことは武装は近接系の武器ね！ならこっちが有利!》

一度は優希と打鉄式式の初稼働をしているところをしつかりと見ているため近接戦ではこちらが有利と思った鈴は簪との間合いを見

て、自分の射程内に簪が入りきると双天牙月を上段から一気に振り落とすとした。

《いまだ!》

双天牙月が振り落とされている中簪は仕掛けてきたのを見て漸くバースロット拡張領域から新しい武装を取り出し、出された武装を見て鈴は目大きくして驚く。

《ハンドガン!?!》

簪の新たな武装、それは刀や槍のような近接武器ではなく、中距離のハンドガンが2丁。

簪は片方のハンドガンのサイト辺りで双天牙月を抑えて、軌道を剃らすと直撃を剃らされて隙を作ってしまった鈴にもう片方のハンドガンを至近距離で鈴に突きつけ射撃する。

「くっ!のー!」

ハンドガンのエネルギー弾が数発当たるも直ぐに鈴が双天牙月で反撃し簪を避けさせて距離を取らせる。

「まさか、槍や刀とかじゃなくて銃なんてね」

「うん、右手の銃が如月、左手の銃が睦月だよ」

ハンドガンであったことを今でも驚いている鈴に簪はハンドガンの名称を言う。

「なるほどね、結構良い名前じゃない」

「うん、この睦月と如月の使い方、優希にみっちり鍛えられたから…ごめんだけど鈴、私が勝つから!」

「…そういうのは勝つてから言いなさいよ!」

二つに名付けられた名前を褒める鈴だが簪は早くも勝利宣言をすると少し笑って、鈴はその言葉に対して言い返して簪に迫る。

鈴と簪との戦い、それはまだ始まったばかり……

六十七話 『勝利の女神はどちらに微笑むのか』

遂に始まったクラス代表戦、簪の意表を付く作戦で鈴から先手を取ることになった。戦いを優位に運んでいた。

その光景を見ている優希達、するとセシリアが気になることがあるのか視線を優希に向けて訪ねる。

「優希さん、簪さんの睦月と如月…あの二つで鈴さんの攻撃を逸らし続けていますけど、普通なら簪さんの武装が壊れても可笑しくありませんこと?」

「ああ、それは俺が打鉄式式にエネルギー収束システムを積んだからだ」

優希がさらりとその理由を述べたがセシリア達にとっては耳を疑う内容だった。

「ちよ、ちよっとお待ちくださいませ、あのシステムは優希さんのリヴァイヴに積んでいるはずですよ」

「え?何でって…あれOSにそのシステムを組み込めばどんな機体にも使うことが出来るものぞ」

「そ、そんな…」

驚きの言葉に啞然とするセシリア。

優希自体そこまで凄いものではないと息巻いているが、第三世代の特徴はイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵装の実装…

優希が付けたエネルギー収束システムがどの機体にも使うことが出来ると言うことは…つまり…

優希がその気になれば第三世代の量産など簡単にできるといふことであつた。

「なんで、そんなに驚いてるんだ?セシリア…まあ取りあえず、打鉄式式にはそれを組み込んでから簪はシールドエネルギーを鈴の双天牙月が当たる箇所を強化して攻撃を捌いてるってことだ」

驚いて固まったセシリアを他所に優希は分かるように本音達に説明をするが本音はまだ気になることがあるのか優希に訪ねてくる

「でも〜かんちゃんよく、りんりんの攻撃を捌いてるよね〜どうして

なの〜」

「ああ、それについては俺が鍛えたから：簪自体、射撃に関しては言うまでもなく上手い、だけど射撃型は距離を詰められると不利になるだろう？だからこそ、近接タイプの対処の仕方、捌き方を重点的に鍛えたんだ」

アリーナで練り広げられている簪と鈴との試合、それを見て捌ききっている、簪のことを訪ねられ、優希は短時間で行った主な練習が近接武器の捌き方であったことを明かし、それであれだけ捌き方が上手いことを納得する本音達、しかし優希はアリーナで戦う簪と鈴を見て、難しい顔で見つめていた。

《もう既に開始してから15分は経つ：今は簪が優勢だが、鈴は勘で覚えるタイプだ：時間をかけすぎると厄介なことになる：簪：頑張れよ》

心の中で優希が簪を心配する中、その簪は少し息を荒くして、鈴の出方を待っていた。

《不味い、そろそろ鈴の攻撃を捌ききれなくなってる：時々龍砲も飛んでくるけどそれは優希の言ったとおり、狙わせないように移動し続けてなんとか回避できた：立て続けの捌きでシールドエネルギーももう後半分もない：そろそろ決めていきたいけど：》

そろそろ決着をつけたい、簪であるが中々その機会が来ず、馳せる気持ちを抑えながら、鈴に視線を外さない。

「やってみるか、山嵐、弾数12発、前方に向けて発射！」

簪は意を決して打鉄式式の山嵐12発を発射させ、発射し終わると自身もその後について鈴に迫る。

「当たるわけないでしょー！」

前方から来る単調に来るミサイルに上空へと逃げようとする鈴だが、鈴に当てるのが簪の狙いではなかった。

「いまだー！」

そういつて、簪は睦月で鈴ではなく自らはなった山嵐のミサイルに向けて射撃し鈴の目の前を爆発の煙で覆う。

「目眩まし!?!でもー!」

《きつと、この煙の中から私の懐に入ろうとするはず、出てきたところを龍砲で落としてやるわ》

これにより簪の姿を捉えることが出来なくなった鈴だが、少し後方に下がり、簪の出方を待つ。

そして鈴の左手から煙から突き出てくるものを鈴はハッキリと確認すると少し笑みを浮かべながら龍砲の照準を合わせて龍砲を放った。

「これで……っ!?!」

龍砲を放ち、当たるかと思えたその時、鈴は目の先にあるものに目を疑う。

「あれは簪の持ってた銃!?!」

左手から出て鈴の龍砲を受けたのは簪……ではなく簪が持っていた二丁拳銃の片割れである睦月。

では簪は何処に……そう鈴は思考を巡らせようとすると鈴の正面からスラスターを噴かせて迫る簪の姿を捉えた。

「正面!」

《睦月を囷に上手く接近できた、なんとか如月を当てる》

正面から鈴に迫る簪は利き手に持っている如月に力を入れながら着実に鈴へと近づく。

「中々やるわね……でも、遅いわ!」

ここままで苦戦を強いられたことに簪を賞賛する鈴だが、煙で目眩ましの時後方に下がったのが幸いし接近する簪への迎撃する時間をあたえることになる。

《駄目だ、私が攻撃するより先に鈴の攻撃が振り落とされる。でも諦めて……》

「なるもんかあ!!」

簪は鈴の攻撃が先に当たることを予測しながらも勝利の先にある姉との決闘、そして自身の心の氷を溶かしてくれた大好きな優希のため、簪はスラスターにエネルギーを溜めるとそれを解き放ち一気に加速する。

一気に加速したことにより鈴の攻撃を躲すことに成功し直ぐさまスラストを逆噴射して減速しながら鈴の右側面から背後、左側面へと回る。

《この一撃に全てが決まる、次なんてない……だから出せる全ての力をこの一撃にかける!》

「はあああああっ!」

未だ余る速度を利用して如月を鈴に向けて振り回す。

その時の如月は銃口にエネルギーが収束し尖った刃が生成されそれが甲龍のシールドとぶつかり、数秒拮抗したのち甲龍のシールドが砕かれ、簪はすかさずに鈴の横腹に如月を突きつけた。

「……………」

「……………」

如月を鈴に突きつけて互いに無言な時間が過ぎる。

「……………私の……………負けね」

「うん……………私の勝ちだよ」

懐に銃を突きつけられた鈴は潔く負けを認め、簪は勝利を確信し如月のトリガーを甲龍のシールドエネルギーが0になるまで引き続けた。

「勝者、クラス1-4、更識簪」

機械のアナウンスがアリーナ中に聞こえ渡り、その直後、大勢の人の歓声がアリーナを包み込んだ。

六十八話 『学生最強の妹VS世界最強の弟／決別』

クラス代表戦、第一試合、4組の簪と2組の鈴

お互いの国の代表候補ということもあって専用機同士の戦いは熾烈を極め、4組の簪が勝利を手にした。

簪の勝利に湧き上がる歓声、優希達のいる観客席でも殆ど2組、4組の生徒ばかりだが互いの健闘を讃えて歓声を上げていた。

「やった〜！かんちゃんも勝った〜！」

「凄いよね、更識さん、それに最後の加速つてもしかして……」

簪が勝ったことに喜ぶ、本音にそれに便乗して清香も最後に行った瞬時加速に見覚えがあったため優希に向かって訪ねた。

「あれは瞬時加速イグニッション・ブーストだな、中々の熟練者しか扱えない技能だ、放出するスラスタのエネルギーを溜め込んで放出することで、それに比例する爆発的な加速を得る。普通なら直線しか無理な瞬時加速イグニッション・ブーストだけど簪はそれを無理矢理だが旋回して鈴の脇腹に食らいついたな」

《と、説明したのは良いが俺的には瞬時加速イグニッション・ブーストより最後の甲龍のシールドを破壊した簪の一撃……間違いなくエネルギー収束システムの応用によるものなんだが……俺、あれは簪にはまだ難しいだろうから教えてないんだけどな……咄嗟にやったとしか思えないな》

優希は瞬時加速イグニッション・ブーストについて説明をしたが心の中ではそれより、簪が偶発的に起こしたエネルギー収束システムの応用のほうを考えていた。

「まあ、それは後で良いか……さてと一度、簪達に会ってくるかな」

簪のあの一撃のことは頭の隅に置いておき、優希は健闘した二人を労おうと席から立ち上がり、準備室へと向かっていった。

そして、鈴に勝利した簪は準備室のベンチで少し休息して勝ったことを思い返す。

「勝った……私……自分で作った打鉄式で勝ったんだ」

優希と本音を初め協力者の尽力で完成した打鉄式、簪は勝つことに不安があつたのだが、結果は勝利を手にすることが出来たため、ご満足な表情を見せる。

「簪？いるか？」

「あつ、優希！」

部屋の外から優希の声が聞こえてきて、直ぐに返事をする。優希は飲み物を三つ持ったまま扉を開けて部屋に入ってくる。

「優希！」

「ちよつ、簪？」

優希が入ってくると簪は勝ったうれしさを分かち合いたいのもあつて優希に抱きつく。

「優希、私、勝てたよ」

「ああ、それはよかったな……あと出来れば離れてくれないか？そのこんなところ誰かに見られたら……不味いし」

「え？あつ……」

喜ぶ簪だが、抱きつかれている優希は喜べる状況ではなく、顔を赤くして離れるようにと恥ずかしそうに言う。と改めて簪は自分がしたことを確認すると直ぐに優希が赤くした理由を察した。

簪が抱きついたことで優希と隙間もないほどに密着してその上、今はISスーツを着ているのもあつて更に簪の肌の感触が直に感じ取ることが出来てしまう。

それに気づいた、簪も一瞬で真っ赤になって自分の大胆な行動を恥ずかしく思いながら慌てる。

「こ、こ、こ、これは……その喜んでいたあまり、感情抑えきれなくなつて、優希が来たから、反射的につい体が……」

「お、落ち着け、なんか理論的な話になつてる」

簪の慌てているのを見て少し冷静になつた優希が簪を落ち着けさせようとする。

簪が真っ赤にして慌てているのが落ちつくのはこれから10分あまりしたときである。

鈴SIDE

負けちやつたわね……

初戦で簪に負けた私は制服に着替えてアリーナの通路をゆっくり

と歩いている。

本当は直ぐにシャワーを浴びたいところだけど……それはクラス代表戦が終わってからにするとして……まずは簪の所でも行こうかしらね

そういつて簪が居る準備室に向かおうと足取りを速めようもしたとき、後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。

「鈴！」

「っ！一夏」

私を見つけてこつちに駆け寄ってくる一夏……大方、負けて気を落としてる私を慰めに來たんでしようね

「あの……その……残念だったな……試合」

『そうね……』

本当は一夏と決勝で戦って叩きのめしたかったんだけど……それは簪に託すしかないわね

「安心しろ鈴、必ず俺が決勝で仇を取ってやるから！」

そう笑みを浮かべて宣言する一夏……何言ってるの？

「あんたが私の仇を取る？馬鹿じゃないの？」

「鈴？」

「あんた、私と簪の試合見てなかったの？簪のあの動き……恐らく、あんた対策の動きよ、近接武器しかないあんたが勝てるわけないでしょ！」

ちよつといらついてきた……直ぐに簪の所に行きたい

「大丈夫だつて！俺は千冬姉と同じ雪片を使ってるんだ……負けたりなんか……」

千冬姉つてあんたが千冬さんと同じわけないじゃない！

「無理よ、簪はあんたに勝った優希から直々に鍛えられてるのよ……あんたのことなんて想定されてるに決まってるじゃない」

いいかげん気づきなさいよ！あんたと千冬さんとは天と地の差があるってことぐらい

「また……八神……っ！なんであんなやつが……！」

優希の名前を口にした瞬間、一夏の顔つきが変わった。その表情はもう昔の面影なんて何処にもないくらいに

『なんで、鈴まであいつに肩を持つんだよ！あいつは女を平気で痛めつける最低な奴なんだぞ！それなのりに…』

優希の悪口をペラペラと…もう頭にきた。

多分私の名前を言い切る前に私の手があのバカの頬全力で叩き倒して、バカは叩かれた頬手で添えながら、啞然とした表情で私を見ていた。

『最低よあんた…!!』

もう、私が好きだった一夏は見る影もない…ただの言い訳をする子供にしか見えない…

「どうしてだよ…鈴…」

叩かれて狼狽える一夏、私は一々構う必要もないと一夏に背を向けて歩き出す。

『……それじゃあ、私行くから……どうせ叩かれた理由やこの前約束のことも分かってないんでしょ？別に良いわよ、わからなくて……でももう一人の幼馴染みぐらい守ってやることね…あんたにはそれぐらいがお似合いよ』

……一夏……あんたのことで少しわかったことがある……気づいてないけど、あんたは…優希に嫉妬してるのよ

『さよなら』

そういつて私は後ろにいる一夏に遠ざかる。

………さよなら一夏…

さよなら…私の…初恋……

六十九話 『学生最強の妹VS世界最強の弟／開幕』

NOSIDE

一夏と話し合いが終わって10分ほど漸く簪の準備室にやってきた鈴

中に入るとそこに居たのは優希だけで元々訪ねようとしていた簪の姿は何処にもない。

「鈴、お疲れ…簪に会いに来たのか？簪なら少し前に次の試合に向けてカタパルトデツキで式式の調整中だ」

「そっか…」

優希は簪がすれ違いで出ていったことを説明するが鈴は先程の一夏のやりとりにまだ思うことがあるのか俯いていて表情が暗い。

「…なんか…あのバカとあったのか？」

鈴の表情から優希は察して、少し遠慮しながらも俯いている理由を訪ねる。

「…ちよつとね…ここに来る前に一夏とあつてね…全部…終わらせてきたの」

暗い顔つきで話し始める鈴、それを優希は静かに耳を傾ける。

「私…一夏のこと好きだったのよ…昔、あいつに虐められてたときに助けてもらって…それで仲良くなってね…いつの間にか好きになつてた…鈍感で唐変木な所は今も変わらないけど…いつも真っ直ぐ前向きでお節介なところに…けど…今のあいつは…もう昔の一夏じゃなくなつて…力に溺れて、何も見えてない」

一夏のことを語る鈴、昔の一夏のことを話した後、今の一夏のことを話し始めるとその瞳には涙が貯まっているのが分かる。

「力はただ力…力を求めるものは愚者、理想の夢だけを追うものは哀れな夢想家、力と理想…二つのものを持つものこと真の強さを持つものである…だから力だけを求めるな…理想だけを追い求めるな…力と理想二つを追い求めてこそ真の強さを手にする」

「…誰かの偉人の言葉？」

詩人のように語る優希に、何処かの偉人の言葉かと訪ねる鈴、それ

を優希は横に首を振って否定して、昔のことを思い出しながら話した。

「いいや、四年ほど前に亡くなった……ある男性の言葉だよ……あの人のこの言葉は今でも清明に覚えている」

《そうでしたよね……ゼストさん》

あの日地上本部でのシグナムと一騎打ちをする前……傍に居た優希に語った言葉、それは今でも優希の心に残っていた。

「……………それと織斑のこと……恐らくは俺に……嫉妬してるんだろ?」

ゼストのことを思った後、優希は一夏のことで一夏は優希に嫉妬していることを見抜いており、それを鈴に指摘するとやっぱりという顔で頷いた。

「分かるわよね、あんたなら……さつきの一夏とのやりとりでよく分かったわ……多分一夏はあんたが羨ましいのよ……強いから……もし自分にも優希ほどの力があれば守りたい者を全て守れるって……そう思ってるんじゃないかしら?」

「……………それは間違いだ……俺の力でなんて、たかがしれてる……精々両手いっぱいにか守れるもんなんてないさ」

戦いを……JS事件を経験してわかる優希は自分は完全無欠ではないと言いきり、優希は鈴を見るとまだ落ち込んでる様子がハッキリと分かり、咄嗟に鈴用に勝っていたジューズを鈴の頬につける。

「う、うわあ!?!な、何するのよ」

「湿っぽいのもやめやめ……過ぎたことに囚われてたら中々前に進めないぞ」

優希は鈴を励ますとジューズを渡し、渡された鈴はありがとうとお礼を述べる。

「さてと、観客席に戻るか、鈴も来るだろ?」

そういつて優希は鈴に向けて手を差し出し、鈴も少し考えた後、優希の手を取り観客席へと向かった。

そして観客席に戻るとその直後、歓声が響き渡り優希と鈴は何かと思ったがアリーナの方を見ると第二試合の勝者が決まった直後だと

理解した。

「勝者、クラス1ー1、織斑一夏」

アリーナ内で立っていたのは白式を纏う一夏の姿、それを見て鈴は少しだけ表情を歪ませるがそれを見かねた優希が安心させるように頭に手を当てて落ち着かせ、本音の元へと戻る。

「あくやーくん、それにりんりんという〜」

「あつーお疲れさま、凰さん！さっきの試合凄かったよ！」

本音の元に辿りつくると本音が優希達に気づき、声を上げると続けて本音の声で気づいた清香が先程簪と戦っていたことを労いの言葉を言う。

その後感謝言葉をかけられた鈴は軽くお礼を述べて空いている席に座ると誰もいないアリーナ内を見る優希達

「…いよいよか…まあ俺の中じゃあ予想通りの展開だな」

「なによそれ、それは私が簪に負けるって予想してたの？」

遂に決勝と優希は頭の中でイメージした通りにことが進んでいることに頬緩ませたが、隣に居る鈴はその予想に不服を申し立てる。

「いや、鈴と簪の方じゃなくて…織斑の方…まさか訓練機に負けるほど弱いわけじゃないからな」

不服に思われた鈴に優希は簪達の方ではなく一夏の方だと指摘して、その理由も述べると本音は何処か困った表情で優希を見てきた。

「それがね〜おりむーさっきの3組の子に…シールドエネルギー半分くらい持っていかれたんだよね〜」

「……は？」

本音から明かされた衝撃な事実には優希は呆気にとられ、それに続くように鷹塚と清香も話し始める。

「うん、3組の子、ラファール・リヴァイヴを使ってたけど……」

「織斑くん、射撃武器に結構苦戦してたよ？」

「……」

ふたりの供述に優希は右手を目を隠すように顔に添え顔を上に向けて、溜め息を溢した。

「……………いや…まあ…まさか…織斑…そこまでか…」

「おりむーの白夜って射撃武器ないのいたいのね〜」

「どうして、織斑くんの機体に搭載されてないんだろう」

《そりゃあ、製作者の……気まぐれだろうな》

まさか、織斑がそこまで弱いのかと優希は少し哀れみ、本音と鷹霖は射撃武器について話し合い、それを聞いて製作者の気分だろうと心の中で優希はまた溜め息を付いた。

それから数分した後、決勝戦が行われようとしていた、既に簪と一夏も互いの打鉄式式、白式を身に纏って、対峙していた。

《漸くこのときが来た、織斑一夏あなたには直接的にも間接的にも色々恨みがある……悪いけどここで鈴のことも入れて恨みを全部晴らす!》

簪は睦月と如月を持つ手の力を強めて、一夏を見据え、対して一夏も簪を見据えていたがその時、管制室から通信が入る。

「聞こえるか織斑」

「千冬姉? 「織斑先生だ! 馬鹿者!!」 うぐつ!」

「全く……更識妹の機体、打鉄式式についてだが……恐らく機体性能から見て第三世代型の中では一番性能が良いと見ていい、武装もデータベースにあるものとは違うが昨晚登録された新型の武装だ……十分警戒して当たれ……」

「ああ、分かっている、でも、こっちは千冬姉と同じ雪片があるんだ……負ける気なんて……「自惚れるな馬鹿者!!」」

「先程も訓練機相手にそれで足元を掬われていたのを忘れたか……それと……いや良い……織斑、精々頑張ってみろ」

《流石に倉持技研のことは避けるべきか……一夏のコンディションを下げるやもしれんしな》

そんな姉弟の会話があり、最後に打鉄式式の出所と経緯を説明しようとしたがそれは一夏の精神面に影響を及ぼすと考え織斑先生は口を閉ざした。

「なんだったんだ?……まあいいか」

一夏も織斑先生が言いかけたことに気にしたが直ぐにどうでも良いことだろうと気にするのを止めて簪のことに集中する。

そして、互いに戦闘準備完了し数十秒後……試合開始のブザーが鳴り響いた。

七十話 『学生最強の妹VS世界最強の弟／圧倒』

開始のブザーが鳴り響き決勝戦が開始したことで歓声が鳴り響き、開始直後に一夏が雪片式型を構えて簪へと突っ込む。

「また、開始直後に一直線！」

「あいつ……前の戦いで何も学んでないのか……」

突っ込んでいく一夏を見て清香が思わず声を上げて、見ている優希も顔に手を当てて、自分と戦っても全く同じことをしている一夏の学習能力の無さに溜め息を溢す。

「そんな動き……」

格好の的だとばかり簪は睦月と如月で一夏に向けて射撃。

放たれたエネルギー弾は一夏の周りを掠めたり直撃、雪片式型撃ち落とされたりと優希と戦った以前よりかは動きの切れがよくなっているがそれでも白式に被弾した攻撃により白式のシールドエネルギーは着実に削れていく。

「間合いが詰めたこれで!!」

捨て身で間合いを詰めた一夏は白式のワンオフ・アビリティー、零落白夜を発動して雪片式型の刀身が変形してエネルギーの刃が放出されると簪に目掛けて振るわれた。

しかしガンナーである簪は接近されても取り乱すことはない、如月で雪片式型のフレーム部分を強く弾いて雪片式型の軌道を変更させ悠々に一夏の攻撃を避けるとすぐさま手の空いている睦月で至近距離での弾丸を放ちまた白夜のシールドエネルギーを削ることに成功する。

「くっ！」

雪片式型を外され……零落白夜のデメリットでシールドエネルギーを減っていき、その上簪のカウンターも決まり、簪の優勢は周りから見ても明らかであった。

「くそおー」

外したことで一夏は少々躍起になって雪片式型を振るうが元から

優希によって回避と捌き方を重点的に教え込まれた簪にとって、一夏の攻撃は避けるに容易いものであった。

「あのバカ当たらないから躍起になってるな」

「白式の零落白夜は発動中はシールドエネルギーが減っていくデメリットがあります……あれでは、ただ自身の首を絞めているようにしか見えませんわ」

一夏の動きを見て一夏の心境を見定める優希にセシリアは白式の最大の欠点であるシールドエネルギーの消費していつているのを見て自爆行為だと指摘する。

「はあ……はあ……くそー！どうして……当たらないんだ」

遂に肩から息を吐きながら、前線当たらないことに苛立つてきて、それを見て簪は冷たい視線で一夏を空から見下ろす。

「織斑一夏……あなたは勘違いをしている」

「なんだと!？」

「あなたは確かに並みの人よりかは強いかもしれない……でも上には上がいるってこと……例えば優希とか」

「っ!!また、優希かよ!どうして、あんな奴を庇うんだよ!あいつは平気で……」

「それはあなたの見解!私は優希と一緒にいたから分かる。優希は……あなたみたいに無闇に力を振り回す人じゃない!」

一度、戦闘を止めて口論になる二人、優希の名前が出てくると一夏は怒りをあらわに優希が悪いと主張し、それを聞いた簪は声を荒げて反論した。

「この前の優希が女性三人に暴行したって言う情報もそう!もし優希が女性三人を気絶させなかったらもっと被害が出ていたかもしれない、現に優希は死にかけたし、巻きこまれそうになった子供もいた!!」

「そ、それは……優希が何かして……」

「犯行に及んだ三人は以前にバニングス社で優希を連れ攫おうとしたIS委員会の人達!下手をすればバニングス社にも被害が及びそうで優希が倒した人達よ!」

…観客席では……

「ゆ、優希さん!!それは本当なのですか!？」

「……簪のバカ……」

……

……

「で、でも、普通にIS委員会なら付いていけば済む……」

「モルモットになれって?そんなの認めるわけないじゃない!」

「モルモット!?俺はそんなこと……」

なにをいつているのかわからない、一夏、だが簪の怒りは収まらず、睦月と如月の銃口を一夏に向け、通常のエネルギー弾より大きいエネルギー弾を生成する

「言ってるの!あなたは他人のことなんて理解してない……理解しようともしない!!」

「そんな人が他人のことを語るなあ!!」

簪の怒りの言葉と共にエネルギー弾を発射しようとトリガを指で引こうとした瞬間……

天上より砲撃がアリーナへと降り注がれた。

七十一話『乱入者（前編）』

優希SIDE

簪と織斑が口論になっているのを見てみると、簪が声を荒げて睦月と如月をでエネルギー弾を収束しているのを見て勝利を確信したのも束の間、ロンギヌスから警告が伝えられる。

「マスター！上空より高熱源反応！アリーナへ向かって……来ます！」

『っ！』

ロンギヌスの警告で席から立ち上がり上空を見上げると直後アリーナのシールドを貫通しレーザーいやビームというのが正しい……それがアリーナに着弾する。

「な、何?！」

「地震?！」

いきなりのことで慌てる、鷹月さんと相川さん、そんな二人に俺は振り返って、分かっていることを手短かに話した。

『いいや、外からの攻撃だ!』

明らかに何かが入ってきた……IS学園に……恐らく単騎で……！

「試合中止！織斑！更識！直ちに退避しろ！」

ビームによって焼かれた地面を見据えながら、乱入者のことを模索していると突如、織斑先生の退避アナウンスに観客席の防壁が降りて、アリーナ内の様子が見えないそれが観客席にいる全員の不安を駆り立てて、我先に出口へと集まっていく。

『くそーやっぱパニックになったか!』

アリーナ内の様子が見えないから状況が全く分からない……何か何か手を考えないと……

「優希さん！悠長にお考えなさってないで私達も援護に向かいますわよ！」

「そうよ！優希！こんなところで突っ立ってないで、簪を助けに行くわよ！」

考えているとセシリアと鈴に簪の援護に向かおうと進められるが………確かそうだな……

『わかった、直ぐに行こう!』

取りあえずあの人混みに入ってカタパルトデッキに向かわないといけないんだが、まだ出口の前で立ち往生していて俺は不思議に思う。

すると出口へと向かったであろう鷹月さんと相川さん、そして本音がこつちに戻ってきた。

『どうした?』

「大変だよドアがロックされてて出られない」

そういうわけか!

どうやら乱入者は相当のやり手のようだ、一瞬でセキュリティをクラッキングしたと思われる。

「……駄目ですわ、ISネットワークでの通信も出来ません、恐らく先程の侵入者がジャミングをしているのでしょう」

セシリアはブルー・ティアーズで管制室への通信を試みたようだがジャミングにより通信もできないと伝え、俺は少し考え、考えをまとめると、真剣な表情でセシリア達に話し始める。

『先生達とも連絡が取れない以上独自で動くしかない、まず、セシリア、鈴は直ぐにアリーナ内で戦う簪の援護、例え打鉄式が無傷だと言っても簪一人だと分が悪い、本音、鷹月、相川は逃げる学生の避難誘導を頼む』

「は、はいー」

俺の真剣な表情を見たこともなかったためか相川さんが戸惑いながら、返事を返してくるが、次に鈴が訪ねたいことがあるのか俺に向かって喋る。

「優希はどうするのよ」

『俺はまず扉をぶち破る……避難ルートを確保したら直ぐに俺もアリーナへ向かう』

「ぶち破るってどうやってよ」

鈴がどのように扉をこじ開けるか訪ねてくると俺は直ぐさま、出口

へと群がっている生徒達に大声で叫んだ。

「全員！出口から離れろ!!」

そう生徒達に一喝すると、出口までの道を開けて、出口の扉前に来るとリヴァイヴから武装を取り出す。

取り出したのは2本の短剣

しかしただの短剣ではない……これはの名称はアーマーシユナイダー……装甲車などの装甲を使った、かなり耐久性のある短剣で切れ味もかなりいい。

「そんな武装出しても……短すぎるわよ!」

そこは鈴の言うとおりに、短剣なため刀身がかなり短い……それでどうするのかという……

『さて……やるか』

俺はアーマーシユナイダーを少し軽く振るった後持つている手を強く握り、アーマーシユナイダーの刀身からエネルギーが溢れて、それは形を変えて通常の刀ほどの長さのエネルギーブレードを生成するとドアを切り裂いて出口をぶち開ける。

『よし、これで出られるはずだ、直ぐにみんな避難しろ……みんなどうした?豆鉄砲くらった鳩のような顔して』

「ゆ、優希……なによ!それ!短剣の刀身が伸びるなんて聞いたことも無いわよ!」

鈴がエネルギーブレードのことを驚きながら指摘すると全員思っていることが同じようで、うんうんと頷いている。

『その事を話すはまた今度だ、今は避難が先だ!』

そう言うと、生徒たちが避難を開始し始め、避難誘導のため本音達が避難していく生徒達の元へと向かっていき、残った鈴とセシリアは直ぐにカタパルトデッキへと走って向かっていく。

さてと、取りあえず、簪の元へ行くには時間がかかる……それまで耐えてくれれば良いが……っ!いや一方的だが伝えることはできるか

そう思い俺は思いついたことを実行しようと一度深呼吸して取り組むのであった。

七十二話『乱入者（中編）』

簪SIDE

『何!?!』

織斑一夏と戦っていると突如、ビームだと思ふ光線が降り注ぎ、アリーナのシールドを貫通して地面に着弾した。

それと同時に突き破ったシールドから何かが入ってきてきつきのビームで舞った煙の中に入っていく。

「試合中止!織斑!更識!直ぐに退避しろ!」

すると織斑先生のアナウンスがアリーナ中に響き渡り、観客席はアリーナ内を隔てるシエルターが下ろされる。

もう試合どころじゃない……ここは一旦引いて……いや足止めしない……

恐らくみんな、大慌てで避難しているはず、そのため混雑すると思うから……乱入者が暴れて死者が出ないように私が足止めをすべきだろう。

突入部隊も来るとは思うけど……時間はかかる……そう思い睦月と如月の持つ手に力を入れて乱入者見る。

全身装甲で、武装は両腕から放たれるビーム兵器……のみと見て良いだらう。

だけどあんなの一体どこから……ビーム兵器など何処も開発が進んでいない技術だ。

本当は極秘裏に開発されていてお披露目で襲撃してきた……というのも考えるところがある。

もし、開発元がバレれば、ただでは済まないのは明白なこと……あまりにデメリットがでかすぎる。

考えるだけ更に分からなくなっていく謎……いや今は検索するのは後にしよう……それにしても

あの織斑一夏はどうして突っ立っているのだろうか……

『何をしているの織斑一夏、直ぐにピットに戻って』

「っ!更識はどうするんだよ!」

『私はこれを足止めする……あなたは邪魔だからさっさと行って』
「っ！女を置いて男が逃げれるか！」

この織斑一夏は!!

『状況を把握して！もう白式のエネルギーも心もとない癖に強がらないで！あなたがいると邪魔になる！』

「っ！」

きつく言ったのが堪えたのか何も言えない表情で私を見る。

そんな織斑一夏をよそに乱入者に集中して動きを見てみると乱入者はこつちに腕に内蔵されている銃口を向けていて、高出力のビームを発射してくる。

『っ!!』

しつかりと動きを見ていた私にとって、放たれたビームは簡単に避けることができ、先ほど放たれたビームについて少し模索する

あのビームの威力……多分、優希の使ってた砲撃より威力はある……！

ということはあれは以前、あの結界に閉じ込められて襲ってきた、仲間？……秘密を知った私を殺しに来たというのもあり得る話だ。

(……簪、聞こえるか?)

『えっ!!』

いきなり、優希の声の頭の中から聞こえてきた。打鉄式で移動しながら直ぐに辺りを見渡したけど乱入者とあの織斑一夏以外、目に映る姿はない。

(驚くのも無理はないがテレパシーの一種だ……一方的な話になるが取りあえず聞いてくれ)

テレパシー……優希、そんなものも使えるんだ……

(まず、上空から来た乱入者の性でアーリーナのシステムがクラッシュグとジャミングの性でドアが開かないしISの通信も繋がらない、俺は生徒の避難を優先するから簪の元へは直ぐには行けない……取りあえず、セシリアと鈴がそつちに向かっているから、それまで耐えながら相手の観察……頼む……それとロンギヌスに調べてもらった結果なんだが、乱入してきたものは無人機だ……遠慮なんていらぬ

全力で叩き潰せ)

えつと……つまり、セシリアと鈴はこっちに向かってきていて優希は避難誘導のために遅れる……それと乱入者は無人機？ってことで良いんだよね

(あ、追伸……織斑はまあ気絶なりさせて黙らせて良いと思う)

……うん、それは同感かも

取りあえずの優希から与えられた情報をから……教師陣営の援軍はあまり望めないと見て良いだろう……セシリアと鈴が来るのも後10分ほど……ならそれまでこの無人機相手に粘れば良いだけのこと！

そう、無人機と戦うことを決めて睦月と如月の銃口を無人機に向けて交互に射撃を放つ。

私が撃った攻撃に反応して回避行動をとり、躲しきると即座に先ほどより威力も弱まったが連射間隔が短くなったビームが私に向けて飛んでくる。

飛んでくるビームをよく見ながら回避し、お返しとエネルギー弾を飛ばす。

お互いそういった攻防戦を六分ほど繰り返しているが中々有効打といえる攻撃を与えられない。

『はあ……はあ……少し不味いかな……』

少しずつ私は息を上げ始めてる……しかし相手は無人機……そういうこともあって向こうは疲れなんて知らない、長期戦は不利になる一方だろう。

……けど……引くわけには行かない……絶対に！

優希SIDE

『よし……これで観客席の出口は最後か！』

セシリアや鈴達と別れて避難活動する俺は、閉じ込められている生徒を助けるためロックされている扉を切り裂いて……開ける作業を行っていて、今最後の観客席の扉をこじ開けることに成功する。

『慌てずに出るんだ！焦らなくても脱出することはできる！』

あふれ出てくる生徒達に俺は直ぐさま焦らせないように促して避難誘導していると見知った顔の生徒が俺を見て足を止める。

「や、八神くん……」

そう、あの噂で俺のことを批判したり避けたりしていた1組の生徒達。

やはり、まだ俺のことを恐怖対象で見ているためか怖じ気づいて俺を見ている。

『……取りあえず、ここはまだ危険だ……急いで避難するんだ』

……色々悪口なり恐怖対象で見られていたが……俺は気に病んでないし、今は非常時だ……そんなこと気にしている場合でも無い。

「どうして……私達……八神くんのこと……」

『あれだけ避けてたのにどうして助けるのかって？……はあ……助けることに理由なんているのか？それじゃあ俺はもう一度逃げ遅れた人がいないか確認しないと行けないから……外には鷹月さん達がいるからそこに行くといい……それじゃあ』

助けることに理由はないときっぱりと言い切って、急ぐ俺はもう一度逃げ遅れた生徒がいらないか確認するため、アリーナの通路を走りだした。

七十三話『乱入者（後編）』

簪SIDE

もう戦って何分経過したんだろう…

一つ一つ、油断もできないこの状況、緊張から体感時間が遅く感じる気がする。

そろそろ…鈴達が来ても良いだろうと…援軍を待ち望んでるけど一向にこない…

え？援軍ならアリーナ内にいるだろう？…いや、あの織斑一夏なら…

「……………」

地面に倒れてるよヤムチャってる

ことの顛末を話すと…

私は有効打を入れるため、広範囲に射撃して無人機の動きを鈍くしたの。

鈍くしたのを確認して、特大のエネルギー弾を収束して発射だけど、同じく機会を伺ってた、織斑一夏が飛び出してきた、案の定無人機には避けられた上、私のエネルギー弾の餌食に…

これは事件ではなく…事故だ…誤射だ…私は何も悪くない……悪いのは飛び出してきた織斑一夏が悪い。

そんなわけで邪魔者も消えたことで少しはやりやすくなった。

けど、特大のエネルギー弾を空振りになったのは痛いな既にシールドエネルギーも四分の一以下になっていて、早々に攻撃も出来ない…どうしたらいいかと悩んでいるが敵は待つてはくれず、ビームを速射して避ける私を追い詰めていく。

『くっ！』

うまく攻撃に転じないと…！

そうどうして攻撃しようか模索したのが悪手であった。

少し気を取られた私はビームの一発が背部スラスターに直撃、それによってバランスが崩れて地上に落下していく。

急いで立ち直ろうとするけど……敵にとっては絶好の的状態、無人機がビーム砲をこちらに向けてエネルギーを溜めているのがわかる。

駄目避けられない！直撃する！！

なすすべもなく、当たると予感し、恐怖する私だが、ビームは別方向から飛んできた青竜刀によって放たれるのが中止され、出てきた新たな敵を警戒しだす。

マゼンタと青い機体……甲龍とブルーティアーズ！！

『鈴！セシリア！』

「待たせたわね！簪！」

「ここからは私達も参戦ですわ！」

私の元にやってくる鈴とセシリア、二人とも双天牙月とスターライトmkⅢを持って無人機に対して臨戦態勢を取る。

「ごめん、デッキの扉をこじ開けるのに手間取って……遅くなった……援軍も時期に来るだろうけど……私達三人であいつをとつつかまえる？」

私達三人でやるのは賛成だけど……

『捕まえるんじゃないかって破壊する、あれには人が乗ってない……下手をすれば自爆する恐れもある』

「なっ!? ISは人が乗らなければ動きませんわよ!」

『けど、あれには人が乗ってるようには見えない……それにありえないってことは……ありえない』

「……確かに……あのIS不気味よね……わかったわそれじゃあぶつ壊す方向でやっていきましょう！」

『あいつの主な攻撃はビーム砲だけ！でも全力の砲撃に当たれば一撃で落とされると思う！』

「では、参りましょう！」

セシリアの掛け声共に私達は散開して無人機に反撃を開始する。

N O S I D E

アリーナ管制室では

「駄目です、通信及びアリーナ内のシステムは全て受け付けません」

山田先生が管制室のパネルを操作してシステムの奪還を試みるが全くもって駄目で、織斑先生もまたそれを聞いて苦い顔を滲ませる。

「くっ、ジャミングされていてはアリーナ内でどうなっているか確かめることすらできん……!」

「はい……」

何も出来ないことに苛立ちを覚える二人、所変わってアリーナの外……優希の活躍で外に脱出した生徒達が一纏めに集まっていた。

「鷹月・相川!」

優希も外に出てきて、辺りを見渡し鷹月と相川を見つけて二人の元へ駆け寄ると、二人も優希に気づいて近づいてくる。

「観客席を見て回ったがもう誰もいない、そっちは誰かいないやつい
なかつたか?」

「はい、2組から4組は鳳さん達を除いて全員いるのを確認したよ」

「いま、本音が1組の方を見に行ってる」

「そうか……」

《ならもう大丈夫だな……俺も簪達の援護に……》

優希は簪達のことを心配していると……慌てて本音が鷹月達の元へとやってくる

「た、大変だよーほーちゃんがどこにもいないってー!」

ほーちゃん↓篠ノ之箒

「え!?うそ!」

本音がほーちゃんと呼んだだけで篠ノ之のことだとわかったふたりは篠ノ之がいらないことに驚き、優希に探しにいらおうと優希のいる方向に振り向くと……

「あれ?八神くんは?」

「いない!?何処に行ったんだろう」

既に優希の姿は無く、辺りを見渡しても見つかることはなかった。

所変わり、アリーナ内鈴とセシリアも合流し無人機を追い詰めていく簪達。

セシリアがブルーティアーズで同時攻撃オールレンジで無人機の動きを封じ、そこに鈴が踏み込んで双天牙月で無人機に仕掛けるが、ブルーティアーズの抜け穴を潜り抜けられて近接攻撃が当たらない。

「こいつ、中々しぶとい」

「無人機にしぶといもない……」

中々落ちない無人機に少しだけ苛立ちを見せる鈴に簪は無人機だからと宥める。

「もう一度連携して追い詰めましょう私と簪さんで機体の動きを止めますわ。鈴さんはすかさず……」

セシリアがもう一度三人の力を合わせて無人機に畳みかけようと口になっていると彼女達を他所に自体は急変する。

「一夏あああああああつ!!!」

アリーナ中に響く声、放送室のマイクを通してその声はアリーナ内に響いていた。

「な、何ですの!?!」

「この声……まさか箒!?!」

突然のことでセシリアと鈴は戸惑いを見せるが鈴は声から声の主は篠ノ之箒だと直ぐにわかる。

「男なら!!この程度の敵勝たなくてなんとするか!!」

明らかに倒れている一夏に対して活を入れる激励……しかし当の織斑一夏というと完全に気を失っているため箒の激励も取り越し苦労に終わる……

しかしそれだけで終わることなく無人機は放送室に向けて右腕の銃口を向けた。

「不味い!あいつ!箒を狙うつもりよ!」

「急いでこつちに気を向けさせなくてはなりませんわ!」

「駄目!間に合わない!」

銃口が箒を狙っているのに気づき急いでこちらに気を向けさせようとするが既に遅く、今すぐにも右腕の砲撃が放たれようとしてい

た。

「あつ!!」

こちらに砲撃が来ることがわかり、箆も恐怖から後退るが避けることは叶わない……箆達も間に合わないと思うっていると……

どこからともなく大きい氷柱が飛来し無人機の右肩の関節部分をピンポイントに狙い無人機の右腕を切断させる。

「なっ!?!氷柱!?!」

「なによ。いきなり!?!」

突然のことで大きく戸惑う鈴とセシリア……しかし箆だけは違い身に覚えのあるこの事象に頭を回転させる。

《あの攻撃……もしかして……!》

「っ!ピットの上!誰がいるわ!」

鈴は指を指すと……ISが出てくるピットの上に黒フードを羽織、顔を隠した槍を持つ謎の人物が何かを投げたように左手を突き出しながら立っていた。

《あの槍は……優希のロンギヌス!!ということは……優希!》

謎の人物が持つ槍が優希のデバイスであることを確信した箆……そして、当の謎の人物……優希はというと……

《間一髪……中からアリーナ内に向かうのは面倒だから外からセットアップして飛び越えてきてみたら危機一髪な状況だったし……思わず魔法で迎撃してしまつた……》

と少し後悔しながらも優希はアリーナを見下ろしていて……右腕を失った無人機を箆は好機とみてセシリアと鈴に話す。

「鈴!セシリアいまだよ!!一気に畳みかける!」

「わかつたわ!」

「いきますわよ!!」

箆の号令に呼応して無人機に攻めかかる三人。

「先ずは私から、山嵐全弾……ターゲットロック!つけえ!!!」

まず、箆が打鉄式式の山嵐全弾を発射させ四方八方からミサイルが

迫り、無人機の逃げ場を完全になくす。

「今ですわーブルーティアーズ!!」

徐々に迫る山嵐にセシリアはブルーティアーズで無人機：ではなく山嵐をビットで射撃し直撃した山嵐は爆発し密集していた他の山嵐も爆発により誘爆して、発生した煙に無人機は覆い被される。

ありえないパターンに無人機もデータ処理に追われる中、それを見逃さない簪ではない

「これが本命!!」

山嵐発車直後から睦月と如月で貯めた特大のエネルギー弾を生成し声と共にエネルギー弾を放ち、動きを封じ込めていた無人機に直撃させて後ろへと吹き飛ばす。

「来たわね！とりゃああつ!!」

吹き飛ばした先には待ち構えていた鈴、タイミングを、合わせて双天牙月を振り落として地面へとたたき落とし、無人機が落下していく中、鈴は追撃するため追いかける。

しかし、無人機もただやられるわけではない動きが鈍くなっているがらも残っている左腕を鈴に突きだして残った力でビームを放とうとする

「っ!!」

「鈴!!」

ビームが来ると予感する鈴に殆ど力を使い果たしてしまった簪は悲痛な声を上げる。

しかし今戦っているのは彼女達三人だけではない：もう一人もいるのだから

「もう一発!!」

戦いを見ていた優希は鈴が危ないのを見て、すかさず凍結魔法でできた氷フリーズランサー柱を生成すると大きく振りかぶって無人機めがけて飛ばしもう片方の左腕も切断した。

「これで!!終わりよ!!」

もう武装がなくなつた無人機に鈴は連結した双天牙月を無人機めがけて投擲、無人機は避ける間もなく双天牙月によって胴体を真っ二

つに切り裂かれた。

七十四話 『約束の行く末』

簪SIDE

鈴の攻撃で胴体が二つに別れた無人機

もう動く気配もなく、爆発する様子もない。

一段落かと武装を構えるのを止めて、落ちつくけどもまだセシリアと鈴は警戒を緩めていない。

「まだですわ!!ピットのの上いる方がいますわ!」

「そうね!援護してくれたのは助かったけど……何者かわからない以上気を抜かないでよね!」

と警戒心がすごいけどあれ優希なんだよね

教えても良いけど信じないだろうな

そう気楽に考えて謎の人物^{優希}を見ていると、忽然と姿を消す

「消えた!?どういうこと!?!」

「わかりませんわ!?!あの方は一体……」

うーん、優希なら姿を消すぐらい造作と無くやってしまいそうなんだよね

「簪!セシリア、鈴!」

するとピットからリヴァイヴを装着した優希が到着……これはアリバイ工作かな?

「優希!遅いわよ!」

「そうですわ!私達が苦勞をしていましたのに……」

「悪かったって……避難に結構手間取ってたからな……」

避難誘導については本当のことだろう……優希が途中ですつぽかすとは思えないし

「八神、更識、オルコット、凰……聞こえるか?」

と優希のことを考えていると無人機が撃破されたことによりジャミングも解除されて通信が回復したのか織斑先生が少しご立腹な声で私達を呼んだ。

「色々と聞きたいことがある、管制室へと来い……織斑は教員が保護

室へ送る」

「織斑先生……篠ノ之は？」

「篠ノ之にもきつちりと説教をする……それでは直ぐに来い……いいな」

と至急来いと通信がきれると私達は全員顔を見合わせる。

「行くか」

「そうですね」

そうして私達はピットに戻って織斑先生のいる管制室へと向かった。

…

…

「二簪！打鉄式完成、及びクラス代表戦優勝をおめでとう!!」

『う、うん……ありがとう』

こんな直球で誉められたことあんまり無かったから恥ずかしいな……

もう、日も沈み夜になり、今私は自分と優希の部屋、でセシリアや本音……鈴や、相川さん達みんなで私のために祝ってくれている。

今周りに並べられている料理は優希が丹精込めて作ってくれた一品の数々本当に美味しそう……

そんな料理の見立ての感想を述べるけど取りあえず、無人機との戦闘後のことを思い出そう……

あの後、管制室で織斑先生に色々事情聴取を行われた。

優希は全部自分が命令したと責任をかぶろうとしてたけど……優希がやったのも人命救助な活動なために今回はおとがめなしとなった。

私達はそうだけど……後の2人……織斑一夏と篠ノ之箒……この2人には厳罰を下されたらしい……実際聞いていなかったけど

「でも更識さん、残念だったね、間違いなく優勝してたのに……あれのせ

いで無効になっちゃって」

……そう……あの無人機のせいで試合は中止、あと一歩だったのに……大会は無効になって……

「か、かんちゃん!? 落ち込まないでよ! そんなに食堂のデザート1年間無料パス欲しかったの!」

あ、そんな話し合ったんだ……でも私にとってはそれより重要な……

「あゝ実はなく」

優希は状況を見て私と姉さんの約束のことを話し始め、聞き終わったときには楽しいパーティーがお通夜ムードにへと一転する。

「ごめんなさい、簪さんまさかそのような事情を知らず……」

「ううん、いいの、みんなは知らなかったわけだし……」

セシリアはそんな約束があつたことを知ると深く反省し、簪も知らなかったことだと割り切る。

「でも、本当に有耶無耶にされてるわけだから……」

しかし、それでも納得のいかない鈴はどうにかしたい気持ちでいっぱいのようなだ……

そんな時、突然部屋の扉が勢い良く開かれる。

「話はきかせてうえ!?!」

……勢いのあまり扉が帰ってきて入ってきた人に直撃……もう何しに来たんだろう

顔を扉に当てて、痛そうだけど何故か堪えながら気を取り直してやり直す

「……話は聞かせてもらったわ」

《な、何事もなかったように進めてる》

さすがの登場にみんなの心が一つになったような気がする……だつて出てきたときの印象がねえ……

取りあえず、外で話を聞いていた姉さんがやってくると自信満々な表情で私をみる。

「安心しなさい! 簪ちゃん! 決闘の話は優勝が無くなったけど、あれは事故のせいだから気にすることは無いわ!」

「そ、それじゃあ……」

そう相川さんか期待した目で、姉さんを見る、そして姉さんもそれに応えようと口を動かした。

「ええー！決闘は有効よー！」

と姉さんは口元を扇子で隠し開けた扇子には受けて立つと書かれている。

「よかったよーかんちゃん！」

『うん！』

1度は有耶無耶で諦めかけたけど……姉さんに挑める！戦える！！

「と、話の腰を折りますが……お嬢様？何か忘れていたのではございませんか？」

あれよく見れば姉さんの後ろには本音の姉である虚さんがいる

……

「え？何か忘れていたかしら？」

「今回の事件で当分はアリーナの使用は禁止になります」

「まあ当然だな」

虚さんから放たれた言葉、アリーナの使用禁止……やっぱり無人機
のことが原因か何だろうな……

優希もそれに同感して頷いていると虚さんはまだ何かあるのか姉
さんに向かって言いたげな表情を見せる。

「さあ、お嬢様……そろそろ生徒会室に戻りますよ」

「え!?あ、あと少しくらい……美味しそうな料理食べてから……!」

帰ると促す虚さんに、子供っぽく駄々を込める姉さん……姉さん少し
惨めに見えるよ

「そうは行けません今回の事件のこともありますし、それらの後処理
を行わないと……さあ、行きますよ、お嬢様」

「ちよ、ほんとちよっと待って!!」

そういつて姉さんの襟元を掴むと姉さんを引きずりながら連れて
部屋の外へと出て行く虚さんであった

「……嵐みたいだなね……」

そう姉さんの登場と退場の始終を見ていた鈴はそういつて観測を述べる。

「と、取りあえず、これで簪さんの約束も果たせそうですわね！」

『…うん！』

取りあえず、これで少しは前に進めてるよね

私は成長していると実感し、優希の作った料理を食べながらパーティーを楽しんだ

七十五話 『優希レポート②』

優希SIDE

『よつと、これで終わりかな』

既に外は全くもって音が聞こえない静けさと星空が漂う夜空に包まれている。

そんな中俺は台所の電機をつけて料理の皿洗いと部屋の清掃を終えて俺は一息ついた。

『にしても完全に寝ちまつてるな』

台所からベッドの方を見ると部屋にある二つのベッドが簪達6人によって完全に占領されている。

簪の方は本人と本音、相川さん、俺の方にはセシリア、鈴、鷹月さんと既にベッドいっぱい寝転がっていた。

『俺……何処で寝れば良いんだ?』

「床で寝るしかありませんね」

「ネルー」

『だよな……』

まあ、起きる気配もないから仕方がないだろうし……取りあえず……レポートをまた書くか……

そういつて俺は台所の明かりを消して、椅子に座って机に置いてあるランプを点灯させてディスプレイを起動させた。

新暦79年4月△日

第97管理外世界『地球』の極東の島国、日本の東京、IS学園にて毎年行われているISを使ったクラス代表対抗戦が執り行われた。

自分は辞退したために大会には不参加であったが1年のクラス代表対抗戦、勝ち残った日本代表候補、更識簪と要注意人物、織斑一夏の戦いの終盤、事態は急変した。

突如、所属不明の無人ISがアリーナへと乱入、それと同時に通信をジャミング：アリーナのシステムを、掌握され観戦に来ていた生徒達はアリーナ内に閉じ込められる自体が発生。

自分が先導し独自の判断で生徒たちの避難活動を開始、近くにいたイギリス代表候補、セシリア・オルコット、並びに中国代表候補、凰鈴音にアリーナ内で戦う日本代表候補、更識簪の援護に行くように指示、その後※更識簪に念話で自分の趣旨と状況を説明し避難活動を再開しました。

観客席の扉を全て切断し生徒達を避難させることに成功、1度確認した後アリーナ内で戦う更識簪達の援護に急行。

現場に到着した時点で篠ノ之束の妹、篠ノ之箒が放送室のマイクを使ったことで無人機の標的が篠ノ之箒に向けられたことで、やむを得ず、魔導士として戦線に参加し更識簪以下三名と共に無人機の無力化に成功し、戦闘終了後、直ぐさま離脱した。

更識簪について：

更識簪は以前、レゾナンスでの召喚士襲撃事件の当事者にしてその後リンカーコアを所持していることを判明：後日、次元世界、魔法などのことを隠して事情を説明していたため：念話での指示することを独自判断、これにより更識簪がセシリア・オルコットと凰鈴音の両名合流まで戦線の維持に貢献されていると思われる。

無人機について

今回の襲撃犯である無人機のIS

撃破した無人機はIS学園の教師陣が回収、サーチャーで追跡した事によりIS学園に地下施設が存在することと無人機のISコアは468番目のコアであることを確認した。

新造されたISコア、地球ではまだ開発されていないビーム兵器が実装されているなど、兵装面からして各国、企業の差し向けた刺客という可能性は低く、IS開発者篠ノ之束が糸を引いているのではないかと推測される。

主犯と思われる篠ノ之束の動機は不明：記述による自分の見解から単なる気まぐれか：もしくは織斑一夏、織斑千冬、篠ノ之箒、これら3名が関係しているのではないかと自分は推測している。

時空管理局 海上警備隊司令補佐官 八神優希准空尉

七十六話 『次へのステップ』

『ふう……完了』

レポートを書き終えて一息つくと急に眠気に襲われる。

『ん〜っ！そろそろ寝るか……』

やることもないため、眠ろうと思ったが……ベッド……占領させられてるんだった。

……ここで寝るか……

椅子に座って寝るのも馴れてないわけではない……だから上半身を机の上に乗せて目を閉じると、直ぐに眠りに落ちた。

簪SIDE

『う、うーん……』

あれ？寝てた？

いつの間にか寝ていた私は体を起こすと私の隣には本音と相川さんが眠っている。

どうしてと覚えていることを思い出し……そういえば部屋でパーティーをしてて、そのまま寝てしまったんだ。

外を見ると日が昇り始めてる……

みんな疲れていたんだろう、起きる気配もない

ベッドから起き上がると私は椅子に座りながら穏やかに眠っている優希に気がつく。

いつもなら私が起きてるときには確実に起きているはずの優希も昨日の疲れからまだ熟睡しているようだ。

『……………』

ふと、私は周りを見渡して私以外起きていないことを確認、そしてもう一度優希に顔を向ける。

『……………わがままになっても……いいよね』

……これは昨日頑張った、ご褒美……面と面でだどできる気がしないから……

『やるなら今……だよね』

そういつて……私は穏やかに眠っている優希の顔に近付いていつて……後数cmで近づくの止めた

翌々考えてみよう……もし、このまま優希にキスして直ぐに目を覚ましたら……優希はどう思うかな……で、でもでも……こんな無防備な優希なんて早々あるはずないし……

「ほえくかんちゃん、あと少しなのに……どうしたんだろ」

「あと少しなのに、見てるこっちもドキドキしてくる」

「ねえ。こういうのって出歯亀っていうんだっけ？」

「今そんなこと言ってる場合!? 鷹月、セシリアを押さえるの手伝ってよー!」

「っ!! むうっ!!!
!!!」

よし! 決意完了!

私はまた優希の顔に近づき、私の唇と優希の唇、互いの唇が重なるまで3cm……2cm……1cm……!!

「ちよつと待ったああああっ!!」

「え!? なんだあっ!」

『えっ!』

突然のセシリアの大声それに驚いて飛び起きる優希に近づきすぎている私の顔は優希の顔に激突、おもいつきりだったために私も優希も顔に手を当てて痛がつている。

「あく惜しい! あと少しだったのに」

「セシリア、どうして大声出したのいいところだったのに」

「あ、当たり前ですわ! ゆ、優希さんの無防備なお顔に……き、キスなんて……!!」

見ていたのか……鷹月さんが私がキスすることを止めたことに惜しいと悔しがり、相川さんはその原因となったセシリアに詰めよるが、セシリアは顔を赤くして当然と言わんばかりの主張をする。

まあセシリアが赤くなるのもわかるけどね……後ろの腹を押さえ
て蹲ってる鈴について……何やったの？

「セ、セシリア……あんたね……！肘打ちしておいて、謝りもなし……
！」

「あれは、鈴さんが悪いですわ！口と鼻両方お塞ぎになりますか!？」

とセシリアと鈴が口論になり……なんかもう……雰囲気ぶち壊し
てるし……それに結局……キスもできなかつた……優希は呆れて所
を見て……キスのことは気づかれてなかつたみたい……

でも……とつととキスしておけばよかつたな……

優希SIDE

朝から騒々しかつたけど取りあえず事態を収拾した後セシリア達
は自分の部屋にへと戻つていき、俺と簪も今日の準備を整え、寮から
出て通学途中に本音達と合流し1組の教室に入る。

すると入ってきたのが俺だとわかると急に静かになる……まあ昨日
色々あつたからね……更に避けられてても可笑しくは無いわな

「や、八神くん！」

すると一人の女子生徒が俺の前にやってくる少し戸惑つた後に
上半身を前に曲げて誠心誠意の言葉を言い放つた。

「ごめんなさい！噂だけで八神くんを悪者扱いして……！」

その生徒先導に次々とまわりから俺に向かって謝罪の言葉を述べ
ていくクラスメイト達……でも流石に予想外だったため慌てて返事
をした。

『いや、顔を上げてください……別に謝って欲しくて助けたわけでもな
いし……誤解が解けただけでそれでいいです……できれば普通に接し
てくれればそれでいいですよ』

と俺はクラスメイト全員に向けて言うと言つて笑みを浮かべて全員頷い
た。

「よかつたですわ、優希さん……」

「本当だねくやっぱりクラスメイトでいがみ合うなんて見たくないも
んね〜」

セシリアと本音も今回の件が良い方向で解決したことに安堵を覚えていた。

「セシリアさんも八神くんを庇ったとき、酷いこと言ってしまったって本当にごめんなさい」

「……いいえ、別に気にしてはございませんわ。私も一度は間違えていた身。誰であろうと間違えることはありますわ」

次にセシリアに暴言を吐いたことを生徒たちが謝るがそれをセシリアは気にしていないという。

クラスでのわだかまりも終わってほっとしていると後ろから織斑先生と山田先生が教室内に入ってきた。

「お前達、席に戻れホームルームを始める」

そう織斑先生が言うのと全員直ぐに持ち場に戻り着席する。

しかしここであることに気づいた。

篠ノ之と織斑がいない……何かあったのか？ ……いやそういうえは織斑は無茶のしすぎ、篠ノ之は放送室の一件で処罰が下ったのだから。

「あの、織斑くんと篠ノ之さんは……」

「織斑と篠ノ之については現在謹慎中だ……昨日の一件で色々やらかしてくれたからな」

……これは因果応報という奴だろう……

「よし、これより授業を始める……まず……」

織斑達のことを区切ると直ぐに授業を開始する先生……昨日は色々あったけど今日は平和だな

七十七話 『簪の修行 序盤から高難易度』

簪SIDE

クラス代表戦が終わって優希の悪い噂も言われるのも少なくなり、5月の1日：お昼休みに屋上で本音と優希と一緒に優希お手製のサンドイッチを食べていると優希から話を切りだしてきた。

『え？特訓？』

突然特訓なんて言われてぽかんと唾然してるけど優希はそうだと頷いた。

「取りあえずクラス代表戦の時一日だけ：近接攻撃の捌き方をみっちりやった：その時エネルギー収束システムの武装強化：それだけは教えたな」

『う、うん：まだ不完全だけど』

そう不完全……

私は武装強化が一時的な部分強化しかできない。

優希は武装全体を強化することなんて朝飯前にできるけど……やってみれば物凄く難しい、エネルギー収束システム自体、物凄い集中力を有するため少しでも欠けると強化が解けてしまいかねなかった。

「特訓を、三段階に分けて行う……先ずは強化……取りあえず一度で武装全体強化、それを維持できるようにする」

中々計画的に修行するみたい……優希もよく考えてるな

「更識さんの決闘も来週の日曜日と差し迫っているのもある……今のままでは更識さんには太刀打ちできない……故にここでパワーアップすることで更識さんと対等に戦えるところまで持っていく」

日曜日……今日が火曜日だから後五日しかない。

「2日後からはゴールデンウィークで連休だ……わかってると思うけど明日の放課後からバニングス社の演習所へ移動……特訓の他にも打鉄式式の最終調整に入るようになって……色々やることは山盛りだ」

『うん、そうだね……』

きつと、全てをぶつけないと姉さんには勝てない……やれることがあれば全部やっても損は一つもない。

「さてと、話はこれぐらいで……つと？あれ？サンドイッチ全部なくなってる!？」

そう驚く優希……だけど驚くのも無理はない……結構量はあったはず……そしてまた私の横には満足げな本音の姿……うん、間違いないね『本音?』

「お前……まさか残りのサンドイッチ全部くつたな!?俺達、2きれぐらいしかくつてないのに!」

「え、えつとね……美味しかったから……つい……」

「つい……じゃねえ!!」

そういつて本音の頬捻る優希、止めてと本音も懇願するけど止める気配なんてない……授業中お腹持つかな……

放課後……

第三アリーナにやってきた私

取りあえずISスーツに着替えてアリーナ内にやってくるとすでに優希が戦闘用の服に着替えていて待ち構えていた。

「きたな、よし!早速始めるぞ!!」

そういうと優希はリヴァイヴを起動、拡張領域バズスロットからアーチャーシユナイダーを取り出して構え出す。

『え!?優希!?!』

いきなりの戦闘!?!と驚いているのも束の間すでに優希は臨戦態勢を取っていた。

「模擬戦の中で武装強化のコツを掴んでもらう……時間も余りないからな……簪打鉄式式を起動しろ」

『うん!お願い打鉄式式!』

私は打鉄式式を展開し、展開し終わると早速優希がこっちに迫っていた。

『え……もう!?!』

「時間が無いからな!」

そういうとアーマーシユナイダーを振るい私を切りつけようと迫ってきて咄嗟に睦月と如月で受け止めてアーマーシユナイダーの軌道を反らす。

今のはギリギリ強化は間に合った……けど一時的な部分強化だ

「続けていくぞ!」

そういうと再びいや更に素早い二刀の短剣の乱舞が私に襲いかかり、捌ききれずに打鉄式式に直撃

その後と同じ状況が続き数分もしないうちに打鉄式式のシールドエネルギーが尽きてしまった。

『はあ……はあ……』

全く歯が立たないし……上手いかなかった………時間全然ないのに

「簪、どうして打鉄式式のエネルギーが尽きたかわかるな?」

『うん、一時的な強化はその度にエネルギーを消費する……だから使うたびにエネルギーが減って……』

エネルギー収束システムを完全に使いこなせば克服できるデメリット……それはわかっているけど……

「うーん、どうすればいいかな……」

『というか、強化しながら全ての攻撃を捌くなんて無理だよ……強化に物凄く集中するし……攻撃が来たらで集中力が欠けちゃう』

「……」

私は少しふて腐れながら自分の原因を指摘しそれを聞いた優希は腕を組んで考えると……仕方ないと何か良いことを思いついたのか、考えた後私に顔を向けてくる。

「仕方ない……少し予定を変更する元々おまけで付けようと思ってた第三段階の修業も並行でやっていこう」

そう平然と述べてくる優希、私はえって言う驚いた顔をして優希を見つめる

つまりそれって今以上に忙しくなるのではないのかと

そう思っている私に優希は心配するなど声を掛けて再びアーマール
シユナイダーを構え始める。

「取りあえず、第三段階の特訓はISを使わない練習だから夜にやろう」

ああ、夜もやるのか…と少し憂鬱になりながらも再び打鉄式式を起動して武装強化の特訓に明け暮れた。

七十八話 『簪の修行 第三段階は座学?』

……

……………

あ、どうも簪です……

挨拶が遅れちゃった……でもねこれには訳が「簪、腕止まってる」あううく

今現在考える暇さえ与えられないぐらい、優希によって絞られてる……あ、ヘンな意味がないよ

今は日も暮れて部屋に居て椅子に座り第三段階の特訓を一心にやっている。

やっているけど……

「簪、左手が動いてない……あと制限時間2分だよ」

え!?もうそんなにしか残ってないの!?

制限時間を述べられて焦り出す私

取り出したことでまともにもできなくなつて、終わりのアラームが鳴り響く。

「はい、終了……それじゃあ採点するから休憩しててロングヌスそっちはお前に任せる」

「了解です」

私は椅子から立ち上がってベッドに飛び込むとどつと疲れた体を休ませる。

優希の言うとおり夜でもできることだけ……まさか……座学なんて……

今やっていたのはIS学園でも習うのような問題の数々……けど、それだけならまだ良かった……

問題はテストが二つあるということ……

一つは紙に書かれた一般的によく見るテスト表……そっちは優希が採点してみたいだ。

それだけなら問題は無かった……

問題ここから

私の座っていた左手には優希のディスプレイがあつてそれをロンギヌスが採点していた。

そう、もうわかると思うけど……

二つある別のテストを同時にやる……これが優希に課せられた第三段階の特訓らしい……

これって何の特訓なのか全くわからない

「はい、採点完了……こっちは54点だ……ロンギヌスそっちは」

「(こちらは32点です)」

低い……でもしかたない両方いっぺんにやるとテスト問題がごちゃ混ぜになつて酷い有様

『優希、本当にこれって特訓なの?』

特訓というか、なんらかの罰ゲームにしか思えないほどげんなりしている

そのため、私はその疑問を直接訪ねると優希は直ぐに縦に首を振つて頷く。

「ああ、この特訓は物事を両方同時進行でやること……これが打鉄式式のいやIS自体の性能を引き出すことに繋がるんだ」

IS自体の性能を引き出す……か……

「まあ初めてこれぐらい取れたまあまあだろうな……俺なんて……もっと悲惨だったしな……」

初めてにしては上出来という優希……その後何か言つたみたいだけど聞き取れなかった……何かあつたのかな?

「取りあえず、俺の予想だが簪には俺以上の潜在能力が眠つてると思つてるだからきつとできるはずさ……俺が保証する」

『私に……優希以上の?』

そんな力があるというのか……ううん、翌々考えれば……鈴と互角に渡り合えたとき……稼働時間も訓練時間も私が劣つていたはず、それなのに互角に持ち込めたということは優希の言うとおりの話なのかもしれない。

優希に励まされ、少し嬉しく思えた私、そして優希は机の上を片付

けると台所の方へと向かっていった。

「取りあえず、夕飯にしようか…待ってる直ぐに作るから」

『うん…い』

この頃は食堂の開いている時間が過ぎることが多くなったことから優希が夕飯を作ってくれることが多くなった…：優希が作る料理はどれも絶品で…：優希曰く…：それは母親仕込みらしい。

そんな優希の作った料理を食べた後また、同じように2つ同時進行のテストを行うのであった。

……

……

「はい、今日の授業はここまで、明日からは連休だから帰郷する人も居ると思いますが…：くれぐれも羽目を外さないように」

そういつて教卓に立つ先生は教室から出て行き、周りの人達も近くに居る人と話し合いながら寮に戻る準備を進めていく。

明日からはゴールデンウィーク…：5日間の休みで浮かれる人も居るだろう…：

私もほとんどゴールデンウィークは埋まってるといつていい…：主に優希との特訓で

今日からバニングス社の演習所に移り打鉄式式の最終調整と私の特訓を更にもつちりとやることになっている

迎えも直ぐに来るらしいから直ぐに寮に戻らないといけない。

教材を鞆にまとめめて教室から出ようと思った矢先クラスメイトが私の前に立ち止まる。

「あの更識さん、今日これから一緒にレゾナンスで遊びに行かない？」
至って普通のお誘い…：忙しくなかつたらいつて良いんだけど

……

『ごめんなさい、今日から少し用事があつて…：』

「あ、そうなんだ…：用事なら仕方ないよね」

「用事つていつたら一つしかないじゃない…：八神さんとデートなんでしよっ。」

そういつて近くに居たクラスメイトがニコニコとからかいながら

そう言われると私は顔を真っ赤にする。

「そっか、それじゃあ尚更仕方ないよね……でも八神くんってかっこいいよね……普段は優しい物腰で接しやすいし……だけど裏腹に怒ったりすると怖いけど……」

「でも……」一番では頼りになるんだよね……この前の閉じ込められたときも先導して避難させてたし……あの時の八神くん、凜々しかったよね」

と優希のことをこれでもかと褒めちぎるクラスのみんな……

みんな優希のことをわかってくれて嬉しい気持ちはあるけど……少し妬いちゃう気持ちはあるかな。

というか、少し恥ずかしい……

私はそんな気持ちでクラスメイトの横を通り過ぎて教室から出て行く。

「あつ、八神くんとのデート楽しんできてね」

離れていく中そんな声が教室から聞こえてくる……そんなこと言われると恥ずかしくなってくるよ」

七十九話 『簪の修行　へりポートでの出来事』

クラスメイトに茶化されて恥ずかしい気分になりながら寮に戻ってきた、私は部屋に戻り昨日のうちに荷造りしていた。

優希の方のベッドを見るとまだバッグはあるから部屋には戻ってきてないみたいだ。

少し待っていいようかとベッドに腰掛けると部屋のドアが開かれて帰ってきたと思ひ扉の方を見ると入ってきたのは優希ではなく……本音であった。

本音の姿はワインレッド色のシャツに紺色のスカートそして腕の丈があつていないベージュ色ロングコートを羽織り、いかにも遊びに行くような服装である。

『本音……その服装は……』

「ほえ？だつてバニングス社に行くんだし制服はちよつと駄目かな？なんて」

『……でも遊びに行くわけじゃないし……』

格好から見るとそう思いたくもなる……そう思っているとまた扉が開いて優希が帰ってくる。

『優希、お帰り……ちよつと遅かったけど何かあったの？』

「いや、織斑先生に呼び止められてな……それで遅れただけだ」

と遅れた理由を説明を優希……私は織斑先生が関わっていると聞くと少し不安になった。

これまで優希が外に出た時は必ずといわんばかりに厄介ごとが起こる、それを思つて静止したのかもしれない。

不安な顔で優希を見ていると気づいた優希は笑みを浮かべて口を開ける。

「安心しろ……中止しないって、ただ注意しろと言われただけ……さてと……待たせると行けないからな……」

そういつて自分のベッドの上にあるバッグを手に持つて……休む

間もなく優希は部屋をでていき私達も続けて部屋をでていった。

寮を出て向かったのは駅……ではなくヘリポート……理由は言わずもわかる……優希が原因だ。

ことあるごとに優希は狙われているために陸路ではなく、空路を使うことにした。

それも公共機関のものではなくバニングス社のヘリらしい……特別待遇というやつかな？

そんなことでヘリポートに付いた私達だけ……ヘリはまだ到着していない。

少し待つことになるその後ろから走ってくる足音が二つ……振り向くとそこにはセシリアと鈴が走ってこちらに向かつてきているのがわかる。

「はあはあはあ……」

「おいおい、二人ともどうしたんだよ……」

息ぴったしの鈴とセシリアに優希は訪ねると二人はいきなり優希に詰めよる。

「き、聞いていませんわよ！ 簪さんと本音さんお二人でひ、秘密の特訓なんて！」

「そ、そ、そ、そうよ！ い、いい、いかがわしいじゃない！」

何故か話がずれている気がする……

慌てている二人の言い分を聞いた優希は首を傾げて当たり前に二人への返答を返す。

「秘密の特訓……ってただ俺達は更識さんに勝つためにみっちりと簪を鍛えるだけで……他に意味合いとかはないからな」

……うん、そうだよね……あくまでそうだもんね……

実際少し期待してたり……してました。

「で、ですが……つい勢いということも……っ!!」

と、セシリアが更に勢いを増していき……それに押される優希だが、突如背後から出席簿の一撃が振り落とされてセシリアは猛烈とする。

「全く、八神は更識妹を鍛えるだけだ……変な妄想を浮かべるな……馬鹿

者が」

更にセシリア達の後ろから織斑先生と山田先生：恐らく見送りに来たのだろうか

そうしていると遠くからプロペラ音が耳に聞こえてくる

みんな、聞こえてくる方向に視線を向けるところに一台のヘリが向かってきているのがわかる。

だけどそれは普通のヘリではない…

どこその良く落ちるヘリではなく軍用に配備されているような軍用のヘリ：バニングス社はそんなものまで所有しているというのか…

そしてヘリはヘリポートに着陸、その着陸のうまさに織斑先生は感心を覚える中ヘリの後部ハッチが開いていく…：そして…

「HEY!!!待たせたなく優希に簪ちゃん！それと本音ちゃん!!これはやてちゃんが来たからにはもう安心や！大船に乗った気持ちで安心な空の旅をお約束するでええええええええええっ?!?!ゆ、優希ちよつたんま!!」

ハッチから現れたのは決めポーズを決めている優希のお母さん…：それを見た優希が高速で接近しアイアンクローをかますのであった。

八十話 『簪の修行 出立』

「ギブーギブー！ほんまギブや!!あつ！顔に優希のてがあ!!」

へりから突然出てきた、はやてさん…その登場の仕方が少し恥ずかしくて、優希が高速ではやてさんに接近しアイアンクロー…：…なんというカオスな光景なんだろうか…：

セシリアと鈴、後本音はぽかーんと唾然としていて、織斑先生は頭を抑えながら呆れ…：…山田先生はあわあわと動揺を隠せない。

「そうかそうか、もう少し力を入れてみようか」

ニコニコしながら更に握力を強めようとする優希にそれを必死に藻掻き苦しんでいるはやてさん…：

流石に見て見ぬふりはできないだろうから私ははやてさんに助け船をだした。

『優希？もういいんじゃないかな？はやてさんも反省してるだろうし…』

「簪は甘い、母さんは隙あれば面白いことに首突っ込むからな…：…この前の制裁で懲りてなかったみたいだしな」

結果、効果ならず…：…するとへりの中から顔を出すのは紫髪をしたはやてさんと同じ若い女性だ

「優希くん、そろそろ止めてあげたらどうか…：…その時間も迫ってる位だし」

その人の理由を聞くと優希は溜め息を付いてはやてさんを攔んでいるアイアンクローを解いた。

「ううう痛いゝ痕ついたらどないするんや」

「これぐらいで丁度良いだろ？…：…今回はすずか姉に免じて解いたけど次はもつときつい食らわすからな、母さん」

え？あれよりきついのあるの？

そう思ってた私だけど周りのセシリア達は他のことに気を取られていた。

「母さん!?!」

あ、そういえばはやてさんが優希のお母さんだって知ってるの…：

この中じゃ、私だけだったんだ。

「簪、本音何してるさっさと行くぞ」

そう優希は出発するとうとうとはやてさんの襟元を掴んで無理やりへりへと連れ込んでいく。

「ちよつ!? 優希待つて! 今来たばっかやのに、お世話になってる人にもちやんとご挨拶を……」

「別に良いから……というか、こっちが恥ずかしいだよ」

「そんな恥ずかしがらなくてもええべえ!?!」

あ、優希に沈められた。

『と、取りあえず私達もいきますね、本音行こう』

「ふえ? あ、うん」

見送りに来たみんなに一言挨拶をして、啞然としていた本音を正気に戻すと私達もへりの中にへと入っていく。

「八神!」

私達も乗って出発すると思った矢先、織斑先生が優希に向けて名前を呼ぶ。

「……くれぐれもやり過ぎるなよ……」

「……わかりました……ですが、そう判断するのは自分なので保障は出来ませんよ」

と返答する優希……多分私のことを言ってるんだと思う。

織斑先生と優希の会話が終わると見計らって後部ハッチの扉が閉まる。

そして閉まると優希に席に座るように促されて座るとへりが浮上して動き始めるのであった。

NOSIDE

「行ったか」

優希達が乗せた輸送へりが飛び立ち、残った織斑先生と山田先生、二人は遠くなっていくへりを見つめながらそう呟いたり

「さて、とりあえずは……」

見送った後ちらりと横に居る今も固まっているセシリアと鈴を見

て、持っている出席簿の一撃が二人の頭上に振り落とされて、正気に戻す。

「オルコット、凰……いつまで固まっているつもりだ」

「っ……あれ？優希達は!？」

「もう出発しましたよ」

正気に戻った鈴はいなくなった優希達に気づき、それを山田先生は優しい物腰で教える。

「それより、貴様らも突っ立っている暇があるなら自国への報告書の作成なり、特訓するなり効率よく時間を使え」

「は、はい！」

「わ、わかりました」

気迫のこもる織斑先生の一喝にたじろぐ二人はすぐさまこの場から退散していきヘリポートは織斑先生と山田先生のふたりとなった。

「さてと、我々も職務に戻るとしよう」

「はい、あの……八神くん達は大丈夫なんでしょうか……」

「なに、心配はいらんだろう……先程その確認も取れたからな」

「え？それはどういうことですか？更識さんのことを言っていたのは……それとも……」

二人になったことで、セシリア達には聞かれたくは無い話を切り出す二人、そしてヘリが飛び立つ前に織斑先生と優希が交わした言葉の意味を訪ねる山田先生に織斑先生は口元をにやつかせた。

「両方だ」

……

……

「こちら、偵察班、目標はヘリに搭乗しバニングス社演習所へと向かい飛び立った」

「了解：目標地点に差し掛かりしだい攻撃を開始する」

「油断するな相手はISが複数機でもものともしなかった男だ……最大の注視して当たれ」

そして軍用ヘリの中……初めてヘリに乗った本音は少しはしやぎながら外の景色を眺め、他には本音の隣に簪が本音を見て苦笑いして、二人で雑談をするアリサにすずか、そして持っている本を読む優希に……隣には先程沈められたはやてが優希にもたれかかっている。

「優希、その本ってなんなの？」

「ん？これか？古い偉人の冒険譚……それを現代の人が通訳した小説……全部国外の言語だから簪は読むの苦労すると思うよ」

そう苦笑いをする優希、そんな優希の隣に簪は座り横からその小説の中身を見るとずらつと難しい英文が書かれていて一見では何が書いてあるのかわからないで居た。

「そうだ、簪はアリサ姉とすずか姉とは面識なかったよな……丁度良いか……アリサ姉！すずか姉！ちよつとこつち来て」

「ん？何よ優希？」

小説を閉じて簪がアリサとすずかを知らないと思い、優希は二人をこつちに来るように呼び出すとアリサがどうかしたのか聞きながら優希の元へと近づいてくる。

「いや、簪にちゃんと紹介してなかったからさ……アリサ姉もすずか姉も知ってるだろうけど……彼女が更識簪」

「そういえば、そうね……初めまして、アリサ・バニングスよ……そこに居るはやての友達で今から行く演習所は私の会社の所有地でもあるの……よろしくね」

「月村すずかです。簪さんの使ってる睦月と如月は私の会社で作ったものなんだ……IS事業はアリサちゃんと合同でやってるからこれからもよろしくね」

「は、はい……よろしくお願ひします」

三人の挨拶を済ませ、取りあえずはもうないかと優希は思ったがここで意外なところから声が聞こえてくる。

「おっと、俺のことを忘れてもらったら困るぜ……優希……」

「あつ……そういえば……簪、今ヘリを運転してるパイロット……彼はヴァイス……俺が知る限りじゃあヘリの操縦に右に出るやつはいいな」

「ヴァイス・グランセニツクだ、今後乗せることがあるかもしれねえ

からよろしくな嬢ちゃん達」

「は、はい……よろしくお願ひしますー!」

へりを運転していることから運転席から左手でジエスチャーしながら挨拶をするヴァイスに簪も直ぐに返答して挨拶をする。

「さてと、これで一通りかな……まだ出立してすぐだから後3時間ぐらいは空の上だな……簪……この間に特訓やっておくか」

「あ、うん……お願ひ」

一通りの自己紹介を終えて、優希は少し何をするか迷った後、第三段階の特訓をやろうと簪に提案をして、簪はそれに頷き……特訓をやり始めるのであった。

八十一話 『簪の修行 人を撃つ覚悟』

優希達がIS学園からヘリで出立して大凡1時間半が経過した。到着までの時間を使い優希は簪に昨晚と同じく二つ同時テストをやらせて…今終えたテストの採点をしていた。

「よし、終わり…取りあえず昨日よりはマシになってるな」

採点を終えた優希は簪に昨晚よりかはマシになっていると言うと簪は少しほつとした表情を見せる。

「ん？なんや？優希？簪ちゃんにマルチタスクを教えとるんか？」

優希と簪のやりとりを気になってかはやてが近づいてきてすとを覗き込むと…優希の意図を理解してマルチタスクの単語を口にすると簪は首を傾げた？

「マルチタスク？」

「え!?!優希…なんも教えてないんか？」

「いやだって…罰ゲームはなかったけど昔に俺にやったのと同じ形式でやってるわけだから…」

「いや…あれはな…」

《罰ゲームって何のことだろう…》

マルチタスクのことを教えていなかった理由を訪ねるはやてに優希は昔に自分もやったような方法での習得することを考えていてその後も親子で話し合いをする中、簪は優希が口にした罰ゲームについて少し気になった

優希とはやてが話し合いは少ししてから終わり…優希は簪に向くとマルチタスクについての話をしはじめた。

「えっと、簪…この第三段階の目的はマルチタスクを習得することが目的なんだ」

「そもそも、マルチタスクちゆうんわな…並行思考で二つのことを同時に処理することや…例えば…そやな…テレビ見ながら…料理する…簡単に言えることやけど…普通はどっちかに集中しなあかんよな」

「だから、両方とも出来るようにするのがマルチタスク…ということ

ですか？」

「うん、そうや、直ぐに理解くれて助かるわ」

優希とはやても交えてマルチタスクの説明を行い習得しようとしている。簪に理解をさせる。

「でもそのマルチタスクを覚えてISに何か有利なことがあるの？」

「ああ、それは……」

優希が本音の質問に対して返答を言い切ろうとしたがへりが大きく揺れる。

「何!？」

触れたこととただことではないと判断する簪。優希も来たかという顔で操縦席に居るヴァイスに向けて声を掛ける。

「ヴァイス!!」

「ああ、後方から十機位付けてきてやがる!」

声を荒げながら現在の状況を説明をするヴァイス、優希は少し考えた後……何かを決意したのは後部ハッチの方にへと向かう

「ヴァイス、ハッチを開けてくれ俺が出る」

「待って優希! 優希が出るなら私も……」

ヴァイスに出撃すると伝える優希に簪も出撃すると志願するが優希の表情は険しい顔をしていた。

「駄目だ」

「どうして!?! 私だって優希の援護ぐらい……」

「相手を殺す……その覚悟があるのか?」

いつもとは全く違う優希の気迫と殺すという言葉に簪はたじろぐ。

「相手は恐らく倉持技研の連中だ……理由は……大体分かるだろ?」

「……私……ううん、打鉄式か……」

優希の口から敵は倉持技研であることを教えられると襲われている理由は自分の専用機を目当てに来たのだろうと簪は察する。

その理由は先のトーナメントが起因出る。

決勝戦で織斑一夏……基、白式を圧倒して見せたかつての欠陥品……これではいいデータが取れないと踏んで手の平を返すように打鉄式

式のデータを要求した。

しかしこれまでの仕打ちで倉持技研とは完全に縁を切っていたためにその要請を拒否……その話を知った企業が波のように我先と契約を迫ったが……すでに簪の意中はバニングス社であったため全て断った。

倉持技研はあの手この手で打鉄式式を取り戻そうと疾走したが全て失敗……ついに輸送中を襲うという暴挙に出たのだ。

「織斑先生にも忠告されたよ倉持技研が妙な動きをしているから気をつけろって……この空路を取ったのも被害を最小限にするためもある……力を持つ責務……ちやんとわかっているだろう？」

そう簪に優しく言うのとヘリの後部ハッチが開きヘリの後方からミサイルが四つこつちに向かっているのが優希の目で視認する。

「あつちも本気で落とす気だな……！」

倉持技研もこちらのヘリを落とそうとしているのを確認すると優希はリヴァイヴを起動して拡張領域バスターロットからガラムを取り出し銃口をミサイルに向けると片手で四発発射し全弾各ミサイルを撃ち落とす。

「それじゃあ出るから……母さん、ヴァイス……もしもの時のバックアップよろしく」

「うん、わかったわ」

撃ち落としたのを見て、二人にもしもの対処をお願いしはやてが了承すると優希はヘリから飛び出した。

八十二話 『簪の修行 不屈き者に制裁を（前編）』

へりから飛び降りた優希、直ぐにリヴァイヴのスラスターを噴かせて追撃してくる敵機へと向かっていく。

出撃した優希の姿は倉持技研の方でも目視していた。

「隊長！あの八神優希が出て来ました」

「更識簪は出てこない…か…ではプランDでいく。打鉄式式を取り戻す！」

「了解!!」

当初に予定されていた作戦を伝える隊長、それに応じて隊員達は隊列を組む。

「先手を打つ！」

まだ距離も1km程離れているにも関わらずに優希はガルムを構えて2発ほど射撃しまだ射程内ではないと油断していた隊員達の打鉄、二機に直撃させる。

「ぐっ！この距離で！」

「油断するな！相手は鬼神だ！」

射程外だと思われていた距離からの狙撃にたじろぐ隊員達だが隊長はたじろぐ隊員に一喝する。

これまで疑いたくもなる所業をやってきた優希…そこからつけられた二つ名が鬼神…その名の通り圧倒的な力で敵を倒してきた優希に周りがつけた名前であった。

「隊列が立て直された、ちっ！これまでとは行かないということか！」

崩れた隊列が直ぐに戻ったのを見て相手はこれまでの刺客達とは比べものにならないほど練度が良いことを分析し右手にアーマーシユナイダーを持ってエネルギーブレードを生成して刀身を刀ほどの長さにする

「隠し球か!!各機！仕掛けるぞ！」

お互い距離が詰められて射撃武器射程内に入ると同時に打鉄部隊は散開し戦闘が開始された。

十一個の飛び回る影がぶつかり合う。

約3 kmほど離れたバニングス社のヘリでは開かれたハッチからその光景が見えており、簪は何か思うことがあるように思い詰めていた。

《あそこで優希が戦ってる、試合じゃなく……本当の殺し合いをしている……今の私には打鉄打鉄式式があるのに》

そう思いながら指輪打鉄を填めていない手の方で覆い悲観に浸っていると後ろに居るはやてが至って落ちついた顔で簪に語りかける。

「…優希の所に行きたいんか？」

それだけの言葉しかし、簪の意中をずばり当てているその言葉に簪は頷いた。

「私……優希の隣に居たいんです……けど、今のままじゃ……」

簪の脳裏に優希が出撃する前に言い放った言葉がよぎる。

殺す覚悟……そんな覚悟持ち合わせて居るはずもない……それは恐らく戦いに迷いを持ち込むなどそういう意味を持たせた言葉なのだと簪は思った。

「優希はほんま、強くなったわ……けどな……ほんまは……優希には戦場に出て欲しくないって言う気持ちがあるんや……」

「えっ？」

はやての言葉に簪は耳を疑う……それはどういう意味だと聞こうとしたがはやてはその簪の意中を組み取るように話を続ける。

「優希は子供の頃から戦いを知ってしもうた……その反面、学校には行かず……優希の年齢での当たり前な事をさせることが出来ひんかった……私達の所為でそうなってしもうたんかとよく思うことがあるんや……」

はやての口から語られるのは優希のこれまでの道程……そのことから、はやてがどれだけ優希のことが心配であったのか伺えた。

「……だから今回……I S 学園に優希が行ったこと……心から嬉しいと思うとんねんや……簪ちゃんは……優希のこと……どう思ってるんや？」

はやての心中を聞いて、訪ねられた簪は少し目を閉じて考えると、

答えは直ぐに見つかりゆつくりと目を開けて口を動かした。

「私も優希に出会えて本当によかったって思います。だから私、優希の隣で支えていたいんです！」

「そうか…ならいつてきい！簪ちゃんは簪ちゃんの戦いをすればええ！」

「は、はいー！」

簪の決意の言葉に感応してはやては優希の元へと向かえと進め、その言葉に簪は嬉しく頷いた。

「ヴァイスくん！簪ちゃんのフォロー頼むわ、へりの運転は私に任せときー！」

簪が出撃することが決まり、はやてはヴァイスに援護をするように指示、そして空いたへりの操縦は自分のすると伝える。

しかしここで疑問と感ることが発生する

はやてはへりの操縦する資格を取得していたのだろうか？…

「あの…別に援護ぐらいしますけど…へりの資格って持ってましたっけ？」

「ふっ、当然…もつとるはずがないやろうが!!」

「いやいや、そんなことや顔されても困りますから!!」

はやてに資格を持っているのか恐る恐る聞くヴァイスに堂々と持っていないと暴露するはやてに鋭いツツコミがはいる。

そんな素人に、へりは任せられないとヴァイスは思うがそんな中

…優希から通信が届く。

「母さん！そっちに敵機が4機向かった！」

へりのスピーカーから流れてきた優希の声…知らされたその状況からは一刻の猶予も無さそうであった。

「あく八神司令絶対に動かさないてくださいよ！そのまま維持してくださいー！」

そう折れたヴァイスは操縦席から立ち上がるとはやてと交替、へりを静止させると後部ハッチまで急いで移動し体をしゃがませて起動したストームレイダーを構える。

「ふえ!?なにそれ!?!」

何も知らない本音は突如出現したストームレイダーに驚くがそんな余裕は今が無い。

「見えた!・ヘリを落とす! 打鉄式は死体から回収するぞ!」

4機のうちの1機の打鉄のパイロットが指揮して4機ともステインガーを構え、ヘリをロックするとミサイルを発射……ミサイルはみるみるとヘリへと近づいていくが照準を合わせたヴァイスの狙撃で全て撃ち落とされる。

「なっ!?撃ち落とされた!?!しかもあれは……男!?!」

ステインガーを全て撃ち落とされたことに驚愕すると同時に落としたのが男であることにも驚きを隠せない彼女たち。

驚いているのを、隙と見てヴァイスは顔を簪の方に向けて言い放った。

「今ならでれるぜ!嬢ちゃん!」

「は、はい!更識簪……打鉄式……行きます!」

ヴァイスのゴーサインとともに簪は打鉄式を展開し戦場の空へと駆けだした。

八十三話 『簪の修行 不屈き者に制裁を（後編）』

「くっそ……！」

飛び交う弾丸の嵐、その殆どは優希に向けて放たれた攻撃であり、上手く連携して優希の近距離攻撃を封じてきて苦戦を強いられてきた。

「多勢に無勢か……なんとかしないと！」

そう言いながらアーマーシユナイダーを回して向かってくる銃弾を弾き飛ばす。

「やはり、中々落とせないか……しかし我々の優勢なのは違いない……よし！一部隊はヘリを落とせ！ISはそれほど柔ではない……への搭乗者の生死は問わん！」

隊長の指示に隊員達は迷うことなく返事を返し4機がヘリへと向かっていく。

「しまった！ヘリを……母さん！そっちに敵機が4機向かった！」

抜かれた事で急いでヘリへと通信を繋げる優希、しかしヘリの方に気を取られたのが失敗だった。

「いまだ！アンカー射出!!」

気を取られた隙に隊長が指示を下すと4機が特殊な銃器を取り出して射出し、飛び出したアンカー付きのワイヤーは優希の両手両足を拘束して身動きを封じた。

「くそ……これぐらい!!」

動きを封じられて優希であるが引きちぎろうと強引に体を動かそうとしたが次の瞬間ワイヤーから電流が流れて優希の体を電流が襲いかかってくる。

「ぐわあああああつ!!」

電気を浴びて優希は悲鳴を上げるとそのままぴくりとも動かなくなってしまう。

「気絶したか……よし、障害は取り除けた……後は打鉄式式だけだ」

……

へりから出撃した簪、それを確認した倉持技研の戦闘員は空かさずに武装を葵へと変更して突っ込んでくる。

「相手は中距離機体だ！近接攻撃で攻め続ける！」

そういつて簪の懐に入ると葵を振り下ろす隊員達、それを睦月と如月で強化しながら捌き続ける。

「くっ！」

昨日の優希のお陰もあり四人の攻撃を捌ききれることはできるがそれでも一時的な部分強化のためにエネルギーが著しく削られてくる。

《このままじゃっ！》

エネルギーが0になったとき待っているのは死という結末だけ…簪はそれを恐ろしくも感じるが同時に人物を選んだ道であると

《落ち着け…冷静に初心に戻る……優希はこの強化を教えたとき……まずエネルギーを武装に通し……それを覆うようにエネルギーの膜を形成する！》

「動かなくなった！もらったぞ！」

初心に戻る簪は動きを止め、それを好機とみてか1人が動きを止めた簪に特攻する。

《後は強化を維持しっつ……敵に対処する!!》

特攻する敵を見て振り落とされた葵を如月で捌き完全に全体強化された睦月を思いつき振り回すシルド突き破ると如月で至近距離での射撃を放ち、スラスターを破損させる。

すると一部の故障で浮力を失い打鉄を纏った女性は落ちていく恐怖で悲鳴を上げながら消えていった。

「っ！」

《あれじゃあ、もう……駄目だ今は迷っちゃ……》

自分の行いで1人落ちたそう思うと自分の心を締め付ける気持ちに駆られるが今はそれどころでは無いと闘いに集中する。

「おまええ!!」

仲間がやられて激情に駆られる一人は何も考えずただ我武者羅に

簪を殺そうと突撃する……しかし今の簪はそのような攻撃は通用するはずもなく睦月と如月で防ぎきる。

「くそーくそ!!なんであいつが死なないといけないんだよ!!」

「私にも譲れないものがあるから!!」

墜落したパイロットのことを悔しがる女性、そんな彼女の言葉に簪は揺れることなく譲れないと言い切り、葵を弾くとそのまま強化されている睦月で葵の刀身を折る。

「なっー!」

折られたことで即座に下がろうとするが下がったところで睦月と如月は射撃武器、当然のごとくエネルギー弾を放たれて女性の打鉄のエネルギーが削られていく。

「くそー!こうなれ!?!」

「もう…遅いよ」

反撃しようとしたが既に簪が次の一手を打ち込んでいて女性の左右から山嵐12発が向かってきており、気づくのが遅すぎたため全弾直撃し女性の打鉄はエネルギーが尽きた。

「後…二人!!」

二人撃墜したことで後の二人もとそちらに視線を向けるがその二人は既に逃走を開始…それを見て構えていた睦月と如月を解き、先ほどの去り詰めていた空気から開放される……

「終わった……」

勝ったしかし喜べるものではない。

「……………苦労さま……………ごめんな、簪ちゃん」

へりから見えていたはやてはへりを救ってくれたことを、労うと同時に戦場に駆り出したことを謝罪する。

「……………いえ、私が選んだことですから」

《優希は大丈夫だよね……………》

一方その頃……………簪の戦いが終わった直後残りの打鉄6機はというとへりを撃墜に行った部隊が全滅したことの知らせを聞き隊長は難しい顔をしていた。

「……ちっ！作戦中止だ……このまま撤退する……打鉄式式奪還は失敗したが八神優希は捕縛した……かくなる上は交渉材料に……」

隊長は作戦の中断を決定し残りの隊員に撤退命令を下すと……次の策を巡らせようとする中……

「……え？」

隊員の一人がほつりとそう呟く、次の瞬間隊員は胸に謎の光の刃が突き刺さっていて、その後力尽きて墜落していく。

「な、なにが……っ!？」

突然の不可思議なことに戸惑う隊長だがここで優希の異変に気がつく。

優希の右手が刃のように光っていることに

「っ!!全員八神優希から離れろお!!」

すぐさま、先程の現象は優希が起こしたものだとは判断した隊長だが既に遅かった。

解放されている右手をエネルギーの物凄い長さの刃を形成し隊長以外の隊員を高速で切り裂く。

「え？なに？」

「やら……れた」

「助けて……おかあ」

気づかぬ合間に打鉄の中枢や浮遊するスラストーなどを切られ切られたことで起きた爆発に飲まれて焼け死ぬ隊員達。

一瞬のことで何がおきたか頭が混乱する隊長であるが優希は冷静な目で隊長を睨みつけていた。

「……全く……本当これだけはしたくはなかったんだよな」

「な、なにがだ……」

で似れば聞きたくは無いが自然とそう口にしてしまった隊長。

そんな隊長に優希は答えた。

「修業だよ……簪の……」

「なん……だと……!」

「こんな短期間で強くなるためには普通の方法じゃあ間に合わない……だからこそ普通じゃない方法をとったんだ」

「元々、倉持技研が報復にくるのはわかりきっていた……だからこそ、空路でその上バツクアップ人員も込みでバニングス社に向かった……」

「まさか……我々を利用したというのか!!先程の捕まったのもただの……演技?」

「本当に悪いと思ってる……だが……利用できるものは利用するものだろ?」

「き、貴様は!!!」

利用されていたことに怒りのボルテージが最高潮に達した隊長は真っ向から突撃してくる。

それを優希がエネルギーを纏ったアーマーシユナイダーを投擲し隊長の打鉄のシールドを貫いて左肩のスラスターに突き刺さる。

「まだだあ!!!」

「いや、終わりだ」

直撃を避けて葵を持って構えるが優希は冷静に終わりだと口にする。

「バースト^爆」

その瞬間打鉄に突き刺さっていたアーマーシユナイダーのエネルギーが暴発してハリネズミのようにとげとげしい尖ったエネルギーの刃が隊長を襲う。

「ぐっはあ……っ!」

口から血を吹き出しそして打鉄の爆発にその身を焼かれるのであった。

「……来なかつたらやられなかつたのにな」

報復など考えずにいればと苦い顔をしてそう呟くのであった。

八十四話 『簪の修行 傷ついた心に癒やしを』

優希SIDE

『……これで最後だな』

あの戦闘の後色々戦闘中域を周りコアを回収……撃墜した人達は爆発四散したのだから肉片一つ見当たらなかった。

彼女達はこんなところで死ぬと……そう思わなかったのだろう

あの人達にも家族と言える人達が居たのだろう……だけど……自分達の地位のため、放っておいた打鉄式と簪に目を付けるのは烏澁がましい気持ちもある。

『取りあえず……戻ろう……』

そういつてスラスターを吹かせてヘリのある方向にへと向かっていった。

スラスターでヘリへと急ぐと数分もしない内にヘリに追いついて、俺が帰ってきたのを見計らって後部ハッチが開き無事に着地し、リヴアイヴを解除する

「……お疲れ様……優希」

『……ああ……』

俺の心境を組み取りながら戦いのことを労う母さん……俺はそれに目をそらしながら短く返事をする。

色々と疲れているため座席に荒っぽく座る。

「優希……」

俺の様子を見て心配してか簪は元氣のない声で俺に語りかけてくる

あっちも大体、落ち込んでいる理由は分かっているのだろう

「……生きてて……よかった……」

簪の言葉に俺は自然と頷いて簪は俺の隣の座席に座り体をもたれかけてくる。

『簪!?!』

「今はこう……させて……」

驚く俺だが、簪は温もりが欲しいためか俺の制服の袖を攔んで懇願、周りも気を利かせて目をそらしている。

戦いが終わったのに晴れない気持ち…その性で簪は暗くなるんだっただらあまり気負いするわけにもいかないな

そんなことを思いながらへりは演習場へと向かっていった。

簪SIDE

戦闘が終わって再びへりが目的地へと向かい始めてから1時間半…漸くバニングス社の演習場に辿り着いた。

優希の話から無人島を買って島丸ごとIS関係の基地であると聞いていたけど、凄いと一貫して言える…流石はバニングス社だ。

演習場のヘリポートに私達を乗せたへりが着陸し後部ハッチが開くと優希やはやてさん達は何事もなく降りていく。

「さてと、漸く、来れたわね」

と途中の襲撃のことを示唆するようにアリサさんがうんざりとした表情でそう呟くと隣のすずかさんが苦笑いの笑みを浮かべる。

「さてと、優希も簪も…お疲れ様…変なことになっちゃったけど…みんな無事に辿り着いたわ…適当な人に寝泊まりする場所を案内させるわ」

アリサさんがそういうと近くの社員に説明すると社員は二つ返事です承し私達は泊まる場所に案内された。

案内され寝る部屋で新しいベッドに寝転がっていると数時間前のことを考えてしまう

初めての人と人とも殺し合い…やっぱり生半可なものではなかった。

…優希もあの時そういう気持ちに駆られてたんだよね…

………

『少し……歩こう』

気分転換とベッドから起き上がり部屋を出て宿舍内を歩き出す。

そして一階の隅の休憩フロア……そこに差し掛かると、先に休憩フロアにいる2人を見て思わず身を隠して様子を窺う。

先にフロアに居たのは優希とはやてさん……何やら真剣な表情で話し合っているようだ。

「今日は本当に助かったよ、母さん……お陰で後ろは心配しなくても良かったから」

「支援するんがフルバックの手本やからな……まあ、まさか簪ちゃんと打鉄式式のために全戦力を投下するのは予想外やったわ」

「でもそれでも……こっちに被害はない……物理的には……だけどな」

「…簪ちゃんのことか？」

「ああ、倉持技研が打鉄式式を狙ってるのはうちの諜報員から聞かされていたから今回の根回しをしてヴァイスを回してくれた……だから、俺は倉持技研の襲撃を利用して簪の更なるパワーアップを計った……」

え？それって優希は今回のことは事前に気がついてたってこと？

それも私が出てくる前提での話……初めから来るってわかっていたようだ。

「結果は……優希の思惑通り簪ちゃんは武装の全体強化とマルチタスクを習得した。」

「それに引き替えは何かときついがな……」

そう目をそらしながら後悔している表情を見せる

「……それでそろそろ行くの？」

「うん、行くわ……本局直通の転移ポータルはこの演習場にあるさかい、気軽に帰ってきい」

そういうと休憩フロアの自動販売機の隣の壁そこに手を添えると突如として壁がエレベーターの扉へと変わる。

「隠し扉か」

「そうや、しかもただのやなくて……魔力を使わな、現れへん、擬装済みや……それじゃあな……気が向いたら帰ってきいや」

そういうとはやてさんは出現した扉の向こうへ行き、その直ぐに壁は先程と同じく元に戻った。

八十五話 『簪の特訓 真実を求めて』

『優希…』

私は与えられた部屋でベッドに寝転びながら優希のことを思う。
……優希は全部知ってたんだよね……

だからこそ、利用したんだ倉持技研の襲撃を……
私の頭は色々な疑問で思わず溜め息をつく。

『……もう寝よう……』

考えても答えなんて出て来ない…だからもう眠ることにした…
明日になれば少しはすつきり出来るだろうし

「かんちやーん!!」

突然扉が開くと私を呼ぶ声が響く、その呼び名から本音であることは直ぐにわかった。

眠気が失せて体を起こすと、本音は両袖をパタパタと振りながら元
気そうだ。

『何？本音？』

少し不機嫌に返答するけど、本音はあまり動じない

「かんちゃん、ゲームやろ！」

『…ごめん、今そんな気分じゃないの』

「で、でも…かんちゃんが好きそうな…」

『いいからー今は関わらないで!!』

思わず大声で叫ぶ…

言うつもりなんか微塵もなかった…けど頭が混乱していた私は思
わずそう口にしてしまったのを後悔した…

直ぐに弁明しないと…と私は喋り出そうとしたがその前に少し俯
いている本音が話し始めた。

「ごめん。かんちゃん…でも…どうしてかな…このままだとかんちや
ん…何処か遠くへ行っちゃいそうなんだ」

本音は今の私を気づかって…

最低だ…私、本音にこんなに心配されていたことに気がついてな
かったなんて…

やっぱりこのまま…拗らせていたら駄目だよ

「かんちゃん？」

『このままじゃ駄目だよね…ごめん本音、私優希とあってくる』

遊びに来てくれたのは嬉しいけど…私は待ってるだけじゃ駄目だ
と思い、立ち上がると部屋から出て行こうとする。

「ま、待ってかんちゃん！」

そこで慌てて呼び止めようとする本音、私は直ぐに顔をそっちに向
けると本音は話を続ける。

「先にやーくんのところ行っただけど、やーくんが居なかつたよ」

その本音の言葉にドアに手をかける指を止める。

部屋にいないということは他の場所に居るのだろう…そして優希
が行きそうなのは

『あそこかな？』

大体の予想をつけて扉を開け外に出ていく私、それを見て本音も一
緒にと跡をついてくる。

…

…

「優希くん？此処にはいないよ」

あれ？予想が外れた。

今私は整備室に来ていた。

優希のことなら自分のリヴァイヴを調整していると思っただけ
ど…

此処にいるのは技術スタッフとすずかささんだけ…すずかささんに
聞いても優希の行方はわからないようだ。

『そうですか、ありがとうございます』

「ごめんね、あつ、そうだ簪ちゃん、打鉄式は今持つてるよね？優希
のリヴァイヴと一緒に一度オーバーホールするから渡して欲しいな
…明日の夕方には完了するから明日はお休みになるって優希くん
にも伝えておいて欲しいの」

『はい、わかりました』

すずかさんが私の打鉄式も検査すると言って、私は打鉄式を渡し、そしてまた優希を探すためにこの場から去る。

「優希？あれから見えてないわよ」

次に来たのは監視塔、アリサさんがいるこの場所までやって来たけどアリサさんも知らないみたい。

でもアリサさんも知らないなんて……ここに来るときも一応見かけなかったかすれ違う人にも聞いてはいたけど収穫0……

「やーくん何処に行ったんだろ……もしかして外に……」

「それはないわよ、優希だつてバカじゃないわ……今出ていけばどうなるかぐらいわかっていることなんだから」

アリサさんの言葉には一理ある。では一体何処に……

そう頭の中で優希が居そうな場所を模索するが見当がつかない。

「まさか、あつちに戻つてたりして……それなら此処にいないのも説明がつくわ」

いま、アリサさんが何か言った？……

小さくて聞き取れなかった……心当たりがあるというのか

「取りあえず、優希のことは明日にでもちやんと探せば良いわ……もうすぐ日も暮れるから部屋に戻つてるといいわ」

優希のことを先延ばしにするアリサさん、その表情は一件柔やかではあるが、何かを隠しているような感じがする。

それと何あると言えば一つだけ気になる場所があったのを思い出す。

『仕方ないよね、教えていただきありがとうございます』

アリサさんに一礼して本音を連れてこの場から立ち去る私、ある程度離れた後、一度足を止めた。

「かんちゃん、どうしたの？」

『……本音……あと一つだけ調べたい場所があるの？まだ行ってなくて……一番怪しい場所』

あの時、はやてさんが入っていったエレベーターの先……あそこを調べるしか無い。

そういつて私達は沈み始める夕暮れが照らす道路を宿舎へと向
かって走りだした。

八十六話 『簪と秘密の部屋』

一番怪しい場所に優希が居るのではないかとそう思った私達は宿舎一階の休憩フロアへと辿り着いた。

休憩フロアには到着した私達以外誰もいないし誰かが近づいてくる様子も見られない。

「はあ…はあ…かんちゃんちよつと…休憩〜」

走ったことでダウンする本音、そんなことを気にすることなく、はやてさんが触れていた壁に触れる。

「ふえ？…どうしたの？かんちゃん？」

『本音、今から言うこと信じられないかも知れないけど…はやてさんと優希は普通の人とはかけ離れた力があるの』

「ほえ？やーくんが強いのはもうわかってることだよ〜」

やっぱり少し勘違いしている本音、まあ、仕方がないかもしれない。『優希はね、ISなしで氷を自由自在に使えたり、ビーム砲を撃つたり、もう一般人では出来ないことを出来るの…』

…これって言ったらいけない話なんだけど良いよね、今から優希と腹を割るつもりだから。

「いやいや、やーくんでも流石に…」

流石の本音も信じない…じゃあ論より証拠だろう。

『確か、この壁…魔力がどうのって言ってたっけ…』

はやてさんと優希が話し合っていた内容を頭の中で思い浮かべる。魔力…についてはもしかしたら優希が言っていた特殊な力のことを指し示しているのかも知れない…それに優希は私に強化の特训を始めて付けてくれたときに、どうしてそんなに馴れているのかと訪ねたときに直ぐに特殊な力を使うのと全く同じという答えを返してくれた。

私にも特殊な力を使える。条件は整っていると聞いていた…つまり、今の私なら！

そういつて私は打鉄式式のエネルギー収束と同じような感覚で壁

に触れている手に集中するとはやてさんの時と同じように壁がエレベーターの扉へと姿を変える。

「ふええええ!？」

『やった…行くよ本音』

突然扉が現れて、驚く本音だがそんなことを気にすることなく私は本音の手を掴んでエレベーターへと駆け込みエレベーターは下へと動いていく。

1分ほどかなり下までエレベーターは降りていき、止まって扉が開くとうつすらと明かりで照らされている空間、ぽつんとSFにあるような転送装置が設置されているだけの部屋。

『これが』

辺りを注意せずに転送装置へと歩いて行く私、そして転送装置の横に居るパネル起動すると画面とキーボードが空中投射される。

『えつと…』

「なんて書いてるの？」

投射された画面をじっくり見てこれは英語に似た文字で書かれていることに気づき、書かれている文字をしっかりと読む。

『これかな』

そういつてパネルを操作すると転送装置が起動して、装置の上に丸い魔法陣が展開します。

『行くよ、本音』

「あつ待ってかんちゃんー!」

起動したのを確認すると私は急いで転送装置の展開した魔法陣の上に乗る、遅れて本音も一緒に私の隣へやってくる。

すると私達の体が徐々に光に包まれていき、経験したこともない現象に少し戸惑う気持ちもあるけど少し目を閉じて、後は流れるままに体を任せるのであった。

NOSIDE

バニングス社、演習場の整備室、そこではオーバーホールしている優希のリヴァイヴと簪の打鉄式式の姿があった。

「さてと、これが優希くんが設計した打鉄式式の改修プランなんだけど……見る限り物凄いやね」

先日から優希が打鉄式式の改修を考えた改修プランの書かれたデータを見ていた。

「オーバーホールは明日だから私は打鉄式式の睦月と如月に手を加えよう」

そういつてすずかは打鉄式式のパワーアップに着手するのであった。

八十七話 『簪、本局へ』

バニングス社、演習場のアリサの執務室、そこに社長椅子に座り、とある場所と通信しているアリサの姿があった。

表情は少し険しいが内心では呆れて物も言えないもので淡々と述べていく通信相手の話を聞いていた。

「今回の件、また八神優希が関わっているというではないですか、やはりIS委員会に身柄を保護すべきです」

「お言葉ですが八神優希が手を下しているのはこちらに被害を加えに来た時のみです。身柄の件も彼はそちらに行くことはありませんし、私個人でも彼を渡すわけには行きません」

ことあるごとに厄介ごとを起こす優希を無理にも手元に置きたいIS委員会は優希をこちらに引き込もうと画策するが、アリサは優希の行動理念と個人での意見を述べて優希を連れて行かれることに頑固拒否する。

「……八神優希の件は置いておきましょう……もう一つ……回収されたISコアと倉持技研についてですが」

「ISコアについては3つお返しします。これから打鉄式をモデルに量産型の雛形を開発するためにコアを4つほどこちらに譲ってくれるのでしたら問題ありません」

今回の戦利品としてコアの半数の保有を提示するアリサ……しかし、疑問に思うことがあったが直ぐに返事を返される。

「4つ?5つの間違いではないのですか?報告では十機中の八機を撃ち落としたはずです、ではあと一つは?」

「優希が探した結果あと一つは見つからなかったようです。恐らく深い海底に沈んでしまったのでしょうか」

コアの数が足りないことに追求をされるアリサだが余裕な表情で追求を逃れる。

「……そうですか……今回の件で倉持技研のISに関する開発は剥奪され

ることになります…倉持技研のもつ残りのコアと機体もIS委員会が管理する予定です。つまりは今日本の中でバニングス社がIS事業の先端を担うことになるでしょう…明日から長期期間、査察を執り行います。それではISの更なる発展を期待していますよ」

倉持技研の処遇を話、倉持技研が無くなつた中、バニングス社が日本のIS事業を担うと説明をされると通信が終わり、アリサは張り詰めた緊張を解いて盛大に息を吐く。

「やっと、終わったわ…にしても…査察…ねえ不味いわね」

溜め息を吐いたのも束の間、最後にIS委員会が言い残した査察について、アリサは頭を悩まされる

長期期間となれば何時終わるかもわからない…つまりは簪と楯無の決闘にも支障がきたすことなるのだ

「アリサちゃん…入るよ…頭、抱えてるけど何かあつたの？」

悩まされているとすずかが部屋に入ってきて、悩んでいるアリサを見て、首を傾げながら訪ねられる。

「いやあね…明日から査察が入つてこのままだと演習場使えないなと思つてね」

「そうなんだ……そういえばなんだけど、アリサちゃんの方に簪ちゃん達来なかつたかな？」

「あの二人？来たわよ…優希を探してるんでしょ？…でも優希は多分本局に行つてるからはぐらかしといたわ…私の予想だと…優希は…」

「へ〜これがISのコアなんだね」

所変わつて本局の整備室、マリエルは優希が持ってきたISコアを見て興味を示していた。

「ロンギヌスにギリギリ収納して探知されないように封印処理を施して起きました…これで問題は無いと思いますよ」

「ありがとうね、早速解析班にコアを渡しておくから…何か分かれば詳細の情報を送っておくよ」

「そうですか、わかりました…それで話は変わるんですが…簪の夢現の方…どうなってるんですか？」

「あの子の武装はあと少しって所だよ…明後日に来てくれれば完成してると思う」

ISのコアについてはひとまず置いて、優希は夢現の状態を訪ねるとマリエルは笑みを浮かべて概ね良好であることを伝える。

「そうですか、それじゃ俺はこれで明後日の早朝に受け取りに来ますので」

「うん、それまでに完成させておくから…期待しててね」

優希は明後日の朝に受け取りに来るといふ趣旨をマリエルに話すと部屋から出て行く。

「さてと…このまま帰るのもなんだな…少しカフェテリアでのんびりと寛ぐか」

そういつて優希は転送ポータルのある広間へと足を運んでいくのであった。

簪SIDE

奇妙な感覚に見舞われて数秒間…地面に足がついている感覚を感じて恐る恐る閉じていた目を開けると…目を大きくして見える光景に驚愕した。

先程の転送装置しがなく、薄暗い部屋ではなく、明かりがしっかりとって人もまばらにいる。

『……………』

本当に転移してしまったのか…疑いたくなる気持ちに駆られる私…隣の本音はまだ混乱して目を瞑っているようだ。

『本音、目を開けて』

「ふえっ…もう大丈夫なの？…あれ!?か、か、かんちゃん此処何処!？」

私が本音に語りかけるとゆっくりと目を開けて辺りを見渡すと本音も別の場所に居ることに驚きを隠せないようだ。

『取りあえず…一度部屋から出てみよう…あそこに扉があるみたいだし』

取りあえず色々調べたいことが多くて先ずは部屋から出てみようとドアに近づくと自動でドアが開き、部屋の外の光景を見ると再び圧巻と言えるような一言だった。

往来していく人達にだだっ広いロビー至るところに空中投射がたのウインドウも目だつ。

それに往来して人達も空中投射のウインドウを展開している人達が多いことから、私の知る技術より優れているのでは無いかと思わせる。

……ここに優希が居るのかな…というかこの中で優希を見つけれられるのかな…

まさかここまで人が往来しているとは知らずに、焦りを見せる私。横に居る本音もどうしようと言いたげな表情を浮かべており、これからどうしよう考えていると…

「あのあなたたちちよつと良いかな？」

突っ立っていたのが目だってしまったのか声からして女性が優しい声で話しかけてきて、私は慌ててその人の顔を見ると、思考が止まってしまう。

長い綺麗な金髪に…赤い瞳…そしてピシツとした黒い制服を身に纏う女性、一瞬で見惚れてしまう女性は少し首を傾げながら私達を見詰めている。

『は、はいなんででしょうか？』

「いきなり声を掛けてごめんね、でもこんなところで立っていると、周りの人の迷惑にもなるから…ね？」

そういつて私達を注意する女性…そのあと女性に連れられてロビーの邪魔にならない場所に連れてこられると、また話しかけられる。

「あなたたち、本局に来るのは始めてかな？」

『本局？は、はい！はじめてです』

本局…そういえばはやてさんもそんな単語を言っていた…つまり

此処の名称を意味しているのだろう

「そうなんだね…やっぱり、どこか私の友達と同じ感じだったから何となくわかったんだ」

そういつてくすと微笑みを浮かべる女性…

「本局には何をしにきたのかな？わかることなら教えられるんだけど…」

困ってる私達を見過ごせないのだろう…そういつて手を貸してくれる女性に私は言うべきか判断に迷う。

此処で優希を探しに来たことを話せばもしかしたらわかるかも知れないけど…ここまで人が多い中個人を引き当てるなど…相当な高い確率であるのは間違いない。

「えつとね、やーくんを探してるんだよ」

って私が考えてる横で本音が優希を探していることを暴露…でも女性は首を傾げて困った表情を見せる。

「えつと…やーくんじゃあわからないかな…」

『あ、えつと…優希っていう人を探しているんです』

ハツキリと言った…流石に無理だろうな…

「え？優希？」

優希の名前に反応を示す女性、あれ？これはもしかして…

「もしかして八神優希…って名前じゃないかな？」

女性から口に出される優希の名前…声を掛けられた女性から優希の名前が出て来たことに私は驚くのであった。

八十八話 『時空管理局』

「えっと、あなたたちの表情から察すると…二人が探しているのは優希で間違いないみたいだね」

本当に一回目で優希の知り合いに会えるなんて思わなかった。

そんな驚きの心境に見舞われながらも私は女性の問に縦に頷いて肯定した。

「うーん、今日は優希は見えてないけど…はやてならわかるかな？バルドイツシュ」

「Yes. sir」

今日は優希を見た覚えの無い女性は、はやてさんの名前を出すとバルドイツシュ？という名称を口にするどこからともなく、機械混じりの声音が聞こえて来て女性の前に空中投射のウィンドウが出現する。

「あれ？フェイトちゃんお疲れや…急に連絡してどないしたんや？」

するとウィンドウからはやてさんの声が聞こえてくる。

「はやて？ごめん、優希っているかな？」

「優希？いや？おらんよ？あれ？フェイトちゃんには優希今任務で地球に行ってるん知らんかったけ？」

え？どうして此処で地球なんて大雑把な発言をしているのだろうか？

それではまるで…ここは地球の何処にも存在しないと聞き取れる言葉だ。

「優希…地球にいるんだ…えっとね…優希を探してある子達が居て…」

「誰やる？優希が助けた人がラブレターでも直接渡してきたんかな？でも諦めた方がいいで、なんせ今優希には意中の女の子が…」

『あ、あの…はやてさん…』

失礼だけど、女性の隣に立ってウィンドウに向いてはやてさんに声

を掛けるとテレビ電話と同じようなので私の顔を見て鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていた。

「…うえええええええい!! 簪ちゃん!? ちよい待ち!? なんで…此処に自力で此処に来たんか!」

次に覆いに驚き声を上げる。はやてさんその声に私と隣の女性：フェイトさんだったかなその人も大声で耳を塞いでいて、大声で周りの人もこつちに視線を向けてきて、それに気づいたフェイトが頭を下げて謝る。

『その、ごめんなさい…優希とはやてさんが休憩所で話し合っていたのを覗き見してて…それで…』

「あくそういうことか…簪ちゃんは条件も整ってるから開けられるわな…はあ…しやない…ごめん、フェイトちゃん…簪ちゃんとは本音ちゃんかな? 私のオフィスに連れて来て欲しいな」

「うん、わかった、それじゃあ今から行くね」

そういうとはやてさんとの通信がきれて、フェイトさんは少し溜め息をつくと私達に顔を向ける。

「それじゃあ、はやての所に案内するね、それにしても…無断で転送ポータルでこつちに来るなんて駄目だよ」

めつと指さしして私達を軽く叱るフェイトさん、やっぱり無断使用は禁止されているんだろうな…

軽率な行為に反省しながら、私達はフェイトさんの後に続いていき、また転送ポータルを利用してはやてさんのオフィスの近くまで転院する。

転送ポータルはフェイトさんがいたから難なくこれた…転移する前にその理由を聞いてみるとここはかなり広いために転移を利用しないとかなり時間がかかるとか

そんなことを聞きながらフェイトさんの先導で通路を通っていきはやてさんのオフィス前の扉までやって来た。

「はやて、来たよ」

扉の横にあるパネルを操作すると部屋の中にいるはやてさん達に

フェイトさんが来たことを伝えるとドアを開けて私達は部屋の中に入っていく。

オフィスは結構広く、大きめの執務机が一つにその左手にそれより小さい机が二つ…そのうちの一つには以前にあったことのあるリインちゃんが私達に気づいて笑みを浮かべて、そして大きい執務机の先に椅子に座るのは、ヘリでの私服姿では無く。ぴしっとした正装の服に身を纏った。はやてさんがいすに腰掛けていた。

「ようこそ、簪ちゃん、本音ちゃん、数多の次元世界を守る守護機関…時空管理局へ」

そう、笑みを浮かべて気になる単語を幾つも述べるはやてさん。

『…はやてさん…時空管理局…それが前に行っていた…何処の国にも所属しない組織の名称なんですか?』

「うん、そうや…ごめんな…あそこまで巻き込まれていたのに…色々と抜けた説明をしてもうて」

まずは組織名のことをはなすとはやてさんは申し訳なさそうな顔で謝罪をしてくる。

「あと、フェイトちゃんふたりを連れてきてくれてありがとうなお仕事大変なはずなのに」

「ううん、訳ありみたいだし…別に気にしてないよ…取りあえず、今日はもう上がりだから…お先に上がるね」

「そうか…お疲れ様」

そういつて次にははやてさんはフェイトさんに向けて私達を連れて来たことに礼を述べるとフェイトさんは私達の事情に少し察したのか笑みを浮かべると部屋から退室していった。

「…さてと…ほんなら色々話さなあかな」

漸く真実が聞ける、今か今かと待っているけど隣の本音の状態に気づく。本音は何が何だかわかっていないのだ。

「あの～はやてさんとかんちゃんだけで話を進めないでほしいです」

「本音ちゃんは知らんもん…それじゃあ…先日起きたレゾナンスで

の事件を話さなあかな」

そういつて本音に先日に来た、レゾナンスでの出来事を打ち明けるはやてさん、本音もしっかりと聞いて：聞き終わると納得した表情を見せた。

「ほえ、そんなことあったんだ」

「取りあえずはレゾナンスでのことはこれぐらいやな……さてと先ずは……次元世界の話からしようか……まず驚くと思うけど……ここは地球に存在しない場所や……言わば別世界と言いきつても良い」

「え？別……世界？」

いきなり突拍子のない話……普通は嘘だと割り切れるけど……割りきれぬ気になれない

「実はな世界って言うのは簪ちゃん達が生まれ育った地球だけやのうて……無数に世界が存在するんや……簡単にすると地球が一つの国として……次元世界を世界と考えればええかな？」

……なんとも言えない……地球自体がちっぽけな感じに感じる。

「地球には外世界……次元世界への渡航方法は無いから知らんのも当たり前や……でもな次元世界を股にかけて悪さをする犯罪者は多く居る……そういう人達を逮捕するのが時空管理局や……地球でいうんやったら時空管理局は警察と軍……裁判所とかもう、色々と一纏めにした組織……と考えれば良い」

「え!?そんな纏めて大丈夫なんですか!？」

聞く限り無茶苦茶になるのでは無いのかと思うがその返答を応えたのははやてさんでは無かった。

「まあそれで今の体制が維持されてるわけだから……大丈夫と言えば大丈夫だろう」

後ろから聞き慣れた声にする私は振り向くとそこに扉の前に居たのは以前にもあった神崎さんと少し複雑な心境を顔に出している優希の姿があった。

八十九話 『腹を割ってのお話し合い』

空気が重い：優希がやってきたことで私と優希の間にはそこが見えない谷間のような溝が出来ていた。

優希は時空管理局のことを最小限にしか話していないし：関わらせるつもりなんて一度も無かったんだろう…

加えて私とここまでの秘密を持っているとは思っていなかった：次元世界なんて文字通りでぶっ飛んだ事実なわけだから

『……』

「……………」

私も優希も終始無言：どう話せばいいのが切り出すタイミングが図れずにいた。

だけどここの状況を黙っていない人がいる。

「あゝ!!なんやこのお通夜みたいな空気は!!」

「は、はやてちゃん：今は少し大人しくした方が…」

「いいや、そんな空気は私がぶち壊す!優希!簪ちゃんと一緒に飲み物買ってきてい!上司命令!」

「職権乱用も甚だしいな!!……………はあ…それじゃあいつてくるよ」

凄いい理不尽を見た気がする。

優希も呆れながらもはやてさんの言うことを聞いて部屋から出て行く。

「…簪ちゃんもほらいき」

片目を閉じてあっちいけと言わんばかりに片手を振るい、恐らく厄介払いではなく気を利かせたのだろう。私は言われるままに部屋から出て優希ついていくのであった。

はやてSIDE

『ふう……いってくれたか…』

今のこの現状を作った元凶は省けたわ：まあこれで元に戻れば万々歳やな

「あの〜一体何がおきてたんですか？」

ほんわかには首を傾げる奏ちゃん：この中では事情を知らないわけだから仕方がないと言えば仕方ないわな

取りあえず事情を話そうかと思うた時、私のスマホから着信音が流れてくる。

『あれ？アリサちゃんや、なんやろう』

どうしてアリサちゃんから連絡がとそう疑問に思うこともあるけど：私はアリサちゃんからの電話に出るのであった。

簪SIDE

：はやてさんのおかげ？で二人つきりになった私と優希はやてさんのオフィスから少し離れた少し休めるソファアが備えられている。

しかし、先にオフィスを出た優希に落ちついたのだけど一言も話せずにいる。

「…全く…」

無言の間に優希の呆れた呟きが聞こえてくる。

「喫茶店で神崎と話したら突然母さんに呼び出され、途中でフェイト姉に会ったらいきなり、簪のことを話すから度肝を抜かれたよ」

再び全くと呟き、自動販売機でジュースを二つ買い一つを私に手渡し近くのソファアに腰を座らせて私も続くように優希の隣に座る。

『…ごめん』

優希を驚かしたことに俯きながらも謝罪をする。すると優希は何を思ったのが溜め息をつくと持っていたジュースの缶を私のほっぺに付け：缶から発する冷気が肌に直接伝わってきて私は小さい悲鳴を上げた。

『ひやつ?!何するの?』

「いや、謝るのは俺の方だよ…あの時事情を話したのも色々と抜けた事とか今回の倉持技研の襲撃を察知していながらも：簪に強くなってもらいたいたために利用したこと：謝ることだらけだ」

そう乾いた笑みで笑う優希、そんな優希に私は体を優希に委ねる。

「か、簪!」

『そんなことない…確かにどうしてと思うけど…全部それが最善だと思っただよね…それに後者に関しては…自分の今後のことを考えて…』

「…やっぱり気がつくか…そうだよ、簪の察してる通りだ」

時空管理局というこのことを知ってから今回の襲撃を利用したのかは納得のいく理由がわかった。

優希はこの組織で次元世界を守ることが義務だ…なんらかの任務でIS学園には来ていたのだろうけど…いつかは…戻らないといけなくなる。

そうなればこれまでのように私を守ってはくれない…だから一人でも戦えるように利用できる物は利用することにしたのだろう。

「…簪…簪の思いも分かることには分かる…けどな…何時かは地球から離れることになる…そう思うと簪の気持ちを…」

『待つて優希…勝手に決めないで』

恐らくここで諦めてくれと突き放そうとしていたのだろう…だけれどそうはいかない…私は…私の思った事をする。

『私は優希が好き…優希が地球から離れるんだったら私も優希に付いていくよ』

「危険だ！次元世界は地球とは比べものにならないほど危険なことが起こるかもしれない…それに簪を巻き込むわけには…」

強く否定する優希…少し前の私ならここで引いてたかも知れない…でも…今の私は引く気なんて早々にない！

『譲らないよ、この気持ちは…私は優希の隣で支え続けるって決めたから！』

誰にもこの決意を止められない！そう表情に見せる私それを見て優希も少し黙り…目を閉じると大きく溜め息を出した。

「…はあ…これは何言つても…止まらないな…何処かその真っ直ぐした信念はなのは姉に似てきてるし…なら、ちゃんと俺が守れる範囲にいてくれ…遠すぎると守れないかも知れないしな」

そう頬赤くして視線を逸らす優希…どうやら分かってくれたみたいだ。

『うん！優希のことは私が一生隣で支えるよ！』

分かってくれたことで私は優希に向かって笑みを浮かべる。

「さてっと…本音達を待たせるのもなんだから行くか…飲み物買ってな」

『うん！』

私ははやてさんのオフィスに戻ろうと声を掛ける優希にたいして頷きジュースを買った優希の隣を歩くのであった。

九十話 『簪、ミッドに降り立つ』

優希 S I D E

簪の告白を受け取った後俺は小恥ずかしながらジュースを持って母さんのオフィスに戻った。

中に入ると母さんだけで残りの本音やリイン、神崎さんの姿が見当たらない。

俺達が話し合っていた間に何処かへ行ったのだろうか

リインはともかく、神崎さんもここに来てから少し経つから問題ない

だけれど、今日来た本音がないと言う事が俺に関しては気になっていた。

「お帰り…どうやら蟠りはなくなってるな…いや〜良かった」

俺達の仲が直ったことに笑みを浮かべて嬉しそうにいう。

『心配させてごめん…所で…リイン達は？見当たらないけど』

「リイン達には地球のアリサちゃんの所に行ってもらっとるんや」

『演習場？何でまた…』

本音は演習場にいち早く戻ったということの説明がつくけど他の二人は行く理由がわからない。

その理由聞こうとした時、後ろの扉が開く音がして振り向くと、何故か俺達の荷物を持っているリイン達がやってくる。

「はやてちゃん、優希達の荷物持ってきたのですよ」

「リインお疲れ…まあ、優希がおらんときにアリサちゃんから連絡があつてね…明日から緊急の査察が入ったから演習場を使えへんって」
『…そういうことか』

俺は母さんから告げられた内容に納得した表情で返事を返す。

恐らくは突然の査察は倉持技研の件にも関わりがあると見て良いだろう。

しかしそれはかなり困った事になった。

演習場が使えなくなったことで更識さんと簪の決闘の話がまた有

耶無耶に…なるかもしれない。

それはなんとかしなければと模索するが直ぐには答えは出て来なかった。

「まあ今考えても答えは纏まらへんやろうし…それで簪ちゃん達泊まるところないやろ?」

そういつて母さんは椅子から立ち上がり座っていて凝っていたのか背筋を伸ばす。

「ん〜!!取りあえず、私の家に泊まるってことでええやろ」

「え!?!はやてさんの家ってつまり…優希の…実家?」

驚いて母さんの家⇨俺の家だということを口に漏らしながら呟く。

『大丈夫なのか?…部屋割りとか』

「そこところは大丈夫や…ほんなら私とリインは仕事終わりやから着替えてくるな…取りあえずミッド行きの転送ポータル前で集合や」

母さんが問題ないと強気で言い切り、俺は母さんのその言葉を信じて俺達はミッド行きの転送ポータル前で待ち合わせた。

そして私服姿の母さんとリインがやって来て、みんなでミッドに降り立ったわけだが、まず家に戻るのだがその前に買い物に行かなければならない。

「取りあえず、車、駐車場に止めてあるから行こか」

母さんの声と共に母さん先導で地下の駐車場にやって来るとギリギリ八人は乗れるであろうファミリートタイプの見知ったナンバープレートが一つの駐車スペースに置いてある。

『母さん?よくもまあファミリートタイプの車で…乗ってたの三人だったろ?』

「まあ、色々途中、他のみんなも乗るかもしれへんからな…」

そういつて母さんは車のロックを解除すると母さんは運転席へ俺は隣の助手席に座る。

簪達も後部座席に乗り込むとエンジン始動して車を発進させた。

はやてさんの車に乗って地下駐車場から出た私達…

地下から出て私が目にしたのは地球では見れない、発展した街並みだ。

辺りには高層ビルが建ち並び進む先にも同じようなビルが建ち並んでいる

「ほえ〜見てみてかんちゃん！あっちに物凄く大きい塔があるよ〜」隣に座っている本音がはしゃいで私に呼びかけてくる、何かと思つて振り向き本音が指さす方向を見ると私は絶句した。

一際目だつ高い塔…この都市の象徴と言わんばかりにその塔は堂々と立っている。

「あつ、あれは管理局の地上本部なんですよ、あそこが地上での管理局の要なんです」

つまり、日本の国会議事堂と同じということかな？

そう思うと一つ気になったことがあつて私は優希に向かって話しかける。

『ねえ優希？優希はその地上本部つて言ったことあるの？』

「地上本部か？ああ、何度か…行くとしても母さんの付き添いばかりだったからな…」

「地上本部か…そう思うと…あの時のことを思い出すわ」

「…ああ、あの時の…な」

何を思い浮かべているのか優希の表情に影を落とすような物が見える。

これは聞かない方が良くかもしれない。

「…そういえば神崎さんつて今は母さんのところにいるけど…結局、家出問題…どうなったの？」

「ほえ〜…話してなかったですか？…えつと…一度…はやてさんと一緒に家には戻ったんですけど…色々話し合った結果…はやてさんの所に行くことになったんです」

「ああ、あれな…ほんま、私が優希の母親つて言ったら手の平返して差し出してきたわ…もう完全に下心見え見えでな」

そう、淡々とその日のことを清明に説明をするはやてさん…なつと

も…簡単に想像が出来てしまう。

「出て行く前…優希さんを籠絡しろなんて言われたよ…やる気はないですけど」

「でもまあ、差し出してくれるんやったら好都合や…それで今は私の家に居候させとるんや」

「…ミイラ取りがミイラになった…というかミイラ取りは実はミイラだった…だな」

…それ物凄く言い得て妙だよ

そんな事を思いながら車はスーパーへと向かって走り続けるのであった。

九十一話『八神一家』

「いや〜みんなありがとうな買い物も手伝ってくれて」

既に日が沈み…地球では見られない月が二つある星空の中、車は先程の街並みより落ちついた…何処か海鳴市を思わせる街並み…遠くからはギーギーと波の音が聞こえてくる。

少し辺りが暗いためにこの近くには海があるのだろうとそう思わさせる。

「そういうえば、母さん今晚、他に誰がいるの?」

「えっと、ヴィータとザフィーラやな…シヤマルは忙しいらしいし、シグナムとアギトも今日は帰れんって」

前の優希とはやてさんが何やら聞き慣れない名前をどんどん出してくる。

察するに家族だと思うけどどんな人達なんだろう…

「あ、簪ちゃん達は分からないですよね。ヴィータちゃんって言うのは…私達の家族で…優希の戦闘の師匠の一人ですよ」

え? いまりインさん…なんて言った?…優希の…師匠?

私の中で戦慄が走る、だって優希はあれほど強いのだ、勿論教えた先生がいるのも頷ける。

だけど考えてみると優希の師匠の人物像が想像できない。

強面の何処かのダンボールを愛用する凄腕の兵士を思い浮かべてしまう。

いやでもリインさんはちゃんずけ…つまり、それほど怖くない?

色々と優希の師匠の人物像を考えるがいまいちピンとこない…

「…簪、もしかしてヴィータの事について考えてるのか?…別に考えるほどの者でもないし…それに会えば驚く」

…どうということなのだろう。

私はその優希の師匠がどんな人なのか…それが気になってそわそわしながら車は車道を走っていきそして、一つの一軒家の車庫に駐車するとはやてさん達は車から降りて私と本音も続いて車から降りる。

そしてはやてさんの後を付いていくと車庫の直ぐ傍に建っている軒家を見上げる。

『ここが…優希の?』

「ああ、素っ気ない一軒家だろ?」

私の質問に平然と返答する優希、それを聞いていたはやてさんは少し拗ねた顔で優希を見る。

「素っ気なくて悪かったな」

「別にそういった意味合いはないんだけど…ただ単にアリサ姉達みたいな屋敷じゃないって言いたいだけ」

「…そうか…まあええわ、ほんなら簪ちゃん達も遠慮せんでええから入ってきい」

そういつてはやてさんは家の扉を開けて優希や神崎さん達は迷うことなく家の中に入っていく、はやてさんのお言葉に甘えるように私達も家の中に入っていく。

「ただいま〜靴からしてヴィータも帰って来とるな」

はやてさんが玄関前でただいまと声を出すと、ふと、並べられている靴からその優希の師匠の靴があることに気づいたようだ。

私もはやてさんの目線に目を向けるとそこには子供が履くような小さい靴が…

??あれ?どうして小さい靴が?もしかして、はやてさん達の末っ子かな?

はやてさん先導に靴を脱いでリビングへと向かっていき、リビングの扉を開けて中へと入っていく。

「あつ、はやてお帰り…今日遅かったけど、何かあったのか?」

「ヴィータ、ただいま、少しあつてな…買い物に行つとったんや」

リビングに入ったはやてさんが噂のヴィータさんと話し合ってる。

声からして女の子?しかも幼いような…

私の頭の中でまた謎が増えるなか続いて優希とリインさん、神崎さんもリビングへと入っていく。

「リインと奏…後…優希!?お前、地球にいるんじゃないの!?!」

「ただいま、ヴィータ、色々あつて帰郷することになった…」

リビングでヴィータさんが優希を見て驚きの声を上げ、それに対して優希は名前を呼び捨てで平然と話す。

「ヴィータちゃん。実は今日は優希だけじゃないですよ！簪さん達もこっちに来るのですよ」

そういつてリインさんが私達を手招きにして、私達もリビングへと入るとそこにいたのは赤髪の女の子と青い毛並みをした大型犬であった。

「紹介するですよ！更識簪さんと布仏本音さんですう！二人とも優希の同学年生ですよ！」

『え、えつと…更識簪…です』

「布仏本音…だよ」

緊張して声が上手く出ない本音も何時もみたいなのほほんとしていないのも珍しい。

「…確か簪っていうと優希が目掛けてる奴だよな」

「…ああ、大体のことは主からも聞かされている」

『え!?!い、犬が喋った!?!』

女の子の隣にいる大型犬が人の言葉を喋ったことに驚きを隠せずにいると…隣の優希はそういえばとといううっかりした顔つきで喋り始める。

「ああ、そういえばザフィーラのことなんも話してなかった…えつとザフィーラっていうのがあの犬のこと…言葉を話すけど気にするな…後こっちにも喋る動物はそれほどいないから」

「犬ではない…狼だ」

優希が言ってくれたことで少し納得するけど、その…ザフィーラ…さん?が正確な補足を付け足してくる

「他にも後は三人おるんやけど…仕事でおらんよ…でもきつと会えると思うで」

そういつてニコニコと笑みを浮かべるはやてさん…既にザフィーラさんの存在で頭の許容範囲は超えている気がする…

でも1つだけ改めて分かった気がする…私より幼そうなヴィータさん、人の言葉を話す犬…ではなく狼のザフィーラさん、まだ23歳

なのに15歳の息子を持つはやてさんにそれを支えるリインさん、それに逸脱している戦闘力を持つ優希…

まだ見ぬ三人の家族もいるというけど絶対に一般人とは思えない…八神一家…やっぱ想像を絶するような家族なのは間違いないだろう。

九十二話 『八神家+αの日常』

「さてと、ほんならちやつちやと作るな…今日はボンゴレや」

「はやてちゃん、ラインも手伝うですよ」

「なら俺も」

私と本音の自己紹介も終わった頃、はやてさんが早速料理に取りかかろうと動き出し、そんな、はやてさんを手伝おうとラインさんと優希が手伝うと立候補する。

「優希はこの頃、働き詰めやし、休んどぎ」

「…了解、なら寛がせてもらう」

はやてさんは申し訳なきそうな顔で優希に向けていって、優希もはやてさんのことを熟知しているためか潔く、その言葉に甘えた。

「簪も本音も疲れてるだろ、そこにあるソファーとかに腰掛けていいぞ」

『あ、うん、ありがとう』

「なんだか、こつちに来てから…疲れっぱなしだよ」

優希の言葉に私はお礼を言うのと近くのソファーに腰掛け、同じく本音も地球から出てきた時から疲れっぱなしと両腕を軽くパタパタと振って腰をかけた。

「そういえば、優希…そこにいる、簪がちよくちよく言った奴だよな」
「ん？ああ、ゴールデンウィーク中に色々とやるつもりだったんだがな…緊急の査察だからな…」

そういつて溜め息を付く優希…やっぱり査察は予想外だったみたい。

でも…これじゃあ予定されていた姉さんとの決闘も…

一気にまた有耶無耶になったことに不安な表情を見せる

「…どうしたもんかな…決闘をする日までに査察が終われば問題は無いんだけど…」

「終わるとは思えねえな…ISのコアを今以上に持つことは、それに適した環境なのかを見極めねえといけないからな」

緊急の査察に頭を悩ます優希、それに補足するようにヴィータさんも当然とも言えることを言ってくる。

「取りあえずなんとも言えない状況だな…明日はリヴァイヴも式式もオーバーホール中だからな…取りあえず簪達連れて観光でも行くかな」

え!?ミツドの観光!?

行きたい気持ちはあるけど…良いのかな…切羽詰まってるのに…

「良いんじゃないのか…明日ぐらい遊んでこいよ…」

ヴィータさんもそれでいいと頷き、明日の予定は観光と決まった。

ど、どうしよう…優希とまたお出かけできる。

えへへへ

「かんちゃん、顔真っ赤で嬉しそうにしてる」

「え!?もしかして…簪さんって、優希さんのこと…」

「初々しいですね」

そう、私を見て茶化してくる三人…今の私の心境は顔に出ているのだろう…優希は他所を向いてるからバレてないみたい…よかった…

「にしても明後日か…よし!明後日なんだが、あたしが練習に付き合ってるよ…」

「ヴィータ?!いや、それは心強いんだが…仕事あるだろ?」

「ふえ!?ヴィータさんって…お仕事してるの?」

驚く、本音だけど仕事をしてるのは一理あるかな…でもあれ?確かにヴィータさんって優希の師匠じゃあ…

「ま、まあ、何処を見てそう思ったかは気にしないで置いてやる…あたしは、教導官だからな優希を教導するって事でついでに教導してる」

これは…言わない方が良いよね…体格のことは…「なんか言ったか?」な、何も言ってますせん!

「とりあえずだ!優希の付け焼き刃の教導なんかより効率的だろう…

優希も腕が鈍ってないか確認できるしな」

「…色々酷いこと言うな…おい」

明後日はヴィータさんが教えてくれる…一体どんなことするんだろう…

優希でも武装強化やマルチタスクの練習だから…基礎的なことをするんだろうな

その後も色々ヴィータさんとザファイラさんと雑談を交えて話し合い、私は直ぐに八神家の人達と打ち解けた。何処か優希のように打ち解けやすい印象があるな。

その後はやてさんのボンゴレの美味しさに絶賛したり、お風呂で本音と一緒に入って本音が私の胸を揉もうとしていたのを止めたりと今日の疲れを流していき、そして泊まる部屋を決めるときに、その事を告げようとするはやてさんの口元がニヤニヤとにやついていた。

こういうはやてさんってよからぬ事を考えてる時だって優希言ってたな…

「とりあえず、部屋割りなんやけど…本音ちゃんは奏ちゃんと一緒に部屋使つてな…後簪ちゃんは…優希と一緒に優希の部屋を使おうか」

へ？優希の部屋？優希と一緒に!？」

「ちよつと待て！母さん！いやいや、流石に不味いだろ！それは!？」

優希も真っ赤にしてはやてさんの言葉に反論する。

流石に優希と一緒にのベッドで…寝るなんて…あうう…想像しただけで顔が沸騰しそう

「問題ないって…学園寮でも同じ部屋やったんやろ？」

「いや、確かにそうだけど…ベッドまでは別だつて!？」

必死に私のことを思ってくれている優希…けど…優希と一緒に寝たいっていう気持ちも満更じゃないんだよな

(それに、簪ちゃんは満更そうでもないんやろ?)

あっ!? 念話！はやてさんはにやついてこつちを見ている…完全にお見通しというわけだ。

『優希…私は別に良いよ…その…一緒にベッドで寝るの』

「簪ちゃんがそういつてるんやから決まりやな」

私が了承したことではやてさんは半ば強引に優希と私は同じ部屋で寝ることが決まり、優希はこの問題に頭を悩ませるのであった。

九十三話 『GW1日目／ミッド観光』

…どうも：優希です

今現在俺は身動きが取れない：

何故かって？それは俺の目の前にいる人物が起因してる。

俺の目の前には水色髪を下ろし、淡い紫色のパジャマ：そして健やかに眠っている寝顔

…まあ、わかると思うが簪だ：

何故かっていうと昨日の出来事が問題で、俺のベッドで俺と簪が寝ることになった：

お互い抵抗感があったが直ぐにそういった蟠りはなくなり：そこまでは良かったのかも知れない

簪が眠ってから簪の意識などあるはずかないのだが俺に抱きついてきた。

腕はきつちりと俺の背中に回されていてその上足は俺の足に絡みついて強引に取る以外方法もなさそうだ

そしてなにより：今現在、俺と簪は密着しているという状況こそが問題といえる。

服越しとはいえ、ここまで密着していれば、その：簪の体の感触もよく分かってしまい…：昨日の夜はあまり寝付けなかった。

とりあえずこの状況を脱したい…このままだと理性までゴリゴリと削られかねない。

まず、取りあえず下からは足音なんか聞こえる…つまり母さん達はもう起きているということだ。

それに窓から見える空の色からも明け方：寝ていたら起こしてくれるかも知れないが：来る人に問題がある…

グイータやザフィーラなら問題ないだろう。

リインは…この状態を見て赤らめるだろうけど何とかしてくれるといえれば怪しいところ…

問題は母さん、確実にアウトだ…母さんなら確実にこの現状を見て

もニヤニヤして放っておくに違いない

……となると：いやあと一つだけ大丈夫そうなのがいるではないか…

(おい！ロンギヌス聞こえるか!?)

俺の机の上に丁重に置いてある待機状態のロンギヌス：ロンギヌスなら目覚ましのアラームのように起こしてくれると信じて念話を送る。

(…zzzzz…zzzzzzz)

(おいしいいいいっ!?寝たふりか!?デバイスが狸寝入りするなんて聞いたこともねえぞ!!)

くそ！一番頼りになると思ったらとんだ伏兵が潜んでやがった!!

次の手を模索していると下から足音が近づいてくる

どうやら誰かがこっちに向かってきてきているようだ。

頼む！母さんじゃないように!!

と心の中で祈る俺だが足取りが軽いのに気がついて母さんではないことに気づく。

足取りが軽いのはリインかヴィータぐらい…つまりは…脱出できる!!

こちらに近づく希望、そして扉が開かれ入ってきたのはヴィータだ「優希、休みだからって寝てないで…」

やっぱり起こそうとしている、しかし途中で言葉が止まった。

恐らくはこの状況を見てのことだろう

だがこれほどの機会もない、急いで誤解を解くために念話を送った。

(ヴィータ、言いたいことはあると思うが助けてくれ、今の状態じゃあ手の出しようがない、ヴィータが俺の拘束を解いてくれるなら起きれるんだ、頼む!!)

誠心誠意のお願い、これはヴィータも助けてくれるだろう

しかし、思っていたこととは裏腹にヴィータはにやりと笑みを浮かべる。

(仕方ねえ、もう少し寝かしてやるよ…後1時間ぐらいはそうしておけ)

ブルータス、おまえもか!!!

くそ！完全に読み間違えた、ヴィータなら大丈夫だと信じていたのに！

「ヴィータ様…私も連れて行ってください」

「ん？わかった、それじゃあな」

そういつて机に置いてあったロンギヌスを持って俺ににやついた笑みを浮かべて部屋から出て行った。

『ま、全く…朝からしんどい』

「あうう…」

あれから一時間半ほどが経過し、食卓の机に座る俺は不機嫌な表情を見せ、隣に座る簪は顔が真っ赤になって恥ずかしがっていた。

「まあ、いいじゃねえか…今の優希は学生なんだからな」

「そうやで、今のうちに青春してないと…」

そういつて母さんは俺達の前に朝食のベーコンエッグを置く

『母さんは言えた義理じゃない気がするけどな…』

「ん？なんかいったか？」

ニヤニヤしてその上に圧迫感がとんでもない…

…口では母さんには勝てる気がしない……

そう思いながら朝食のベーコンエッグを食べ終わると、少ししてから母さん達は直ぐに出ていく時間帯になっていた。

「ほんなら、私らは行くさかい…後片付けとかよろしくな」

そういつて母さん達は行くも通りに出勤残った俺と簪は後片付けで皿を洗っていた。

『ごめんな、皿洗い手伝ってもらって』

「ううん、いいの…泊めてもらってるんだから…これぐらいしらないね」

一般的な会話が続き、そして時間は九時を少し過ぎた頃俺達も準備を整え家を出ようとしていた。

「気をつけて行ってこい、それと四時頃からいつも通りに子供達が来る…子供達も優希と会いたがっていたぞ…暇になったら顔を出しに来い」

『わかった、それじゃあ行ってくるな』

ザフィーラに見送られて、家を出る俺達、少しずつ家から離れていく中、本音は気になったのか俺に向かって話し始める。

「ねえねえ、やーくん…観光って言っても何処行くの?」

本音に言われてるけど…うーん…

『取りあえず…都市部の方へ行ってみるか』

唐突な所もあったために計画性などなく、取りあえずとクラナガンの中心部の方へ向かっていく。

少し徒歩でバス停まで行き、モノレールでクラナガンの都市部へと辿り着くとまず、中心部で一番でかいショッピングモールへと向かった。

まだ昼前ということもあって…ショッピングモール自体の来客者は少ない。

「すごい、ここ大きいね!!」

中に入り、ショッピングモールの大きさに驚く、本音、それを俺達はそれほどはしゃぐものかと思いつながら本音の後を付いていく。

『本音、はしゃぐのは良いがはぐれるなよ』

「大丈夫だよ」

と俺の問に相変わらず、のほほんと返す

『取りあえず電子端末を取り扱ってる所行くか』

「え?どうして?」

『いや…まあ…こつちだとわからないことばかりだろ?…それとどうしてそこなのかは…気まぐれだ』

本当に何を見るのかも決めていないからな……
取りあえずは……行ってみるか、そう思いながら俺は簪達を連れて
電子端末を扱っている店に向かうのであった。

九十四話 『GW一日目／雷帝と氷帝』

簪SIDE

どうも、簪です

今私達はショッピングモールから少し離れた公園で休息を取っています。

ショッピングモールを一通り見回って一言…

本当に楽しかった！

だってね、優希が連れて行った電子端末のお店で見たのは、地球では到底、拝めない高スペックなPCがたっくさん並んでいるし

更に何を言ってもその値段が凄かった、地球じゃ絶対手に入らないと思われる値段で売られていたから、本当は欲しかったんだけど…こっちのお金持ってないし…優希に出してもらおうのもちよつと引けたから…

その後、デバイスのコーナーにもいったら、また私のテンションが上がった。

さっきのPCより値段も張るものながら、性能は群を抜いてデバイスの方が高性能

しかも！これが市販の量産型というわけで…専用機となると、大体は自身で組んでいる人が多いらしくて…デバイスのパーツなんかも多く置いてある…

デバイスのパーツを見ただけでも…打鉄式式に組み込める物が多くて…優希に呼ばれるまで長い間、それらをずっと見ていた。

その後も色々なお店を見回って、お昼ご飯も食べた後、一服ついでに公園へとやって来たのだ。

「ごめんね、やーくん、全部奢ってもらって」

「別に良いよ、こっちのお金俺しか持ってないわけだし」

本当、ここは日本ではないから持つてる円では支払うことが出来ない。

だからこそ、交通や食事にかかる代金は全て優希が賄った。

「さてと、他に何処か見ておきたいところとかある？」

そう優希にいわれるけど、いまいち行く所なんてないよね…

「ねえねえー…ここに来る途中で見た、大きなアリーナがあったよね…わたし、そこにいきたいなく」

と本音が気になったところを述べるけど、結構アバウト…それでも優希はしわを寄せて、頭の中で何処なのかを模索する仕草を見せて、直ぐにあそこかな？と空中でウィンドウを開いて私と本音に映っている物を見せる。

ここに来る途中で見た気がする建物…横の本音はこれこれと肯定していることを見ると言っていた建物とはこれのことなのだろう。

「なるほど、…ここか…」

なにやら思い入れのある顔を見せる優希…もしかして…そこに何かあるのかな

「やーくん。そこって何かあるの？嫌なら…行きたくないけど…」

本音も優希の表情を見て遠慮気味、だけど優希は首を横に振って否定した。

「いや、嫌なことはないよ、それじゃあ行ってみるか」

そういつて、また優希に連れられてモノレールに乗り、そのアリーナへと向かった。

アリーナに向かうまでは三十分も掛からずに辿り着いた。

目の前にはやって来たこともあって、大きさが身に染みてわかる。

おおよそ、IS学園のアリーナほどはあるだろう。

ここは何かのスポーツの会場か何かなのかな？

「すごい!!ねえねえ!やーくん!!此処って何の会場なの!？」

本音が大声で優希に何の競技場か聞くと、落ち着けと優希が落ちつかせると、淡々と話し始める

「ここはDSAAAの会場だ…毎年、此処で大会が行われてる」

『DSAAA?』

聞き慣れない単語、それについて優希に聞こうとしたとき、会場の

方から聞き慣れない女の人の声が聞こえてきた。

「デイメンジョン・スポーツ・アクティビティ・アソシエーションのことですわ」

「この声…まさか、こんなところで会うなんてな…」

女の人の声に反応して声が出た方向に優希が顔を振り向くとどうやら見知った人だったのか、意外そうな顔でその人を見ていた。

優希が見ている人とは長い金髪で気品のある緑の瞳…そしてセシリアみたいな高飛車の言動がよく目立つ人とそれに付き従う若い執事

「インターミドルはあと2か月ぐらいはあるはずだけど…何かあったのか？」

「ええ、私が開会式の宣誓をすることになりましたので、その打ち合わせに…それが終わりましたので帰ろうとしたところ、貴方を見かけたのですわ」

二人の間で会話が進んでいるけど、蚊帳の外の私達は完全に置いてけぼりである。

「おっと、二人にはわからないよな…この人はヴィクター隣の執事はエドガー…まあ俺の知り合いだ」

「ヴィクトリア・ダールグリユン、以後お見知りおきを」

そういつて軽くお辞儀をするダールグリユンさん…何ともお嬢様と言え人だなと思える。

「ねえねえ、ヤーくん、インターミドルってなんなの？」

とダールグリユンさんの紹介が終わったあと本音が聞きたいことをまた口にする。

「優希、この方々は？」

「ああ、少し今の任務でな…水色の子が更識簪、隣の子が布仏本音だ…二人ともミッドに来たのははじめてでD S A Aやインターミドルのこと知らないんだ」

「そうだったのですか…では実際に中に入られてはいかがかしら？」

『えっ!? 良いんですか!?!』

「別に問題などありませんし、それに…優希とは久しぶりに募る話も

ありますから」

：やっぱり優希とダールグリユンさんって何かあったのかな？
そんなことを思いながらも会場に入っただけいき、誰も座っていない観客席に座りながら下のリング内を見下ろしている。

従業員がなにやらリングで整備しているのがわかる…

「此処は、DSAが運営してるインターミドルの会場でな…毎年此処で総合魔法競技の大会が開かれているんだ」

魔法の大会…なんだが想像がつかないな…でもそれはISと一緒になのかも知れないね

「ヴィクターもこの大会の選手で…大会の本戦にも勝ち残れる上位ランカーなんだ」

この人そんなに強いんだ…この世界って強い人多くないかな？

「優希もでしょう？5年前、10歳にして貴方は…」はい、その話はなしね」話を切らないでくださるかしら？」

え？優希も？優希もこの大会に出たことがあるって事かな？

「…今年もジーク…出るのかな…」

「…それはわかりませんわね…去年はあの事があって途中欠場してしまいましたから」

ジーク？二人とも暗い顔で俯いてるのを見るに共通の知り合いではあるみたいだけど…

「…お嬢様、そろそろ」

「そうですね、優希、それでは私はこのあとにも用事がありますので此処で失礼いたしますわ」

「そうか、それじゃあな…色々助かったよ」

「別にお礼を言われるほどではございませんわ、いつか…また貴方とは戦いたいですわ…氷帝」

氷帝？優希のことを言ってるのかな？

「…ふっ…その時が来たら受けて立つよ…雷帝」

そういつて優希も穏やかな笑みを浮かべてそう言い返した。

氷帝に…雷帝…この二つは多分優希とダールグリユンさんのこと

を指しているのはわかるけど、一体それが何を意味するのか…私は全くわからなかった。

九十五話 『GW1日目／八神道場』

ダールグリユンさんが出ていったあと、しばらくして私達もインターミドルの会場をあとにして、優希の家近くまで戻ってきていた。「今日一日色々行ったけどどうだった？」

「うんー色々初めての所を見て楽しかった！」

優希が私達に今日の感想を聞いてくると隣の本音は本当に楽しそうな顔をしてご満悦なことを述べた。

『うん、私も楽しかったよ』

私も本当の述べるけど内心では少し気になっていることがある。

ダールグリユンさんと優希が別れる際に言い放った雷帝と氷帝：ダールグリユンさんは優希のことを氷帝と優希はダールグリユンさんのことを雷帝と呼んだ。

これらには何かしらの意味があるとは思っただけど…こつちの事に関しては全然、わからないからな

そういうときは優希に聞くに限るけど、もしかしたら聞き難い話かも知れないし…

そういった、どうすればいいのかと頭の中で考えるも一向に考えが纏まらなかった。

「あ、そうだ！やーくん、ザファイラさんが言ってた子供達って何のことなの〜？」

「ああ、ザファイラ、子供達に格闘技教えていてな、何人かはさっきのインターミドルに出ると思うんだ」

え？ザファイラさんが格闘技？

『あの、優希？ザファイラさんって…犬…だよね…』

流石に昨日聞いてはいたけどこれだけはハッキリとしていたい。だって犬が人間の子供に格闘技を教える光景なんて…明らかに想像できないことだから

「ああ、そうか…簪達は知らなかったな…ザファイラは…」

優希がそう言い切ろうとしたとき、唐突に海辺の方から何かが爆発

したような爆音が響く。

「えっ!? なになに!?!」

本音も今の爆音で慌てているが優希は特に驚いている様子が見えない。

「この蹴りの音は…ミウラか」

え!? この音、蹴りによるものなの!?

一体どれほどの蹴りなのか…私は額に汗を滲ませながらも浜辺へと歩いて行く優希に付いていくと、優希の家の近くの浜辺に何十人もいる子供が真剣に拳を突き出したりしておりそれを一人の体格の良い男性が腕を組んで子供達を見ていた。

だけどザファイーラさんは見当たらない…あれ?

「おお、やってる、やってる…よし、おおい! ザファイーラ!」

「ぬっ? 優希、戻ってきたか」

「え!?! 優希さん!?! あっ! お久しぶりです!」

え? あの男性の人がザファイーラって呼ばれて反応した? えつとつまり…どういうこと?

そうこうしているうちに子供達はワイワイと優希の周りに集まっていく、これを見ると優希が面倒見の良いお兄さんに見えてくるよね「おまえら、元気にしてたか…全く、一ヶ月ぐらいしか経ってないのに…懐かしく思えるよ」

そう言いながら笑みを零す優希、その表情はお世辞を言っているようには見えない。

「ねえねえ、やーくん、ザファイーラさんはどこにいるの?」

そこに本音が気にしていたことを口にすると言葉を返してきたのは優希ではなく男性の方であった。

「俺がどうかしたか?」

「ああ、説明していなかったからわからないよな…あれがザファイーラ、魔法で人間形態と動物形態になれるの」

「え、えええええええっ!?!」

当然、驚きの声を上げる本音、私も驚いて声を上げたいぐらいだ。

「まあ、説明してなかったからな……さてと、俺も少し体を動かすかな、ミウラ、少し一本どうだ？」

「は、はい！お願いします！」

そういって、ボーイツシユな女の子が元気よく返事返すと、優希がロンギヌスを展開する。

『ゆ、優希!』

「問題ない、優希も全力でやるわけではないし、それにミウラもデバイスは持っている」

いきなり、ロンギヌスを展開したことに驚く私だがザフィーラさんが説明して一旦落ちつく。

それにしても私より小さいあんな子もデバイスって持つてるんだ……それなら……私も少し欲しいな……

私はそんなことを思いながらも少し離れた場所でやる優希達を眺めるのであった。

九十六話 『GW1日目／改良完了』

優希とリナルデイちゃんが軽く？一本を終えて、優希の家の庭に設置されている椅子に座りぐったりとして机に突っぱねていた。

「やーくん…おつかれくなんか凄かったね」

机に突っぱねる優希に労う、本音…でも本音の言うとおりで凄いと
言える戦いぶりだった。

優希の実力はもう言わずもわかるぐらいに強いのは知ってるけど、
リナルデイちゃんがまた強かった。

あんな小さい子なのに物凄い足蹴りを繰り返して出しロンギヌスで防い
だ優希を2メートルほど後ろに後退させて見せた。

優希のロンギヌスに当たるとき途轍もない打撃音が響き渡って思
わず耳を塞ぎその場にしゃがんだくらい大きかった。

「…もう四時か…」

そうぼそりと優希はロンギヌスの表示したデジタル時計を見て椅
子から立ち上がる。

「そろそろ、リヴァイヴ達を取りに行かねえとな…」

そういえば今日の夕方と言っていたつけ 今なら向かえば、それく
らいになるって事なのだろう。

『優希、私と行った方が…』

打鉄式も取りに行くなら私は付いていこうと優希に声を掛け
る

「いや、俺一人で行くよ、簪達はゆっくり休んでて」

そう言われたら何とも言えず、押し黙る私…すると浜辺の方からザ
フィーラさんがやって来る。

「優希、もう行くのか…」

「ああ、日が沈むまでには帰ってこれると思うし…そういえば今日つ
てシグナム達帰ってくるのか」

「その予定だ…シヤマルは六時頃だと思うがシグナム達は五時ぐらい
だろう」

昨日いなかった人達も帰ってくるんだ、どんな人達なんだろう…

「そういえば、シグナム達のこと話してなかったな…シグナムは俺の近接戦闘の師匠で八神家の中で、1番強い騎士でその相棒にアギトっていう内の末っ子がいるんだ…あとはシヤマルは医務官をしていて、サポートなんかをこなすんだ」

「やーくん、流石にそんなこと言われても、なにもわかんないよ」
「そ、そうか…そうだな…シヤマルは一部を除いて家庭的で…優しい…内の母親…いやお姉さんみたいだな…人かな…アギトはリインと仲が良くて家にいるときは大抵は一緒だな…あとはシグナムは…そうだな…うーん簡単に言う…織斑先生に似てるな」

『え!?!』

織斑先生がシグナムさんに?…つまり厳格な人ということかな

「まあ、会ってみればすぐにわかるよ…それじゃあ行ってくるよ」

そういつて優希は玄関前にあるガレージに向かっていき、しばらくしてエンジン音が聞こえてきて音は遠ざかっていった。

優希SIDE

「はい、これリヴァイヴと打鉄式、オーバーホールは完了したよ」

バイクを吹かせて本局へ上がり、転移ポータルで地球のバニングス所有の演習所にやって来た俺

既に空は夕暮れで赤く染まっていて、整備室に向かうとさすが姉がオーバーホールを終えて、俺にドックタグのリヴァイヴと簪の打鉄式式を受け取る。

「優希のリヴァイヴは各パーツを管理局から流れてきた第三型のパーツに取り替えて、両腰に感応性の4門ミサイルポットが2基を取り付けて、折れてしまった葵も管理局と共同で改良した葵改も収納しているから、後は…ビーム兵器の大鳳を入れたからその感想も教えてね」

「取りあえず、武装が増えたんだな…それで簪の方は?」

「打鉄式の方はね、殆ど優希の要望通りだよ、山嵐に関しては優希と

簪ちゃんが組んだマルチロックシステムを搭載した上に、山嵐のミサイルは優希の機体同様で感応性のミサイルにしてあるし、未完成だった春蘭に関しても優希が作ったデイバインバスターとショートバスターの複合プログラムをインストールしてるから正常に動かせるよ

…あとは如月と睦月は私の方で改良したいことがあるから優希と同じで大鳳を装備させて置いたよ」

…なるほど…取りあえず要望通りなんだな

「そういえば、今つてはやてちゃんの家に二人ともいるんだよね…
優希くんも思春期だから、変な気は起こさないでね」

「起こしませんよー」

全く、すずか姉にも言われるとは…長居は無用だから帰ろう…
そういえばそろそろシングナムは帰ってくる頃かな

九十六話 『GW一日目／烈火の将と風の癒しての帰還』

簪SIDE

優希が打鉄式式を取りに向かって大凡1時間ぐらいが経過した。既に夕日は沈みかけていて時間を見ても五時と頷ける時間になっていた。

そんななか、私達はというと家主のいない八神家で寛いでいる。

ザフィーラさんはまだ浜辺で子供達に格闘技を教えてるしね

「ねえねえ、かんちゃん…もうすぐシグナムさんが帰ってくるんじゃない？」

そういつて本音は優希が行っていたことを思いだし、私に語りかけると優希の行ったとおり、帰ってくるだろうと思ったその時、玄関の方から扉を開ける音が聞こえてきて恐らく、シグナムさんが帰ってきたのだと私は思った。

「今日も疲れたな…むっ？誰だお前達は？」

リビングに入ってきたのははやてさんとは違う、えっと確か地上所属の制服だったかな？それを着た桃色の髪をした女性が入ってくるなり、私達に気づいてそう話しかけてくる。

『えっと、更識簪といいます…その…優希の友達で…』

「優希の？なるほど…確かに優希から聞いたことがあるな…しかし何故、家に…」

「シグナム、昨日姉貴からメール来ただろ？昨日からしばらく優希の友達二人が泊まるからって」

取りあえずと自己紹介をする私に、シグナムさんは私の名前に聞き覚えがあつたのかそういえばという顔で私達を見ていて、それに付け足すように後ろからやって来た赤い髪のリインさんぐらいの子供がシグナムさんに説明をする。

「そうか…すまない…優希の家族のシグナムだ、それと隣にいるのは

アギトだ」

「アギトだ、優希からなんか聞いてると思うけどよろしくな」

そう元気よくアギトさんが挨拶を返してきて私達はよろしくお願
いしますと軽く挨拶をしてお辞儀をする。

それから二人は帰ってきて一度部屋に向かっていき、戻ってくると
私服姿でリビングに戻ってくる。

「あ、そういえば…簪…でいいか？優希のことなんだけど」

戻ってきたか二人が椅子に腰をかけると、アギトさんが少し落ち着
かない感じに優希の事を聞いてくる。

『優希のこと？えっと優希の何が知りたいんですか？』

「ああ、あいつ、この頃状況報告しかしてないから、プライベートまで
は教えてくれなくてな」

ああ、そうか…優希のことを心配して聞いてきてるのか

それなら言っても大丈夫だよな

そうして私は、優希のIS学園で起きたことを説明した。

クラス代表戦や打鉄式式のこと…その他色々のことを説明して、説
明し終えたときには1時間ほど経過していた。

『優希とは大体こんな感じですよ』

「そ、そうか…」

あれ？なんか引かれてる？

(なあなあ、シグナム…もうこれ…ドラマなんかで見るイチャイチャ
カップルだぞ…)

(…優希はしっかりと責任を取らないと駄目だな)

そんな念話があるなんて知らずに私は首を傾げていると玄関の方
から扉が開く音が聞こえてくる。

「ただいま」

この声は優希だ

声が聞こえてきて直ぐに優希がリビングに入ってくる。

「ただいま、シグナム達も久しぶり」

「おう！久しぶりだな、優希」

リビングに入って早々、シグナムさん達が帰ってきているのを見て話しかけて、それをアギトさんが返す。

「さてと、簪…：すずか姉から改修された打鉄式、受け取ってきたぞ」
取りあえずの久々の顔合わせの挨拶を終えたと私の方に向けて打鉄式の待機状態の指輪を手渡してくる。

『打鉄式…：』

前より性能はアップして要るのであろう。

何となくそんな感じがする。

「ほう、それが更識のISか…：」

「待機状態はデバイスと何ら変わらねえな」

そこに、打鉄式の待機状態の指輪を興味津々に見詰めているアギトさんとシグナムさん。

「待機状態はデバイスとそんなに変わらないよ、起動すれば…：パワードスーツなだけだけどな」

二人にデバイスとそんなに変わらないと主張する優希…：しかしISとデバイス、似ているところはあるけど違いもあるということだろう…：優希の言葉にはそれを思わせる言葉も含まれていた。

「さて、今日は母さんが少し遅いみたいだから、俺が晩ご飯作るか」

『私も手伝う』

帰ってきて早々夕飯の支度を済ませようとする優希を見て私も手伝おうと八神家の台所に足を運ぶ。

「さてと、今回はみんな帰ってくるわけだから少しお祝いムードでやっついていこうかな」

そういつて優希は冷蔵庫から食料を取り出し調理を開始する。

…

…

「簪、そこにある醤油取って」

『あ、うん』

料理をし始めて三十分ほど順調に作業は進んでいた。

「ただいまうあ、優希、今日は優希が作つとるんか？」

そこに、はやてさん達が帰ってきて、リビングに入ってくる中一人だけ見知らない顔の人がいた。

「あなたが簪ちゃんね…噂は優希から聞いているわ…シヤマルよ、よろしく」

『あ、よろしくお願いします』

金髪でほんわかしか雰囲気らしいお姉さんを思わせるこの人がシヤマルさん…優希の行ったとおりのだ。

「そろそろ、ごはんできるから…少し待ってて」

「うん、了解や…楽しみにしてるで」

優希とははやてさんがそんな会話をして、それから10分もしないうちに料理は完成してテーブルに並べられた。

八神家面々と本音は席に着く中、私も席に付こうと足を運ぼうとしたがふと、優希が気になり、視線を向けるとなにやら小さいお茶碗に料理を装い、テーブルから少し離れた、年期のある本の前に置いた。

『……優希?』

一体何を意味しているのだろうか……少し疑問に思いながらも直ぐに優希も椅子に座ったので続けて私も席座った。

そして、はやてさんの掛け声で、夕飯を食べ始める私達、優希はやてさん、八神家のみんなは全員集まったのが久々だから会話には花が咲いていて…何となく羨ましい気持ちになってしまう。

「そうだ、なあ優希、お前…簪と楯無……だったか?二人の戦う場所、かんがえついたので?」

そうヴィータさんが気になって優希に訪ねると苦い顔を浮かべる優希はその重い口を開けて喋った。

「いや、それがな…演習所は査察で使えないし…ヴィータは教導隊の施設を使えたりしないか?」

「無理に決まってるだろう?」

「…ですよね…」

ああ、やっぱり場所がなくて遁詰まりしてたんだ

「これじゃあ、かんちゃんとかつちちゃんさんの戦いでできないよう」

「やーくん」

本音も不安そうに優希に話しかけ、それを聞いて少し頭を抱えているとアギトさんが何か思いついたのか優希に提案を持ちかける。

「なあ、優希とにかく思いつきり戦える場所があれば良いんだろ？…ならさルールーの所とかどうなんだ？」

ルールー？

「ルーテシアのところ？…カルナージか…確かにあそこなら…行けるかもな…取りあえず聞いてみるか」

そういつて、優希は晩ご飯を終えた後、そうしようと決めて、また気を取り直して晩ご飯を堪能し始めるのであった。

九十七話 『GW2日目／新生！夢現』

優希SIDE

ゴールデンウィーク2日目、昨日は色々とおったけど一夜が明けて朝日がまた昇った。

今日はいつも通りの時間帯で起床して母さんと一緒に朝ご飯を作っていた。

「優希、今日は何時ぐらいにマリエルさんの所にいくんや？」

『まあ、八時ぐらいに取りに行く予定：母さんと一緒に向かってもいいけど：教導が10時だからバイクで向かう予定』

ヴィータは早朝から教導の準備があるみたいでもういない：

10時ぐらいから教導予定のため結構早走りで簪の夢現を取りに向かわなければならぬわけだ。

「それやったら朝ご飯食べたら、出かける準備しなあかな：バイクで行くとすると、簪ちゃんは後ろに乗せるとして：本音ちゃんはどうするんや？」

『どうするかって…』

「当の本人はまだベッドで夢の中なわけですから」

そう、私服姿でソファアに座る簪は苦い笑みを浮かべる。

『本音には悪いかも知れないが留守番していてもらおう…』

「まあ、仕方ないな、家にはザフィーラも居るさかい、大丈夫やろう」
一人じゃないわけだから問題ないとそう思った俺は朝ご飯を作り、それを食べた後、幾分か時間が過ぎた。

俺と簪は今から本局に行くためにガレージから俺のバイクを出して、備え付けられているヘルメットを被る。

「これ、優希のなの？」

『ああ、15になったときに免許取得して買ったんだ』

バイク持つてることにへえくと少し関心を持つ簪、そんな簪に俺は予備をヘルメットを手渡す

『ほら、時間も無いから行くぞ』

「うんー」

そう返答して簪はヘルメットを被るとバイクの後部に跨がりしつかりと俺にしがみつく。

簪がしがみついたのを確認した後俺はバイクを走らせて本局へと向かった。

NOSIDE

優希と簪が出発して時間が経ち八時前、本局のデバイスルームではとあるデバイスマイスターが頭を抱えていた。

「ど、どうしよう…」

恐ろしいことをしてしまったとそう思わせる声を上げるのは優希が夢現の強化を依頼したデバイス技師、マリエル・アテンゼ、彼女は目の前にあるものをただただ見ることにしか出来なかった。

何故、彼女がここまで動揺を隠せない理由は昨日の夜まで遡る。

「ふう…これで後は少し微調整すれば完成かな」

パネルを操作して、夢現がほぼ完成した姿を見て微笑みを浮かべる。

「アテンゼ技術長、上がりですか？今からみんなで飲みに行くのですが、一緒に行きませんか？」

「飲みにですか…《あと少しだし…別に飲みに言っても良いよね》うん、それじゃあ、行かせてもらおうかな」

そこに同僚の局員達がやって来て飲みの誘いをかけてきて、それに少し悩んだ結果、同僚達と共に居酒屋へと向かってしまった。

誰かの音頭で始まったそれはワイワイと酒やつまみを飲み食いつる。

そして1時間もすれば酒を飲んでいる人は酔いが回り、思考がまともにも判断できなくなり…そして…

「えっ!?個人的に作ってるんですかあ!?!」

「はい、そうなんですよく局に戻って最終調整しないと」

完全に酒に酔ってしまったマリエル、つい、夢現のことを話してしまふ。

「それなら俺も手伝いますよ」

「俺も俺も」

そう酔いにやられた技術者が集るように夢現の強化に手を貸そうとするのを見て思考が回らないマリエルは嬉しそうに笑みを浮かべて局員の手を借りた。

そして酔いながら戻った…マリエル一行は…

「なるほど、これが…むっ!? マリエル主任にしては構造が甘い! もつとこうしないと!」

「このデバイスってミッド式ですか!? ならこのパーツが良いんじゃないですか?」

「あ、そうですね、さて明日には取りに来る予定だからぱつと作っちゃおう〜!」

「おおっ〜!!」

そして…

「ど、どうしよう」

こうなったわけである。

酔いの暴走が生んだ、武装にどうすればと頭を悩ますマリエル、部屋の上には何人もの酔いの勢いで協力をした技術者は倒れ込んでい

る。

「失礼します…って何これ!?!」
と此処にバイクで向かっていた優希と簪も到着し、デバイスルームの惨状を見て驚きの声を上げる。

「あ、ゆ、優希くん…も、もう来たんだよね」

「は、はい…えっと…この惨状は…」

「えっと…これは…その…じ、実は…」

マリエルの口から語られる昨晚からの暴走劇、それを聞いて優希は絶句して頭を抱え、隣の簪はぽかーんと唾然とした。

「つ、つまり……酒の勢い余って……夢現が……デバイス化したと……」

「うん、それだけじゃなくて部品も殆ど第五世代型……」

「よ、ようはまだ試作段階の最新パーツを使っってしまったと」

「……はい、ど、どうしよう優希くん!?!」

「お、俺に言われても!?!」

取り返しの付かない事をしてしまったマリエルは焦りを滲ませ、優希に解決策を懇願したが、優希も優希で解決策など何も出てなかった。

「あの……つまり……私の夢現が管理局の最新世代の兵器になってしまった……ということですよね……なら、いつそ……私がその試作段階の五世代型のデバイスのテストになったってことにすれば良いんじゃないんですか?」

そういう、簪に優希とマリエルは簪に顔を向けて、少し考えたあと難しい顔をした。

「確かにそれなら行けるかも知れないけど……何処の誰かもわからない子に最新式を受理できるほど上層部は甘くないよ?」

「簪、気持ちは判るけど……流石にな……」

やはり、局員からの観点で今回のことを見る二人に簪は俯いてしまいうが優希は溜め息を付いて、口を開ける。

「まあ、どちみち夢現がいるのは確かだし……マリエルさん、予定通り夢現、持っていくから……この後2人でヴィータの教導があるからさ!」

「あ、うん……ごめんね」

時間が無いと優希は夢現を手に取り、それを簪の打鉄式に収納すると、マリエルが一言今回の事で謝罪して、それを聞いた後優希と簪は急いで本局を後にした。

九十八話 『GW2日目／戦技教導官の時間』

優希SIDE

本局に夢現を受け取りに行つた俺達、マリエル達技術者達によってデバイスに魔改造されて頭の悩ませる種になつてしまったが、今はヴィータが折角予定を入れてくれたんだ。それを棒に振ることなど出来なかつた。

そして約束の時間三十分前、俺達は教導隊舎へと辿り着いた。

バイクを駐車場に駐車して教導隊舎の敷地内の道を歩いて行く。

『こつちだ』

俺が先導で隊舎ではなく少し離れた場所にある訓練施設、機動六課時代での訓練スペースへと足を運んでいく。

そしてリアルソリットビジョンで投射された廃墟とかした市街地が見えて、訓練スペースの設定の出来るパネルの前には白い教導官の制服を着たヴィータがいた。

「おっ！ やつとききたか……なんだ？ あつちでなんかあつたのか？」

ヴィータもこつちに気づいて話しかけてくるが、簪が俯いていることを気づいてその事について話してくると、俺は包み隠さず少し前に起きた夢現のことを話した。

「ま、マジかよ……」

話した結果はヴィータが頭を抱えて溜め息を吐き……そのあと割り切つたのか仕方ねえなと口ずさむと腕を組んで堂々と云つた。

「まあ、こつちの不祥事だからな……あんま気にすんな……」

「は、はい」

事の正論を述べて簪を慰めるヴィータは、よし行くぞという訓練施設の廃墟の市街地へと向かい丁度中心地まで歩くとそこでは足を止めた。

「よし！ そんなじゃあ特訓を始めるぞ……優希、簪のポジションとかわかるか？」

「センターガード……武装はティアナよりなのもあるが、どつちかつて

いうとなのは姉の方に近いかな」

「なるほどな…よし！そんじやあ一本、模擬戦すんぞ！あたしに一撃でも与えられればクリアだ」

内容を聞く限りでは簡単…でも…今の簪じやあ無理かな

「優希は近場の屋上から観察してろ、簪の準備が出来次第やるぞ！」

ヴィータが淡々と予定していた訓練を始めようとして、俺は邪魔になるので近くのビルの屋上へと退避した。

さて、何処まで行けるか見物だな

N O S I D E

優希が退避して簪は待機状態の打鉄式式をその身に纏い新しくなった夢現を構える。

薙刀であった夢現の形は優希のロンギヌスと同じような両刃式の槍の形をしているがロンギヌスのように付いたり切ったりという実体刃は存在しなかった。

《これどうやって使うんだろう》

急いでいたために使い方がいまいまだわかっていない簪

ふと薙刀をイメージすると夢現に変化が起こる、

夢現の片刃がスライドして下がり、魔力刃が形成されて薙刀に変わった。

「ええい！」

思考を読み取って夢現が形態変化したことに驚きを見せる簪だが、それを少し離れたところでアイゼンを手に持つヴィータがそろそろと思つて声を掛けた。

「まだ戸惑うことあるが、馴れるしなねえな…おし…そろそろ始めるぞ！」

ヴィータはそういつて強引に試合開始のカウントを始めそして、カウントがゼロとなり模擬戦が始まった直後、ヴィータが動き出した。

「てりやあああああつ！！」

開始直後から真っ正面からの特攻、織斑一夏と同じ戦法ではあるが…素人と玄人とは次元が違った。

踏み込みの速度が速く簪が気づいたときには既に懐まで迫ってきて

ていて、反応する間もなくヴィータは声を上げながらアイゼンを簪に目掛けて振るう。

「っ!!」

咄嗟にアイゼンから身を守ろうと簪は夢現で防御しよう構えたと夢現に当たる前にシールドエネルギーとは違う魔力のプロテクションが張られてアイゼンと衝突した。

「デバイスだからな…守ろうとして無意識で張ったんだろうが…あたしを阻めるかよ!!」

そういつてヴィータは一度後方に飛んでから着地と同時に踏み込んで再びアイゼンで簪に攻撃を仕掛け、今度はプロテクションが破られ打鉄式式のシールドが発生するもヴィータとグラーフアイゼンの前には安々と破られて絶対防御が発生しそのまま、押し切られて簪は悲鳴を上げながら吹き飛ばされる。

《うそ、一撃でも六割も持っていかれた…!?これが…世界の壁!?》

ビルの壁に激突し、苦しそうに残りのシールド値を確認し大ダメージを受けたことに絶句する。

「まあ…こうなるわな…」

それをサーチャーで見ている優希は予想通りといった顔で教導を見ていた。

「簪様も初めてとはいえ反射的にプロテクションの発動をしています」

「まあそれでも…ヴィータに一撃は無理だな」

そうぼやいているとブザーがなってヴィータと簪の模擬戦はヴィータの圧勝で終わった。

そしてその後簪が変わるように優希もヴィータと模擬戦を執り行い、こちらは一進一退の攻防が続きました。何度か簪もヴィータと模擬戦をしたが善戦には至らなかった。

そしてお昼時、簪は優希達と昼食を食べていたが俯いた表情で、食事を終えると訓練スペースの近くで海を見て黄昏れていた。

「はあ…私…強くなれるのかな…」

ヴィータの教導は実践的で自分の問題点も指摘してくれていることから少しづつ改善はされているのだと簪は思っているが楯無との決戦は近いことから、前に進めているのかと焦りを滲ませる。

「ねえ、君」

「え？は、はい」

そう考えていると優しそうな女性の声が聞こえてきて簪は振り向くと、そこには茶髪の髪をサイドテールで纏め上げ、此処の白い制服を身に纏った若い女性が簪に向けて優しく微笑んだ。

「少し…となり良いかな？」

九十九話 『GW2日目／白い天使（魔王）降…（此処から題名はないどこからともなく飛んできた砲撃により掻き消されたようだ）』

簪SIDE

私の伸びしろに少し悩んでいると若い教導官の女性が優しい声を掛けて私の隣に座る。

見ず知らずの女性がいきなり声を掛けられたこともあって少し警戒心を出してしまう。

「にやはは、そんなに警戒しなくても良いよ…ねえ、此処ら辺で見たことない子だけど、もしかして見学に来た子かな？」

『え？、いえ…優希…友達に誘われて特別に此処で特訓を』

つい、優希の名前を出してしまったけど直ぐに友達の誘いで来たこと訂正する。

「ただ何故かこの人は優希の名前に少し眉をひそめた…もしかして優希の関係者かな？」

「そっか…うーん…ねえ…」

大体の理由を察した女性は笑みを絶やさず、少し考えると私に向けて話しかけてくる。

「あなたが力を持つ理由…少しお話聞かせてくれないかな？」

『え？…えっと…私にはお姉ちゃんがいるんですけど…お姉ちゃんは何でも出来る人で…昔から周りから比べられていたんです…それで見返してやろうって初めはそう思っていたんですけど…友達から私は私のままで強くなれば良いって支えてくれて…だから…私は私のままでお姉ちゃんを越えてみたい…そしていつかは…あの人の隣で支えられる力が欲しいんです…』

…あうくなんかいつてて恥ずかしい。

「そっか…それは良い目標だね……ヴィータちゃんと優希くんは今昼食食べてるぐらいだから後1時間ぐらいは帰ってこないよね…」

だったら少しぐらい良いかな　……うん、決めた！ねえ君……少し私が見てあげるよ同じSセンターガードGだからいい見本にあると思うしね」

『え？良いんですか？』

突然の提案……少し警戒もするのだけど……少しだけ話しただけなのにこの人の提案に裏がないと自然とそう思えてしまい少し考えたあと、私は直ぐに縦に頷いて誘いを承諾した。

優希SIDE

「なあ、優希」

教導隊舎の食堂で昼食を食べる俺とヴィータ

簪はさっきのことでもあって悩みながら何処かへ行つてしまったが、敷地内にいるだろうから今はそつとしておこうと判断し……1人にさせた。

そしてヴィータは簪のことで何かいいことがありたげな表情で俺を見て口を開けた。

「簪は……確かに基礎も出来ていて伸びしろも良い……正直蔑まれる要素なんて何処にもないぐらいなダイヤの原石だ……だが……」

『自分自身、その才能に気づいていない……まあ理由としては更識さんだろう……姉が秀才だった故に……自分の才能に気づけなかった……だからこそ……簪には才能を導く人間が必要なんだ』

ヴィータが言いたいことを俺が言い当てるとヴィータは頷き、話を進める。

「それに関しては優希がいい例だ……クラス対抗戦で教導のイロハと知らねえお前でさえ、あそこまで伸ばしたんだ……まともな教導官が鍛えれば確実に化けるな」

『イロハがないとは心外だな……ではその教導官のヴィータさんはこの1日で簪をどのように鍛えるのですか？』

「皮肉混じりに聞くな……そうだな……ISはONE ON ONEがセオリーだ……優希はティアナみたいに捌いたりするガンナーを目指してたが……あたしはなのはみたいに防御も視野に入れときたい」

『…夢現か』

ヴィータがそういう所以はあのマ改造された夢現にあると睨みそう返すと頷いて応えた。

「あたしも、ティアナの線が良いと思ってたけど…夢現がデバイスな話は別だ…ストレージデバイスの強みは万能…つまり簪が防御魔法を使いこなせるようになれば…」

『実質、高機動要塞の完成か……だが迂闊なことにマリエルさんが第五世代のデバイスにしてしまったこれが一番の問題点だな』

「あたしからも頼んでみるか…はやて達にも言えば手伝ってくれるだろう」

『ああ、そうだな……そう言えば…なのは姉には教導…』

頼まないのかと言おうとしたがヴィータが言いたげな表情を見せて、俺は口を止める。

「優希……お前は簪を第二の魔王なのはにするつもりか？期間が今日だけじゃなかったら、確実になのはSLBを教えんだろ」

…言い得て妙だ…

そういえば今日は平日だし…なのは姉、勤務してるはずだけど今どこにいるんだろう。

NOSIDE

「にやははごめんね、休憩中だったのかも知れないけど…勝手に連れて来ちゃって」

「いえそんなことは…」

一方、簪と女性は、フィールドが森林へと変貌した訓練スペースへと来ていた

女性は片手にデバイスである杖を持ち、簪に対面するように立つ

「さて、あまり時間も無いだろうから手短にやっていこうか…君は魔法はまだ初心者な訳だからまずはシューターから覚えていこうか…その前に…君のデバイス、少し見せてくれるかな？」

「は、はい！」

「さてと、やっぱり真っ白な新規デバイス…でもこれは試作段階の最新式だね…」

「えっと、実は…」

夢現を取り出して、女性に手渡すと夢現のウィンドウを開けると新規デバイスであることと第五世代型であることに少し驚くと簪はここに来る前の出来事を話し始める。

「なるほど…ねえ、君は…自分の持つデバイスをどう思ってる?」

「デバイス…ですか?…えっと相棒と思ってます…友人はそう接しているのを見て私も自然に…そう思えたんです」

「そっか…ふふなら私も張り切っちゃおうかなレイジングハート」

「オーライマスター」

そう嬉しそうに夢現に何かを打ち込んだりして女性のデバイスに声を掛けると何かのデータをコピーして送り始めた。

「さてと、はいこれ…基本の射撃系魔法を入れたから使えるよ…それじゃあシューターの練習始めようか」

「は、はい!お願いします!」

…
…
…

それから時は過ぎていき夕方の五時、訓練スペースではヴィータと簪が模擬戦をしていたがブザーなり、夕方になったので訓練は終わった。

「よし…今日一日、よく頑張ったな、試合は明後日だから明日はゆっくりしろよ…それじゃあ、あたしはオフィスで仕事してから帰るから、またな」

「ありがとうございます!」

そういつてヴィータは訓練スペースから離れていく中、優希は何か思ったのか、簪に顔を向けて話し始める。

「簪、俺少しヴィータに話があるから…駐車場で少し待っていてくれ」
そういうと優希はヴィータの元へと走りだし、残った簪も少し休んでから駐車場へと向かった。

そしてヴィータに落ちついた優希はヴィータと横に並んで歩き、簪

について話し合う。

「なあ、ヴィータ：簪の動き午後から比べものにならないくらい良くなっていたの気づいてるよな」

「当たり前だ：午前は何も出来なかった、はずなのに午後から急に良くなってるよ：優希、お前なんかやったのか？」

「やってたらこんな話しないって：でもなんかいい方向に向いてるから別に良いんじゃないか？」

午後からの簪の動きについて話し合う二人、しかしその理由は皆目見当がつかず：わからなかった。

そして駐車場に向かう簪も教導隊舎の玄関前で、私服姿の少し教導してくれた女性と出会う。

「あつ！こんにちは！」

「あ、君ももう帰るんだね：お疲れ：午後からのヴィータちゃんの教導：中々動きが良くなってたよ」

「え？見てたんですか？：ありがとうございます」

「そんな君に少し褒美上げないとね、はいこれ」

そういうと女性のデバイスのウインドウを操作すると打鉄式：というより夢現のウインドウが開き、何やらアドレスと動画データが送られてくる。

「君にあった教材と私のデバイスのアドレス：困ったときは私に相談してくれば嬉しいかな」

「あ、ありがとうございます！」

「うん、それじゃあまたね：簪ちゃん」

そういつて、女性は町の方へと歩いて行った。

「あれ？」

女性を見送る中、簪はふと思いうかべる。

「私：名前って名乗ったっけ？」

夜：某住宅

「へえ、あの子がね」

「うん、少し教えたただけなんだけどすつごく、吸収力が良くてね：

ヴィータちゃん達には内緒で色々教えちゃった」

ミッドチルダ南部の住宅街、以前に簪とであったフェイトと今日簪を密かに鍛えた女性は楽しく話し合っている。

「なのはの顔…物凄くタノシそう…それでなのは的にはどう思ってるの？」

「そうだね…今まで色々な子を教導してきたけど…：簪ちゃんは天性の才能だよきつと…エース級の魔導士になれるくらいのね」

「ふふ、そうなんだ…それと昼間の連絡についてなんだけど…」

そして同時刻、ミッドチルダ南部…八神家では

「え!?!私の…専用機?」

「うん、夢現のこととでやっぱりが少し揉めたみたいやけど…優希の推薦や他色々な人達の推薦が得られてな…正式に第五世代型試作デバイスのテスターになれるわけや」

「良かったですね!簪さん」

「は、はい…でもいったいだれが…」

はやてから述べられた夢現の正式な譲渡、それに混乱しながらも簪は誰がやってくれたのかと戸惑う。

「さあ?何処かのお節介さんが…頼んだんやろうな」

そういつてウインクしながらはやての脳裏には笑みを浮かべるなのはの姿が過ぎるのであった。

百話『GW3日目／休日と告げられる予言』

優希SIDE

ヴィータの一日限りの教導は終わり、一夜が明けてゴールデンウィークも三日目：土曜日ということもあつて、シグナムとシヤマルを除いては休みであり、リビングで寛いでいた。

といつても午後からは忙しくなる…

今日中にカルナージへ行く予定であるために、俺の頭の中では今日のスケジュールが試行錯誤されていた。

恐らく二人の決闘を見届けた後は少し滞在した後にはIS学園に戻ることになるだろ…だからこそ今のうちに行きたい場所に行つておこうかと思つた。

『母さん、俺少し教会の方についてくる』

「…あつ、そうか…あの子の所に行くんやな…了解」

俺の主な趣旨を理解した母さん達は頷くけど、本音は小さく首を傾げる。

「なに〜や〜くん、教会行くの〜」

『少しな…本音も来るか?』

別に一人で行きたいというわけではない…だから気にしている本音を誘うとすかし考えた後、腕をパタパタとして口を開けた。

「それじゃあ、行こうかな〜かんちゃんはどうする〜」

「ごめん、私少しやることがあるから行けない…」

と、簪は遠慮して家でやることがあると言い、俺は何をするのかわからないために首を傾げるが、何か思い当たることがあるのだろう、そう思つて今日の予定を母さんに告げる。

『母さん、わかつてると思うけど三時ぐらいに中央次元港だからね…』

「うん、わかつてる、安心し」

そういつて大丈夫という母さんを見て俺は安心して教会…あの子が眠り続けている聖王教会へと向かつた。

モノレールやバスを經由して一時間半…ミッドチルダ北部に位置

する山岳地帯…そこに大きく佇む聖王教会が建てられていた。

「ほえ〜大きいところだね〜」

『此処は聖王を崇める主教の本山だからな…さてこつちだ』

大きさに少し感心を述べる本音…それに俺は少し補足を述べると正面から入っていく。

正面の門を潜り中庭…そこは俺が覚える限り何も変わらない、緑が生い茂る草木や花が立ち並んでいて、草木の世話をするシスターの姿も何人か見て取れた。

そんな中…見知った橙色の髪をしたシスターと水色のシスター…切羽詰まってるわけではないから話しかける時間ぐらいあるだろう
そう思つて二人のシスター…セインとシャンテに近寄っていく。

「ん？あつ！優希じゃん！久しぶり〜」

『久しぶりだなセイン、それにシャンテも…シスターシャツハを困らせてないか？』

「いや、なんでシスターシャツハを困らせてる前提なんだよ！」

そうセインが盛大にツツコミを入れるけど…いやだつてな

『セインもシャンテも…シャツハに叱られてる事多いし…間違つてはないだろ？』

俺は記憶から正確な事実を指摘しそれを凶星とばかりに表情を表す。

『まあ、世間話はこんなところにして…』

「世間話つてなんだよ！…つで優希はイクスのお見舞い？」

『ああ、中々来れないからな…』

そう一言言つた後、セイン達とは別れて、とある1室にやつて来る。
何はいると、橙色の女の子が眠っていた。

「ほえ〜この子が？」

『ああ、イクスヴァリア…2年前に知り合つた…子だよ』

「ほえ〜ねえねえ、イーちゃん、寝てるけど、どうする？」

『…まあ、仕方ないか…』

もうイクスは俺が生きている間には目を覚まさないだろうから…

『…イクス、偶にしか来れなくなるけど…いっぱいお土産話してやる

「からな…」

そういつて俺は眠るイクスの頭を撫でて、部屋から出てまた中庭へと向かおうと思ったとき前からセインがやって来る。

「あっ！ー！いたいた！ー！優希！ー」

『…セイン？』

「いやーまだ帰ってなくて良かった…騎士カリムが重大な話があるから来て欲しいって…」

『?!?騎士カリムが!?!?…わかった行く、すまない本音…セイン達と一緒に中庭で待っていてくれ』

「あ、うん…」

俺の切羽詰まった、顔を見て少したじろぐ本音…そんな本音をセインに預け俺はカリム姉の執務室前へと足を止める。

『騎士カリム、八神優希です』

「はい、入ってきて」

失礼しますと、ドアを開けて中に入ると中にはカリム姉とシスターシヤツハがいた。

『騎士カリム、お久しぶりです。シスターセインから重大な話があると言う話ですが』

「ええ…それと話し方は普通で良いわよ、今はプライベートだから」

『わ、わかった…カリム姉』

カリム姉…これがプライベートでの呼び名だ…

堅苦しい言葉遣いをやめて普通に接するとカリム姉は笑みを浮かべると物凄い早さで俺に近づき、抱きついてきた。

「あく本当に久しぶりねー優希くーん」

と普段のカリム姉とは思えない言葉遣いと幸せな顔をして抱きつききの力が強まる。

何故、こうなってしまったのか…それは俺が小さい頃からカリム姉と知り合いであったからだ。

母さんがミッドで仕事があったときは必ず、聖王教会に預けていた、その時お世話してくれたのがカリム姉、カリム姉自身も…息抜き程度だったんだけど…今では…このただ甘っぷりである

「優希くん、優希くんも良い年頃だしそろそろ私と結婚とか考えて…」
『いやいやいや、冗談やめてくれ!?!カ、カリム姉…そろそろ…重大な話あるんでしょ!?!』

なんとか話を逸らさなければとここに来た理由を述べると、後ろにいるシャツハが助け船を出した。

「騎士カリム、今は勤務中なのですから…程々に」
「わ、わかったわ」

しよぼーんとした表情でカリム姉は席に戻ると俺もシャツハが準備した椅子に腰掛けてカリム姉と対面する。

「優希くんには1番に伝えておきたかった話だから…実は三日前ほどに私のレアスキル…プロフィールイン・シユリフテン預言者の著書で新しい予言が出たのが始まり、私達は直ぐに解説を初めて…全員の協力もあつて解説が成功したわ」

『新たな…預言…』

カリム姉のレアスキルはかなりの確率で当たる…六課時代のあれがあるから尚更身に染みてわかる。

『それじゃあ、読み上げるわね』

遠き蒼き星、白と赤と銀が交わりしとき、潜んでいた影は動き出す

白の翼は折れ…赤は白の亡骸を見て天上に雄叫びを上げる。

天の兎は狂い咲き、蒼き星に救世主が舞い戻る

青き先見の瞳を持つ者はその光景を見て……

百一話 『GW3日目／楯無達の出立』

『……此処で預言は終わったの?』

「ええそうよ……わかるのは蒼き星は地球ということと……後は」

『先見の青き瞳を持つ者……これは俺だな……』

つまり近い未来俺は何かをするということだ。

白は……白式か?となると赤と銀とは一体……それに天の兔……これもわからない……そしてなにより……

『救世主……』

この名前……何を示すかは全くわからないが妙に引つかかる……まさか……

『いや!ありえない』

あれはもう存在しない……もう存在してはいけないんだ……!

「優希くん」

『っ!』

深読みしすぎてしまったのかカリム姉が手を俺の肩を揺すり意識を現実に引っ張り戻す。

「優希くんの心中はわかるわ……でももしかしたら……」

『わかってます……』

大丈夫だ……きつと……大丈夫

俺はそう思いながら、なんとかカリムの話を聞くのであった。

N O S I D E

その頃、IS学園では……

「これで仕事は終わったわ」

「お疲れ様ですお嬢様」

生徒会の雑務が全て終えて、机に項垂れる楯無、それを見て労う虚は紅茶を楯無の前に置く。

「さて……優希くんの話だと3時前に指定の場所に行けということだけだ……」

楯無は持っている携帯の送られてきている優希のメールを見ながらそう呟く

「先日の倉持技研の案件も関係してバニングス社の演習場は使えませんかから…」

「だけど…メールの文面からはそういった感じはしないわね」

そう楯無は虚が入れた紅茶を飲み、笑みを漏らしたあと扇子を広げる。

その扇子には怪しいと書かれていた。

「まあ、以前の話で全部じゃないのはわかったことだしね…さてつと…そろそろ行こうかしらね」

生徒会の仕事を終えたことで簪との約束を果たすために指定された場所に向かおうと椅子から立ち上がる楯無、それに続いて虚も楯無に付いていく意志を見せる。

一度、荷物を取りに寮に戻ると楯無は寮前で足を止めた。

「あら？イギリス代表候補と中国代表候補、セシリア・オルコットさんと凰鈴音さんじゃない、私に何か用かしら？」

「生徒会長、無理を承知でお願いしますわ」

「あたし達も優希のいる場所に連れてって！」

と頭を下げて頼み込む二人、理由は言わずもして、決闘の結末をこの目で見届けたいという意気が見られた。

「…あなた達のお願いはわからなくはないけど…私の一存では決められないことね」

扇子で口元を隠しながら、事実を述べる楯無、彼女の言うとおり、此処で楯無にお願いを言っても付いていくことが出来るようになるわけではない。

「でも、まあ…聞いてみましょうか」

そういつて楯無は懐からスマホを取りだし、連絡を取り合うために登録しておいた優希の電話番号にかける。

「はい、もしもし」

かけて待つこと三十秒ほど…電話が繋がり、優希の声が楯無の耳に届く。

「あ、優希くん、今良いかしら」

「はい、別に…よつと！問題ありませんよ？」

楯無は問題ないかを確認するが優希は問題ないと主張するものの楯無の耳には電話越しからなにやら振り回す音と剣戟が聞こえた。

「ゆ、優希くん？本当に大丈夫？」

「大丈夫です、それで今からこつちに向かうんですか？」

「そのつもりだけど…セシリアさんと鈴音さんが現地に行つてどうしても応援がしたいって…だから大丈夫かしら？」

「セシリアと鈴音？…うーん…少し待つてください…ちよつとそこらへんお世話になる人に聞いてみるんで…ロンギヌス、メガーヌさんに確認取つて…その間にシャンテと本音を沈めるから」

「了解」

「え？今の聞き間違えだと思っただけ…本音が…なんて？」

「や、やばい…こうなれば最大分身で！！突撃！！」

「おおー！シャーちゃんがいっぱい」

楯無の携帯から微かに知らない声と本音が声が聞き取れているため本音は近くにいることは判つたが現状があまり理解できない状況だった。

「19人か…少し本気出すか…さてと…本物は…お前だ！」

「うわあ!?どうしてピンポイントであたしが本物つてわかるんだ!？」

その後剣戟だけが楯無の耳に聞こえてきて、すると優希が楯無にまた話しかけてきた。

「あ、返事きた…人数が多い方が楽しいからOK…このことです…問題無さそうです」

「そ、そうなの？…それと本音が何かやっちゃったみたいだから…ごめんなさいね」

「いえいえ、お気になさらずに…それじゃあ待つてますからね」

そういつて優希から電話を切られ、楯無はスマホを懐に戻すと一体向こうで何があったのかと疑問を思いながらも返答はどうなったのかと聞きたがる二人に向けて笑みを浮かべた。

「優希くんから問題ない…ということよ」

「そ、それは本当ですか!?!」

「そう、良かったわ、それでは荷物取ってくるわね!」

優希の元へ迎えることに安堵する二人、嬉しさを滲ませながら二人は荷物を取りに寮内へと駆け出す。

「二人とも簪ちゃん目当てというか：優希くん目当てな気がするわね
く」

それを見た楯無は扇子を開け、その扇子には恋敵多しと書かれていた。

「お嬢様、そろそろ私達も」

「そうね、行きましようか」

そういつて、楯無達も自身の部屋に向かって歩き出し、それから十五分後には全員揃い、指定された場所東京の、海鳴市の月村邸へと向かった。

百二話 『GW3日目／決戦世界カルナージへ』

午後二時半：楯無達が海鳴りに向けて出立し漸く、月村邸前までやって来た。

「ここね、凄い豪邸じゃない：本当に此処なのか疑いたくなるわね」

楯無の脳裏には月村は八神家とは親密な関係ということは頭の隅に覚えていて、取りあえずと門の横に付いているチャイムを鳴らした。

チャイムが鳴って数秒後インターフォンからすずかの声が聞こえてくる。

「はい：」

「えつと優希の知り合いの更識です：優希くんからこちらに行けといわれてきたのですが：」

「あ、更識さん達だね、話は優希くんから聞いてるよ入って来て」

家主の了承も得たことで門を潜り敷地内に足を踏み入れる楯無達、そして玄関の扉を開けて中に入るとすずかが柔やかな笑みを浮かべて待っていた。

「初めましてこの家の主の月村すずかです」

「初めまして、更識楯無です、そしてこちらにいるのが布仏虚です」

「お、お初にお目にかかりますわ、私、セシリア・オルコットです」

「凰鈴音です」

「うん、みんなのことは聞いてるよ：さて、まだはやてちゃん来てないから、少しお茶でも飲んで待つてようか」

そういつて中庭に案内され：鎮座するテーブルには用意された紅茶やお菓子などが置かれていた。

そこでしばらく休憩して雑談などをする楯無達：

決戦前ということもあり何処か落ち着かない雰囲気も醸し出されていた。

「それじゃあ、セシリアちゃんも鈴音ちゃんも優希くんのこと好きなんだ」

「え、ええ…私にとって優希さんは理想の殿方ですから」

「私は…その好きってわけじゃ…ただ優希には色々と助けられたから…その…」

優希に好意を持つてる？セシリアと鈴にすずかが指摘すると少し恥ずかしそうに紅茶を飲むセシリア、鈴はまだ自分の気持ちかわからないのかもじもじしながら言い放つ。

《青春ね〜簪ちゃんのライバルが多いわ〜》

あまり顔に見せない楯無も内心でそんなことを思いながら、この先のことを思い浮かべながら紅茶を飲んでいく。

すると近くから何やら不思議な音が聞こえてきて、この場にいる全員がその音に反応する。

「何の音でしょうか」

「結構近くで音がしたわね」

不思議がるセシリアと鈴と虚、それと対照的にすずかと楯無は至って落ちついてた。

楯無はこの音が何処か優希がやっていた魔法と同じ起動音であることを察し、すずかに至ってはもう既に聞き慣れた音だったため…それほど気にしていなかった。

それから少しすると、楯無達に近寄る足音が1つ、近寄ってくる相手は中庭に楯無達がいることを知っているように一直線に向かっていき、声が届く範囲で話しかけた。

「すずかちゃん!!」

「うん、はやてちゃんだね」

楯無達の元にやって来たのははやて、それがわかっていたすずかは当然のごとく物言いで柔やかに笑みを浮かべる。

「ごめんな、集合場所に使ってもうて」

「気にしないよ〜ミッドに行けるの此処以外だとアリサちゃんの島しかないし」

勝手に楯無達との合流場所に使ったことを謝る、はやてだがそんなこと気にしていないすずかは平然と返した。

「えっと、お久しぶりです。八神さん」

「うん、半月ほどぶりやな、さてと…私のこと知らん人が多いから自己紹介しなあかな…八神はやてです、優希の母親で海上警備の司令やってます」

と自己紹介をするはやて、しかし海上警備司令であることは知らなかった楯無は恐る恐る、訪ねた。

「あ、あの…はやてさん…海上警備司令…って」

「ああ、楯無ちゃんも気になるとは思うけど…少し時間が迫ってな…優希達も待ちくたびれてると思うしさっさと行こうか」

迫り来る時間のことを考え、楯無の質問を応えることなく、はやては楯無達を連れて…中庭にある転移ポータルの前へとやって来る。

「さてと、ある場所に行く前にみんなにはお願いがあるんやけどええかな?」

「お願いですか?」

「これから見ることを体験することは他言無用にしてほしい…勿論国の命令であつたとしても…」

はやてから告げられるその言葉には強い意志が含まれていて、その場にいた全員が気圧されて、たじろぐ。

全員がたじろいだ中最初にはやての質問に答えたのはセシリアであつた。

「勿論ですわ!このセシリア・オルコット、その名を賭けて秘密は守りますわ」

「わ、私もよ!ここまで来て引き下がるわけないでしょ!」

まず、同学年の二人は秘密にすると了承した後、次に応えたのは楯無であつた。

「私も…この前の説明も納得するところが幾らかあつたし、そろそろ腹を割って話して欲しかったのよね…更識家の名にかけて他言無用にするわ」

「私もお嬢様に従います」

楯無と虚の答えも出たことでそっかどと呟いたはやては笑みを浮かべて話し出す。

「それじゃあ、行こうかみんなこの陣の上に乗って、此処から一気に優希のいる場所まで転移できるから」

「いや、転移って…」

地球出身ではあまりにも聞き慣れないか鈴が戸惑いながら訪ねてくる。

「まあまあ、論より証拠や!」

そういつて、半ば強引に全員を転移ポータルの上に乗せると直ぐに転移が開始された。

優希SIDE

クラナガン中央次元港、一般人が別世界に行くための玄関口にいる俺達は簪、ヴィータ…：リインと奏と合流し、もう一方の到着を待っていた。

「それでね!やーくん酷いんだよ!?!無抵抗の私をく容赦なく…」

俺がいる場所から少し離れた場所で本音がパタパタと両腕を動かしながら簪と奏と話している。

話している内容は聖王教会での騒動であろう。

簡潔に話すと預言を聞き終えた後、カリム姉と雑談していると窓の外に耳を当てて盗聴しているシャンテと本音を発見…

勿論、シャツハが黙っていない…：しかし此処でもう一つ問題が起きた。

盗聴していたのは一人ではなく、悪乗りをしたセインまでも別方向から盗聴していてシャツハはセインを追いかけた。

そして俺も本音も関わっていたために、俺がシャンテと本音を追跡、その末少し氷結魔法で動きを封じ込めた。

まあ、悪いのは盗み聞きしてた本音だし、正当性はこっちにある。何を言われようが言い返せる。

「優希、それより預言のこと本当なのか?」

『ああ、今後、管理局も動きを変えるだろうな…：取りあえず詳しい預言の内容は母さんも交えてカルナージで話す、今は預言より…：試合だしな』

「ああ、そうだな」

しぶしぶと頷くヴィータ、預言が出たことにやはり思うことはあるだろう、そういう表情が見受けられる。

(こちら、はやて…優希聞こえるか?)

『母さんから念話?』

(聞こえてるよ、今到着したの?)

(そうやで…地球から4名ご到着、あ、優希がいる場所教えたらセシリアちゃんと鈴ちゃんそっちに走っていったよ)

母さんからの念話を聞いて、セシリア達が向かってきているという報告を聞くと目線の先にエスカレーターで上がってきたセシリアと鈴の姿が目映る。

(母さん、二人とも見つけた、真っ直ぐこっちに来てる)

「見つけたわ!優希!」

『そんな急がなくても…』

走って俺の元に駆け寄ってきた鈴の言葉を聞いて、馳せる気持ちを落ちつかせようとするが…どうも効果は無さそうだ。

「というより!?異世界なんて聞いてませんわよ!?優希さん!説明してください!」

『セシリア落ち着け、ここまで来たんだ話はちゃんと話すから…それより母さん達も漸く来たみたいだ』

セシリアの問を後回しにしてセシリア達の後からやって来た母さん達、漸くカルナージへと向かうメンバーが勢揃いしたわけだ。

「さて、時間も迫って来とるから、先急ごうか」

「あの、優希くん少し良いかしら?」

先を急ぐ、母さんにふと思うことのある更識さんは俺に向かって話し始める。

『…母さん達は先行ってて直ぐに追いかけるから』

「了解、早うするんやで」

俺の言葉を聞いて母さんは俺と更識さんを残し先に進んでいく。

『さてと、話って…なに?』

「そうね…先ずは…ごめんなさい!今の今まで謝っていなかったけ

ど、優希くんを危険視していたこと、今此処で謝るわ」

そういつて頭を下げる更識さん、俺としては怪しい人物を警戒するのは当然だと思うため、それほど気にしていなかったことなのだが：『別に謝らなくても良いですよ、更識さんは不確定要素が多い、俺に警戒していたんですから……上に立つものとして当然だと思えますよ』

「それでもよ、一度疑った上に今の今まで謝っていなかったのは事実だから……それともう一つ……簪ちゃんを助けてくれてありがとう、あなたがいなかったら簪ちゃんは、自分の殻を壊すことも出来なかったと思うから……」

『それも大げさ、単に少し教えただけですよ』

「ここまで強くなったのは殆ど簪の力だ、これもお礼を言われるようなことではない。」

「…本当…自惚れないのね…少しぐらい自惚れてもいいと思うけど…」

『まあ、まだまだ半人前ですから、さてと母さん達を追いかけないと乗り遅れたら色々と予定が狂うからな』

更識さんも言いたいことは言ったことで、話は此処で終わりにして俺と更識さんは先に行った母さん達の後を追い、無事に次元航空艦に搭乗しルーテシアが住む、カルナージへと向かっていった。

百三話 『おいでませ、ホテルアルピーノ』

母さん達に追いつき無事に臨時の次元航空艦に乗ることが出来た。そして航空艦はカルナージへと出発し始めた。

『さて、此処から四時間ほどは掛かるから…寝るか』

体力温存のために眠ることにしようと思おうとしたが…

「優希さん、少し…よろしくて?」

航空艦の席が隣になったセシリアが声を掛けてきて、俺は振り向いて返事を返した

『どうした?何か分からないことあったか?』

「いえ、少しお聞きしたいのですが…今から行く場所はどのような所なのですか?」

そういえば名前ぐらいしか言っておいてどういった場所なのかは言っておかなかったっけ?

なら、良い機会だし説明しておくか

思ったら吉日と俺は目の前にウィンドウを開けてカルナージの情報を表示する。

『今から行く場所はカルナージ、元々は無人世界だったんだけど…今は二人だけその世界で住んでいる人がいるんだ…それが今回お世話になる人達…アルピーノ親子』

「ちよつと!?!星一つに2人しかいないの!?!」

俺の話聞いていたのか俺の後ろの席の鈴が顔を出して驚きの声を上げる。

『元々、無人世界だからな…2人もある理由があつてそこに住んでるわけで…二人とも元氣ありありで過ごしてるし問題ないよ』

「そ、そんなもんかしら?」

俺の解答に少し引いている鈴だが、事実だから仕方ない…それにエリオ達も結構行ってるらしいし

「やーくん、やーくんそのアルピーノさん達ってどんな人なの?」

次は鈴の隣の席に座る本音からメガーヌさんやルーテシアのこと

について聞かれると、俺は直ぐにどういった人物像かを整理してはなした。

「そうだな、まず母親のメガーヌさんは元々管理局所属の魔導士でそれなりに強かったんだけど…とある理由で前線から身を引いて…ルーテシアと一緒にカルナージで過ごしている…もう一人のルーテシアもちよつとわけありな子でね…どういった子だつて言つたら…ミッド関連での歴史に詳しくてハイテンションな子だとしかいいえないな」

流石に4年前のJS事件で敵同士だったなんて…言えるはずもないからな…：…これでなんとか伝わつただろうか…：…今思うと前のルーテシアはあんなに大人しい性格だったのに…：…どうしてあんな性格になつてしまつたのか…

「まあ会えばわかるよ…」

…決して丸投げしたわけではない…：説明するのが少し難しいだけだ

そうしていて、航空艦が出発すること四時間程…俺達はカルナージへと到着した。

入国手続きなどは簡単に済み…転移ポータルでカルナージへと降りると辺りは相も変わらず綺麗な草原が立ち並んでいる。

「凄…綺麗…」

この光景を見て簪はぼつりとそう呟き、初めて来たセシリア達も同様な感情で景色に見惚れている。

「綺麗な景色に見惚れてる人も良いけど、宿泊する場所に行こうか」
セシリア達が見惚れてのを承知で母さんがホテルアルピーノへ向かうと声を掛けて、それに対してみんな返事を返して、敷かれている道を歩き始めて丘に見えるアルピーノ宅へと向かっていく。

歩き始めてしばらく、家も間近になる中、前方から土煙が舞っているのが目に見えてわかり足を止めて何事かとセシリア達は前方を見るが俺や母さん達にとっては何となくとわかつたので少し溜め息を吐いた。

そんな中でも徐々に迫り来る土煙と耳に響く地響き

「ねえ…私の目が正しいのなら…あれ…人よね？」

「う、うん間違いなく…」

鈴がその目で土煙と地響きの元凶は人しかも…年が同じぐらいの紫色の髪の子を見て絶句しそれを聞いていた簪が肯定する。

『はあ…ロンギヌス』

俺は思わず溜め息を吐き、相棒の名を名乗り右手を突き出す。

そしてその直後俺達との相対距離が二十メートルほどになった瞬間、少女…というかルーテシアは俺目掛けてダイブ。

「優希!!会いたかった〜!さあ、私と〇作りして幸せな家庭を作りまじよっ!？」

『チエストオオオオオオオッ!!!!』

抱きついてこようとするルーテシアに身の危険を感じた俺は展開したロンギヌスを大きく振りかぶり、柄部分でルーテシアの腹を捉えるとそのまま吹き飛ばしルーテシアは空高くへと飛んでいき…星となったのだった。

百五話 『決闘前日 前編』

『…ふう…悪は滅びた』

そういつてロンギヌスを待機状態に戻しルーテシアが吹っ飛ばされた方向を眺める。

「あ、あの優希…いくら何でも…これはあんまりじや…」

後ろで困惑している簪が俺に寄り添うように訪ねてきて俺はその間にハッキリと返事を返した。

『大丈夫だ、ルーテシアのことだからそろそろ…』

「ただいま〜」

『ほらな』

ルーテシアなら問題ないと言い切り、しばらくすると転移魔法で平然と戻ってきたルーテシア、それを見てこれはわかりきっていたように告げる。

「い、今のは!?!」

『転移魔法だよ、テレポーターション』

「そ、そのようなことまで!?!」

鈴の驚きに俺はルーテシアが転移魔法を使ったと説明すると、やはり信じられないのかセシリアが声を上げる。

「もう…驚きすぎて疲れるわ…それでその子のこと紹介してくれないかしら?八神くんとは並々ならぬ関係みたいだけど…」

『そうだな…いきなりすぎて紹介してなかったな…ルーテシア』

「了解、ルーテシア・アルピーノ、14歳、優希とは誰もが認めるラブラブ…『ただの友達だ!以上!』…もう優希のいけず」

更識さんがルーテシアのことを訪ねてきたために俺はルーテシアに自己紹介をさせると前半までは問題はなかったが後半からあらぬ事を言い始めたので強制的に遮った。

あのまま言わせたなら何を言い出すかわかったものではないしその上後ろの三人から物凄く視線が向けられているから…

「ルーテシア、そのぐらいにしてやれ…下手したら優希がただじゃす

まねえ」

「わかってますから♪」

《見た感じ、後ろの3人は優希に好意的なわけね…隅に置けないわね、優希は》

『さ、さてと…取りあえず、ルーテシアの家に行こう…メガーヌさんにも会いに行かないといけないからな』

取りあえず仕切り直してメガーヌさんのところ…今日宿泊するホテルアルピーノへと向かう俺達、向かう道中は話しながら進んでいき、建物に着くと、家ノ前にはメガーヌさんが立っていた。

「はい、八神さん、いらっしやい」

「ご無沙汰です、メガーヌさん」

着くと笑みを浮かべて歓迎するメガーヌ、それに母さんが軽く返事を返した。

『メガーヌさんお久しぶりです、それとすいません…突然、無茶な頼みを聞き入れてくださって』

「別に良いわよ、大体暇だから…」

今回の場を提供してくれたメガーヌさんに感謝の意を込めてお礼を言おうと、やんわりと返事をして特に気にしていないことを告げられる。

「さてと、荷物置いたら、どうしよつか」

「更識姉妹の決闘は明日にするにして…よし良い機会だから、優希、それと奏もみっちり扱いてやる」

「は、はい！」

母さんがこれからどうしようか考えていると折角の機会だからと俺と奏を鍛えるべくヴィータが提案すると奏は緊張しながら返事を返す。

「ほんなら、簪ちゃん達はゆっくりしておき」

はやてはIS組に休んでいるように指示を出して俺達は各々の別行動を取ったのであった。

百六話 『決闘前日 後編』

『優希の?』

ルーテシアから言われたその言葉に私は少し驚いてルーテシアの顔を見る。

気になる知りたくない、そういった欲求に駆られる中、ルーテシアは私の意志を組み取るように口を開ける。

「優希はね…生まれながらに親に愛されなかった子供だった」

愛されなかった…か

これは予想通り、はやてさんの養子だったということは親子の間で何かあったと考えるのは適切だった。

「優希の父親は秀才の研究者で…ある事件によって…復讐心に取り付かれて…生まれてきた優希はその復讐の道具にさせられていた…」

そういえば…優希が昔に言ってたつけ…自分はヒーローというより悪人だって…

その意味合いは恐らく、その事から言っていたものだったのだらう。

「復讐の道具にさせられていた優希の止めて保護したのが当時まだ9歳だった八神司令」

「はやてちゃん、放っておけないって…自分から優希の育児を買ってでたって昔言ってたです」

そこに聞き耳していたのか リンさんとそれとセシリアがこっちに近づいてくる。

『リンさんにセシリア…』

「申し訳ございません。なにやら優希さんのことについて、話しているらっしゃったようなので…」

ばつ悪そうに言うセシリアに対して私は優希のことが気になるのだから仕方がないのではないかと思ひ、気にしていないとセシリアに告げる。

「優希のことは、リンが生まれる前のことなので当時のことはあま

り聞いてないのですが…復讐のために幾つか薬剤で調整されていたと…聞いたこともあるのです」

『それってつまり…人体実験？』

優希が言いたくないのも頷ける…こんなに重い過去を持つてるなんて…

そんなこと軽々しく言えたものではない…

セシリアも重々しい話で暗い表情を見せてるし…

「その、優希さんの父親は…」

「捕まって極悪人収監の留置所送り、でも8年前に衰弱死したって…」
「そうですか…」

セシリアは優希の父親のことが気になって訪ねると父親は既に死んでいることを聞かされて、何かを悟って目を閉じてそう呟いた。

「他に優希に関して聞きたいこととかあるかしら？」

ルーテシアはそういつて次の質問があるのかを訪ねるとふと、私は気になることを思い出してルーテシアなら知ってるだろうと思いを開けた。

『ダールグリユンさんが優希のことを氷帝って呼ばれてたんですけど、なにか理由があるんですか？』

氷帝…それは優希に向けてダールグリユンさんが発した言葉…その意味も聞きたかった私はルーテシアを訪ねるとルーテシアは意外そうな顔を向ける。

「意外な名前が出てきたわね…氷帝についてね…簡単に言うとう優希の二つ名のことよ」

「もう5年ぐらい前になるのですか、総合魔法競技の大会で決勝戦雷帝の子孫、ヴィクトリア・ダールグリユンを打ち破り、優勝…雷帝を倒したということと優希が氷結魔法の使い手ということもあって、氷帝…と呼ばれているのですよ」

だから、氷帝…D S A Aのアリーナで意味深な表情を浮かべていたのは嘗ての自身の姿を思い浮かべていたからなのかな？

「まあ、因果というかなんというか…優希に氷帝…なんていう二つ名が付いたのは凄い偶然なんだけどね…」

「あの…まだ何か理由があるのですか？」

ルーテシアは少し俯いてまだ氷帝に関して何かあるのか…言いたげな表情を浮かべて、それに気づいたセシリアはルーテシアに追求をする。

「さつきもいったとおりなんです。優希は生まれて間もない頃から復讐のために薬で調整されていたんです。それにより優希は嘗てベルカ戦乱時代の氷帝が持っていたという…レアスキルを…手にしているのです」

「嘗て氷帝フルシユキヴィルンは全てを見通す魔眼…オーデインの瞳を要していたと歴史書には記されている」

『つまり、優希も…そのオーデインの瞳を使えるってことですか？』
そんなものがあるなんて…正直に信じられない、けど二人の顔から嘘はついてないのはよくわかる。

「優希自身、オーデインの瞳は継続すると魔力消費がバカにならないってあまり使わないんだけどね」

とルーテシアが補足を入れて、多様は出来ないことを説明するとそれなら確かにと私もセシリアも納得して頷く。

なんか本当に優希のこと全く知らなかったんだね…私達は…

そう私達は自分の無知にうちしがれる中、私の顔に冷たい水が掛かる

『きやつ!?!ほ、本音?!』

「かんちゃん…水か気持ちいいよ」

そういつて水をかけたのは本音で着ていた服は近くの木の下において下着姿で完全に水に浸かっていた。

「かんちゃんも入ったら」

とパシヤパシヤと足で水飛沫を上げてはしやぐ本音の姿を見て、さつきまでの気持ちなど吹き飛んでいくように思えた。

「本音さん? 幾らなんでも下着で水浴びをするのはいささ…つ!」

「なーに堅いこと言ってるのよ、こういうときは楽しまないとそんじやない」

鈴ももう既に下着姿で水に浸かってたんだ。

そして反論するセシリアに水をかける、鈴この行為によってセシリアがどう動くのなんて容易に想像できた。

「そうですか…そういうことですか?! いいですわ!? 鈴さん今からそっちに行きますわ! 動かないでくださいまし!」

そういつてセシリアも着ていた服を脱いで下着姿で一直線に鈴の元へ向かっていく。

そして隣にいたルーテシアもまたニヤニヤした笑みを浮かべて自分の服に手をかける。

「楽しそうだから私も混ざりに行こう!」

そういつてルーテシアも服を脱ぐと…下着…ではなくこの事態を想定していたのか水着を着ていて水の中に入っていく。

「ほらほらかんちゃんも〜」

そして再び私を誘ってくる本音

そうだよね…此処には決闘で着たわけだからこんなところで落ち込んでいたら駄目だよね

『よ、よし!』

自分に言い聞かせるように活を入れて、服を脱いでいき下着姿になると私は本音達がいる場所に向かっていき、決闘前日の一日を満喫するのであった。